

秦漢時代における東部ユーラシア国際システム
-その形成、変化及び崩壊-

2022 年 3 月

新潟大学大学院

現代社会文化研究科

氏名 HE Yongchang

目次

目次.....	- 1 -
序章.....	- 4 -
第一節 問題の所在：秦漢時代における東部ユーラシア国際システム.....	- 4 -
第二節 先行研究：多様な世界像.....	- 7 -
一 権力関係下の古代東部ユーラシア.....	- 8 -
二 古代東部ユーラシアを社会化する世界観.....	- 11 -
三 古代東部ユーラシアを動かす制度.....	- 13 -
第三節 先行研究の問題.....	- 16 -
第四節 本論文の独創性と構成.....	- 18 -
第一章 国際システムに対する分析枠組み：境界、ユニット、相互作用及び構造.....	- 27 -
第一節 システムの形成に対する基準：境界、ユニット、相互作用.....	- 29 -
第二節 システムの特徴としての構造：階層的制度による権力分布.....	- 32 -
一 権力の測定と関係的権力.....	- 36 -
二 制度の階層性と権力分布.....	- 39 -
第二章 東部ユーラシア国際システムの形成.....	- 52 -
第一節 東部ユーラシア国際システムの境界.....	- 52 -
第二節 東部ユーラシア国際システムのユニット.....	- 54 -
第三節 東部ユーラシア国際システムの相互作用.....	- 57 -
一 農耕地域.....	- 58 -
(一) 統一国家としての秦漢.....	- 58 -
(二) 農耕地域における国家間の相互作用.....	- 59 -
二 遊牧地域-西域における匈奴の覇権.....	- 62 -
三 農牧接壤地帯での和親条約に基づく共存体制.....	- 63 -
四 漢・匈争覇による東部ユーラシア国際システムの形成.....	- 65 -
第三章 東部ユーラシア国際システムにおける国家間相互作用：漢と匈奴との争覇.....	- 70 -
第一節 漢と匈奴との争覇による対抗時代.....	- 70 -
一 武帝期における漢匈争覇.....	- 70 -

二	昭・宣帝期での漢匈争覇.....	- 79 -
第二節	匈奴称臣による平和時代.....	- 82 -
一	呼韓邪称臣の後での漢と匈奴、西域関係	- 84 -
二	西匈奴滅亡後の漢の帝国化政策.....	- 91 -
第三節	新と匈奴との決裂から漢と匈奴との争覇までの対抗状態	- 95 -
一	匈奴と新・漢との対抗.....	- 95 -
二	新と決裂した西域の匈奴への臣服及び莎車の台頭	- 97 -
三	匈奴の南北分裂と北匈奴の西域拡張	- 99 -
四	漢と北匈奴との争覇の決着	- 101 -
第四節	漢による単極時代.....	- 104 -
一	漢の西域撤退と西域攻略再開	- 104 -
二	鮮卑の台頭.....	- 107 -
三	東部ユーラシアの解体.....	- 108 -
第四章	東部ユーラシア国際システムにおける帝国内の相互作用：漢帝国の成立と異民族支配.....	- 115 -
第一節	農耕地域の辺縁（閩越・南越・西南夷・朝鮮）における帝国建設 ...	- 116 -
一	前漢初期における農耕地域に対する拡張	- 116 -
二	農耕地域における異民族支配の強化	- 123 -
第二節	接壤地帯における帝国建設	- 129 -
一	接壤地帯の辺郡における異民族（匈奴・烏桓・羌）	- 130 -
二	接壤地帯に対する異民族支配	- 132 -
第三節	国内異民族による反乱	- 138 -
一	農耕地域の辺縁における異民族による反乱	- 139 -
二	接壤地帯における異民族による反乱	- 142 -
三	国内異民族による反乱の原因	- 144 -
第五章	東部ユーラシア国際システムの構造：漢・匈奴による二極から漢による単極へ、	- 155 -
第一節	東部ユーラシアにおける制度：質子・朝貢・冊封	- 156 -
一	質子制度.....	- 158 -
二	朝貢制度.....	- 162 -

三 冊封制度.....	- 166 -
第二節 制度に反映される階層関係	- 170 -
第三節 東部ユーラシア国際システムの構造の変化	- 173 -
終章.....	- 183 -
参考文献	- 201 -

序章

第一節 問題の所在：秦漢時代における東部ユーラシア国際システム

古代東部ユーラシアには、国際システムがあったのだろうか。この問題に答えるためには、近代国際関係を体系的に研究するために用いられる概念としての「国際システム」が古代の地域秩序を説明するのに適用できるのかを考えなければならない。この問題に対して、賛否両論がある。まず、否定的な論者は、一般的につきのような立場を取る。すなわち、国際システムを近代以降の主権国家により形成されたものであり、古代東部ユーラシアには、相互作用を行う主権国家がなかったため、国際システムは存在しなかったというのである^[1]。また、中国研究者は、国際システムという概念を古代東部ユーラシアに適用することに慎重な態度をとる^[2]。その最も重要な理由は、中国統一史観であり、モンゴリア、現在の新疆ウイグル自治区、チベットが中国の一部分とすることが二千年前に遡及するため、中国の歴代王朝と遊牧国家との関係は国内の民族関係に還元されるのである^[3]。

一方、肯定的な論者は、国際システムのユニットに、主権国家・国民国家だけではなく、前国家アクター、古代国家・初期国家なども含めるため、国際システムはあったとい考える。その一部の研究者は、国民国家（Nation-State）による国際（International）システムと区別するため、近代以前の形態を含める国家によるシステムを国家間（Inter-State）システムと呼称する^[4]。そして、英国学派は、歴史を重視する立場をとって、近代だけではなく、古代の国際システムをも研究の視野に入れるため、古代東部ユーラシアにおける国際システムに早くから関心を持っていた。例えば、ワイトは、国家だけではなく、使者・会議・外交言語・貿易という四つの制度を基準にして、歴史上に存在したただ三つの国家間システムの一つとして戦国時代の中国を挙げる^[5]。そして、ブルは、共通の文化か文明を基準として、戦国時代の中国における国際システムを国際社会までのものとみなす^[6]。最後に、ブザンと張勇進は、戦国時代の中国だけではなく、もっと一般的時空概念としての古代の東部ユーラシアに国際社会が存在したことを指摘する^[7]。英国学派だけではなく、多くの研究者は、古代東部ユーラシアにおける政治外交の思想と実践にもとづいて、近代国際システムとは異なる古代国際システムの特徴を探り出そうとしている^[8]。最後に、近年、中国研究は古代東部ユーラシアにおける国際システムの存在を証明しようと試みている^[9]。その他に、多くの研究者が、古代東部ユーラシアにおける国際システムの存在を前

提として、後述するように、冊封体制、朝貢体制、世界帝国論、天下秩序、華夷秩序などの概念を提案し、多様な側面から古代東部ユーラシア国際システムを記述・解釈してきた。

本論文では「古代」という語を使う。「古代」は実際のどの時代であろうか。古代の時代区分は国内政治だけではなく、国際政治にとって重要なテーマである。なぜかといえば、時代区分は単に国内の政治や経済によってではなく、漢族王朝と胡族王朝との関係にもよるものだからである。日本においては、古代東アジア研究あるいは最近の古代東部ユーラシア研究で暗黙裡に了解されている範囲、すなわち、秦漢から隋唐までの約 1200 年を「古代」と定義する^[10]。一方、中国においては、古代の歴史分期に関する論争があるが^[11]、一般論的に言えば、秦漢から明清までの約 2000 年を「古代」と定義する^[12]。したがって、古代は、広義からいうと、秦漢から明清までの時代で、狭義からいうと、秦漢から隋唐までの時代である。そして、欧米の研究者にとって、古代は、広義的古代だけではなく、その前の春秋戦国時代をも含む。

2000 年程前の古代には、東部ユーラシアには一つの国際システムだけが存在したはずはない。時代の変化と共に、東部ユーラシアにおける国際システムも変化しつつあった。概して言えば、東部ユーラシアにおける国際システムに対して、その発端としての秦漢時代、その成熟としての隋唐時代、その最盛期としての明清時代という三つの時代は重要だと考えられる。東部ユーラシアにおける国際システムが諸夏の国家による春秋戦国時代から形成されたという意見は、少なくとも中国と欧米の一部の研究者に認められる^[13]。しかし、当時の諸夏の国家間に相互作用があったとはいえ、諸夏はモンゴリアおよび朝鮮半島の民族との相互作用がまだ少なく、まして西域およびチベットの民族との相互作用はほとんどなかった。一方、中国の分裂期としての南北朝時代、両宋遼金時代には、東部ユーラシアはいくつかの独立の地域に分かれ、各地域の間には充分の相互作用がなかったため、一つのシステムとは考えられない。要するに、歴史上、古代東部ユーラシアには、少なくとも、三つの異なる国際システムが存在したのである。

この三つのシステムのなかでも、秦漢時代の東部ユーラシアにおける国際システムは、最も重要だと考えられる。まず、地域範囲という側面からいうと、秦漢時代には、東部ユーラシアにおける国際システムの範囲が初めて定めされた。秦漢時代以前には、諸夏による華夏システムは農耕地域（いわゆる「中原」）には形成されたが、遊牧地域とは少ない相互作用があっても、西域とは相互作用がなかった（「農耕地域」、「遊牧地域」、「西域」に対する説明は第二章で詳しく行われるため、ここには省略する）。したがって、東部ユーラシ

アは、秦漢時代以前に、隔離の状態のままであった。秦漢時代に入った後、農耕帝国としての秦・漢と遊牧帝国としての匈奴は、西域をめぐる覇権を争ったことを通じて、東部ユーラシアの各部分を関連させ、東部ユーラシアを初めてシステムとして成立させた。秦漢時代に定義される東部ユーラシアの範囲は、基本的に明清時代まで継承される。言い換えると、東部ユーラシアにとっては、秦漢時代が分水嶺なのである。

次に、国際制度という側面からいうと、秦漢時代は、古代東部ユーラシアでの国際制度が形成される時期である。一般的に言えば、古代東部ユーラシアでの国際制度には、質子、朝貢、冊封という三つの制度があった（この三つの制度については、第五章で詳しく説明する）。この三つの制度は、秦漢時代以前から、名前が異なっても、各地域で進化してきたが、各地域の中でしか用いられなかった。しかし、古代東部ユーラシアが一つのシステムになった後、これらの制度は、国際制度として、共通の理解の上で広汎に用いられている。それだけではなく、これらの制度は、明清時代までに、古代東部ユーラシアの主要制度として継承された。国際制度だけではなく、外交に関する制度も秦漢時代に形成された^[14]。したがって、古代東部ユーラシアの国際制度の本質を明らかにするためには、秦漢時代において国際制度の形成・普及のプロセスを解明する必要がある。

最後に、東部ユーラシアは、秦漢時代に初めて一つのシステムとして機能するようになった。西嶋定生は、古代東アジアシステムの端緒を漢王朝とみなし、漢時代におけるシステムの諸原理が隋唐時代に成熟して、両宋から元まで中断されたが、明清時代に別の形で復活された、と指摘する^[15]。英国学派は、このようにシステムの基本的な原則を決める構造を憲法的構造（Constitutional structures）として定義する。すなわち、憲法的構造とは、「間主観的な信念、原則、規範による統一的集合体であり、正当的なアクター、及び正しい国家行動に対する基本の範囲を定義する機能を通じて、国際社会に秩序をつける」^[16]。そうであるとする、秦漢時代には、東部ユーラシア国際システムの憲法的構造が実際に設定されたため、秦漢以降には、東部ユーラシア国際システムはいかに変化しても、その基本的原則が保持される以上、その本質が変化しない。したがって、古代東部ユーラシアは、2000年を経っても不変的なものという錯覚をもたらしている。

要するに、古代東部ユーラシア国際システムを明らかにするためには、以上の三つの理由により、秦漢時代の古代東部ユーラシア国際システムを明らかにすることが最も重要であると考えられる。こうした理由から、本論文では、秦漢時代の古代東部ユーラシア国際システムを研究課題として提起する。

第二節 先行研究：多様な世界像

本論文では、秦漢時代における東部ユーラシア国際システムをテーマとする。しかし、秦漢時代における東部ユーラシア国際システムについて、一部の学者は秦漢時代に限定して東部ユーラシア国際システムを研究していくが、多くの学者は秦漢から明清までの時代を古代と設定して、古代という時代の一つの時期としての秦漢時代における東部ユーラシア国際システムを研究していく。したがって、先行研究をできるだけ詳細に整理・分析するためには、本論文では、秦漢時代だけではなく、広義な古代における東部ユーラシア国際システムに関する研究を対象とすることとする。

古代東部ユーラシアあるいは古代東アジアに対して、第二次世界大戦から現在までの 70 年間に、中国、日本および欧米の研究者は、国家間の共通性、国家の相互作用、経済・文化・人間の交流などをテーマとして、多様な世界像を描きあげてきた。同じテーマに対する世界像も研究者の属する地域によって多様である。しかし、これらの研究成果は、必ずしも自国の学界の中で独立的に発展するわけではなく、世界中で相互に影響しあい、さまざまな枠組みを作ってきた。しかし、相互に影響を受けるとはいえ、各地域の研究は既存の枠組み内にとどまることが多い。例えば、古代東部ユーラシアにおけるシステムを分析するにあたっては、日本の研究は、遊牧国家に対する北アジア研究を除いて、ほぼ東アジア文化圏にとどまって、日本の発展をそこから探求しようとする。しかし、欧米の研究は、東アジア文化圏の重要性を認めるものの、漢朝から唐朝までの時代に対しては、辺境をめぐる漢族王朝と遊牧国家との相互作用に重心を置いている。中国の研究は、日本の強調する東アジア文化圏を外交関係か国際関係として、欧米の強調する辺境における相互作用を民族史か中国国家形成史として研究しようとする。

さらに、古代東部ユーラシアに対しては、上記のように歴史学の中で研究されるのが伝統的であったが、1980 年代以降、国際関係論においても研究されるようになり、そこでは東アジアあるいは東アジア-太平洋地域の経済発展に初めて焦点をおいて、この地域の経済的かつ政治的な重要性の増加とともに、古代まで遡って研究をするようになっている¹⁷⁾。古代東部ユーラシアに対する国際関係的な研究には、三つの目的があると指摘されている。一つ目は、古代の東部ユーラシアにあった国際システムにおける相互作用パターンの研究を通じて、将来この地域に生まれうる国際制度か国際規範を予測しようとするものである。二つ目は、国際関係理論を、その出自であるヨーロッパとは異なる古代東部ユーラシアに

応用することを通じて、古代東部ユーラシアを新たな方法で解釈しようとしながら、国際関係論の普遍性を証明しようとするものである。三つ目は、古代東部ユーラシアを理論構築の経験的なベースとして、欧米中心主義に満ちている国際関係理論に新たな可能性を見出そうとするものである。しかし、国際関係学の研究と歴史学の研究との間には、相互的な影響があまりみられない。たとえ相互に参照しても、歴史学には理論に対する不信感および無関心があり、一方、国際関係学は歴史的な分析をあまり重視しないため歴史研究をデータベースとのみみなしがちである。

本論文は、古代東部ユーラシアに対して、以上に挙げられた三つの地域（日本・中国・欧米）と二つの専門（歴史学・国際関係学）の研究成果を、国際システムに絞って、三つの要素——権力、観念、制度——で整理することで、古代東部ユーラシアにおける国際システムの多様な世界像を描きあげようとするものである。

一 権力関係下の古代東部ユーラシア

古代東部ユーラシアには遊牧帝国と漢族王朝との間に争覇^[18]が繰り返されていた時期がある。しかし、従来の古代東アジア研究、特に後述の観念と制度に重心を置く研究は、このような争覇に触れることがあるが、それを重視して観念と制度の変化によって、争覇の流れをダイナミックに解明することが少ない。さらに、これらの古代東アジア研究は争覇を把握しようとしても、文化圏としての東アジアという地域的桎梏のため、農耕国家である漢族王朝と朝鮮半島の国家と日本の関係として捉えるしかない。例えば、古代東アジア概念を中国中心論と批判し、中国周辺の小国の自主性を強調すべきと主張した鬼頭清明は、隋唐時代の国際システムの変動の要因を、唐朝と突厥かチベットとの関係にではなく、百済と新羅との抗争に求める^[19]。一方、遊牧民族を主な対象にする北アジア研究は、当該の遊牧民族の政治発展を研究するほかに、その遊牧民族の発展にともなった漢族王朝との関係にも注目する^[20]。しかし、このような研究における遊牧国家と漢族王朝との関係は、せいぜい二国間関係に過ぎず、システム全体には及んでいない。

もっとも、東部ユーラシアにおける農耕帝国と遊牧帝国との争覇を中心にする研究は少ないとはいえず、主に四つのパラダイムに分類されることができる。一つ目のパラダイムは、世界帝国である。すなわち、古代東部ユーラシアにおける国際システムには、世界帝国の素質をもった国家（例えば前漢、唐朝）が帝國的秩序（支配・従属関係）を樹立して、国際関係に規範・ルール・制度を定めている。例えば、石母田正は、古代東アジアの国際

的秩序を、「藩夷の諸国家と朝貢関係を結んでいる中国王朝」による世界帝国に求める^[21]。また、堀敏一は、歴史的世界を、西嶋のように文化面ではなく、世界帝国の産物として捉える^[22]。しかし、これらの帝国は、他の国に対する外交および内政上のコントロールによってではなく、当該の国家が帝国戦略をとることで定義されるのである。例えば、石母田正は、世界帝国の本質が国内の隷属体制と国際面における夷狄観にあることによって、日本を小帝国と定義しようとした。さらに、最近の東ユーラシア研究において、外交文書に重点を置きながら国家間における上下関係を明らかにしようとした廣瀬憲雄は、この概念をさらに拡大して、「独自の国際秩序をもつ」周辺国家を小帝国と定義する^[23]。しかし、このような定義は、国際関係上の定義とは異なる。何故ならば、帝国は征服した国家の内政外交を全て支配することが必要であるからである^[24]。しかし、小帝国として定義された国家は、あくまでも外交儀式上において上位に立って、もっと極端に言えば、自我的基準を満たすための外交儀式上の上下関係を示しているに過ぎない。これに対して、堀敏一は、帝国の本質を支配関係に求めて、中国王朝と周辺国家との関係を、帝国秩序の中で、言い換えると、中国が周辺国家を支配するための羈縻で捉える。すなわち、古代東アジアでは、中国王朝は、朝貢・冊封・和親などを含める羈縻を通じて、周辺国家とさまざまな支配関係を成立させて、「ルーズな結合関係」による世界帝国になる^[25]。このような支配関係を強調する仕方は中国疆域形成論と似ている。しかし、中国疆域形成論は、今の中国国境内の全ての民族が相互作用および相互融合を通じて一つ多民族国家になるプロセスに主眼を置きながら、国境外の国家との相互作用を外交関係として研究の重点から排除している^[26]。すなわち、朝鮮半島とか日本といった、今の中国と外交関係を結ぶ国家と中国との支配関係はこの研究においては軽視されることになるのである。

二つ目のパラダイムは、中心-周辺構造である。灌漑農業と専制国家との関係を研究するウィットフォードが、すでに東洋の帝国、特に中国帝国を、「中心(Core)-周辺(Margin)-亜周辺(Sub-Margin)」という関係で捉えていた^[27]。彼らの研究を練り直した柄谷行人は、システムとしての世界を帝国と同一視して、中心と周辺には周辺が中心に征服されるか中心が周辺に侵入されるかという形で同化傾向があることと、周辺の外にある亜周辺は離れるか同化されるかを選択することができることを示そうとする^[28]。彼らとは違って、特定の時期(南朝の梁)から「中心-周辺-辺縁」という構造を提案したのは鈴木靖民である。鈴木にとって、古代東部ユーラシアは、中心と周辺からなる関係と周辺と辺縁からなる関係が複層的なので、辺縁にある「傍の小国」か「小国」が、周辺と中心との関係によ

って中心と関係を成立することを通じて、「多様な国際秩序、複線的に結び付く地域」になる^[29]。

三つ目のパラダイムは、「極」を強調するリアリズムである。世界帝国にせよ、世界システムにせよ、いずれもシステムに他の全ての国を圧倒するパワーをもつ大国の存在を前提しており、言い換えると、単極システムと等しいものなのである。しかし、視野を東アジアから東部ユーラシアまで拡大してみれば、漢族王朝が世界帝国であった時間は思われているほどには長くない。換言すれば、東部ユーラシアにおける国際システムは、ある時期には漢族王朝が維持していた単極システムになることを否定できないが、他の時期には複数の極の存在のため、二極的か多極的なシステムにもなる。そのため、システムの力の構造およびそれによる安定性を解明するには、極という変数を導入することが必要になる。例えば、前漢時代の東部ユーラシアの国際システムでは、朝貢関係ではなく、漢朝と匈奴との二極によって、システムの安定性が保てるかどうかが決定的な役割を果たした、と孫力舟は主張する^[30]。孫とは異なって、苗中泉は、西漢前期の漢朝と匈奴と南越という三極システムが漢朝の拡張政策によって漢帝国という単極システムになる、と指摘する^[31]。歴史学では、極という概念を意図的に使用することは少ないが、極になる大国間関係からシステムの動きを明らかにしようとする研究はある。菅沼愛語は、最初、隋唐時代の東部ユーラシアの力の構造を唐・吐蕃・突厥の外交関係に求めて、続いて、研究の時間範囲を北魏の分裂まで遡って、東部ユーラシアにおけるシステムが四極-二極-単極-三極という変化を経験したことを明らかにしている^[32]。

最後の四つ目のパラダイムは、相互作用のダイナミズムを強調する研究である。それは、国家間の相互作用にある普遍的規則を発見して、システムの全体の動きをこの普遍的規則によって説明しようとするものである。例えば、周方銀は、ゲーム論を利用して、中国王朝と周辺国家との力関係の変化とそれとともなう四つの相互作用のパターンを提案して、システムはこの四つのパターンの循環によって動的均衡を維持することができる、と指摘する^[33]。さらに、漢族王朝と遊牧帝国との戦略的な相互作用によって、勝敗の鍵は中原-内亜境界地域（China-Inner Asian Borderland）の征服にある、とスカフは考える^[34]。そのため、古代ユーラシアにおける国際システムは、漢族王朝と遊牧王朝が中原-内亜境界地をめぐって動的均衡を繰り返すことにある、と理解されることになる。

二 古代東部ユーラシアを社会化する世界観

古代東部ユーラシア、あるいは古代東アジアといえ、文化的世界というイメージがよく出てくる。何故ならば、古代東アジアはいくつかの文化を共有して、さらに、これらの文化にもとづいて動くからである。社会科学的に言えば、古代東アジアにおける世界観は、国家を特定の規範あるいはルールに組み込んで、国家が認めれば認めるほどこれらの規範あるいはルールを遵守するという社会化の機能を発揮する^[35]。したがって、特定の世界観が東部ユーラシアに共有されると、そこに存在する諸国家はこの世界観にもとづいて相互作用を行うことになる。

東部ユーラシアにこのような世界観が存在したか否か、言い換えると、東部ユーラシアにひとつの歴史的世界が存在したのか否かは、戦後における日本の東アジア史の出発点の問いかけであった。時代区分上は中国・日本・朝鮮が異なった古代を経たとしても、ほぼ同時に中世に入ったことに注目する前田直典は、それが可能になるのは諸国家間の関連が前提にあるからだ、と指摘した^[36]。しかし、前田の所見が巨視的に過ぎたため、この問題を詳細に解決したのは冊封体制を基礎にして東アジア世界論を提案した西嶋定生である。西嶋は、中国に起源をもつ文明を共有していた日本、朝鮮半島、ベトナムを含む古代東アジアを、「文化圏として完結した世界であるとともに、それ自体が自律的發展性をもつ歴史的世界」と定義した^[37]。その文化圏の成立の指標は、西嶋の提案した漢字文化、儒教、律令制、仏教のほかに^[38]、技術と教育制度がある^[39]。このような文化圏としての東アジアは、冊封体制という政治的原動力を通じて、中国周辺の国家が中国の文化を自主的に受容していく形で実現されていた。しかし、李成市は、これを基礎にして、周辺国家の間の相互作用をも強調し、さらに、周辺国家が中国文化を受容した後それを自分のものにする形で脱中国化を求めることを指摘した^[40]。また、このような共通文化の存在には国家間の関係を安定させる機能があった。例えば、儒教国家は、文化の共通性によって集団的なアイデンティティを有して、さらに、この集団にウィーネス（We-ness）が形成されるため、相互間の平和関係をこのウィーネスで維持することが可能である、とケリーは指摘する^[41]。

古代東部ユーラシアを一つの文化世界とすれば、この世界はどのような世界観によって動いていたのだろうか。一番包括的なのが天下思想であったと思われる。「天下」は、広義と狭義に区別され、前者が華夏と夷狄を含む世界を天下と定義し、後者は中国（漢族王朝と胡族王朝）を天下と定義する^[42]。したがって、天下が世界を意味するのは広義の天下に

ほかならない。広義の天下は、『尚書・禹貢』か『国語・周語』の五服にせよ、『周礼・夏官』の九服にせよ、中心から周辺まで拡散する同心円的な階層的構造がある。この天下にどのような原理が働くかについては、実際には、多様な意見が存在している。例えば、高明士は、結合原理、統治原理、親疎原理そして徳化原理という四つの原理の存在を指摘する^[43]。また、檀上寛は、天下＝天朝には、官僚的秩序、爵制的秩序そして宗法秩序というこの三つの原則があるが、明初で「朝貢一元体制」によって統一されたことを指摘する^[44]。そして、国際関係を天下体系で超克しようとする趙汀陽は、自然世界・社会心理世界・政治世界を統一する天下が「無外」という原則にしたがって動くという。すなわち、天下には、すべての場所が天下の内部であり、天下という世界に外部性がないため、自我-他者との区別もなく、結果として、この世界はその中に位置するすべての民族に共有されるのである^[45]。

天下を動かすためには、華夷の区別、そしてこの区別による相互の権利と義務に関する名分論上の華夷秩序問題と、華と夷との相互転換に関する漢化問題あるいは王化問題がある。近代以前の東部ユーラシアは、よく華夷秩序と呼ばれて、中心にある中国（漢族王朝と胡族王朝）と周辺にある夷狄からなる。中国が自我-他者を華-夷として定義するのは、早く西周・春秋時期から行われていたが、戦国中期以降、諸華と呼ばれる国家の領土的な拡張によって、華夷の内容は多様に定義されるようになった。吉本道雅によれば、華夷は、「同化・棄絶・羈縻」という三つの意味をもっている^[46]。さらに、春秋時代から戦国時代になると、中原で夷狄の国が滅ぼされたが、秦と楚が時に他の国に夷狄とみなされたこともあるため、華夷が国家間の区別の基準として利用されるのは秦の統一から清末までに渡る二千年間になる^[47]。この長い期間においては、華夷の区別は、種族、生活方式、文化（礼の有無）という基準によって行われる。漢族王朝が周辺の国家より弱い時には、種族か生活方式を華夷の基準として強調せず、その区別においては文化がほぼ核心に位置するのである。要するに、華としての中国は夷狄に経済的支援を与える懐柔、および文化をもたらす王化という義務がある代わりに、夷としての周辺の国家は中国の権威を朝貢などの形で認めることと相互的に戦争を行わないという義務がある。ここには、重要な問題がある。もし基準が文明であるとすれば、華夷の転化は夷から華になるだけではなく、華も夷に落ちる可能性もあるはずである。そのため、中華文化を受けた朝鮮、日本、ベトナムは、脱中国の結果として、自分を華と、周辺の小国を夷と定義する同心円的秩序を築くことができるのである。

以上のような天下思想と夷狄思想という中華思想あるいは中華中心思想は、古代世界から見ると、例外的なものではなく、実際には地域大国の自我誇示のための大国中心主義に過ぎなく^[48]、今でも、欧米中心主義あるいは米国中心主義という形で現れる。しかし、他の地域の大国中心主義と異なるのは、中華思想が漢族自身だけではなく、漢族と夷狄としての胡族との相互作用の産物であるところにある。華夷の相互作用から進化しつつある中華中心思想は、東アジアより、漢族王朝と遊牧政権との辺境をめぐる相互作用という視点から明らかにするしかない^[49]。例えば、漢族と遊牧民族との相互作用に注目しているパーデューの提案した「辺境視角 (frontier perspective)」は、朝貢を文化間の交流とみなして、中国が遊牧民族との相互作用を通じて自分の核心価値に新たな要素を持ち込むことを示す^[50]。このような相互作用は、南北朝と宋遼金時代に顕著である。さらに、漢族と遊牧民族との間での文化的競争がこのような相互参考と同時に存在し、競争による新しい文化が後に互いに継承される。スカフは、隋唐帝国と周辺国家との長期的相互作用を分析して、その中には軍事的競争だけではなく、イデオロギー的競争もあって、「天可汗」という称号が儒教と突厥の伝統思想を融合させる試みであったが、その後の征服王朝にも継承された、と指摘している^[51]。

三 古代東部ユーラシアを動かす制度

権力関係をめぐる世界像は客観的な相互作用のパターンを描き出す代わりに、世界観に関する世界像はシステムに対する主観的な認識を示す。しかし、実際には、権力を背景にして、世界観にもとづいて築かれた制度こそ、システムの日常的相互作用を調整して規制する。この場合に、古代東部ユーラシアの制度は、英国学派の第一次制度 (primary institutions) にもあてはまる。すなわち、古代東部ユーラシアの制度は、「深く相対的に長い社会的実践であり」、「国際社会における参加国に共有されるだけではなく、彼らにとって合法的行為 (Legitimate Behavior) と認められる」ことなのである^[52]。そのため、これらの制度は、単に欺騙行為を罰して協力的行為に報いることを通じて取引コストと不確実性を減らして、相互作用に対する情報を提供して、最後に協力の実現の可能性を高めることだけではなく^[53]、実践されると同時に制度を裏付ける世界観を参加国にもたらす社会化的機能もある^[54]。このような機能は、中国王朝に対する朝鮮の「事大主義」によく示されている^[55]。

もし古代東アジアの一番重要な制度は何かと聞かれるならば、朝貢制度^[56]は必ず挙げら

れることになろう。これは、明朝以降、覇権国としての中国王朝（明朝と清朝）が対外政策を朝貢によって統一させることで、より顕著になる。朝貢に対して、フェアバンクの「朝貢-貿易論」が絶大な影響を与えた。彼にとっては、朝貢は、二つの側面から認識すべきなので、中国にとって外国の朝貢が中国の天子に権威か合法性を与える外交面的役割と、朝貢国にとってギフトを代価にして中国から回賜と通商の権利をもらう経済面的役割があった^[57]。このフェアバンクの考えを基礎に、浜下武志は、朝貢貿易システムの終止符を清末に打つのではなく、近代に転じて以降も、朝貢貿易システムが生き残り地域経済圏として近代化における危機を克服することになった、と指摘する^[58]。もちろん、朝貢は必ず同様な形式で行われるはずではない。リュウは、朝貢の多様性を強調して、異なる朝貢国が異なる朝貢パターンをとるだけではなく、模範朝貢国としての韓国が時期によって異なる朝貢行為をとることを示す^[59]。このように朝貢システムを理論づけることで朝貢システムに新たな解釈を与えることができる。例えば、張勇進とブザンは、古代東アジアにおけるシステムを国際社会としての朝貢システムと、このシステムを裏付ける憲法的構造（Constitutional Structure）を世界と社会ハーモニーへの促進、秩序のある不平等、礼的正義、と定義した^[60]。依然として、朝貢システムといえ、同心円的な構造を思い浮かべることが多い。しかし、スプルートは、朝貢行為の背後には共有文化の存在を否定して、その行為の成立には一定の権力変化があることで、朝貢システムを多頭的階層（Heterarchy）と定義し、そのため、朝貢の意味する服従は単に行為遂行的礼儀に過ぎなかった、と指摘する^[61]。さらに、朝貢の中心が必ず中国にあるのではなく、陳尚勝によれば、小中華と自認する朝鮮、日本、ベトナムにも自国を中心にする朝貢関係が存在したことが指摘されている^[62]。

朝貢は前秦から清末までずっと継続し、特に明清以降の「朝貢一元体制」によってより顕著なのが、唐王朝までは複数の制度の中の一つに過ぎなかったことである。さらに、この複数の諸制度の中で政治的意味が一番深かったのは冊封にほかならない。前に述べた西嶋の東アジア世界論に動力を与えるのはこの冊封体制である。西嶋は、中国古代の皇帝制度における爵制に注目して、国内の臣に与える「王」「侯」などの爵を外国の首長に与えることを通じて、外国を中国の国際政治秩序に組み入れることを冊封として扱う。この冊封体制は、漢朝から始まり、魏晋南北朝時代にさらに発展した結果として隋唐において成熟したが、唐王朝の滅亡と同時に東アジア文化圏と一緒に崩れ、それ以降、宋王朝の経済文化圏と元朝における東アジア世界の一時的動揺の後、明清になって再び復活した^[63]。しか

し、西嶋の冊封体制論は、あくまでも中華文化圏に限られるため、中国王朝にとって一番重要な対遊牧国家政策を説明することができず、それゆえ地域的意味から批判される。この点を問題にする金子修一は、冊封関係が単に中華文化圏の諸国家だけではなく、遊牧国家にも適用できると考える。例えば、可汗・贊普などの本国の称号である「本国王」と臣服の意味のある「徳化王」も冊封に属する。そのため、漢から唐までの千年間に、東部ユーラシアは冊封を通じて動いていた^[64]。しかし、西嶋と異なって、冊封体制がよく利用される時代は隋唐ではなく、動乱にある南北朝であると、金子と堀はいう。このような冊封体制には、外国の首長は中国の臣になるが、官僚としての内臣ではなく、内臣より一段階低く中国の領域の外にある外臣にあたる^[65]。しかし、強大な匈奴などの遊牧帝国に対して、中国王朝はこれらの遊牧帝国をコントロールすることが難しいと認識し、外臣ではなく、「夷狄不臣」という儒教的思想にもとづいて、彼らを自分で支配しない「客臣」として冊封する^[66]。最後に、政治上の冊封体制あるいは君臣関係を裏付けるのは、血縁上の父子関係なのだ、と韓昇はいう。このように、政治上の君臣関係は、宗法関係によって、倫理的意味を身に着けることを通じ、より強大な権威を中国王朝に与えることになるのであった^[67]。

最後に、国際関係の階層研究を参考にし、古代東部ユーラシアにおける中国と周辺国家との間における階層的制度の形成に焦点を置くのは近年の成果である。そのパイオニアは、21世紀の中国の台頭に対するアジア国家のといった追随（Bandwagoning）と、現実主義にもとづいて台頭国に対する均衡（Balancing）との矛盾を切り口にして、それを東アジアの長い歴史をもつ階層性に関連させる研究を行うカンである。^[68]カンにとって、階層性はシステムの参加国のコンセンサスによって生まれたがゆえに、均衡より、追随・適応（Accommodation）・服従（Submission）の方が顕著なのである。単に物質の側面ではなく、階層性は、属国が中国の文化の優位性を認めて学ぶことをつうじて、中国文化による制度及び規範を正当化させて内部化（Internalize）する。そのため、属国が冊封・朝貢・正朔の遵守をつうじて中国に服従を示すのであれば、中国は属国に攻撃という懲罰を与える必要がなくなり、他方、中国は自分に服従する属国に経済・安全保障などの公共財を提供するため、属国は強大な中国と抗争する必要もなくなる^[69]。このように、下位国家が部分的な主権を代価にして自分に有利な政治秩序を得て、上位国家が経済・安全保障に対する約束を代価にして権威を身に着けることによって、階層性は成立したのである。しかし、階層性の成立は、単に外交だけで成功するはずはなく、その初期には一定の武力行使が必

要であった。孟維瞻は明朝初期の朝鮮に対する武力行使を強調して、覇権国家が階層性を成立するためには権力という「ハードパワー」と文化という「ソフトパワー」を同時に利用するのだと考えている^[70]。

第三節 先行研究の問題

古代ユーラシアにおけるシステムに対して、三つの視角からその本質を集約しようとし、その結果、研究者の関心によって多様な世界像を明らかにすることができた。もっとも、これらの研究の間では、強調される要素は異なっても、他の要素の利用をつうじて補完されるのが普通である。例えば、帝国理論は、単に権力だけではなく、思想的要素と制度的要素によって帝国システムの動きを説明しようとする。同じく、天下思想に対する研究は、天下思想を冊封・朝貢・和親などの制度で物象化して、システムの展開を解釈しようとする。そのため、古代東部ユーラシアは、実際には、権力闘争において優位に立っていた中国王朝（漢族王朝と胡族王朝）が天下思想と華夷思想を含む中華中心思想にもとづいて、冊封・朝貢・和親・羈縻などの制度をつうじて、同心円か階層的なシステムを維持するものであった。このような解釈にたつものこそ、フェアバンクの「中国世界秩序」にほかならない。

しかし、歴史的に検討すれば、元朝と清朝のような強大な帝国が中国世界秩序を維持することは可能かもしれない、他の時代では、前漢中期と唐朝初期には漢族王朝による覇権システムが異常である一方、モンゴリアと河西廻廊をめぐる漢族王朝と遊牧帝国との競争こそ普通であった。ロッサビの言ったとおり、中国は単に対等な国々の中の一國に過ぎない^[71]。そのため、中華中心主義にもとづいて東部ユーラシアにおけるシステムを中国世界秩序、あるいは中国の対外政策に還元すれば、周辺国家の主体性が見失われてしまうことは言うまでもなく、中国と匹敵する実力をもつ大国のシステムに対する影響力は軽視される。結果として、東部ユーラシアに対する説明は現実より、中華レトリック^[72]という幻想的なものになってしまう。これを克服するためには、思想と制度を分析する前に国家間の権力の分配を明らかにすることが必要である。さらに、思想と制度の変動を権力の分配の変動によって説明しなければならない。

そして、東アジア枠組みでは、中国王朝と遊牧帝国との相互作用は、中国と朝鮮と日本との関係に対する外的要因として言及されるが、東アジアの諸国家の外交パターンと異な

るため、焦点を置かれることがなかった。代わりに、北アジア研究からなる東部ユーラシア枠組みでは、漢族王朝と遊牧帝国との相互作用が強調されるが、漢族王朝と遊牧帝国との相互作用をつうじて設けた制度がいかに東アジアの諸国家の相互作用に影響するかについての研究は多くはない。つまるところ、北アジア研究からなる東部ユーラシア枠組みが中国王朝とモンゴリア・西域・チベットとの相互作用に、東アジア枠組みが中国と満州・朝鮮半島・日本（・ベトナム）との相互作用に焦点を置くことで、東部ユーラシアという地域は中国を軸にして東西二部分に分かれていく。しかし、陳寅恪のいった「外族盛衰の連鎖性」のように^[73]、東部ユーラシアを明らかにしようとするなら、研究の地域範囲がその全体を覆って、諸国家の相互作用がいかに所在地域を超えて全地域まで影響を及ぼすかを解明しなければならない。

また、視角が東アジアから東部ユーラシアまで移ると、平和より軍事的闘争が圧倒的に重要になると思われる。だが、今日の研究が戦争より外交を強調するのは、問題になるとはいえないが、古代には戦争こそが重要な「政治的交通」なので^[74]、戦争抜きで古代の国際関係を全面的に説明するのは難しい。さらに、国際関係は、現実主義がよく主張しており、権力闘争あるいはレアルポリティークにある^[75]。そのため、権力の基礎がなくなると、中華中心思想と中国に生まれた制度は実施される可能性が次第になくなる。実際のところ、世界観の物象化は、例外なく、権力闘争に勝つ大国の意志によって行なわれ、外交面の制度の実施は、戦争が終わった後で勝者の利益の維持のために行われる。そのため、東部ユーラシアにおけるシステムを明らかにしようとするのなら、単に外交に注目するだけではなく、戦争にも十分な関心を持たなければならないのである。

近年、古代ユーラシアに対する研究は、歴史学から国際関係論にまで拡大している。ここには、国際関係理論を古代に適用するのが相応しいかどうかという問題がある。石母田氏が早くも 1970 年代に国際関係という視角から東アジアを研究すべきだと主張したが^[76]、日本の国際関係論では古代より近代の方が重視されるため、このような議論は少ない。その代わりに、欧米の国際関係論は、国際関係の普遍性を重視するため、躊躇なく国際関係論を古代東部ユーラシアに直接応用する。この問題に真剣に応えているのは中国の国際関係論である。中国の国際関係研究者は、古代東部ユーラシアには、近代の民族国家が存在しなくても、独立的かつ自主的な政治体が存在すれば、国際関係を成立させる相互作用も成立すると主張する^[77]。実際には、国際関係論は、国家間の相互作用をテーマにする学問であり、古代東部ユーラシアの国家間相互作用を歴史学と異なる視角から再認識すること

ができ、過去に軽視されていた問題を発見できる可能性も高い。例えば、前述の階層理論は古代東部ユーラシアを解明することにとって重要な解釈力がある。だが、古代東部ユーラシアに対する階層理論には、既に指摘した二つの問題、すなわち、文化圏としての東アジアだけに注目しているという地域問題と権力闘争を軽視しているというテーマの根幹に関わる問題があるばかりでなく、さらに、システムと構造を区別しないとか、単極的な階層システムだけを対象にするといった理論付け上の問題点もある。

要するに、先行研究の諸問題は、以下のように示すことができる。中国中心主義によって東部ユーラシア国際システムを漢の対外関係に還元すること、東部ユーラシアを一つのシステムとしないこと、戦争という軍事的側面の相互作用が外交という政治的側面の相互作用と比べて重視しないこと、及び、国際システムに対する理論枠組みが不足していること、などである。

第四節 本論文の独創性と構成

本論文は、第三節で指摘したいくつかの問題を踏まえて、システム的な研究方法にもとづいて、すなわち、国際システムに関する分析枠組みにもとづいて、秦漢時代における東部ユーラシア国際システムを記述・説明・解釈しようとする。東部ユーラシア国際システムを一国（主として中国の歴代王朝）の対外関係史に還元するのは、基本的に中国中心主義にもとづいて、東部ユーラシアを中国による世界秩序に入れることによる。そして、このような立場には、研究対象としての東部ユーラシアは、地理的意味の東部ユーラシアそのものではなく、中国との関係を基準として、中国の王朝と関係を持つ国家と中国からなる部分だけである。したがって、秦漢時代における東部ユーラシア国際システムの本質を明らかにするためには、必ず一国史観という罫を回避し、国家の対外関係という視角から脱して、システムという視角から分析を行う必要がある。

もっとも、システム的な研究方法はどのようなものであろうか。一般的に言えば、システム的な研究方法は、二つあり、一つがシステム理論で、もう一つがシステムに関する理論である。前者は、システムという分析レベルにおける構造を独立変数として国際関係を説明する理論であり、システムそのものより、システムの構造を重視するために、構造理論とも呼ばれる。このような理論は、主流の国際関係論であり、秦漢時代における東部ユーラシア国際システムにもそれを適用する試みがある¹⁷⁸⁾。もっとも、このような理論には、

歴史に対する関心が不足しているため、秦漢時代における東部ユーラシア国際システムにおける相互作用をあまり重視しておらず、歴史に対する認識の不足により、システムの構造に対する判断も正しいとは言えない。後者は、システムそのものに関心があり、システムの成立の条件や、システムの形成・変化・崩壊などのプロセス、システムの特徴としての構造といった問題に焦点を置く。その代表的な理論は、英国学派である。英国学派は、成立初期、世界中で歴史上に存在した国際システムに対して関心を持って、古代の国際システムを分析するために、早くから国家と相互作用という二つの側面から理論枠組みを提案した^[79]。その後、ブザンとリトルは、「世界歴史の国際システム」というテーマを提唱して、成熟的な理論枠組み（ユニット、相互作用の能力、プロセス、構造という四つの側面）を提案した^[80]。しかし、英国学派は、戦国時代と明清時代における東部ユーラシア国際システムを研究したが、秦漢時代における東部ユーラシア国際システムを研究したことがない。本論文は、英国学派の国際システムに対する理論枠組みを秦漢時代における東部ユーラシア国際システムに適用する試み、という意味を持つ。一方、英国学派が地理的要素をあまり重視しない問題を解決するために、本論文では、境界という要素も理論枠組みに入れる^[81]。したがって、秦漢時代における東部ユーラシア国際システムに対して、本論文は、境界、ユニット、相互作用および構造という四つの側面から、分析を行うことになる。

この理論枠組みを用いて、今までの研究が秦漢時代における東部ユーラシア国際システムの存在を理論的に証明しなかったという問題を解決することができる。すなわち、秦漢時代における東部ユーラシアは、境界の側面から閉鎖的システムであったこと、ユニットの側面から国際システムに適格するユニットを有したこと、相互作用の側面からシステムを形成させる程度の相互作用があった。本論文では、これらのことを通じて、システムが形成されたことを証明する。一方、この理論枠組みは、相互作用を軍事、政治、経済、文化（社会文化）、環境などの部門（Sectors）に分けて^[82]、異なる国際システムに異なる相互作用を対応させる。本論文は、軍事・政治的相互作用による全面的国際システム（Full International System）を研究対象とするために、戦争と外交との二つの側面から、秦漢時代における東部ユーラシア国際システムの相互作用を分析するものである。

一方、秦漢時代における東部ユーラシア国際システムを中国の世界秩序とみなすため、先行研究は基本的に、匈奴、西域と漢との国家間相互作用と、漢帝国の中の異民族と漢との帝国内の相互作用を同一視する。しかし、帝国の形成初期、帝国と国内の異民族との関係も準国家間関係とみなすことができるため^[83]、秦漢時代における東部ユーラシア国際シ

システムの相互作用は、国家間相互作用と帝国内の相互作用に分ける必要がある。国家間相互作用と帝国内の相互作用を区別した上で、それぞれの変化プロセスとシステムに対する影響を明らかにする。

そして、構造に関して、先行研究から見ると、少なくとも権力、制度、観念などの側面から分析が行われる。しかし、古代には、近代のように国家により設計される国際制度と共通の観念が存在したわけではなく、国際制度はあっても、一定の権力分布の産物として、権力の差を維持しながら機能していた¹⁸⁴⁾。したがって、古代の国際システムが基本的に権力闘争によって特徴づけられるため、その構造は権力分布に他ならない。権力分布を判断するには、リアリズムのようにシステムにおける各国家の能力を量的に測定することを通じて、システムの権力の総量の一定の割合を占めることを基準にし、大国の数を決める。その大国の数により、システムが単極、二極、多極システムに分類される。しかし、権力の量的な測定はさまざまな問題があるだけでなく、古代には国家の能力を判断するためのデータがないため、適用されることができない。したがって、本論文は、権力を関係的に測定して、階層的な二国間制度により二国間関係の階層性を明らかにした上で、システムにおける権力分布を判断する。すなわち、システムの全ての二国間関係の階層性を比較して、二国間関係の上位国家が特定の国家に集中することを明らかにするのである。この特定の国家の数により、システムを単極、二極、多極システムと判断することになる。

本論文の独創性は、英国学派を主流とする国際システムに対する理論枠組みにもづいて、秦漢時代における東部ユーラシア国際システムを記述・説明・解釈することにある。言い換えると、境界・ユニット・相互作用という三つの基準にしたがって、秦漢時代における東部ユーラシア国際システムの存在を理論的に説明し、また軍事と外交という二つの側面から秦漢時代における東部ユーラシア国際システムでの国家間相互作用と帝国内の相互作用を説明し、権力を関係的に測定することで、階層的二国制度による国家間の権力の差を通じて権力分布を明らかにすることを課題とする。

本論文は、五章から成り立つ。第一章では、理論枠組み及び構造に関する判断の方法を説明する。システムに対して、今までの理論付け（すなわちシステム理論とシステムに関する理論）を整理・区別した上で、システムの形成の条件（境界、ユニット、相互作用）を明らかにする。その後、先行研究による幾つかの選択肢（権力分布、国際制度、国際文化）から、権力分布をシステムに特徴を与える構造とみなす。量的な権力ではなく、関係的権力（すなわち階層的権力）を用いて、制度による階層性を基準にして、システムにお

ける階層関係を明らかにすることを通じて、その中の権力の集中点としての国家の数によりシステムを単極、二極と多極に判断し分類する。

第二章では、システムの形成条件（境界・ユニット・相互作用）にもとづいて、東部ユーラシア国際システムの形成を明らかにする。具体的に言えば、地理、経済、政治的側面から、東部ユーラシアと他地域との境界を明かにして、その後、東部ユーラシアを、地理・生業・生活的要素を基準に、農耕地域、遊牧地域と西域に分ける。そして、各地域におけるユニット（前国家アクターと国家）が領土・人口・政府などの構成要素と独立自主的に对外政策を行える能力要素を備えていることを説明する。最後に、農耕地域、遊牧地域と西域という三つの地域の間で、漢と匈奴との関係を軸とした、頻繁かつ軸複合的な相互作用の形成のプロセスを明らかにすることを通じて、東部ユーラシア国際システムの形成を漢と匈奴との争覇によるものと指摘する。

第三章では、東部ユーラシア国際システムにおける国家間相互作用を歴史的に明らかにする。農耕帝国としての漢と遊牧帝国としての匈奴が漠南において直接に対抗しながら、西域をめぐる覇権を争うという二つの側面から、両漢時代の東部ユーラシアにおける相互作用を明らかにする。そして、システムに影響を及ぼす大国としての漢と匈奴との関係を時代区分の基準とし、漢と匈奴との争覇による対抗の時代、匈奴の漢への称臣により始まる平和の時代、新と匈奴との決裂から漢と匈奴との争覇までの対抗の時代、及び北匈奴滅亡後の漢による単極の時代という四つの時期に分けて分析を展開する。

第四章では、農耕地域における漢帝国の形成、及び帝国内での中央政府と異民族との相互作用を説明する。秦漢は農耕地域の辺縁（南越、閩越、東甌、西南夷、朝鮮）を、征服して、その後、郡県制および支配強化政策を通じて、帝国の一部として統合した。一方、漢は、匈奴に勝って、農耕地域と遊牧地域との接壤地帯を征服して、そこに投降、俘虜、内属などによって定着した異民族を特別な政治制度と組織で統治した。このように、漢では、異民族が多く漢王朝に支配された。しかし、漢の支配および搾取により、異民族は相次いで反乱を起こし、帝国を内部から崩壊させる。

第五章では、秦漢時代における東部ユーラシア国際システムの国際制度を明らかにして、これらの国際制度の階層性により、構造としての権力分布を解明する。秦漢時代の東部ユーラシアには、質子、朝貢および冊封という三つの国際制度があった。これらの国際制度は、細分することができる。そして、細分された国際制度は、異なる階層性を示す。これらの国際制度を通じて、システムにおける権力の階層性の分布を明らかにすることとする。

註：

- [1] 例えば、ブル（Bull）は、主権国家の条件を対内的主権と対外的主権を同時に持つこととし、宗主国に服従する従属国は対外的主権を失うため、従属国を主権国家とみなさない。したがって、中国の周囲の国家が中国を宗主国と認めて対外的主権を失ったため、この宗主的国家システム（a ‘suzerain-state system’）では、対内的かつ対外的な主権を持つ国家が中華帝国（Imperial China）のみで、国際システムより国内システムである、と考えられる。Hedley Bull: *The Anarchical Society: A Study of Order in World Politics*, Macmillan International Higher Education, 2012, pp. 10-11
- [2] 王日華「国際体系与中国古代国家間関係研究」『世界経済と政治』第12期，2009年，59頁
- [3] 李大龍『漢唐藩属体制研究』中国社会科学出版社，2006年，56-105頁；李大龍『從「天下」到「中国」：多民族国家疆域理論解構』人民出版社，2015年，67-107頁
- [4] 閻学通、徐進『中国先秦国家間政治思想選読』復旦大学出版社，2008年，4頁
- [5] Martin Wight: *Systems of States*, Leicester University Press, 1977, pp. 16-17
- [6] Bull Hedley: *The Anarchical Society: A Study of Order in World Politics*, pp. 15-16
- [7] Zhang Yongjin and Barry Buzan: “The Tributary System as International Society in Theory and Practice,” *The Chinese Journal of International Politics*, Vol. 5, 2012
- [8] James E. Dougherty and Robert L. Pfaltzgraff, Jr.: *Contending Theories of International Relations: A Comprehensive Survey (Fifth Edition)*, Longman, 2001, pp.19-40; John K. Fairbank, “A Preliminary Framework”. In John K. Fairbank, ed., *The Chinese World Order: Traditional China's Foreign Relations*, Harvard University Press, Cambridge, 1968, pp. 1~19; 黎虎『漢唐外交制度史』蘭州大学出版社，1998年
- [9] 胡波「古代東亞關係体系的肇始」『外交評論』第1期，2008年；孫力舟「西漢時期東亞國際体系的二極格局分析-基于漢朝与匈奴二大政治行為体的考察」『世界経済と政治』第8期，2007年；王日華「国際体系与中国古代国家間関係研究」『世界経済と政治』第12期，2009年；苗中泉「從三強並立到帝国秩序-西漢時期東亞國際体系的演变」『世界経済と政治』第2期，2016年
- [10] この問題に対して、日中の意見をまとめる最初の試みが、鈴木俊、西嶋定生編『中国史の時代区分』東京大学出版会，1957年。さらに、国内政治の貴族制および国際政治の胡漢問題を軸にして、時代区分に対する研究を、京都学派と歴史学研究会派という二つの学派のもとに整理しようとしたのが、谷川道雄「総説」，谷川道雄他編『魏晋南北朝隋唐時代史の基本問題』汲古書院，1997年
- [11] 古代の歴史分期に対する研究をまとめる研究は、林甘泉、田人隆等『国古代史分期討論五十年 1929-1979年』上海人民出版社，1982年；張広志『中国古史分期討論的回顧与反思』陝西師範大学出版社，2003
- [12] 中国において、秦漢とか隋唐とか明清といった時代をわざと付けることを除いて、古代は、秦漢から明清までの時代を指す。注意すべきのは、中国学者は、基本的に中国中心主義にもとづいて、中国の古代を東部ユーラシアの古代と定義することが多いことである。例えば、大学の教科書として、朱紹侯、齊濤、王育濟編『中国古代史（第五版）』福建人民出版社，2010年；特別の領域に対する研究成果として、張維華編『中国古代對外關係史』高等教育出版社，1993年；袁南生『中国古代外交史 夏商時期-近代以前』湖南人民出版社，2017年
- [13] 例えば、葉自成は、春秋時代中葉に諸侯国が主権国家的性質を持つことで、東アジアに最初の地域システムを、これらの諸夏の諸侯国による「華夏システム」として提案した。（葉自成『中国崛起-華夏体系 500 年的大歴史』人民出版社，2013年）また、例えば、許田波は春秋戦国時代の古代中国システムと近代のヨーロッパシステムを比べて、近代

国際システムの源流になるヨーロッパシステムが勢力均衡の働きによるのに対して、古代中国システムが最終的に統一帝国になった動力が自我強化的改革にある、と指摘しようとした (Victoria Tin-bor Hui, *War and State Formation in Ancient China and Early Modern Europe*, Cambridge University Press, New York, 2005)。

[14] 黎虎『漢唐外交制度史』, 3-122 頁

[15] 西嶋定生「東アジア世界の形成」『中国古代国家と東アジア世界』東京大学出版会, 1997 年 [初出 1983 年], 406-414 頁

[16] Christian Reus-Smit: *The Moral Purpose of the State*, Princeton University Press, 1999, p.30

[17] Barry Buzan and Richard Little: *International Systems in World History: Remaking the Study of International Relations*, Oxford University Press, 2000; Amitav Acharya and Barry Buzan: *Non-Western International Relations Theory: Perspectives On and Beyond Asia*, Routledge, 2010

[18] 「争覇」とは、語義的には、覇権を争うことを指し、日本語では一般的に「覇権争い」と訳すことができるが、国際関係論の論文である本論文では微妙な語意の違いを意識して「争覇」を用いることとする。覇権争いは、大国間における動態的な争いを強調し、言い換えると、外交、軍事などの具体的な分野において大国が一連の政策を通じて他の国家、特にライバル的大国に対し圧倒的な優位性によって指導権を握ることを意味する。他方で、争覇は、国際システムの主な特徴として、全ての分野において、システムをめぐる指導権に対する大国の間の競合だけではなく、大国が小国・弱国を屈服させたり、丸め込んだり、懲罰として攻撃したりする関係をも意味する。言い換えれば、覇権争いは、具体的かつ相互作用的な特徴が顕著である一方、争覇は、一般的かつシステム的な特徴が顕著である。国際関係論には、例えば、冷戦時代を米ソ争覇とみなし、21 世紀を米中争覇とみなす用語法もある。2019 年、『東亜』の特集では「米中争覇のゆくえ」というテーマ名が使用されている：「特集 米中争覇のゆくえ」『東亜』第 626 号, 2019 年

[19] 鬼頭清明『日本古代国家の形成と東アジア』校倉書房, 1976 年

[20] 匈奴を中心にする研究は以下のようなものである。沢田勲『匈奴-古代遊牧国家の興亡』東方書店, 1996 年; 林俊雄『スキタイと匈奴 遊牧の文明』講談社, 2007 年; 馬長寿『北狄と匈奴』三聯書店, 1962 年; 林幹『匈奴史』内蒙古人民出版社, 2007 年; 陳序経『匈奴史稿』中国人民大学出版社, 2007 年。突厥・ウイグルを中心にする研究には以下のものがある。護雅夫『古代トルコ民族史研究 I』山川出版社, 1992 年; 内田吟風『北アジア史研究-鮮卑柔然突厥篇-』同朋舎, 1975 年; 馬長寿『突厥人和突厥汗国』上海人民出版社, 1957 年; 林幹『突厥与回紇史』内蒙古人民出版社, 2007 年; Larry W. Moses, "T'ang Tribute Relations with the Inner Asian Barbarian", in Perry, John Curtis and Bardwell L. Smith, eds.: *Essays on T'ang Society: The Interplay of Social, Political and Economic Forces*, Brill, 1976; Colin Mackerras: "Sino-Uighur Diplomatic and Trade Contacts (744-840)", *Central Asiatic Journal* 13(3), 1969, pp. 215-240. 遊牧民族を時代順に研究するのは以下のようなものである。Owen Latimore, *Inner Asian Frontiers of China*, Oxford University Press, 1989; Thomas Barfield, *The Perilous Frontier: Nomadic Empires and China, 221 BC to AD 1757*, Wiley-Blackwell, 1992; Nicola Di Cosmo: *Ancient China and its Enemies: The Rise of Nomadic Power in East Asian History*, Cambridge University Press, 2002

[21] 石母田正『石母田正著作集 第四巻』岩波書店, 1989 年, 5-9 頁

[22] 堀敏一『東アジア世界の形成-中国と周辺国家』汲古書院, 2006 年, 6 頁

[23] 廣瀬憲雄『古代日本外交史-東部ユーラシアの視点から読み直す』講談社, 2014 年, 36-38 頁

[24] 山本吉宣は、対外政策だけをコントロールする覇権と区別して、対外政策と内政を共にコントロールする政権を帝国と定義する。さらに、他の国家を、コントロールすることではなく、強い影響を与える政権は、インフォーマルな帝国と定義される。以上の帝国システムは、山本氏によると、インフォーマルな帝国システムに過ぎない。山本吉宣『「帝国」の国際政治学-冷戦後の国際システムとアメリカ』東信堂, 2006 年, 149-152 頁

[25] 堀敏一「東アジアの歴史像をどう構成するか-前近代の場合」『律令制と東アジア-私の中国史学 (二)』汲古書院, 1994 年 [初出 1963 年], 116-125 頁; 堀敏一「中華世界」,

- 谷川道雄他編『魏晉南北朝隋唐時代史の基本問題』汲古書院，1997年，33-36頁
- [26] 李大龍『從「天下」到「中国」：多民族国家疆域理論解構』；趙永春『從複數「中国」到單數「中国」-中国歷史疆域理論研究』黑龍江教育出版社，2014年
- [27] Karl Wittfogel, *Oriental Despotism: A Comparative Study of Total Power*, Yale University Press, 1981
- [28] 柄谷行人『世界史の構造』岩波書店，2010年，156-167頁
- [29] 鈴木靖民「東部ユーラシア世界史と東アジア世界史-梁の國際關係・國際秩序・國際意識を中心として-」，鈴木靖民他編『梁職貢圖と東部ユーラシア世界』勉誠出版，2014年，32-35頁
- [30] 孫力舟「西漢時期東亞國際體系的二極格局分析-基于漢朝与匈奴二大政治行為體的考察」
- [31] 苗中泉「從三強並立到帝國秩序-西漢時期東亞國際體系的演變」
- [32] 菅沼愛語『7世紀後半から8世紀の東部ユーラシアの國際情勢とその推移-唐・吐蕃・突厥の外交關係を中心に-』溪水社，2013年；菅沼愛語「西魏・北周の對外政策と中国再統一へのプロセス-東部ユーラシア分裂時代末期の外交關係-」『史窓』2月，2013年
- [33] 周方銀「朝貢體制的均衡分析」『國際政治科學』第1期，2011年
- [34] Jonathan Karam Skaff: *Sui-Tang China and its Turko-Mongol Neighbors: Culture, Power and Connections, 580-800*, pp.39-50
- [35] Jeffrey T. Checkel, "International Institutions and Socialization in Europe: Introduction and Framework," *International Organization* 59(4), 2005: 801-826
- [36] 前田直典「東アジアに於ける古代の終末」鈴木俊、西嶋定生編『中国史の時代區分』
- [37] 西嶋定生「東アジア世界の形成」第398頁。しかし、共通の文化を有することによって歴史的世界が成立することは、藤間生大が否定した。彼は、古代東アジアの形成を民間的交流と關係させて、そのため、世界形成に対して手工業者・仏教徒・商人の役割を重視する（藤間生大『東アジア世界の形成』春秋社，1977年）。
- [38] 西嶋定生「東アジア世界の形成」399-402頁
- [39] 高明士『天下秩序与文化圈的探索：以東亞古代的政治与教育為中心』上海古籍出版社，2008年，第229-234頁；韓昇『東亞世界形成史論』復旦大学出版社，2009年，第53-70頁
- [40] 李成市『東アジア文化圈の形成』山川出版社，2000年，71-81頁
- [41] Robert E. Kelly: "A 'Confucian Long Peace' in pre-Western East Asia?," *European Journal of International Relations* 18(3), 2011, pp. 407-430
- [42] 安部健夫『元代史の研究』創文社，1972年，425-526頁
- [43] 高明士『天下秩序与文化圈的探索：以東亞古代的政治与教育為中心』3-17頁
- [44] 檀上寛『明代海禁=朝貢システムと華夷秩序』京都大学學術出版会，2013年，347-353頁
- [45] 趙汀陽『天下體系：世界制度哲學導論』中国人民大学出版社，2011年；趙汀陽『天下的當代性：世界秩序的實現与想像』中信出版集團，2016年
- [46] 吉本道雅「中国古代における華夷思想の成立」夫馬進編『中国東アジア外交交流史の研究』京都大学學術出版会，2007年
- [47] 何芳川「“華夷秩序”論」『北京大学學報（哲學社會科學版）』第6期，1998年
- [48] 王永平『從“天下”到“世界”：漢唐時期的中国与世界』中国社会科学出版社，2015年
- [49] Nicola Di Cosmo: *Ancient China and its Enemies: The Rise of Nomadic Power in East Asian History*, Cambridge University Press, 2002
- [50] Peter C Perdue: "A Frontier View of Chineseness", in Giovanni Arrighi, Takeshi Hamashita and Mark Selden, eds.: *The Resurgence of East Asia : 500, 150 and 50 Year Perspectives*, Routledge, 2003
- [51] Jonathan Karam Skaff: *Sui-Tang China and its Turko-Mongol Neighbors: Culture, Power and Connections, 580-800*, pp. 105-133
- [52] Barry Buzan: *An Introduction to the English School of International Relations: The Societal Approach*, Polity, 2014, pp. 16-17
- [53] Robert O. Keohane, , *After Hegemony: Cooperation and Discord in the World Political Economy*,

- Princeton University Press, 1984
- [54] Jeffrey T. Checkel: “International Institutions and Socialization in Europe: Introduction and Framework”
- [55] 孫衛國「論事大主義与朝鮮王朝対明関係」『南開学報（哲学社会科学版）』第4期，2002年
- [56] 前秦から清朝までの朝貢を歴史的に説明するのは次の本にある。李雲泉『朝貢制度史論－中国対外関係体制研究』新華出版社，2004年
- [57] John K. Fairbank and S. Y. Têng: “On the Ch’ing Tributary System,” *Harvard Journal of Asiatic Studies* 6(2), 1941, pp. 129-149; John K. Fairbank: “Tributary Trade and China’s Relations with the West,” *The Far Eastern Quarterly* 1(2), 1942, pp. 135-246; John K. Fairbank, “A Preliminary Framework”, pp. 1-19
- [58] 浜下武志『近代中国の国際的契機－朝貢貿易システムと近代アジア』東京大学出版会，1990年
- [59] Joshua Van Lieu: “The Tributary System and the Persistence of Lake Victorian Knowledge,” *Harvard Journal of Asiatic Studies* 77(1), 2017, pp. 73-92
- [60] Zhang Yongjin and Barry Buzan: “The Tributary System as International Society in Theory and Practice,” *The Chinese Journal of International Politics* Vol. 5, 2012, pp. 3-36
- [61] Hendrik Spruyt: “Collective Imaginations and International Order: The Contemporary Context of the Chinese Tributary System,” *Harvard Journal of Asiatic Studies* 77(1), 2017, pp. 21-45
- [62] 陳尚勝「朝貢制度と東亜地区伝統国際秩序－以 16-19 世紀的明清王朝為中心」『中国边疆史地研究』第2期，2015年
- [63] 西嶋定生「東アジア世界の形成」403-414頁
- [64] 金子修一『古代東アジア世界史論考－隋唐の国際秩序と東アジア－』八木書店，2019年
- [65] 栗原朋信「文献にあらわれたる秦漢璽印の研究」『秦漢史の研究』吉川弘文館，1960年
- [66] 保科季子「漢儒の外交思想－『夷狄不臣』論を中心に」夫馬進編『中国東アジア外交交流史の研究』京都大学学術出版会，2007年
- [67] 韓昇『東亜世界形成史論』復旦大学出版社，2009年，26-31頁
- [68] David C. Kang: “Getting Asia Wrong: The Need for New Analytical Frameworks,” *International Security* 27(4), 2003, pp. 57-85; David C. Kang: “Hierarchy, Balancing, and Empirical Puzzles in Asian International Relations,” *International Security* 28(3), 2004, pp. 165-180; David C. Kang: *China Rising: Peace, Power, and Order in East Asia*, Columbia University Press, 2007
- [69] David C. Kang: *East Asia Before the West: Five Centuries of Trade and Tribute*, Columbia University Press, 2010; David. C. Kang: “Hierarchy and Legitimacy in International Systems: The Tribute System in Early Modern East Asia,” *Security Studies* 19(4), 2010, pp. 591-622.
- [70] 孟維瞻「古代東亜等級制の生成条件」『国際政治科学』第1期，2016年
- [71] Morris Rossabi: *China Among Equals: The Middle Kingdom and Its Neighbors, 10th-14th Centuries*, University of California Press, 1983
- [72] Prasenjit Duara: “Afterword: The Chinese World Order as a Language Game-David Kang's East Asia Before the West and Its Commentaries,” *Harvard Journal of Asiatic Studies* 77(1), 2017, pp. 123-129
- [73] 陳寅恪『唐代政治史述論稿』上海古籍出版社，1997年，125頁
- [74] 石母田正『石母田正著作集 第四卷』108-112頁
- [75] Kenneth N. Waltz, *Theory of International Politics*, Addison-Wesley Publishing Company, 1979; Hans J. Morgenthau, *Politics among Nations: The Struggle for Power and Peace*, McGraw-Hill, 1997; John J. Mearsheimer, *The Tragedy of Great Power Politics*, W. W. Norton & Company, 2001
- [76] 石母田正『石母田正著作集 第四卷』第5-9頁
- [77] 葉自成、扈珣「中国春秋戦国時期的外交思想流派及其与西方的比較」『世界經濟与政治』第12期，2001年；王日華「国際体系と中国古代国家間関係研究」
- [78] 王日華「国際体系と中国古代国家間関係研究」；苗中泉「從三強並立到帝国秩序－西漢時期東亜国際体系的演變」
- [79] Hedley Bull and Adam Watson: “Introduction,” in Hedley Bull and Adam Watson: *Expansion of International Society*, Clarendon, 1992, p. 1; Hedley Bull: *The Anarchical Society: A Study of*

Order in World Politics, pp. 1-21

[80] Barry Buzan and Richard Little: *International Systems in World History: Remaking the Study of International Relations*, pp. 15-110

[81] 国際システムにとって地理的要素の重要性に関する研究は、Jared M. Diamond: *Guns, Germs, and Steel: The Fates of Human Societies*, W. W. Norton & Company, 1999; K. J. Holsti: *International Relations: A Framework for Analysis (Fourth Edition)*, Prentice-Hall, INC., 1983, p. 28; Tang Shiping: “International System, not International Structure: Against the Agent-Structure Problématique in IR,” *The Chinese Journal of International Relations* 7(4), 2014, p. 493

[82] Barry Buzan, Charles Jones, and Richard Little: *The Logic of Anarchy: Neorealism to Structural Realism*, Columbia University Press, 1993, pp.30-33; Barry Buzan and Richard Little: *International Systems in World History: Remaking the Study of International Relations*, pp.91-96

[83] Kees Van Der Pijl: *Nomads, Empires, States: Modes of Foreign Relations and Political Economy*, Volume 1, Pluto Press, 2007, p. 64

[84] John J. Mearsheimer: “The False Promise of International Institutions,” *International Security* 19(3), 1994, p.7

第一章 国際システムに対する分析枠組み：境界、ユニット、相互作用及び構造

国際システムに関して、二つの理論的立場がある。一つは、システム理論と呼ばれ、システム、あるいはシステムというレベルにおける構造について、独自変数を利用して、国際関係を説明する理論である。このような理論は、二つの段階に分かれる。第一段階には、20 世紀中葉の行動主義（Behavioralism）が、国際システムを中心とした研究を行い^[1]、国際システムをマクロ的要因として、国家間相互作用を説明・予測していた。すなわち、国際システムは構造を通じて機能を維持し果たすことで、システムにおける国家の対外行動をアウトプットとして恒常的に再生産する^[2]。例えば、カプランは、国際システムを行動システムと定義し、勢力均衡システム（The Balance of Power System）、ルーズな二極システム（The Loose Bipolar System）、タイトな二極システム（The Tight Bipolar System）、普遍的国際システム（The Universal International System）、階層的国際システム（The Hierarchical International System）、ユニットが拒否権をもつ国際システム（The Unit Veto International System）という六つのタイプを演繹的に提案した^[3]。言い換えると、国際システムのタイプを明らかにすれば、国家の行動は、そのタイプの国際システムの行動原則にもとづいて、予測することができる。そうであるとする、この段階において、システム理論は、システムそのものに対する研究を重視し、その複数の属性を明らかにすることに焦点を置いていた。要するに、第一段階では、国際システムは、大抵二つの意味で使われていたのである。すなわち、グッドマン（Goodman）が言うように、記述的システム（System-as-Description）としての「パターンがあり、かつ確認できる相互作用のある国際政治におけるアクターのアレンジメント」と、解釈的システム（System-as-Explanation）としての「このアレンジメントの本質によって国際関係の場におけるアクターの行為を解釈する主要な変数」との二つに分けられる^[4]。しかし、実際の場合には、二つの意味のシステムは意識的に区別して利用されることが少なく、ほぼ混用されるため一定の曖昧さがある。

この曖昧さを克服するために、第二段階に入った後、システム理論は、システムそのものに対する関心を捨てて、システムを主として、マクロ・レベルという分析レベルにおける意味で用いられる^[5]。分析レベルとしての国際システムは、「相互作用しているユニットのセット」と定義される^[6]。この意味で形成されるシステム理論は、システムそのもので

はなく、システムというレベルにおける構造を独立変数として利用して、国家の行動あるいは国家間の相互作用を従属変数として解釈する。結果として、国際システムはよく国際構造と混同される^[7]。したがって、国際システムは、広義から言うと、「国際行為体の相互作用による集合体」で、狭義から言うと、「国際政治権力の間の相互作用による構造状態」^[8]である。結果として、システム理論は、二つの段階を通じて科学化を実現し、次第にシステムを分析レベルとして高度に抽象化させていき、システムそのものの構成要素・属性・特徴などの問題に対する関心をなくしていった。

もう一つの理論的立場は、システムに関する理論である。「プレゼンティズム (presentism)」と「脱歴史主義 (ahistoricism)」の問題に陥ったシステム理論とは対照的に^[9]、英国学派は『歴史・規範・哲学・原則』を重視する傾向にある^[10]ため、国際システムそのものの存在に対しては関心を持った。英国学派にとっては、国家が国家理由 (Raison D'État) を持つように、国際システムもシステムを運ばせるシステム理由 (Raison de Système) を持つ^[11]。そして、システムは、その発展レベルにより、国際システム、国際社会、世界社会に分かれる^[12]。ブザンによると、「国際システム (現実主義) は、国家間の権力政治に関して、国際無政府状態における構造とプロセスに焦点を置き；国際社会は、国家間の相互の利益・アイデンティティの制度化に関して、共有の規範・ルール・制度の創造・維持に焦点を置き；世界社会は、個人、非国家組織、最後に全世界の人を一つとして世界の社会アイデンティティ・アレンジメントの中心とみなして、国家システムの超越に焦点を置く」^[13]のである。

したがって、システムが国際システムか国際社会か世界社会かを判断するには、システムの構成要素・属性・特徴を明らかにする必要がある。本論文は、古代東部ユーラシア国際システムを研究対象とするため、英国学派の国際システムに関する議論に焦点を置き、国際社会^[14]と世界社会に関する議論を割愛する。最初の段階としての国際システムの成立に対して、ブルは、国家の相互作用が一定の程度に達することを基準に国際システムを定義した^[15]。すなわち、「ある国家の行動が、他の国家が行動する上で必要な要素になるという意味において、システムを形成する」^[16]。実際に、この定義には、国家と相互作用の他に、もう一つの成立要素、すなわち、境界がある。なぜかと言えば、もしシステムの境界が定められなければ、システムでの国家と国家間の相互作用の範囲を確定することができないからである^[17]。しかし、ブルは近現代の国際システム＝世界という認識をもつため、わざわざ境界を強調する必要がない。もっとも、古代の国際システムは世界的規模ではな

く、ほとんど地域的規模しか持たないため、境界という黙示の条件が重要になる。そして、ブルとリトルは、「世界歴史の中の国際システム」をテーマとして、古代世界の国際システムをも研究対象にし、ユニット、相互作用の能力（Interaction Capacity）、プロセス（すなわち実際に行われる相互作用）及び構造という分析枠組みを提案した^[18]。ブルとリトルによる分析枠組みは、国際システムを古代にも適用するために、古代の政治組織の発展の状況に応じて、国家に代わってユニットというさらに一般的な主体を用いながら、部門（Sector）を軍事、政治、経済、社会（社会-文化）、環境を分けることを通じて各部門の相互作用に応じて国際システムを分類した。

要するに、英国学派によると、国際システムに対する分析枠組みには、境界、ユニット、相互作用（相互作用の可能性としての相互作用能力と実際に行われる相互作用としてのプロセス）、構造という四つの部分がある。そして、この四つの部分は、二つの問題に対応する。まず、境界、ユニット及び相互作用は、国際システムの成立の条件として、システムがあるかどうかという問題に関わる。一方、相互作用（実際に行われる相互作用としてのプロセス）及び構造は、国際システムの特徴をもたらす。

第一節 システムの形成に対する基準：境界、ユニット、相互作用

本論文では、英国学派の定義にもとづいて、国際システムを以下のように定義する。国際システムとは、一定の境界に定められる地域において、あるユニットの行動が他のユニットが行動する上で必要な要素になる程度に相互作用が達するユニットからなる全体である。この定義によると、国際システムを形成する基準は、境界、ユニット及び相互作用である。

第一に、国際システムは世界システムになる前に地域的な規模をもち、互いに境界をもって独立的に存在していた。バックランド（Buckland）によると、システムはひとたび形成したら、全部のユニットに影響を及ぼすため、システムから独立したサブシステムが消滅してしまう。システムに独立のサブシステムがある場合には、このサブシステムはシステムの境界の外にあることになる^[19]。すなわち、国際システムは閉鎖的なシステムであり、他のシステムとの間には境界があるのである。

このような境界を決めるにあたって、地理と技術の要素が重要である。古代には技術が未熟状態であったため、地理的要素が人間の交通に遍在的な影響を与えており^[20]、特に政

治軍事面では、砂漠・高山・高原などの超えることのできない地理的障碍が国家間の相互作用の場を設定した^[21]。技術の発展とともに、地理的障碍が克服されて、以前孤立していた国々が交流を始められるようになっていった結果として、システムの境界は拡大していった。

第二に、国際システムはユニットからなる集合であるため、ユニットが国際システム的前提となる。問題となるのはどのようなユニットが国際システムを形成させるかである。一般的に言えば、国際システムのユニットは国家と政府間組織・非政府組織・多国籍企業などの非国家に分かれており、国家は特に政治軍事面での国際システムの主要なユニットであることは間違いない^[22]。近代世界システムの場合、国家とは基本的に主権国家もしくは国民国家となることが多い。だが、古代の場合には、対内的統治権と対外的自主権に基づく主権及び国家に対する連帯意識によるアイデンティティがないため、主権国家もしくは国民国家を基準に古代国家を判断することができない。代わりに、最近の研究では、古代国際関係（例えば古代ギリシャ^[23]、中世ヨーロッパ^[24]、中世中東^[25]）を分析するとき、主権国家もしくは国民国家の有限性を踏まえて、国際関係を国家間関係（Inter-State Relations）に変えることになる。そうであるとする、近代国家の範疇としての主権国家もしくは国民国家に拘るより、国家の一般的基準を明らかにする方が重要となる。

よく参照されるウェーバーの定義によると、国家は「ある一定の領域の内部で正当な物理的暴力行使の独占を（実効的に）要求する」こと、そして専門化した職業政治家が統治組織を維持することによる人間共同体である^[26]。この定義にしたがうと、国家と社会との関係から分析を行うことになる。だが、古代国家は国内的発展がそこまで進むことがないため、ウェーバーの定義に基づく国家とみなされなくなる可能性が高い。言い換えると、古代は、恒常的強制措置の不在、宗教的役割にもとづく指導者、利他主義による行動規制に内的特徴があるため^[27]、前国家段階に留まると考えられる。しかし、前国家アクターでは、原始共同体においてすでに生産力向上・人口増加・階層分化・公共施設建設などの内的要因と競争・戦争などの外的要因によって、親族集団としてのバンドと部族、政府と社会階層が形成されており、正当な暴力の独占のない首長国（Chiefdom）などの前国家階段を超えて、国家にまで進化しようとする^[28]。こうして結局、近代の主権国家・国民国家と異なる古代国家が形成される。

一方、「国家はいまも国際関係の唯一のアクターではないし、かつても国際関係の唯一のアクターではなかった」^[29]。実際に、古代国家にまで進化しなかった前国家アクター（バ

ンド、部族、首長国)には一定の人口・領土・意思決定組織があつて、他の前国家アクターでないしは国家と相互作用しうる能力をもつため、国際システムの政治ユニットとは違いないと考えられる^[30]。そうであるとする、国際関係の分析に際して、古代国際システムのユニットとして、単に国家(古代の場合には古代国家)だけではなく、前国家アクターも含めて考えるべきである。

国際システムのユニットを判断するにあたって、一定の基準が必要である。この問題に対して、『モンテビデオ条約』を参考にすると、国家は永続的住民・一定の領土・政府・他国との関係を取り結ぶ能力の四つの資格要素を備える^[31]。整理すれば、構成要素として一定の領土・住民・政府を有すること、能力要素として一定の軍事力のもとで他の国家に独立自主な政策をとることができること、という二つの基準を満たせば、その政治共同体は国際システムのユニットとみなすことができる。

第三に、国際システムはユニットの相互作用によって形成されるため、相互作用が国際システムの最も大事な要素となる。まず、部門(Sector)に注目する。ブザンとリトルによると、相互作用は軍事戦略・政治・経済・社会文化・環境に分かれ、その中の軍事・政治部門での相互作用によるシステムが全面的国際システム(Full International System)と定義される^[32]。このように、同一の相互作用でも違う部門から見るとその意味も違ってくる。例えば、朝貢は、政治・軍事部門からみると、朝貢体制と解釈される一方^[33]、経済部門からみると、朝貢貿易ネットワークと解釈される^[34]。本稿はハイポリティックスを扱うため、軍事・政治部門における全面的国際システムのみを基準にする。

また、相互作用には一定の頻度が必要である。ローマ帝国と漢帝国の間には経済的交通があるが、五千マイル以上の距離を隔てた自然環境と政治との障碍のため、史書に記載されるローマ帝国から赴く使者は一例だけで、漢帝国から赴く使者はローマまでの到着に失敗した。そのため、頻度が低い場合には、国際システムは成立しない。国際システムに適格であるためには、相互作用は戦争および常態化した国家間交流を基準とする頻度に達する必要がある。

最後に、相互作用のパターンについての基準がある。一般的に言えば、相互作用のパターンは直線的なパターンと軸複合的(Multiordinate)なパターンという二つがある^[35]。図1-1で説明をする。①では、AとB、BとCがそれぞれ隣接し、AとCがBによって隔てられて直接的な相互作用を行わないとき、隣接する国家の間だけで相互作用ができ、接点にあるユニット(B)は同時に複数のユニットと相互作用を行うのに対して、端点にあるユ

ユニット（A と C）は一つのユニットだけと相互作用を行う。このような相互作用のパターンは直線的なパターンであり、システムにおける全てのユニットが互いに相互作用することができないため、システムを形成させることができない。②では、システムでの全てのユニットが互いに相互作用を直接に行うことができ、一つのユニットの行動が他のすべてのユニットに戦略的な配慮を促す。最後に、③では、A、B、C がグループ 1 に、D、E、F がグループ 2 になり、グループ 1 とグループ 2 との間に、C と D だけが直接的に相互作用を行う一方、全てのユニットが互いに相互作用を直接に行うことができない。すなわち、この場合には、グループ 1 とグループ 2 を含めるものは、中には二つの独立のグループが存在し、それぞれのグループは互いに閉鎖しているんで、一つのシステムとはみなせない。そうであるとする、軸複合的なパターンという条件を満たすためには、第一には、ユニットが三つ以上あり、第二には、全てのユニットが互いに相互作用を直接に行うことができ、第三には、部分のユニットによる排外的グループがないことが必要となる。

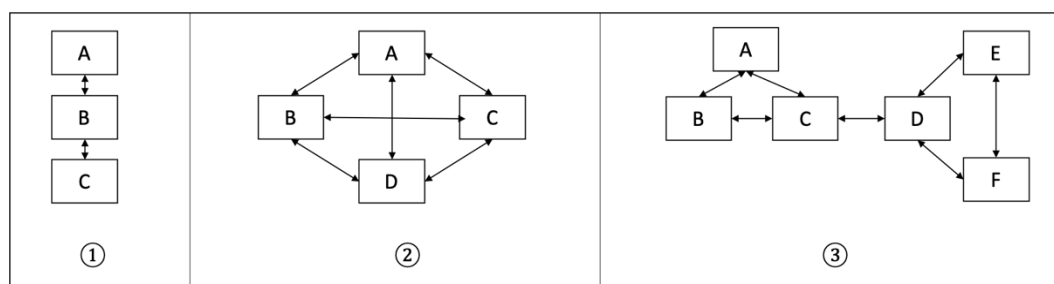


図 1-1 相互作用のパターン

第二節 システムの特徴としての構造：階層的制度による権力分布

国際システムが形成された後、ユニットは、長期及び頻繁な相互作用を通じて、一定の規律を形成させ、この規律により配置（arrange）される。このように、「システムにおけるユニットを配置する原則は、構造である」^[36]。言い換えると、構造は、「システムの部分の配置あるいは秩序のあり方を定義する」^[37]ため、システムに特徴をつける。

実際のところ、構造に関する理解は多岐に及ぶ。具体的にいえば、三つの点に多様性がある。まず、存在論上、構造が物質的なのか観念的なのか。次に、方法論上、構造が構成される際には、ユニットへの考慮が必要か否か。最後に、構造の効果が単に制約的なのか、あるいは構成的なのか^[38]。もっとも、構造に関しては二つの共通の認識がある。まず、構

造は「個人主義的な起源があり、言い換えると、国家間の共存によって創発していく」^[39]。次に、構造は、個人主義的な起源があっても、構成要素としての国家に還元されぬ属性、言い換えると、創発的な属性である。要するに、構造は、構成要素の簡単な代数和なのではなく、構成要素を一つにして初めて生まれたものであるということである。さらに、構造の創発性（Emergence）は、システムに因果能力をもたらす^[40]。

一方、前文に述べたように、システム理論とは、広義から言うと、「システムの構造のロジックおよびプロセスを明らかにしたことを通じて大規模の社会現象を説明することを目指す」理論である^[41]。したがって、システム理論は、用いられる構造により異なる。ここには、ネオリアリズム、ネオリベラル制度論、コンストラクティビズム、英国学派に限定して、構造を説明する。もちろん、この四つの理論の他にも、構造に対する見解を持つ国際関係論はあるが^[42]、その影響はあまり大きいとは言えないため、本論文では割愛する。

最初にシステム理論として登場したのは、ウォルツのネオリアリズム（新現実主義）である。ウォルツは、構造に対して秩序原理、ユニットの特徴、能力分布という三つの原理を見出して、その中の秩序原理とユニットの特徴が不変要素であるため、唯一の可変要素としての能力分布にもとづいてシステムの構造を決める。しかし、全ての国家ではなく、「一般的国際政治理論は大国（Great Powers）にもとづく必要がある」^[43]という理由で、大国のみが能力分布の対象になる。そして、能力分布は、「人口の規模、資源、経済能力、軍事力、政治の安定性と力量」などの基準により判断する。その後、例えば攻撃的兵器、防衛的兵器、核兵器などの技術的要素^[44]も能力分布の基準に加えられる。能力分布により数えられる大国が極になるが、システムは、極の数により、単極、二極、多極に分かれる^[45]。ウォルツは、冷戦の終わった後にも、二極が最も安定的な構造だと考える^[46]。一方、冷戦時代に登場してきた覇権安定論、及び冷戦後にアメリカの覇権と共に登場してきた単極安定論は、単極が最も安定的な構造だと考える^[47]。さらに、この定義にもとづいて、ウォルツが極の数を連盟（Blocs）の数で定めることを否定したため^[48]、ネオリアリズムは極の数が一定になる時に、システムを細分しない。一方、カプラン（Kaplan）、アロン（Aron）、ローズクランズ（Rosecrance）などの学者は大国の数より連盟の数にもとづいて極の数を判断するため、極の数を一定とする時にも、システムの相違をさらに区別することができる。例えば、カプランは、同盟のルール及びアクターの種類によって、二極システムを緩やかな二極システムとタイトな二極システムに分けた^[49]。実際に、同盟の数によって極を定めるのは極化（Polarization）^[50]である。すなわち、システムにおける国家は、大国を

中心とする同盟に集中され、同盟を単位として、争い合っている。ウェイマン (Wayman) は、大国の数による極を「権力的極 (power polarity)」と、同盟数による極を「集团的極 (cluster polarity)」と定義し、例えば、国家が二つの政治集団に集中する場合にシステムが集团的二極 (cluster bipolar) になると指摘する^[51]。

しかし、権力分布がかなり時間は維持されるため、単に権力分布にもとづいて国際政治を説明するのでは不十分であると^[52]、コヘインはネオリアリズムを非難する。この問題を解決するためには、権力分布の他の構造を加える必要がある。コヘインは、国際レジームを権力分布の他の構造として見出した。国際レジームとは、「特定の争点領域において、アクターの期待が収斂するような明示的か黙示的な原則、規範、ルール、意思決定手続き」^[53]である。その後、コヘインは、ネオリベラル制度論を提案する時に、国際レジームを放棄し、より一般的な概念としての国際制度を採用した。コヘインの国際制度は、「行為の役割を規定したり、行動を制約したり、期待を形成させたりする、継続的に関連している（正式と非正式）ルールのセット」を指し、政府間組織・国家間の非政府間組織、国際レジーム、慣習 (Conventions) を含める^[54]。権威性、制約性、関連性をもつ国際制度は、協力に対する動機、動力、保障を与え、詐欺を懲罰することを通じて、協力を実現・確保する^[55]。

ネオリアリズムにせよ、ネオリベラル制度論にせよ、いずれも物質的な構造を強調するため、論争の中で類似化の問題^[56]に陥った。この時、批判理論、フェミニズム、ポストモダニズム、歴史社会学などを含む省察主義 (Reflectivism) ^[57]は、ネオリアリズムとネオリベラル制度論を理性主義として批判し、構造の非物質性を提唱することで、国際関係理論に改めて理念的背景を求めることになった。省察主義の中で、ウェントは構造に新たな可能性を提案した。ウェントは、理性主義が国家のアイデンティティと利益を措定しようとすることを還元主義として批判し、科学的实在論と構造化理論を参考にして、システム-ユニット関係におけるユニットをエージェントまで改造して、構造-エージェント問題の元に、構造とエージェントとしての国家がどのようにお互いに構成させるかを説明しようとする^[58]。そして、ウェントは、観念的変数を科学的に扱うことができない問題を解決するために、シンボリック相互作用理論を参考にし、物質的な変数に対する意味が観念によって与えられたことを前提とする。さらに、個人的な観念は科学的に扱うことができないかもしれず、間主観的観念は、客観性をもつため、科学的理論にも適用されると想定した。結果として、ウェントは、国際関係の大前提としての無政府状態が一つの意味しかないこ

とを批判し、無政府状態が国家によって構成されて、さらに国家が相互作用を通じて得た共有の知識（Shared Knowledge）の種類によって三つの文化（ホッブズ文化、ロック文化、そしてカント文化）があるとした^[59]。具体的に言えば、ホッブズ文化は、敵（Enmity）という役割にもとづいた典型的な権力闘争の状態であり；ロック文化は、ライバル（Rivalry）という役割にもとづいて互いの存続を確保する競争の状態であり；カント文化は、味方（Friendship）という役割にもとづいて複合的安全保障共同体と集団安全保障の状況である^[60]。したがって、ウォルツの権力分布と完全に異なり、ウェントのコンストラクティビズムは、構造を知識分布（Distribution of Knowledge）とみなすのである。

前文に述べた英国学派の国際システムに対する三段階論は、ウェントの提案した三つの文化と類似した部分がある。英国学派にもとづく、最初の段階の国際システムは、権力闘争の状態にあり、その構造が権力分布に他ならず；国際社会は、ユニットが感知力の上で共同のアイデンティティ、あるいは共同のルールと規範を持ったら、国際システムから進化してきて、この時、その構造が国際制度と共同のアイデンティティにあり；最後の段階としての世界社会は、国家システムを克服し、全世界の人をシステムの主体とするため、この時には、国際関係からグローバル・ガバナンスになる^[61]。したがって、世界システムという国際性の不在の段階を除いて、英国学派は、国際システムという段階に権力分布、国際社会という段階に国際制度とアイデンティティを構造として強調する。一方、いずれの段階においても、英国学派は国際制度を構造として重視する。しかし、英国学派の国際制度はネオリベラル制度論の国際制度と異なる。ネオリベラル制度論の国際制度は、「特定の国際社会の産物として、特定の機能的目的を果たすために故意に設計される政府間の協定である」^[62]。一方、英国学派の国際制度は、「設計より、進化してきた相対的に基本的かつ継続的な実践である」こと、「互いの間の関係に行為者と正当的行動のパターンを構成する」^[63]こと、という二つの特徴がある。そして、英国学派の国際制度は、第一次制度（Primary Institutions）として、古代にせよ、近代にせよ、国際社会が形成される時に形成され；ネオリベラル制度論の国際制度は第二次制度（Secondary Institutions）として、近代以降に現れてきた。

つまるところ、構造には、一般的に言えば、権力分布、国際制度、及び知識分布という三つのタイプがある。しかし、古代を、ウェントがホッブズ文化であると、英国学派が国際システム段階とみなすため、古代国際システムの構造は、国際制度や知識分布タイプというよりも、権力分布タイプである。

一 権力の測定と関係的権力

本論文では、構造を権力分布とした上で、権力分布に関する分析方法を説明する^[64]。権力分布を明らかにするには、国家間の権力のランキングを確認しなければならない。そのため、権力の測定が必要になる。これについて、二つの方法があり、一つが量的測定で、もう一つが関係的測定である。権力に対する量的測定は、行動主義が国際関係に影響を及ぼした後に主流になって、領土、人口、軍事力、経済力などの物質的資源を測定の基準とする。国家の物質的資源の総量を測って比べると、国家間の権力の差を明らかにすることができる。例えば、ウォルツは、「国家の地位は、人口及び領土の規模、自然の豊富、経済能力、軍事力、政治的安定性と実行力など全てのアイテムにおいて、どれほどの点数をとることによるのである」^[65]と考えた。また、ギルピンはより簡潔的に権力を「国家の軍事、経済及び技術能力」^[66]と定義する。一方、ミアシャイマーは、権力を細分し、人口の規模及び裕福の程度に基づく権力を潜在的な権力と、陸・海・空軍に基づく権力を現実的権力と分類する^[67]。

しかし、量的測定はさまざまな問題をもたらす。まず、権力を測定する時に、大国の占める割合は、測定の対象が主要な国家か全部の国家かによって、かなり相違が現れる。例えば、ウェイマンは、二極システムには、「二つの最大国が大国の能力の 50%を占める」^[68]と指摘する。一方、モデルスキーとトンプソンは、単極システムの基準を、一つのアクターがシステムの能力の 50%を占めることとする^[69]。したがって、権力総量の考え方に違いがある。つまり、ウェイマンは主要な国家の能力を、モデルスキーとトンプソンは全部国家の能力を、権力総量とする。サンプルのサイズの相違によって、大国あるいは極が占める権力総量の割合は実際に顕著に影響される。冷戦での米国を例として説明をする。米国は、ウェイマンの基準によると、50%以上の世界の軍事費及び 50%以上の GDP を占めるが、モデルスキーとトンプソンの基準によると、50%の世界の軍事費及び 25%の GDP を超えない。したがって、権力に対する量的測定は実際にそのサンプルのサイズによって異なるのである。

また、権力分布によって、大国あるいは極の数を判断することも難しい。大国あるいは極についての基準は実際に権力の集中程度、言い換えると、どのぐらいの権力総量の割合を占めるかに関わる。だが、この問題について一致した意見がない。例えば、トンプソンによると、「単極システムには、大国が 50%以上の相対的能力を持ち；二極システムには、

二つの大国が最低でも総じて 50%の相対的能力を、各大国が最低でも 25%の相対的能力を持ち、さらに大国ではない国家が 25%程の相対的能力を持たず；多極システムには、三つ以上の国家がそれぞれ最低でも 5%の相対的能力を持ちながら、一つの国家が 50%程の相対的能力を持たず、二つの国家がそれぞれ 25%程の相対的能力を持たない」^[70]。トンプソンの基準はこのように詳細なのだが、操作上には混乱をもたらす。例えば、1946-59 年及び 1963-68 年という二つの冷戦時期に、システムがアメリカによる単極になったと、トンプソンは指摘した^[71]。マンスフィールドはより簡単に操作ができる方法を提案し、最大国との関係から出て、「最低でも主要国家による能力の集合に、最大国の占める割合の 50%程の能力を持つ国家を極的国家」^[72]とする。例えば、最大国が主要国家の権力総量の 30%を占めたら、最大国の占める割合の 50%、すなわち主要国家の権力総量の 15%をもつ国家は極的国家になる。このような大国や極の基準は、簡単に操作することができるが、権力のランキングによって最大国を決めることを前提とするため、最大国になる基準を明確に定めることがなく、権力集中の程度が問題視される。例えば、二極システムを例に、最大国が主要国家の権力総量の 25%と占めたら、大国あるいは極になる条件が主要国家の権力総量の 12.5%になる。トンプソンの基準にしたがうと、この二極システムが実際に多極システムである。こうして、基準の相違によって、同じ権力総量の割合を占める国家は、極になる場合と極ではない場合が同時にあることになる。

最後に、権力を国家間関係の規準とせず、単に物質的資源を統計し国家をランク付けすることを通じて極あるいは大国を判断することは、その権力がどれほど有効に行使されるかについて問題がある。例えば、冷戦時代、二極としての米国とソ連は、単に物質的資源から見て、中国に対して圧倒的な権力の優位性を持って、中国に対する影響はそれほど強くなかった。したがって、物質的資源は、権力に転化するときに一定の消耗があるため、有効な権力行使を確保することができない。言い換えると、権力の量的測定は、ローレンスのいうように「権力が関係の属性で関係的現象である」^[73]ことを見落としてしまうのである。

権力の有効な行使及び影響を明らかにするためには、権力を、物質的要素を基準として測ることではなく、国家間関係において判断し、言い換えると、関係的に測定する必要がある。実際に、権力の関係的測定は行動主義の流行の前によく利用され、その中でダールによる権力の定義が最も典型的であった。ダールにとって、「A が B に権力を持つことは、A が B に B が行おうとしないことを行わしめ得ることを意味する」^[74]。この定義による

と、権力は、実際に行動の原因ではなく、行動の結果である。命令をしたり、多い権利と少ない義務を負ったり、権威を振るったりする一方は権力が多く、代わりに、服順的な行動を行ったり、多い義務と少ない権利を負ったり、権威を認めたりする一方は権力が少ない。このような関係が実際に階層関係であるため、したがって、ケースマイケルは権力の関係的測定を「階層的アプローチ」とみなす^[75]。言い換えると、権力を関係的に測定するのは、実際にシステムに対する影響力の多少に基づくことだ^[76]。カッサブの大国定義により、極あるいは大国は、システムに対する影響力を基準に、「その行動でシステムに影響を及ぼすことができる」^[77]国家を指す。

権力を関係的に測定する場合には、その前提に階層性がある。しかし、ウォルツは国際関係の特徴を無政府状態と、国内関係の特徴を階層状態と定義したことで、階層状態は国内属性として国際関係の対象から捨てられた。ウォルツによると、無政府状態には、中央的権威が欠け、類似のユニットが競い合って、自助のためユニットが自らの力で生き残る。それに対して、階層状態には、上下関係による集中化的構造があって、異なったユニットが分業で協働し、暴力が正当性の名義で政府に独占されるためユニットが権威、管理及び法理の下である^[78]。だが、このような二分法が次第に研究者に批判される。例えば、ミルナーは無政府状態と階層状態が実際に国際と国内に同時に存在し、無政府状態と階層状態にもとづいて国際と国内を区別することの有効性を問題視する。具体的に言えば、集中化と分権化は国際関係と国内関係に同時に存在し、各領域にその程度が異なるだけである。そして、暴力を正当に行使することは国内においても問題視されることがあって、一方、国際的に暴力を正当に行使することも珍しくない。最終的には、国内政治にしても国際政治にしても、いずれも権力均衡に関わるので政治そのものなのである^[79]。

他方、一部の学者にとって、無政府状態と階層状態との区別は廃棄するより、両者を調和する方がもっと役立つ。ライクは、二者関係（dyadic relationship）から出て、無政府状態に階層関係（Hierarchy）成立の可能性を探り出す。ライクにとって、「階層関係は、一つのアクター（支配者）がもう一つのアクター（被支配者）に権威を持つ場合に存在する」^[80]。だが、ウォルツの定義によると、国際関係には権威が存在しないはずで、言い換えると、一旦権威が生まれたら、国際関係が国内関係に転じる。この問題を解決するために、ライクは、まず、権威を形式-法律的権威と関係的権威を分けて、前者をウォルツの権威とみなし、国際関係に不適格と指摘する一方、後者を支配者と被支配者との間の交易と契約に基づく自力執行的契約とする。したがって、関係的権威には、「支配者は、支配者へ

の服順による被支配者の喪失の自由を相殺し得る政治秩序を被支配者に与え、被支配者はこの秩序を獲得するために、自らの行為を制限する権利を支配者に与える」^[81]という交易があることになる。ライクは主権の可分性を国際法及び実務から証明した上で、関係的権威の交易対象を主権の一部とみなして、被支配者の主権の譲渡の多少によって支配者の主権の多少を判断する^[82]。したがって、安全保障から見ると、二者関係は、権威のない状態あるいは平等関係という完全な無政府状態を一端に、全ての主権を譲渡した状態あるいは帝国関係という完全な階層状態をもう一端にして、その中には、権威の強さの順にそって、安全保障政策に対する主権を譲渡する保護国、対外政策と国防政策が支配国に実質かつ有限的にコントロールされる弱い保護国、第三国との協力が支配国に制限される勢力圏などの形態がある^[83]。一方、ライクは階層状態を、強制的能力による構造的特徴、言い換えると、能力分布とみなすことを否定し、階層性を二者関係のみに限定して用い、権威に基づく特徴であるとみなす^[84]。

二 制度の階層性と権力分布

権力について、量的測定と関係的測定（あるいは階層的測定）がある。近現代のように豊かなデータがあっても、量的測定を通じてシステムの権力分布を正確的に測るのが難しい以上、古代には、人口・領土の規模、経済力、軍事力に関するデータが少ないため、権力を量的に測定することは不可能である。そのために、本論文では、関係的測定を用いる。しかし、関係的測定は、基本的に二者関係あるいは二国間関係に適用される。したがって、関係的測定により、システムの権力分布を判断するためには、二つのステップがある。第一歩では、システムの中の二国間関係の階層性を明らかにし；第二歩では、システムの階層性の集中程度、すなわち、大部分の二国間関係の上位国家が特定の国家に集中することを見出して、この特定の国家の数によりシステムの極を数える。

国家間の階層性を判断するにあたっては、国際制度が重要な基準である。国際制度は「国際的権力分布などの世界政治の基本的特性と国家・非国家アクターの行動との間の中間要因あるいは仲介変数である」^[85]。そして、近代の国際制度に対する研究は、権力分布に直接に触れないが、実際に、第二次世界大戦の前に国際制度の背景を多極と、冷戦時代の国際制度の背景を二極と、冷戦の後に国際制度の背景を単極と黙示的に設置する。このように想定すると、ミアシャイマーを代表にするリアリストは、「制度は基本的に世界における権力分布の現れ、大国の利己的計算にもとづき、国家の行為には独立的影響を与えない」

[86]と、制度と権力との関係を説明する。言い換えると、国際制度は権力分布にもとづき、大国の支配を正当化するものに過ぎない。最後に、近現代の国際制度が平等性によって特徴づけられるのと異なり、古代の国際制度は、階層性によって特徴づけられる[87]。そうであるとすると、二国間国際制度を通じて、国際制度に潜む階層性にもとづいて、この国際制度をとる二国の階層関係（すなわち上下関係）を明らかにすることができる。

一般的に言えば、二国間関係は平等関係と階層関係に分かれ、前者は敵対関係と平和関係に分かれ、後者は階層性の強さによって多様なタイプがある。まず、平等関係は最も顕著なのが敵対関係である。両国はもし敵対すれば、戦争中止あるいは使者と俘虜に関する制度などはあるかも知れないが、互いに影響を及ぼす制度を持たない可能性が高い。例えば、今の米国と朝鮮との関係には米国による単边的制裁を除いて、二国間制度があまり顕著ではない。だが、敵対から緩和に入った後、両国は平和関係を維持するために、最低限の国際制度を作り出すことが可能になる。この場合には、制度はあっても、国家間で階層性が存在することはありえない。

一方、軍事政治面で、平和関係にある国家は、二国間で軍事防衛協力のために同盟関係を結んだり、多国間で国家間の調和、平和の維持、安全の確保などのために国際連合などの国際的組織を生み出したり、特定のイシューに対して制限、合意形成、促進のために多国間条約を結んだりすることがある。このような、平等的関係では、国家間の階層性は曖昧である一方、そこにおける利益及びそのための対価の相違によってある程度まで明らかにすることができる。例えば、同盟関係は、必ず対称的な利益・対価を意味しない。特に大国と小国の間に結ばれる同盟は、大国の「権力と強制の道具」と「同盟内の支配・管理の手段」である[88]。したがって、モローは、「非対称同盟には、強いパートナーは自主性を得る一方、弱いパートナーに保護を提供する」と指摘する[89]。言い換えると、弱いパートナーは保護を得るために強いパートナーに一定の自主性を譲渡しなければならない。このように、安全のために一定の主権を譲渡することが、ライクの言う関係的権威とよく似ている。

階層関係に基づく制度は、基本的に下位国家が主権を譲渡する一方、上位国家が軍事上での攻撃の自制と軍事的保護、経済上での援助などを約束する形で、主権を約束と取り換えた結果である。そのために、主権譲渡の程度によってその階層性の程度を判断することができる。ライクは二国関係を階層の強い順に、安全保障面で帝国、保護国、弱い保護国、勢力圏、外交に、経済面で従属国、弱い従属国、経済圏、市場交易に分ける[90]。だが、ラ

イクは国家の対内主権と対外主権を区別しない。ライクに扱われる階層関係は二国間関係を対象にするため、下位国家が譲渡する主権は、全ての主権を譲渡したことによる帝国・従属国関係を除けば、実際には対外的主権のみである。だが、一国が他国に対外的主権のみを譲渡しても、対内的主権を保有することはできる。一方、一旦対内的主権をも上位国家に譲渡したら、下位国家は基本的にその国家性を失って、上位国家の一部として取り込まれる。したがって、国家間の階層性を判断する時には、二国間の制度にもとづいて下位国家が譲渡する主権の多少と程度のみならず、その主権の対内性と対外性をも考慮に入れる必要がある。

まず、主権譲渡の多少は下位国家と上位国家との間に形成される制度の数によって判断される。この国際制度は、一つのイシューに対して一種の行動を規制するものである。例えば、冊封を受ける国家は一般的に言えば、質子と朝貢を送る。この国際制度にもとづいて、ここには、質子と朝貢を含める冊封制度という一つの制度ではなく、冊封制度、質子制度、朝貢制度という三つの制度がある。つぎに、主権譲渡の程度は、上位国家がどのように下位国家の行動を規制するかによって判断される。もし下位国家が上位国家に特定のイシューに対する主権を全て譲渡したら、上位国家がこのイシューに対して下位国家に特定の行動を命令・要求・禁止することができる。もし下位国家が上位国家に特定のイシューに対する主権をある程度まで譲渡したら、上位国家はこのイシューに対して下位国家に非対称的に影響を与えることができるが、下位国家に命令・要求・禁止することができない。最後、主権はその性質が対内と対外に分かれ、一般的に言えば、その譲渡が対外主権から対内主権まで順次に行われる。

二国間の階層関係の判断は、必ず同時に三つの要素を考慮に入れず、一般的に主権譲渡の程度と性質にもとづいて行われる。国際関係研究では、二国間の階層関係は、表 1-1 のように、幾つかの種類に分かれる。一般的に言えば、主権譲渡の程度を基準にして、主権を譲渡しないことを対称的影響、主権をある程度まで譲渡することを非対称的影響、主権を完全に譲渡することを支配とみなす。一方、主権譲渡の性質を基準にして、対外的主権と対内的主権を分ける。もし対外主権を譲渡しなければ、伝統的国際政治、勢力均衡、外交などの近代国際政治の相互作用パターンになる。もし対外主権をある程度まで譲渡し、対内主権を譲渡しなければ、ドイルとライクは勢力圏に、山本は覇権になると考える。実際に、山本吉宣は「対外政策、内政の両面にわたって、非対称な影響力関係にある」^[91]インフォーマルな帝国と対照するために、対外政策だけに非対称な影響力関係にある場合を

覇権と考え、勢力圏を分類から捨てる。もし対外主権と対内主権をある程度まで譲渡すれば、モティールと山本は非公式帝国に、ドイルは従属になると考える。もし対外主権を譲渡し、対内主権を譲渡しなければ、ドイルとモティールは覇権に、山本は自治領に、ライクは弱い保護国・保護国になると考える。もし対外主権と対内主権を譲渡すれば、ドイルは（非公式と公式）帝国に、モティールと山本は公式帝国になると考える。

表 1-1：二国間階層関係の分類

	対外主権	対外主権と対内主権
対称的影響 (譲渡しない)	D：伝統的国際政治 Y：勢力均衡 L：外交	D：相互依存 Y：相互依存
非対称的影響 (ある程度まで譲渡する)	D：勢力圏 Y：覇権 L：勢力圏	D：従属 M：非公式帝国 Y：非公式帝国
支配 (譲渡する)	D：覇権 M：覇権 Y：自治領 L：弱い保護国、保護国	D：非公式と公式の帝国 M：公式な帝国 Y：公式な帝国

[D：ドイル (Doyle)；M：モティール (Motyl)；Y：山本吉宣；L：ライク (Lake)；出典：Michael W. Doyle: *Empires*, Cornell University Press, 1986; Alexander J. Motyl: *Imperial Ends: The Decay, Collapse and Revival of Empires*, Columbia University Press, 2001; 山本吉宣「帝国システムの国際政治理論（下）」『国際関係論研究』第23巻，2005年；David A. Lake: *Hierarchy in International Relations*, Cornell University Press, 2011を参考して作成する]

しかし、古代には、主権に関わる行為があるが、主権に対する認識は近現代より曖昧なので、対外主権と対内主権をはっきり区分することは基本的に不可能である。一方、対内主権は多くの場合に政治軍事より、経済、社会などの側面に関わる。そして、政治軍事面では、対内主権は常に対外主権と密接不可分な関係を持つ。したがって、政治軍事面から定義する国際システムをテーマとするため、階層性のない平等な関係の場合を除けば、対外主権の譲渡により、弱い方から勢力圏、覇権、帝国に分類する。ここには、説明を簡潔に行うため、Aを強国、Bを弱国として二国関係の階層性を説明する。

まず、平等関係では、AがBの対外行動の決定権に影響を及ぼすことはできず、あるい

は、B が A に主権を譲渡しない。このような平等関係は、必ずしも敵対関係・戦争関係に限らず、関係緩和・停戦により平和共存関係をも含める。そして、二つの大国は、互いに軍事力で圧倒することができないことを背景に、一国が一時的に軍事的優勢をもって、他国にある程度の経済と政治的要求を付ける場合に、もしこのような要求が条約を通じて成立し、そして、この条約が双方の権利と義務をバランスの取れた状態で決めるなら、平等関係になるとも考えられる。例えば、第三章で詳しく説明するように、前漢初期に漢が和親条約にもとづいて匈奴に公主・賂遺を与えたり、前漢後期に東匈奴が盟約にもとづいて漢に質子・朝貢を送り、冊封を受けたりする場合は、このような平等関係である。

次に、勢力圏 (Sphere of Influence) では、A が B の対外行動に非対称的な影響を与えて、言い換えると、B が圧倒的な強い A を憚って A を嫌わせないように対外行動を決める。勢力圏は最初、植民地時代に、国際法概念として、ヨーロッパの列強がアフリカにおける植民地の利益を確保するために、互いに国際条約を通じて定められた^[92]。このような勢力圏は半宗主権 (Semi-Suzerainty) に準え、そこに、影響を及ぼす国家は、影響を受ける国家に軍事、経済、政治的干渉を行う^[93]。しかし、第二次世界大戦以降、脱植民地化の結果として、勢力圏は、植民地に関わる意味と距離を置くようになり、米ソ争覇という背景下における国際関係概念として用いられている。国際関係研究には、多様な意味を持って、対外政策、国際秩序、規範などの側面で用いられるが、権力関係においては、基本的に階層関係を表して、「パワーゲーム、競合、不公平な弱国の服従などを生まれながらに持っている」^[94]。キールの定義によると、勢力圏は、「限定される地域」で、この地域に「一つの外部的大国が顕著な影響を発揮し、この地域の政治体の独立性と行動の自由を制約する」^[95]。言い換えると、弱国が強国に勢力圏に取り込まれるのは、強国が弱国に非対称的影響を与え、その行動にある程度まで制約を行うことであると言える。一方、カフマンは、勢力圏の特徴として、「大国が高度の浸透により、他の大国、特にライバル的大国を勢力圏から排除する」^[96]ことを指摘する。しかし、勢力圏では、大国は弱国の対外主権を、支配ではなく、非対称的に影響を与えるのであるため、弱国の対外関係をそれほど強く統制することができない。特に、ライバル的大国が安全保障的約束の上で、経済的援助を与える場合には、勢力圏における弱国は容易に勢力圏の外の大國に引き込まれる。したがって、権力分布から言うと、勢力は、権力の集中の最初の段階であるため、極を形成させる第一歩でなのである。

そして、覇権には、A が B にある種の対外行動を義務付けて、言い換えると、B が対外

主権をある程度まで譲渡する。覇権は、覇権国の能力が他の国家に対して圧倒的優勢をもつ場合に形成される。覇権国は圧倒的な政治・軍事・経済的能力をもって、政治上、覇権における他の国家の対外関係を制約し^[97]、軍事上、軍隊を戦略要地に配置し、覇権の影響が覆う地域の安定を保ち、覇権国に対する対抗を鎮圧し^[98]、経済上、先進的技術および発達した生産力を通じて、潜在的な搾取を行う^[99]。一方、覇権国は、単に権利だけではなく、覇権の範囲における秩序を保つためにリーダーシップを発揮し、国際的公共財（Public Good）を提供することを通じて^[100]、ある程度まで自国の利益だけではなく、システムの利益をも追求する^[101]。そして、覇権はこのような国際的リーダーシップを演じることにより、その地位が正当化されることが可能になる^[102]。そうであるとする、覇権関係は、権力の集中がかなり成熟しており、長期でかつ正当性を持つものである。したがって、覇権が形成されると、その覇権国を極とみなすことは可能である。

最後に、帝国では、A 国が B 国を併合し B 国の対外・対内主権を奪って、言い換えると、B 国が対外・対内行動の決定権を A 国に譲渡する。一般的に帝国は一種の国家である。国家としての帝国とは「皇帝の協力統治の下にある多民族国家、単一王国を越えた超域連合、メトロポールと従属地からなる支配-被支配のシステム、あるいは近隣諸国に独善的支配を振るう超大国」で^[103]、「同時代の世界において対外的影響力や領土の広さの面で相対的に大国である」こと、「民族的または宗教的に多様な集団を内包する」こと、「権力を担う中核的な地域ないし集団と周縁または植民地との区別が存在する」ことなどを満たす^[104]。だが、国際システムにおいて帝国は一種の構造になり、二国間関係で一国が他国の内政と外交を支配することを意味する。実際には、古代帝国はその従属国の内政に干渉を行うことが珍しく、多くは外交上で従属国に自国への服従を要求するため、構造としての帝国とは言い難い。だが、国家としての帝国は、異民族が存在し、多くの場合にその異民族に一定の自治権を与えて間接統治を行うため、中央と異民族との関係が普通の国内関係とは異なる。ワトソンはこのような関係を自治領（dominion）と定義し、自治領にいる異民族が「自分のアイデンティティを保持しながら内部事務を支配する」^[105]。だが、ワトソンの自治領は、異民族を帝国に取り込む初期に成立するが、帝国による開発、中央から派遣する官僚、大量の民衆の遷入などを通じて、異民族が帝国に浸透され、その自治権が次第に失っていったため、普通の地方になる可能性もある。権力行使をめぐる異民族と中央との競争は実際に権力関係から見て、帝国における中央集権化はシステム研究の対象になる。中央集権化の強弱によって、帝国は実際に直接統治と間接統治に分かれ、秦漢時代に、秦

では郡県制を中央から派遣する官僚で機能させることと、漢では郡県制の下で冊封を通じて異民族の君主と皇帝との間に君臣関係を築いてこれらの君主に自治を任せることを指すことになる。

このように、二国間制度の階層性にもとづいて、この二国間の権力の差は明らかになる。言い換えると、階層的制度を取る二つの国家では、上位国家が下位国家より権力が多い。そして、この権力の差の程度は、階層関係により確認することができる。覇権関係における権力の差は勢力圏における権力の差より大きい。これによって、システムの権力分布は、国際制度により判明する二国間の階層関係の上位国家が特定の国家に集中することにより、明らかにすることができる。

図 1-2 では、矢先は、下位国家に影響・制限・コントロールを与える上位国家を指す。ケース 1 では、矢先が一つの国家 (A) に集中し、A が極になるため、システムは単極になる。ケース 2 では、矢先が二つの国家 (A と B) に集中し、A と B が極になるため、システムは二極になる。ケース 3 では、矢先が三つの国家 (A、B、C) に集中し、A と B と C が極になるため、システムは多極になる。そして、ケース 2 に C が同時に A と B に対して下位国家になることは、両属関係を形成させる。同じく、多極システムにある国家が全ての極か大国に対して下位国家になったら、多属関係も形成される。このような両属か多属などの階層関係が実際に可能なのだろうか。歴史から見て、後述のように、漢が河西回廊を開いた後、武力で楼蘭を臣服させた。だが、匈奴の威嚇に向けて、楼蘭は依然として匈奴に臣服した。漢はこれを知った後、匈奴の軍事力を憚って、楼蘭の両属を大目に見た。こうして、両属をする国家は極国家が覇権をめぐって最も激しく争う地域に位置する。そして、いずれの極国家は独力で優勢を取って、他の極国家の影響をここから排除することができず、このような両属をする国家を仕方なく放任する。だが、このような両属は一時的なので、一旦一つの極国家が優勢を取ることがあれば消失することになる。

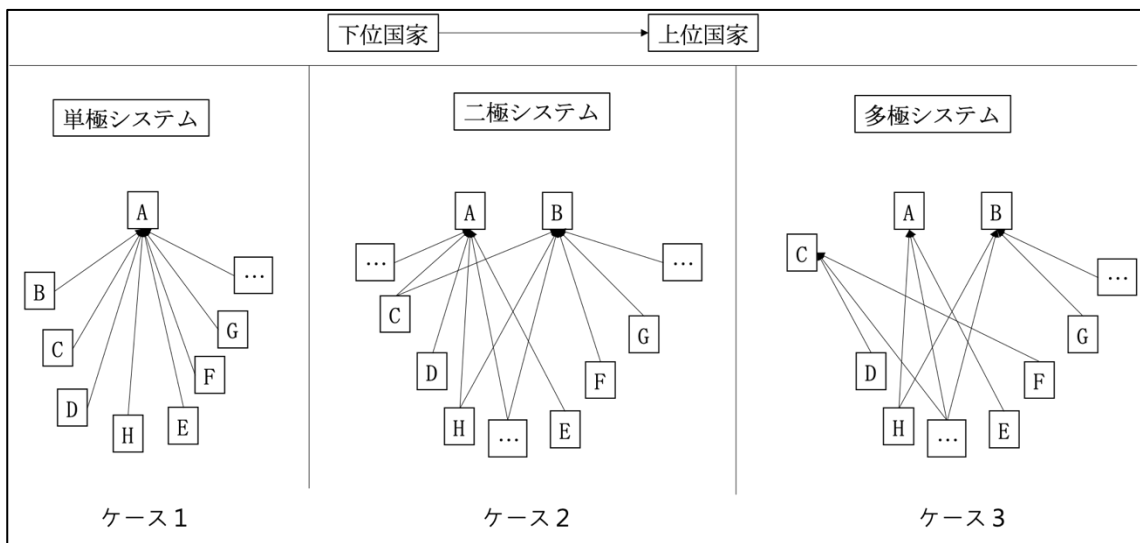


図 1-2：関係的測定にもとづく権力分布

極を判断する時には、極国家の数のみならず、極国家間関係も考慮に入れることが必要である。最も理想的な状況では、極国家の間には、階層関係がなく、平等関係（緩和・平和関係と戦争・敵対関係）があれば、単にその対象の数によって極の数が明らかにされる。もし権力が集中する対象が互いに階層関係にあれば、その階層関係の本質によって極の数を判断できる。図 1-2 のケース 1 を修正すれば、図 1-3 のケース 4 ように、B が C、D、H に対して上位国家である一方、B が A に対して下位国家である。A と B との階層関係には、もし B が多くの点で A に服従を示し、A による命令か制度にきちんと従ったら、B が A の下位国家であることは確認することができる。そうであるとする、B が他の国家を服従させることは A に黙認され、あるいは A が B を通じてこれらの国家を間接的に支配することを意味する。いずれにしても、この場合、B を極としてみなすことはできない。一方、B が A の下位国家になっていても、それが形式的なもので、実際に B が A にあまり服従しなければ、B が A からの攻撃か威嚇を避けるために一時的に行う便法に過ぎない。そのため、この場合には、B は極の候補になる。そして、B を極と判断するにあたって、B に集中する権力の多少も考慮に入れることが必要である。もし B が大国ではなく、さらに、これらの国家に対する B の権力が大したものではければ、B は極とは認められない。B をめぐる権力集中は小国が相互協力で自分の安全を守ることに過ぎず、システムに対してあまり影響を及ぼさない。もっとも、もし B が大国で、これらの国家に対する B の権力が極国家に値するほどに達すれば、B は極と認められる。実際に、この場合、B をめ

ぐる権力集中は集団的極になる。

最後に、ケース 5 のように、C、D、H の上位国家としての B が A の下位国家である。このような状態は、基本的に、A が B の阻害により C、D、H と直接に相互作用を行うことができないことによって現れる。例えば、前漢初期、漢は南越と君臣関係を結んだが、南越の阻害により、地理的に南越に阻隔されるベトナムの中・北部と海南島との部族とは交通がなかった。一方、南越は、中・北部と海南島との部族と君臣関係を結んだ。そうであるとすると、ベトナムの中・北部と海南島と南越と漢と間には、システムを一つに形成させる相互作用が存在しなかったため、これらの地域を含める国際システムはなかったことになる。そうであるとすると、ケース 5 には、システムがないため、構造もないことになる。

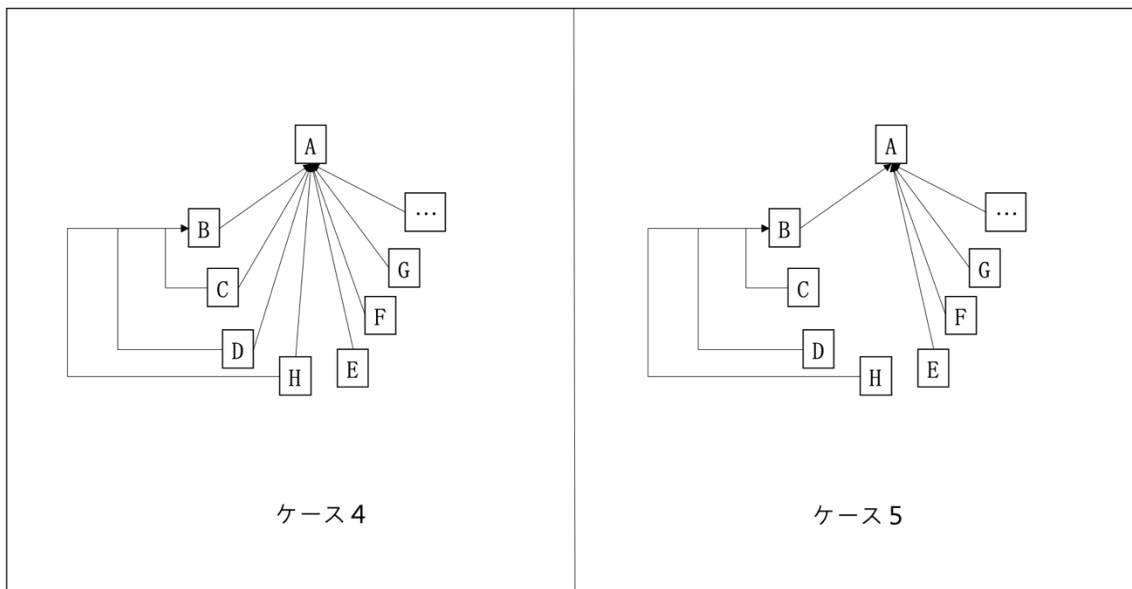


図 1-3 : 図 1-2 単極システムに対する修正

もちろん、ここで紹介した図は、国家間関係、システムの権力の集中性及び極の数を簡潔かつ直感的に表すために作成されたものである。したがって、図に現れる権力分布は、理念的なモデルに過ぎず、現実における複雑な関係とは必ずしも一致するものではない。

註：

[1] Brian C. Schmidt: “On the History and Historiography of International Relations,” in Walter

- Carlsnaes, Thomas Risse and Beth A Simmons, eds.: *Handbook of International Relations*, SAGE Publications Ltd., 2013, p. 19
- [2] George Modelski: "Agraria and Industria: Two Models of the International System," *World Politics*, 14(1), 1961, pp. 120-124
- [3] Morton A. Kaplan: *System and Process in International Politics*, European Consortium for Political, 2008, pp. 20, 34-60
- [4] Jay S. Goodman: "The Concept of 'System' in International Relations Theory", *Background*, 8(4), 1965, p. 258
- [5] J. David Singer: "The level-of-analysis problem in international relations", *World Politics*, 14(1), 1961; Kenneth N. Waltz: *Man, State, and War: A Theoretical Analysis*, Columbia University Press, 2001
- [6] Kenneth N. Waltz: *Theory of International Politics*, Addison-Wesley Publishing Company, 1979, p. 40
- [7] Tang Shiping: "International System, not International Structure: Against the Agent-Structure Problématique in IR," *The Chinese Journal of International Relations* 7(4), 2014
- [8] 宋新寧、陳岳『国際政治学概論』中国人民大学出版社, 2000 年, 75 頁
- [9] Barry Buzan and Richard Little: *International Systems in World History: Remaking the Study of International Relations*, Oxford University Press, 2000, pp. 18-20
- [10] 岸野浩一「英国学派の国際政治理論におけるパワーと経済：E・H・カーとヒュームからの考察」『法と政治』第 63 巻第 2 号, 2012 年, 99 頁
- [11] Adam Watson: *The Evolution of International Society: A Comparative, Historical Analysis*, Routledge, 1992, p. 14
- [12] Bull Hedley: *The Anarchical Society: A Study of Order in World Politics*, Macmillan International Higher Education, 2012, pp. 9-21
- [13] Barry Buzan: *An Introduction to the English School of International Relations: The Societal Approach*, Polity, 2014, pp. 12-13
- [14] 先行研究によると、古代東部ユーラシアには、必ずしも国際社会が成立しなかったわけではない。少なくとも、明清時代での朝貢システムを一種の国際社会とみなす研究成果はある。例えば、Zhang Yongjin and Barry Buzan: "The Tributary System as International Society in Theory and Practice," *The Chinese Journal of International Politics*, Vol. 5, 2012
- [15] Bull Hedley: *The Anarchical Society: A Study of Order in World Politics*, p. 9
- [16] Hedley Bull and Adam Watson: "Introduction," in Hedley Bull and Adam Watson: *Expansion of International Society*, Clarendon, 1992, p. 1
- [17] K. J. Holsti: *International Relations: A Framework for Analysis (Fourth Edition)*, Prentice-Hall, INC., 1983, p. 28
- [18] Barry Buzan and Richard Little: *International Systems in World History: Remaking the Study of International Relations*
- [19] Alexander Backlund: "The definition of system", *Kybernetes: The International Journal of Systems & Cybernetics*, 29(4), 2000, p. 448
- [20] Jared M. Diamond: *Guns, Germs, and Steel: The Fates of Human Societies*, W. W. Norton & Company, 1999, p.317
- [21] Barry Buzan and Ole Wæver: *Regions and Powers: The Structure of International Security*, Cambridge University Press, 2003, pp. 45-46
- [22] Bruce Russett, Harvey Starr, David Kinsella: *World Politics: The Menu for Choice (Sixth Edition)*, Bedford/St. Martin's, 2000, pp. 43-65
- [23] Polly Low: *Interstate Relations in Classical Greece: Morality and Power*, Cambridge University Press, 2007
- [24] John G. Ruggie: "Territoriality and Beyond: Problematizing Modernity in International Relations," *International Organization* 47(1), 1993, pp. 139-174
- [25] Barry Buzan and Ana Gonzalez-Pelaez: *International Society and the Middle East: English School Theory at the Regional Level*, Palgrave Macmillan, 2009
- [26] マックス・ヴェーバー著, 中村貞二、山田高生、脇圭平訳『政治論集 2』みすず書房, 1982 年, 556、561-562 頁
- [27] 猪口孝『国家と社会』東京大学出版会, 1988 年, 7-8 頁

- [28] Elman R. Service: *Origins of the State and Civilization: The Process of Cultural Evolution*, W. Norton & Company Inc., 1975
- [29] Kenneth N. Waltz: *Theory of International Politics*, p.93
- [30] Barry Buzan and Richard Little: *International Systems in World History: Remaking the Study of International Relations*, pp.116-119
- [31] 杉原高嶺他著『現代国際法講義（第5版）』有斐閣，2012年，35頁
- [32] Fullが語義とおり、全面的と訳されるが、Full International Systemは、軍事・政治的側面の国際システムである。Barry Buzan, Charles Jones, and Richard Little: *The Logic of Anarchy: Neorealism to Structural Realism*, Columbia University Press, 1993, pp.30-33; Barry Buzan and Richard Little: *International Systems in World History: Remaking the Study of International Relations*, pp.91-96
- [33] Zhang, Yongjin: "System, Empire and State in Chinese International Relations," *Review of International Studies*, 27(5), 2001, pp. 43-63
- [34] 濱下武志「朝貢貿易システムと近代アジア」『季刊国際政治』第82号，1986年
- [35] 胡波「古代東亜関係体系の肇始」『外交評論』第1期，2008年，52頁; Barry Buzan and Richard Little: *International Systems in World History: Remaking the Study of International Relations*, pp.96-98
- [36] Barry Buzan and Richard Little: *International Systems in World History: Remaking the Study of International Relations*, p. 442
- [37] Kenneth N. Waltz: *Theory of International Politics*, p. 81
- [38] Kenneth N. Waltz: *Theory of International Politics*; Alexander Wendt: *Social Theory of International Politics*, Cambridge University Press, 1999
- [39] Kenneth N. Waltz: *Theory of International Politics*, p.91
- [40] Dave Elder-Vass: *The Causal Power of Social Structures: Emergence, Structure and Agency*, Cambridge University Press, New York, 2010, pp. 13-39
- [41] Mathias Albert and Lars-Erik Cederman: "Introduction: Systems Theorizing in IR," in Mathias Albert, Lars-Erik Cederman and Alexander Wendt, eds.: *New Systems Theories of World Politics*, Palgrave Macmillan, New York, 2010, p. 9
- [42] 例えば、マルクス主義は、世界的な分業体制を構造とみなす。Immanuel Wallerstein: *World-Systems Analysis: An Introduction*, Duke University Press, 2004; Samir Amin: *Unequal Development: An Essay on the Social Formations of Peripheral Capitalism*, Monthly Review Press, 1977; Robert W. Cox: *Production, Power, and World Order: Social Forces in the Making of History*, Columbia University Press, 1987
- [43] Kenneth N. Waltz: *Theory of International Politics*, p.73
- [44] Charles L. Glaser and Chaim Kaufmann: "What is the Offense-Defense Balance and Can We Measure It? (Offense, Defense, and International Politics)," *International Security* 22(4), 1998, pp. 44-82; Robert Jervis: "Cooperation under the Security Dilemma," *World Politics* 30(2), 1978, pp. 167-214; Charles L. Glaser: "Realists as Optimists: Cooperation as Self-help," *International Security* 19(3), 1994-95, pp. 50-90
- [45] Kenneth N. Waltz: *Theory of International Politics*, pp. 129-131
- [46] Kenneth N. Waltz: "Structural Realism after the Cold War," *International security* 25(1), 2000, pp. 5-41
- [47] Robert Gilpin: *War and Change in World Politics*, Cambridge University Press, 1981; Charles Krauthammer: "The unipolar moment," *Foreign Affairs* 70(1) 1990/1991, pp. 23-33; G. John Ikenberry, Michael Mastanduno and William C. Wohlforth : *International Relations Theory and the Consequences of Unipolarity*, Cambridge University Press, 2011; Carla Norrlof and William C. Wohlforth: "Raison de l'Hegemonie (The Hegemon's Interest): Theory of the Costs and Benefits of Hegemony," *Security Studies* 28(3), 2019, pp. 422-450
- [48] Kenneth N. Waltz: *Theory of International Politics*, p. 130
- [49] Morton A. Kaplan: *System and Process in International Politics*, pp. 46-53
- [50] Goedele De Keersmaeker: *Polarity, Balance of Power and International Relations Theory: Post-Cold War and the 19th Century Compared*, Palgrave Macmillan, 2017, pp. 11-41
- [51] Frank Whelon Wayman: "Bipolarity and War : The Role of Capability Concentration and Alliance Patterns among Major Powers, 1816-1965," *Journal of Peace Research* 21(1), 1984, pp. 61-78

- [52] Robert O. Keohane: *After Hegemony: Cooperation and Discord in the World Political Economy*, Princeton University Press, 1984, p.26
- [53] Stephen D. Krasner: "Structural Causes and Regime Consequences: Regimes as Intervening Variables," in Stephen D. Krasner: *International Regimes*, Cornell University Press, 1983, p. 2
- [54] Robert O. Keohane: *International Institutions and State Power: Essays in International Relations Theory*, Routledge, 1989, p. 3-4
- [55] Robert O. Keohane: *International Institutions and State Power: Essays in International Relations Theory*, pp. 101-131
- [56] Ole Wæver: "The Rise and Fall of the Inter-Paradigm Debate," in Steve Smith, Ken Booth and Marysia Zalewski, eds.: *International Theory: Positivism and Beyond*, Cambridge University Press, 1996, pp.163-164
- [57] Steve Smith: "The Discipline of International Relations: Still an American Social Science?," *British Journal of Politics and International Relations* 2(3), 2000, p.380
- [58] Alexander E. Wendt: "The Agent-Structure Problem in International Relations Theory," *International Organization* 41(3), 1987, pp. 335-370
- [59] Alexander Wendt, "Anarchy is what States Make of it: The Social Construction of Power Politics", *International Organization* 46(2), 1992, pp. 391-425; Alexander Wendt: *Social Theory of International Politics*, Cambridge University Press, 1999
- [60] Alexander Wendt: *Social Theory of International Politics*, pp. 246-312
- [61] Barry Buzan: *An Introduction to the English School of International Relations*, p. 12-13
- [62] Barry Buzan: *An Introduction to the English School of International Relations*, p. 17
- [63] Barry Buzan: *From International to World Society: English School Theory and the Social Structure of Globalisation*, Cambridge University Press, 2004, p. 167
- [64] 一般的に言えば、権力は作用の方式（力と制度）を基準としての強制的権力と制度的権力、作用の効果（直接と間接）と基準としての構造的権力と生産的権力、という四つの側面で用いられる。Michael Barnett and Raymond Duvall: "Power in global governance," in Michael Barnett and Raymond Duvall: *Power in global governance*, Cambridge University Press, 2005, pp. 11-22
- [65] Kenneth N. Waltz: *Theory of International Politics*, p. 131
- [66] Robert Gilpin: *War and Change in World Politics*, p.13
- [67] John J. Mearsheimer: *The Tragedy of Great Power Politics*, W. W. Norton & Company, 2001, p. 43
- [68] Frank Whelon Wayman : "Bipolarity and War : The Role of Capability Concentration and Alliance Patterns among Major Powers, 1816-1965", p. 71
- [69] G. Modelski & W. R. Thompson: *Seapower in Global Politics, 1494-1993*, University of Washington, 1988, p. 100
- [70] W. R. Thompson: "Polarity, the long cycle, and global power warfare," *The Journal of Conflict Resolution*, 30(4), 1986, pp. 598-599.
- [71] W. R. Thompson: "Polarity, the Long Cycle, and Global Power Warfare," p. 604
- [72] E. D. Mansfield: "Concentration, polarity, and the distribution of power," *International Studies Quarterly*, 37(1), 1993, p. 112
- [73] Thomas B. Lawrence: "Power, Institutions and Organizations," in Royston Greenwood, Christine Oliver, Roy Suddaby, Kerstin Sahlin-Andersson: *The SAGE Handbook of Organizational Institutionalism*, SAGE Publications Ltd., 2008, p. 174
- [74] Robert. A. Dahl: "The Concept of Power," *Behavioral Science* 2(3), 1957, p. 79-80
- [75] Goedele De Keersmaeker: *Polarity, Balance of Power and International Relations Theory: Post-Cold War and the 19th Century Compared*, Palgrave Macmillan, 2017, p. 24-25
- [76] したがって、関係的権力は、山本吉宣が影響力とみなして、「A 国が何もしなかった場合と比べて、A 国が何らかの行動を取ることによって、B 国の行動が どのくらい変化し、それが A 国の欲するところとどのくらい一致するか、ということによって測られる」。山本吉宣「帝国システムの国際政治理論（上）」『国際関係論研究』第22巻，2004年，9-10頁
- [77] Hanna Samir Kassab: *Weak States in International Relations Theory: The Cases of Armenia, St. Kitts and Nevis, Lebanon, and Cambodia*, Palgrave Macmillan, 2015, p. 7

- [78] Kenneth N. Waltz: *Theory of International Politics*, pp. 88-93
- [79] Helen Milner: "The Assumption of Anarchy in International Relations Theory: A Critique," *Review of International Studies*, 17(1), 1991, pp. 75-81
- [80] David A. Lake: *Hierarchy in International Relations*, Cornell University Press, 2011, p. 51
- [81] David A. Lake: *Hierarchy in International Relations*, pp. 28-29
- [82] David A. Lake: *Hierarchy in International Relations*, pp. 46-50
- [83] David A. Lake: *Hierarchy in International Relations*, pp. 51-55
- [84] David A. Lake: *Hierarchy in International Relations*, pp. 59-62
- [85] Robert O. Keohane: *After Hegemony: Cooperation and Discord in the World Political Economy*, p. 64
- [86] John J. Mearsheimer: "The False Promise of International Institutions," *International Security*, 19(3), 1994, p.7
- [87] John K. Fairbank: "A Preliminary Framework," in John K. Fairbank: *The Chinese World Order: China's Foreign Relations*, Oxford University Press, 1968, pp. 5-6; Zhang Yongjin and Barry Buzan: "The Tributary System as International Society in Theory and Practice," *The Chinese Journal of International Politics* Vol. 5, 2012, pp. 18-19; David C. Kang: *East Asia Before the West: Five Centuries of Trade and Tribute*, Columbia University Press, 2010, pp. 17-24
- [88] Christopher Gelpi: "Alliances as Instruments of Intra-Allied Control," in Helga Haftendorn, Robert O. Keohane, and Celeste A. Wallander, eds.: *Imperfect Unions: Security Institutions over Time and Space*, Oxford University Press, 1999, p. 107
- [89] James D. Morrow: "Alliances and Asymmetry: An Alternative to the Capability Aggregation Model of Alliances," *American Journal of Political Science* 35(4), 1991, p. 930
- [90] David A. Lake: *Hierarchy in International Relations*, pp. 53-57
- [91] 山本吉宣「帝国システムの国際政治理論（上）」15 頁
- [92] Lassa Francis Oppenheim: *International Law: A Treatise (Volume I: Peace, Second Edition)*, Longmans, 1912, p. 297
- [93] Geddes W. Rutherford: "Spheres of Influence: An Aspect of Semi-Suzerainty," *The American Journal of International Law* 20(2), 1926, pp. 300-325
- [94] Susanna Hast: *Spheres of Influence in International Relations: History, Theory and Politics*, Ashgate, 2014, p. 1, 139
- [95] Paul Keal: *Unspoken Rules and Superpower Dominance*, Palgrave Macmillan, 1983, p.
- [96] Edy Kaufman: *The Superpowers and Their Spheres of Influence: The United States and the Soviet Union in Eastern Europe and Latin America*, Croom Helm, 1976, p. 11
- [97] Robert Gilpin: *War and Change in World Politics*, pp. 30-31
- [98] George Modelski and W. R. Thompson: *Seapower in Global Politics, 1494-1993*; Joshua S. Goldstein: *Long Cycles: Prosperity and War in the Modern Age*, Yale University Press, 1988, pp. 99-147; David S. Sorenson: *Shutting Down the Cold War: Politics of Military Base Closure*, Palgrave MacMillan, 1998
- [99] Terence K. Hopkins and Immanuel Wallerstein: "Cyclical Rhythms and Secular Trends of The Capitalist World-Economy," *Review (Fernand Braudel Center)* 2(4), 1979
- [100] Robert Gilpin: *U.S. Power and the Multinational Corporation: The Political Economy of Foreign Direct Investment*, Basic Books, 1975; Stephen D. Krasner: "State Power and the Structure of International Trade," *World Politics* 28(3) 1976
- [101] Robert Gilpin: *War and Change in World Politics*, pp. 50-105; David Harvey: *The New Imperialism*, Oxford University Press, 2005, pp. 36-41
- [102] Christopher Chase-Dunn etc.: "The Forum: Hegemony and Social Change," *Mershon International Studies Review* 38(2), 1994, pp. 363-364
- [103] 山本有造『『帝国』とはなにか』山本有造編『帝国の研究—原理・類型・関係—』名古屋大学出版会, 2003 年, 3 頁
- [104] 宇山智彦「序章 ユーラシア近代帝国論へのいざない」宇山智彦編『ユーラシア近代帝国と現代世界』ミネルヴァ書房, 2016 年, 4 頁
- [105] Adam Watson: *The Evolution of International Society: A Comparative, Historical Analysis*, Routledge, 1992, p. 15

第二章 東部ユーラシア国際システムの形成

第一章で提案したシステム形成の三つの基準にしたがって、秦漢時代の東部ユーラシアにおける国際システムの形成を説明する。東部ユーラシアは他の地域との間に境界を持った閉鎖的かつ独立的なシステムである。ここには、構成要素として一定の領土・住民・政府を有し、能力要素として一定の軍事力のもとで他のユニットに独立自主な政策をとることができる複数のユニットが存在した。そして、東部ユーラシアでは、軍事・政治部門において、ユニットによる相互作用は一定の頻度で軸複合的なパターンになったのであった。

第一節 東部ユーラシア国際システムの境界

東部ユーラシア国際システムの境界を説明する前に、東部ユーラシアと東アジアを区別する必要がある。第二次大戦以後、古代東アジア世界は、西嶋定生が日本の歴史をより広い自我完結的世界の中で明らかにしようと発案したことによって、日本では当たり前の概念として流通している。西嶋にとって、東アジア世界は古代における複数の世界、すなわち文化圏として自律的に発展した世界の一つであり、漢字、儒教、律令制および仏教という四つの指標にしたがって、ほぼ現在の中国、朝鮮、日本、ベトナムの領域に等しい^[1]。しかし、ここでの中国は中原の意味であり、この点をめぐって、東アジアに対する日本学術界と中国学術界との理解には分岐が生まれる。中国研究者にとっての東アジアの範囲は、西嶋の定義より広く、中国を中原だけではなく、中華人民共和国の全土と定義される。それは、西嶋氏が漢族王朝対外政策の重心としての遊牧国家との関係を軽視していると批判した堀敏一の定義した東アジア^[2]とほぼ同じ領域である。たとえ同じ東アジアという名称を使っても、必ずしも同じ範囲を意味しないことは、日中の間だけではなく、日本内部にもある^[3]。さらに、現在では、東アジアは、単なる東北アジアから、東南アジアを合わせた「大」東アジアをへて、太平洋との連携の強化による「アジア太平洋」、ならびに最近の「インド太平洋」戦略にまで、拡大しつつあるため、広域概念としては「解毒」される必要がある^[4]。

歴史的にも現実にも東アジアという語の曖昧さが明らかになった後、それに代わる概念を探る研究者は北アジア研究によく利用される「ユーラシア」^[5]という概念をもとに、堀

の定義した地域を「東部ユーラシア」あるいは「東ユーラシア」と定義しようとした。このような地域的定義はほぼ欧米の研究と一致する^[6]。さらに、複数の世界の一つとしての東アジア世界が文化圏と政治圏を含むものの、文化圏を重視するのに対して^[7]、東部ユーラシアは政治あるいは国家間の相互作用に中心を置いている。そのため、複数の文明間の相互作用にも触れることが可能である^[8]。そこで、東部ユーラシアという空間範囲を設定して、すなわち、東の朝鮮半島および日本列島から西のパミール高原まで、北のモンゴル高原から南のインドシナ半島北部までの地域を「東部ユーラシア」と定義する。

古代には、国際システムは基本的に地域的規模をもって、互いに境界線をもって自己完結的に発展していった。東部ユーラシアはこの多くの地域的国際システムの一つで、地理・経済・政治・軍事などの側面から他の地域に対して境界をもっている。地理からみると、東部ユーラシアは、東に太平洋、北にスタノヴォイ山脈・サヤン山脈・アルタイ山脈、西にパミール高原、西南にヒマラヤ山脈などの自然の障壁がある。輸送技術が低かった古代には、これらの自然の障壁を克服する小規模の経済と文化の交流ができたが、高いロジスティックスが必要とされる政治・軍事的な相互作用は基本的にできなかった。そのため、東部ユーラシアは自然の障壁によってユーラシア大陸の他の地域から離れて存在している。

経済からみると、東部ユーラシアは、北から南まで順に狩猟採集地帯・遊牧地域・農牧接壤地帯・農耕地域があるため、「一つの大きな相互補完的な交易システム、すなわち世界システムを構成する」^[9]。他の地域との間には贅沢品を対象とする長距離貿易があるが、大量かつ頻繁な貿易あるいは生活品の貿易はこの地域の中でだけ行われる。

政治・軍事的にみると、東部ユーラシアは、西嶋定生の言葉を借用すれば、「文化圏として完結した世界であるとともに、それ自体が自律的發展性をもつ歴史的世界」である。しかし、西嶋は文化の共通性と冊封体制を強調するため、東部ユーラシアの地理的範囲を「北方のモンゴル高原や西方のチベット高原、および西北廻廊地帯を越えた中央アジアの諸地域、あるいはベトナムを越えた東南アジアなどの諸地域は通常これにふくまれない」と縮小して捉える^[10]。実際に文化の共通性を考慮しないとしたら、政治面からみると、冊封関係は北アジアと中央アジアまで含まれる。金子修一は可汗・贊普などの本国の称号である「本国王」と臣服の意味のある「徳化王」を冊封とみなして、冊封体制が実際に北アジアと中央アジアにも適用できると考える^[11]。もし冊封だけではなく、和親・朝貢・羈縻・戦争などの政治的相互作用を見れば、東部ユーラシアでの政治的一体性はもっと顕著に現れる。

地理・経済・政治軍事などの側面から他の地域と離れる東部ユーラシアは、東限が朝鮮半島・日本列島、西限がパミール高原、北限がモンゴル高原、南限がインドシナ半島北部となる。しかし、東部ユーラシアは同質的ではなく、一般には農耕地域と遊牧地域に二分されたり、妹尾達彦の分類では狩猟採集地帯、遊牧地域、農牧接壌地帯及び農耕地域に四分されたり、また于逢春の分類によると遊牧地域、農耕地域、漁獵農牧地帯、雪原農牧地帯及び海上地帯に五分されたりする^[12]。本論文では、自然環境と生業にもとづいて東部ユーラシアを三分する。まず、農耕地域あるいは温帯農耕優勢地域^[13]は西嶋の定義する東アジアの範囲に相当して、農耕の生産様式と定住的生活が主に行われる。次に、遊牧地域は主として北アジアあるいはモンゴル高原を指し、耕地が少ない代わりに草原が豊かなのに応じて、家畜と共に季節的に移動する遊牧的な生産・生活様式が主に行われる。最後に、西域あるいは中央アジア東部と呼ばれるオアシス地域は、河西回廊からパミール高原まで、小オアシスが散在するため、農耕と遊牧が小規模的に行われて、さらに、人口の増加による圧力を解決するため、商業が盛んに行われる。

第二節 東部ユーラシア国際システムのユニット

古代には、バンド、部族、クラン、首長国などの前国家アクター、都市国家、遊牧民の集団としての行国、帝国などの古代国家が国際システムのユニットとして認められる^[14]。東部ユーラシアは自然環境と生業によって三つの地域に分けられ、それぞれの地域においては異なる政治共同体があった。概観的に言えば、全ての政治共同体は、構成要素として一定の領土・住民・政府を有すること、能力要素として一定の軍事力のもとで他のユニットに独立自主な政策をとることを兼有するため、東部ユーラシア国際システムのユニットとして認められる。

まず、領土について、農耕地域と西域での定住国家は、小規模の都市国家にしても、大規模の領域国家にしても、一定の領土を有することは言うまでもない。問題となるのは遊牧政権に領土があるかということである。遊牧は季節に応じて移動的生活をおくるものであるが、これによって遊牧政権が領土を重要視しないと判断するのは間違いである。遊牧では基本的に遊動的な生活をおくる。遊動とは「ひとつの集団に焦点を合わせると、移動していても、かなり長期にわたって一定の地理的範囲を生活圏として、そのなかにとどまっていることを前提としている」^[15]。『史記』と『漢書』は遊牧民の遊動性にもとづいてその

国家を「行国」と呼ぶ。対内的には、「逐水草遷徙、無城郭常居耕田之業、然亦各有分地」^[16]とあるように、土地の所有が決まっている。対外的には、冒頓単于は東胡に宥和政策をとって月氏と千里馬を譲ったが、辺境での防衛辺塞としての「甌脱」^[17]に対して「地者、国之本也、奈何予人」^[18]と言って、東胡と戦争を行った。ここから遊牧政権が内的と外的に領土を重視していたことがわかる。一方、行国は基本的に都市国家のような小規模の段階にある。対外拡張とともに、国家は拡張した地域を統合した結果として領域国家になると、統治と管理のために都市を築くが必要になる。例えば、匈奴には政治中心としての単于庭、宗教中心としての龍城および経済中心としての蹕林がある。

次に、人口については、東部ユーラシアは基本的に四つの階層に分かれる。トップには超大国家、すなわち人口が 1000 万以上の国家がある。このような国家は同時代にはただ一つしか存在せず、戦国時代を終わらせた秦王朝と後の漢王朝である。研究によると、秦漢の人口は最低 1300 万から最高 3000 万まで変動する^[19]。このような大規模な人口のもとに、秦漢の兵力は 71 万から 99 万まで変動する^[20]。二番目の階層には百万人以上の人口をもつ大国がある。このような国家も同じく一つしかなく、拡張に成功した匈奴がそれにあたる。具体的なデータはないが、分裂時期を除いて、匈奴の人口は基本的に 110 万から 150 万まで、その兵力は 16 万から 30 万まで変動したことが推測される^[21]。三番目の階層は 10 万以上の人口の国家である。西域には罽賓・烏弋山離・安息・康居・大月氏・大宛・烏孫、農耕地域には南越・閩越・朝鮮がある。これらの国家の兵力は数万から十数万まで分布する。最後に、10 万以下の人口をもつ小国がある。このような国家には数百人の部族から数万人の都市国家・行国まで含まれる。一方、部族段階に留まる烏桓、鮮卑、羌などの民族は、かなり多くの人口をもったが、部族を単位として分散的生活を送るため、各部族の規模を判断することは難しい。

最後に、政府について、各地域のユニットは生業と自然環境に応じて異なる政治体制を選ぶ。一般的に言えば、二つの種類がある。一つは秦漢王朝の制度である。農耕地域を統一した秦王朝と漢王朝は、皇帝制度、三公九卿と呼ばれる官僚制、郡県制（初期は郡国制）による中央集権体制、秦律・漢律による法制を通じて、中央政府の意思にしたがって、地方と中央をつなげて統治する。同じく農耕地域での南越・閩越・朝鮮は秦帝国の拡張によって併合され、秦漢出身の一族が王権を掌握したため、秦漢の政治制度を参考にはしたが、在地勢力が強いため、土着氏族と権力を分有しなければならず、王位の世襲の確保の対価として、土着の貴族に地方的自治権及び重要な官位を与えており、実際には首長連合的な

特徴があった。もう一つは中央集権体制に基づく秦漢帝国とはかなり異なる匈奴の制度である。匈奴は、主として単于と貴族の世襲制、官僚制度としての「二十四長」、中央と地方関係での「左右分地と中央の単于庭」に分かれる三分制、順次に正月に単于庭で、五月に竜城で、秋に蹕林で行われる会議などの政治制度がある^[22]。この制度からみると、単于の権威が全国の部族にまでは及ばず、単于と在地首長の関係が合意のもとに（Consensual）形成され、在地首長が政治・司法・経済などに対する莫大な自治権をえて、さらに、専門化した官僚制度と全国に及ぶ司法制度を持たない、という分権的特徴が強いため、匈奴は首長制を超えるものの国家には届かない「超複合的な首長制（Supercomplex Chiefdom）」にあるとも思われる^[23]。だが、血縁的階層性から分離した軍事的組織と文民的組織が生まれたり、高級軍官と文官が君主としての単于から賃金、奨励あるいは補償を受けたり、単于が匈奴全体にとって重要な祭事を司ったり、匈奴の左右が中央の単于庭から離れて左右賢王に任せられながらも単于が左右賢王に権力をもって命令を下したりしていることから見ると、匈奴が首長制から国家にまで発展したことは間違いない^[24]。西域諸国の国内体制は正確には把握できないが、『史記』と『漢書』を参考にすると、基本的に政府を持つ王政であることは理解できる。一方、部族段階に留まる烏桓、鮮卑、羌などの民族は基本的に首長制をとっていた。

要するに、東部ユーラシアでは、三つの地域におけるユニットは、それぞれの生業と自然環境に応じて異なる規模（領土と人口）と政府を有するため、同質的なものではなく、むしろ多様性に満ちている。本論文では、国家形成の段階と支配の強さと広さによって、これらのユニットを前国家アクター、都市国家（行国）、領域国家と統一国家に四分する^[25]。まず、人口の少ない親族集団をもとに、都市を築かずに移動的生活を送り、集団内には階層分化がないため君主がいない政治共同体は、前国家の段階において、バンド・部族・クラン・首長制などの形態をとって、前国家アクターに分類する。前国家アクター（例えばマンチュリアの烏桓・鮮卑、河西回廊付近の羌、西南夷）は古代東部ユーラシアに主に西域、農耕地域と遊牧地域との接壤地帯に広く分布する。次に、都市をもとに、人口の増加のため血縁関係より地縁関係によって統合され、階層文化によって政府及び君主が現れる国家は、その支配がこの都市に限定されるため、都市国家（遊牧国家の場合は行国）に分類される。都市国家と行国は前国家アクターと同じく、基本的に西域及び農耕地域と遊牧地域との接壤地帯に分布する。そして、文化・経済・政治などの要素で共通性のある地域での都市国家を征服した国家は、その支配をこの地域に及ぼし、唯一支配権を示す「王」

と呼ばれるため、領域国家になる。領域国家は農耕地域での戦国七雄、南越・閩越・朝鮮などの定住国、西域での烏孫・大宛などの都市を築いた遊牧国に分かれる。最後に、異質の地域での領域国家を統合した国家は、所在地の王から世界の王（あるいは諸王の王）になって、その支配が同質的地域としての中心地域から異質的地域としての周辺地域まで及ぶことになるため、統一国家になる。統一国家と領域国家との区別の特徴は、前者では最高位にいる皇帝ないしは単于の下に複数の王があり、後者では王が国内の最高位にいる。東部ユーラシアには統一国家がただ二つ、すなわち、農耕地域を統一した秦漢王朝と遊牧地域を統一した匈奴しかない。本論文では、国内的意味の強い統一国家とシステムの意味の強い帝国を区別するために、統一国家の意味を強調する時に秦漢王朝と、帝国構造を強調する時に秦漢帝国と匈奴帝国と呼び、単に国家間関係を分析する時に秦・漢と匈奴と呼ぶ。

要約すれば、東部ユーラシアにおけるユニットは構成要素としての領土・人口・政府を備えるため、ユニットになる物質的な前提条件を満たしている。しかし、ユニットになるためには構成要素だけではなく、他のユニットに独立自主な政策をとるという能力要素を備えなければならない。この問題は相互作用と高い関連性があるため、次節で検討する。

第三節 東部ユーラシア国際システムの相互作用

前節で論じたとおり、他の地域と境界をもつ東部ユーラシアにユニットがあるため、システム形成の二つの条件が満たされるが、本節は相互作用という側面から東部ユーラシア国際システムの形成のプロセスを明らかにする。東部ユーラシアは、漢と匈奴の阻碍のため、農耕地域と遊牧地域-西域に二分されていた。漢と匈奴は隣国のため相互作用を行っていたが、各部分での国家は他の部分の国家と外交を行うことができなかった。それ故、東部ユーラシアは一つになる前に、農耕地域、農耕地域と遊牧地域との接壤地帯、遊牧地域-西域という三つの舞台に分かれ、それぞれ異なる相互作用があった。しかし、この隔離状態が打破されるのは漢武帝が和親政策を拡張政策に転じて、匈奴と東部ユーラシアの覇権を争うことによってであった。

一 農耕地域

(一) 統一国家としての秦漢

農耕地域には、考古学によると、紀元前五千年から国家が現れ、紀元前二千年に「邑」を王畿とする都市国家（夏）が初めて現れた^[26]。夏から周までの時期には都市国家があったが、それらは春秋戦国時代に戦争のために統合され、最終に戦国七雄と呼ばれる七つの領土国家になった^[27]。戦国時代の末期、秦は地理的に他の六つの国家から離れていた優勢を利用したり、経済面では鄭国渠など灌漑工事建設および勸課農桑を行なったり、政治面では法家に基づく商鞅変法を実行したり、軍事面では胡服騎射への改革および鉄兵器の利用を行なったりなどし、このような富国強兵のための自強的改革（Self-Strengthening Reform）を通じて^[28]、他の六つの大国を滅ぼして、天下を統一した。統一に成功した秦王は、中央で自ら「皇帝」と称し、皇帝制度をとった一方、中央と地方との関係について、封建制をやめ、郡県制の採用を通じて、全国に対する実質的統一を実現したため、初めての統一国家としての秦王朝を建国した。

しかし、秦王朝は暴政・厳法と何年にも渡る対外拡張を行って、人民に莫大な負担を負わせ、その一方、封建制を放棄したことで元六国の貴族の不満が累積していった。その結果、始皇帝の死亡をきっかけとして、陳勝・呉広の乱が全国蜂起に火をつけたが、農民による蜂起は最終的には六国に集中し、元貴族の復権に繋がった。秦王朝が復権した旧貴族によって滅ぼされた後、盟主としての項羽は自ら西楚霸王と称し、漢王劉邦を含める十八の王を封じた。言い換えると、秦王朝がようやく実現した実質的統一は項羽が封建制を復活させたことによって崩れた。中原は李開元のいう後戦国時代の秦末漢初期に入って^[29]、統一国家の崩壊によって再び分裂状態の国際関係になった。このような分裂は楚漢戦争に勝った劉邦が皇帝の座に即位し、漢王朝を建てることによって形式上は終わった。しかし実際には、劉邦が最高の功績にもとづいて協力した異姓諸侯王の推挙によって皇帝になったため、始皇帝のような「平天下」ではなく、独立性の高い異姓諸侯王と「共天下」をし、郡国制を敷かざるをえず、その皇権には制約があったため、漢王朝の建国初期は秦王朝のような統一国家とは言い難い。皇帝と異姓諸侯王との関係は、劉邦が諸侯王に覇者としての秩序維持を求めたため、春秋以降の覇業政治と同一のものであった^[30]。そのため、国家の統一のために、異姓諸侯王の問題を解決しなければならなくなる。漢は建国から劉邦の死亡までの八年間、軍事的手段を通じて反乱を行った異姓諸侯王を鎮圧した。最終に長沙

王と南海王を除くすべての異姓諸侯王が誅殺されたり、謀反の失敗のため匈奴に亡命したりした。漢王朝は異姓諸侯王問題を徹底的に解決するために封爵の誓と白馬の盟を通じて異姓封王を廃絶したが、郡国制をやめず、異姓諸侯王を同姓諸侯王に変えたのだった。

しかし、異姓諸侯王問題を解決した漢王朝は名義上の統一を守ったが、同姓諸侯王が封地を本拠にして独立の財源・軍隊・行政権・司法権・人事権などをもって、まるで独立王国になったため、実質上の統一を欠くことになった。そのため、当時の漢王朝は「国家連合体」であり、諸侯王が王国の統治権を有し、皇帝は諸侯王に対して直接的な干渉を及ぼさないが、立法権と外交権だけを独占した^[31]。文帝の時、済北王と淮南王との謀反があってはじめて、同姓諸侯王の中央に対する反意が徐々に顕著になっていった。分裂の危機に対して、文帝は賈誼の「治安策」を部分的に採用し、諸侯王の封地を分地しようとし、景帝は急進策としての晁錯の「削藩策」をとって楚王・趙王・膠西王の封地を彼らの違法の罰として削減していた。中央と対抗するために必要な実力の累積を基本的に完成した呉王は他の六王と連合し、削藩による王室間不和を理由として反旗を翻した。結局、地方の実力は中央とは比較にならず、わずか三ヶ月でこの七王の乱は終末を迎えた。これを境に、中央は削藩策と分国策を続けて、諸侯国の人事権及び統治権を回収し、武帝の推恩の令を加えて、郡国から租税を得るような経済権利だけを諸侯王に与えたため、独立王国になった諸侯国を実質上消滅させ、秦王朝の郡県制に戻った。言い換えると、この時点で初めて漢王朝は「平天下」に成功した秦王朝の統一国家を継承したのだった。

（二） 農耕地域における国家間の相互作用

一方、中原から農耕地域全域にまで目を移すと、秦王朝は統一した後、四方へ拡張政策を実施していた。北では紀元前 215 年に 30 万の大軍に匈奴を攻撃させてオルドスを併呑し、翌年匈奴を西北から駆逐し、オルドスに 44 県を築いて、さらに万里の長城と要塞のもとで北辺の安定を保っていた。農耕地域の辺縁では、「百越」に対する攻略が紀元前 222 年の楚国の滅亡時から行われたが、最終的に紀元前 219 年と紀元前 214 年にそれぞれ閩越と南越を征服した。郡県を設置したり、人民を移住させたり、中央からその地までの道路を築いたりする直接支配のための政策をとった。征服によって併合された北のオルドス・東南の閩越・西南の南越、および燕国から継承した朝鮮は、郡県を設置したり、人民を移住させたり、中央からその地までの道路を築いたりする直接的支配政策によって秦帝国の天下に組み込まれた。

しかし、秦王朝の崩壊をきっかけに、オルドスは再び匈奴に取り返され、農耕地域の辺縁における南越・閩越・朝鮮は地方勢力として振る舞った。閩越は項羽か劉邦と協力して王権を確保し、南越と朝鮮は中原から距離をとって自らの勢力圏を維持する政策を通じて、この三国は秦末漢初の国際関係中に独立を維持していた。しかし、統一国家としての漢王朝の成立は、孤立政策の限界を告げた。漢と平和関係を維持するために、閩越、南越と朝鮮は順次外臣として漢の冊封を受けて独立性を確保しようとした。漢は建国初期、匈奴の安全保障的压力、諸侯王の分裂問題、および国内の経済復興問題に対して力を尽くしたため、これらの国家を帝国に組み込むのが無理で、その独立を認可せざるを得なかった。

独立とは言え、漢にとって、かつての秦帝国の一部としての南越・閩越・朝鮮を匈奴のような敵国（すなわち対等な国）として認められるはずはなく、少なくともこれらの国家と漢と間に階層関係（すなわち君臣関係）を前提する必要があった。結果として、冊封は、漢からみると、漢の皇帝と外臣国の王が君臣関係を築いて、外臣国の王が漢の徳と礼を受けなければならなくなり、外臣国からみると、冊封を通じて、漢の直接的干渉を避けて、独自の法と礼を行うことができる^[32]。そして外臣国は「臣」のため、南越では「毋為南辺害、与長沙接境」^[33]、朝鮮では「毋使盜辺、蛮夷君長欲入見天子、勿得禁止」^[34]とあるように、漢帝国への侵害を行わないこと、また他国の漢帝国に対する朝見を阻止しようとし、さらに「俱為藩臣、毋擅興兵相攻撃」^[35]とあるように外臣国の間で互いに攻め合わないことなどの義務を負う。しかし、このような義務は必ずしも守られなかった。例えば、呂後の時、南越は漢帝国の鉄器貿易禁止政策に反発して、自ら「武帝」と称し、兵を派して長沙を攻撃した。武帝の時、閩越は東海・南越を侵攻した。要するに、冊封関係は、名目上の臣服と現実上の独立との取引であるため、外臣国の国益に損を与えると違反される可能性が高いのだった。

文帝以降、同姓諸侯王の割拠・独立化によって、漢と農耕地域の辺縁における国家との直接的交通は漢の辺境にある諸侯王によって遮断された。結果として、漢と農耕地域の辺縁における国家との関係は再び中断した。証拠としては、史籍には、漢と農耕地域の辺縁における国家との相互作用が諸侯王問題の解決される前に、原因は不明であるが、記録されなかった。だが、呉楚七国の乱の時、呉王濞が諸侯王に発した書には、

寡人素事南越三十余年，其王諸君皆不辭分其兵以隨寡人，又可得三十万^[36]。

とあるように、呉王が南越から援軍を得る自信を持った。さらに、

呉王濞反，欲從閩越，閩越未肯行，独東甌從呉。及呉破，東甌受漢購，殺呉王丹徒，

以故皆得不誅，帰国。呉王子駒亡走閩越^[37]。

とあるように、呉王は、同時に閩越と東甌にも協力を求めた。そうであるとする、農耕地域の辺縁における国家は漢の中央との関係が中断したものの、漢の諸侯王との関係を維持していた。この時、中央と対抗せんとした諸侯王は、これらの地域の協力を得るために、一定の妥協を行ったのではないかと推測される。そしてその結果として、この中の大国に拡張の機会を与えたのであった。

南越は、呂後の鉄器売買禁令をきっかけとし、自ら「武帝」を称して長沙に侵攻した後、「財物賂遺閩越・西甌・駱、役属焉」^[38]、「南粵以財物役属夜郎、西至桐師」^[39]とあるような経済手段を通じて、東西の大国を勢力圏に組み入れて、これらの国と連携し、「南粵王黄屋左纛、地東西万余里、名為外臣、実一州主」^[40]とあるように、実力を漢と対抗できる程度までに強化していった。結果として、南越は、秦漢の制度を採用して、帝国までになった。統治基盤としての両広には、郡国制をとり；ベトナムの中・北部には、その土着の駱人の首長を内臣の西于王と冊封し、駱将を県令として間接統治を行ない；海南島には、楚の制度を採用して、その土着の首長を外臣の執圭として冊封し、自国による帝国に取り込んだのだった^[41]。

南越だけではなく、朝鮮も漢と約を結んだ後、漢の威信を借りて、「以兵威財物侵降其旁小邑、真番・臨屯皆來服属、方数千里」^[42]とあるように、周辺へ拡張していった。結局、拡張に成功した朝鮮は、「保塞外蛮夷、毋使盜辺；蛮夷君長欲入見天子、勿得禁止」^[43]とあるような義務を無視し、「傳子至孫右渠、所誘漢亡人滋多、又未嘗入見；真番・辰国欲上書見天子、又雍闕弗通」^[44]とあるように、朝覲を行わず、漢への周辺の国の朝覲をも遮断した。

要するに、農耕地域は、漢と農耕地域の辺縁における南越・閩越・朝鮮は、冊封を通じて、君臣関係を結んだ一方、農耕地域の辺縁における南越・朝鮮は、秦・漢の制度を倣って、付近の小国か部族と君臣関係をも結んだ。結果として、「独自の国際秩序を持つ『小帝国』」という廣瀬憲雄の概念を借りれば、当時農耕地域には、漢という大帝国の他に、複数の小帝国による「小帝国群」があった^[45]。漢が「小帝国」の阻害により「小帝国群」の中の小国か部族と直接的な相互作用を行なうことができなかったため、農耕地域における相互作用は軸複合的なパターンではなかった。したがって、農耕地域は、複数の小帝国による独立の閉鎖的システムの存在ゆえに、一つのシステムにはならなかったと考えることができる。

二 遊牧地域-西域における匈奴の覇権

遊牧地域には、古くから秦・趙・燕と攻防を行う遊牧国家があったが、具体的な記載は秦のオルドスへの侵攻から始まる。秦の拡張によって、匈奴はオルドスを喪失し、北に後退せざるをえなくなった。この時の遊牧地域は、東の東胡、中の匈奴、西の月氏という三大国の鼎立状況にあった。その中で、それ以前に燕と秦にそれぞれ負けた東胡と匈奴と比べると、河西回廊を独占する西の月氏は一定の優勢を持ったと推測される。このような推測は匈奴が月氏に宥和政策をとって、太子冒頓を質子として派遣したことである程度まで証明される。この鼎立は秦の滅亡とともに崩壊を迎えた。紀元前 210 年、匈奴は秦の崩壊による北辺の防衛真空状態を機会に河南を奪回した。翌年、月氏から逃げた冒頓は自分だけに服従する近衛兵で頭曼単于を殺し、自ら単于の座に即位することになった。この時、内的反対勢力を鎮圧するために、冒頓は同じく秦の崩壊を利用して強くなった東胡に宥和政策をとった。東胡からの要求が次第に千里馬、単于の妻から防衛辺塞としての「甌脱」までになった。匈奴は最初の二つの要求を満足させたが、領土が国家の最も重要なものであるため、国力の回復に加えて、宥和政策から戦争に転じて、東胡の不備を生かして、東胡王を滅ぼしてその民衆と家畜を領有した。その後、間も無く西では月氏を撃退し、南では黄河流域南部の楼煩と白羊を併呑してオルドスを全て取り返し、北では丁零などの国家を臣服させたことを通じて、遊牧地域を統一した結果として、匈奴は遊牧地域で初めての統一国家になった。

統一に成功した匈奴は、西域に向けて拡張政策をとった。匈奴の西域進出の前に、西域は月氏の影響を受けていた^[46]。それ故、西域にまで拡張しようとした匈奴は月氏を倒す必要があった。匈奴は統一過程で月氏を撃退したが、月氏の地を併合しなかったため、月氏は依然として匈奴が西域に進出するために必要な河西回廊を占有し、匈奴を西域から隔てた。西域の覇権をめぐる、匈奴は紀元前 178 年、紀元前 182 年、紀元前 130 年に月氏と三回戦争を行って、月氏を西に後退させて、最後に西域から駆逐した。結果として、「西域諸国大率土着、有城郭田畜、与匈奴、烏孫異俗、故皆役属匈奴」^[47]というように、匈奴は西域のオアシス都市国家を勢力圏に組み入れたことになる。西域諸国の事務を管理するために、匈奴の西にいる日逐王は僮僕都尉を置いた。僮僕都尉は常に焉耆・危須・尉黎間に駐在して、西域諸国に税金を強要し、その収入で日逐王の経済的需求を満足させた。匈奴の主な生業は遊牧であるため、このような賦税は主としてオルドスにある都市国家の穀物、

遊牧国家の毛皮税、鉱物、手工芸品などに課された^[48]。さらに、「匈奴使持単于一信到国、国傳送食、不敢留苦」^[49]とあるように、西域の諸国は匈奴を通過させるために、匈奴の証書を確認した後、補給を提供しなければならない。そして、紀元前 92 年の楼蘭王死亡後、匈奴にいる楼蘭の質子を楼蘭に送って即位させたことから見ると、西域諸国は匈奴に質子を送る義務も負った。最後に、漢が同盟のため烏孫に公主を派遣した後で匈奴も公主を派遣したことを見ると、匈奴は西域諸国の君主に公主を嫁した。

ところで、匈奴は西域諸国の内政・外交に支配もしくは干渉を行ったのであろうか。史料をみると、匈奴は、例えば楼蘭が漢に降伏・朝貢した後で楼蘭を攻撃したように、本国の利益を損ねる西域諸国に征伐を行なって、その国の政策を変えさせたことがあるが、西域諸国への直接の干渉は基本的になかった。更に、外臣国の新王が即位のために漢に冊封を申し出ることは匈奴と西域との間にも見られなかった。要するに、匈奴は西域を勢力圏に組み込んで、そこに経済的な搾取のための制度及び制度の実施のための組織を作って、西域諸国との間に階層関係を維持している。このような階層関係は、レイク（Lake）の関係的権威（relational authority）、すなわち一国が他国と妥協して、一部分の主権を代価として他国の安全保障と経済援助を約束し交易する関係に近い^[50]。そのため、匈奴は、西域諸国にある種の対外行動（賦税）を義務付けることで、覇権を形成したのだった。

三 農牧接壤地帯での和親条約に基づく共存体制

東部ユーラシアは一体化される前に、基本的に農耕地域での秦漢帝国と遊牧地域-西域での匈奴非公式帝国に分かれて、二つの地帯にある国家は匈奴・漢によって相対的に隔離されていた。このような隔離は漢と匈奴との共存体制によって 60 年以上維持された。

匈奴と漢はほぼ同時期に統一国家を建てた。その後、韓王信の匈奴への投降をきっかけとして、漢と匈奴は初めての相互作用として戦争に突入した。漢匈大戦では、劉邦が匈奴の罠にかかって独自に急進しすぎたため包囲されたこともあったが、実際に全面戦争になる前に双方は撤兵した。そうであるとする、今回の包囲によって、漢は屈辱を感じて、匈奴の軍事的強さに注意しなければならないが、全面戦争ではなかったため、匈奴と比べて軍事的劣勢にあるとは断言しがたい^[51]。だが、漢は建国初期、諸侯王問題と経済問題に焦点を置いたため、匈奴との戦争を避ける緊迫性があった。そして、漢匈大戦後、匈奴は叛いた韓王信とその部将とともに漢の辺境に侵攻と略奪を繰り返し、一方では辺境の武官の投降を受けていた。このような安全保障上の状況は内政に集中しようとする漢にと

って完全に不利なので、対匈奴政策が緊急に必要なになった。

この時、劉邦は劉敬の和親策を採用し、彼を派遣して匈奴と和親条約を結ぼうとした。結果として、漢と匈奴は「奉宗室女翁主為単于閼氏、歳奉匈奴絮繒酒食物各有数、約為兄弟以和親」^[52]とあるような和親条約を結んだ。さらに、後に文帝から匈奴へ出された国書の「先帝制、長城以北引弓之国受令単于、長城以内冠帶之室朕亦制之」^[53]という記載から見ると、今回の和親条約は実際には国境画定も含んでいた。しかし、注意すべきのは古代の国境画定が近現代のような国境線（Border）にもとづいて行われるものではなく、一定の地域からなる国境地帯（Frontier）にもとづいて行われるものである⁵⁴。さらに、国境画定に対する約束は、平和時期にのみ守られるが、戦争時期には破れるのが珍しくない。最後、文帝の時から、漢と匈奴との民間貿易の場所としての関市が開始された。要するに、和親条約は主として、和親公主の派遣、賂遺・関市、兄弟関係に基づく平等関係、万里の長城による国境画定などの内容からなっていた。

和親条約は匈奴に重点が置かれていたため、漢は屈辱的立場に立って、卑屈に対匈奴政策をとったと中国の学者に非難されている。さらに、公主・賂遺・関市などを朝貢と理解して、漢が匈奴の朝貢国になったとみなす見解もある^[55]。最も極端な見方では漢を匈奴の属国とみなして、漢が経済的進貢を対価にして匈奴の安全保障的援助を受けて存続していたと見る^[56]。だが、和親条約は漢にとってそれほど不利とは言えない。漢は、その戦略の中心が対外より対内の諸侯王問題及び経済復興におかれ、和親条約の締結によって安全保障上の最も厳しい脅威を経済的対価で緩和させることを通じて、対内問題に集中することができるようになった。一方、漢は匈奴との関係が平等な兄弟関係にあるため、匈奴に臣服していたとは言い難い。実際に、遊牧地域を統一した匈奴と中原を統一した漢は初めての南北朝対峙になった^[57]。もし和親条約を南北朝対峙にたつ遼宋の澶淵の盟と比較すれば、その本質を明らかにすることができる。杉山正明は澶淵の盟を「国家間の平和共存方式」としての「澶淵システム」と定義し、軍事的劣勢にある北宋が経済的対価を払って遼と平和条約を結ぶことによって存立を確保したものだと考えた^[58]。その上、さらなる具体的研究を行なった古松崇志は澶淵の盟を対等な国家間に結ばれた平和条約と定義し、「ユーラシア東方で維持された複数の国家が共存する国際秩序」を「澶淵体制」として提唱する^[59]。和親条約以後の 65 年間に大規模な戦争がなく、更に、和親条約の継続によって、「終景帝世、時時小入盗辺、無大寇」と「匈奴自単于以下皆親漢、往來長城下」^[60]とあるように漢匈関係が徐々に蜜月期を迎えた。このように見てみると、和親条約は澶淵の盟と

同じく、平等関係に基づく平和条約であり、権力の差を反映する一定の不公平はあるものの、両国の平和共存のための仕組みを確立したものであったといえるのである。

四 漢・匈争覇による東部ユーラシア国際システムの形成

東部ユーラシアは武帝が匈奴に対して和親から戦争に転じたこと及び西域に対して同盟結成から拡張に変化したことによって、その相対的隔離が打破され、一つのシステムになった。漢は文景の治とよばれる治世と諸侯王問題の解決によって、匈奴と決戦するための経済・政治・軍事などの体制を整えた。紀元前 133 年、漢は、関市を開いて以降匈奴が貿易を盛んに行うとともに、漢に親しくなって、漢に対する警戒心が薄らいだことを活かして、馬邑城に匈奴を待ち伏せる作戦を行った。しかし、馬邑城付近の異常に気付いた単于は一人の漢兵士を捕まえて彼から漢の計謀を知って撤退した。結果として、馬邑城事件は戦争をもたらさなかったが、和親条約による漢匈共存体制に終止符を打った。

漢匈戦争は二つの段階に分けることができる。第一段階はモンゴリアにおいて漢が匈奴に対し反撃戦から殲滅戦になった時点である。紀元前 129 年以降、漢は匈奴の何年にもわたる侵攻に対して、辺境防衛だけではなく、匈奴軍が撤退した後に大軍で匈奴に反撃した。オルドスの奪回とその地での朔方郡と五原郡の設置を境に、漢は主動的に進攻を行なって、紀元前 124 年の漠南の戦、紀元前 121 年の河西の戦と紀元前 119 年の漠北の戦を通じて、オルドスをはじめとする河西回廊までの地域を併合したため西域に進出することが可能になった。その一方、匈奴に対して圧倒的な勝利を得て、「是後匈奴遠遁、而幕南無王庭」^[61]とあるように匈奴の主力を漠南から駆逐させた。

紀元前 119 年から紀元前 105 年まで漢は匈奴と停戦したが、農耕地域の辺縁での南越・閩越・朝鮮の併合、及び西域への同盟及び拡張に焦点を置いた。秦帝国を継ぐ意志のある漢は外臣国に独立を維持することを許すはずはなく、匈奴との戦争で優位に立った後、南越・閩越・朝鮮に対する統一政策に転じて紀元前 111 年に南越を、紀元前 110 年に閩越を、紀元前 108 年に朝鮮を併合して、同年漢に臣服した西南夷と紀元前 138 年に内属した東甌を加えて、前の秦帝国の疆域を全て回復し、その地に郡県を設置したことによって、統一国家から農耕地域を統合した帝国にまでなった。結果として、農耕地域は漢の統合により、それ以前にあった小帝国群による複数の国際秩序がなくなり、一つのシステムになった。しかし、この時の農耕地域におけるシステムは、漢帝国の支配・統治により、国際システムではなく、国内システムになった。新たに併合された領土に対して、漢帝国は秦帝国と

同じく郡県を置き、人民を移住させ、道路を建設した。中央集権政策に加えて、多様性の管理、全国的交通システム、複雑な伝達システム、暴力の独占、全国を貫く統一性などの帝国標準から判断すれば^[62]、秦漢は拡張によって農耕地域を包括する帝国を築いたといえるのである。

匈奴と対抗するため月氏との同盟を目的にした張騫は第一回の西域への派遣で実質的な成果を得なかったが、それ以前には不足していた西域に対する知識及び交通情報を補完し、烏孫が国力の増加とともに軍臣単于の逝去をきっかけとして匈奴への臣服をやめたことにもとづいて、武帝に烏孫との同盟を献策した。武帝は一方で烏孫と同盟するために再び張騫を西域に派遣し、その一方で漢使の西域進出の妨害を理由として楼蘭と姑師を征伐した。元々漢と同盟する気のない烏孫は漢の楼蘭と姑師の征伐による兵威で震撼して日々漢との関係を親密化しつつあった。烏孫と漢と関係の深化に気づいた匈奴は怒って烏孫を攻撃した。紀元前 105 年、烏孫は匈奴との対抗のために漢の協力を求めて、漢公主との結婚を通じて同盟関係を結んだのだった。

その後、漢匈戦争は西域での覇権をめぐる第二段階に入った。第二段階では、漢が主導権を握った。紀元前 104 年から 4 年をかけて、漢は西域の大国の大宛を武力で降伏させた。これによって、「西域震懼、多遣使來貢獻、漢使西域者益得職」^[63]とあるように、匈奴の西域の勢力圏を破壊して、自国の勢力を西域まで拡張した。その後、漢は李広利を総司令として、匈奴に紀元前 99 年、紀元前 97 年と紀元前 90 年の三回にわたり大規模の進攻を行なった。しかし、漢の匈奴への戦争は全部失敗に終わった。第二階段の失敗について、衛青と霍去病のような能力のある将領を欠いていたり、何年にもわたる挙兵のため財源と馬が枯渇したりする漢側の事情と、準備が整い、騎兵の得意の迂回戦略を生かしたり、羌と西域国家と協力したりといった匈奴側の事情があった^[64]。紀元前 89 年、武帝は『輪台罪己詔』を発して、歴年の戦争による国内の損害を痛感して、戦争政策を止めて国力の回復に転じることを宣告した。これによって、30 年以上の漢匈争覇は一旦停止になった。

東部ユーラシアは漢匈争覇によって初めて一つのシステムになった。すなわち、匈奴が月氏を倒す前に遊牧地域と西域が相互に隔離していたように、漢が河西回廊を併呑する前には農耕地域と西域も相互に隔離されていた。河西回廊の併呑によって、匈奴による西域進出の障害が消滅したため、漢は西域諸国との相互作用が初めてできるようになった。結果として、東部ユーラシアには、農耕地域の漢、遊牧地域の匈奴及び西域諸国からなる地域的国際システムが初めて形成されたのだった。

本章のまとめを行うと、境界・国家・相互作用から東部ユーラシア国際システムの有無を説明しようとした。ユーラシア大陸の他の部分から離れた東部ユーラシアは、地理的障
碍及び古代の移動技術の低さによって相対的な完結性を有して、閉鎖的なシステムになる
条件を備え、さらに、生業と自然環境によって農耕地域・遊牧地域・西域に分かれていた。
次に、領土・人口・政府などの構成要素と独立自主的に対外政策を行える能力要素を基準
として、農耕地域での秦漢、遊牧地域での匈奴、西域での諸国、接壤地帯での前国家アク
ターが国際関係のユニットとして存在していた。最後に、東部ユーラシアは、武帝期にお
ける漢匈争覇の前には、農耕地域における複数の国際秩序、匈奴と西域における覇権、漢
と匈奴との和親条約による共存体制という三つの部分に分かれており、一つのシステムで
はなかった。武帝期における漢匈争覇を通じて、漢は河西回廊の併呑を通じて、匈奴によ
って隔離された西域と初めて交通することができた。一方、漢は農耕地域の辺縁を征服し
て、農耕地域を郡県制によって完全に帝国に取り込んだ。結果として、東部ユーラシアに
おけるユニットが軸複合的な相互作用を行うことができるようになったため、東部ユーラ
シアは最終的に一体化されたのだった。

註：

- [1] 西嶋定生「東アジア世界の形成」『中国古代国家と東アジア世界』東京大学出版会、2000年〔初出1983年〕、398-402頁
- [2] 堀敏一『東アジア世界の形成-中国と周辺国家』汲古書院、2006年、3-6頁；堀敏一『東アジア世界の歴史』講談社、2008年、17-31頁
- [3] 廣瀬憲雄『『東アジア』と『世界』の変質』歴史学研究会編『第4次 現代歴史学の成果と課題：第2巻 世界史像の再構成』績文堂出版、2017年、21-24頁
- [4] 中野聡『『東アジア』とアメリカ-広域概念をめぐる闘争-』、『歴史学研究』7号、2013年
- [5] 杉山正明『大モンゴルの世界 陸と海の巨大帝国』角川書店、1992年
- [6] Jonathan Karam Skaff: *Sui-Tang China and its Turko-Mongol Neighbors: Culture, Power and Connections, 580-800*, Oxford University Press, 2012, p.7
- [7] 李成市「東アジア論と日本史」、大津透他編『岩波講座 日本の歴史 第22巻：歴史学の現在<テーマ巻3>』岩波書店、2016年
- [8] 廣瀬憲雄『古代日本と東部ユーラシアの国際関係』勉誠出版、2018年、13-15頁
- [9] 妹尾達彦『グローバル・ヒストリー』中央大学出版部、2018年、52頁
- [10] 西嶋定生「東アジア世界の形成」398頁
- [11] 金子修一『古代東アジア世界史論考-隋唐の国際秩序と東アジア-』八木書店、2019年
- [12] 于逢春「構築中国疆域的文明板塊類型及其統合模式序説」『中国边疆史地研究』第3期、2006年
- [13] 廣瀬憲雄「東部ユーラシアと東アジア-政治圏と文化圏の設定-」『古代日本と東部ユーラシアの国際関係』6-12頁

- [14] K. J. Holsti: *International Relations: A Framework for Analysis (Fourth Edition)*, Prentice-Hall, INC., 1983, p. 28; Kenneth N. Waltz: *Theory of International Politics*, Addison-Wesley Publishing Company, 1979, p. 91; Barry Buzan and Richard Little: *International Systems in World History: Remaking the Study of International Relations*, Oxford University Press, 2000, p. 69, 101
- [15] 松井健「牧畜社会への再認識：遊牧の文化的特質についての試論—西南アジア遊牧民を中心として—」『国立民族学博物館研究報告別冊』20 卷，1999 年，494 頁
- [16] 『漢書』卷 94 上，中華書局，1964 年，3743 頁
- [17] 甌脱についていくつかの理解があるが、最も適当なのは甌脱を「辺境における防衛施設」と解釈するものである。何星亮「匈奴語“甌脱”再釈」『民族研究』第 1 期，1988 年
- [18] 『漢書』卷 94 上，3750 頁
- [19] 尚新麗「西漢人口数量変化考論」『鄭州大学学报（哲学社会科学版）』第 3 期，2003 年
- [20] 胡広起「漢代兵力論考」『歴史研究』第 3 期，1996 年
- [21] 尚新麗「西漢時期匈奴人口数量変化蠡測」『人口与経済』第 2 期，2006 年；陳序経『匈奴史稿』中国人民大学出版社，2007 年，188-190 頁
- [22] 護雅夫「北アジア・古代遊牧国家の構造」井上秀雄編『岩波講座世界歴史 6 古代 6 東アジア世界の形成 III 内陸アジア世界の形成』岩波書店，1979 年，360-375 頁
- [23] N. N. Kradin: "Nomadism, Evolution, and World-Systems: Pastoral Societies in Theories of Historical Development," *Journal of World-System Research* Vol. 8, 2002, pp.372-376; Thomas J. Barfield: "The Hsiung-nu Imperial Confederacy: Organization and Foreign Policy," *The Journal of Asian Studies* 41(1), 1981, pp. 47-48
- [24] Nicola Di Cosmo: "Ethnogenesis, Coevolution and Political Morphology of the Earliest Steppe Empire: the Xiongnu Question Revisited", in Ursula Brosseder and Bryan K. Miller eds.: *Xiongnu Archaeology: Multidisciplinary Perspectives on the First Steppe Empire in Central Asia*, Bonn Contributions to Asian Archaeology, 2011, p. 44
- [25] 王日華「国際体系与中国古代国家間関係研究」『世界経済与政治』第 12 期，2009 年，62-65 頁；前田徹「シュメールにおける地域国家の成立」『早稲田大学文学研究科紀要』第 54 巻第 4 号，2009 年，39-54 頁
- [26] 袁建平「中国早期国家時期的邦国と方国」『歴史研究』第 1 期，2013 年，37-53 頁
- [27] 宮崎市定「中国上代は封建制か都市国家か」『史林』第 33 巻第 2 号，1950 年；藤田勝久「終章 中国古代国家と地域社会」『中国古代国家と郡県社会』汲古書院，2005 年
- [28] Victoria Tin-bor Hui: *War and State Formation in Ancient China and Early Modern Europe*, Cambridge University Press, 2005, pp. 54-108;
- [29] 李開元『漢帝国の成立と劉邦集団一軍功受益階層の研究』汲古書院，2000 年，84 頁
- [30] 松島隆真「陳渉から劉邦へ—秦末楚漢の国際秩序と正統性の原理」『漢帝国の成立』京都大学学術出版会，2018 年〔初出 2014 年〕，155-156 頁
- [31] 李開元『漢帝国の成立と劉邦集団一軍功受益階層の研究』286-289 頁
- [32] 栗原朋信「文献にあらわれたる秦漢璽印の研究」『秦漢史の研究』吉川弘文館，1960 年，123-284 頁；栗原朋信「漢帝国と周辺諸民族」樺山紘一等編『岩波講座 世界歴史 4：古代 4』岩波書店，1970 年，464-485 頁
- [33] 『漢書』卷 95，3848 頁
- [34] 『漢書』卷 95，3864 頁
- [35] 『漢書』卷 95，3853 頁
- [36] 『漢書』卷 35，1910 頁
- [37] 『史記』卷 114，中華書局，1963 年，2980 頁
- [38] 『史記』卷 113，2969 頁
- [39] 『漢書』卷 95，3839 頁
- [40] 『漢書』卷 95，3839 頁
- [41] 吉開将人「歴史世界としての嶺南・北部ベトナム—その可能性と課題—」『東南アジア—歴史と文化—』第 31 号，2002 年，81-85 頁；川手翔生「南越の統治体制と漢代の珠崖郡放棄」『史観』第 174 号，2016 年，47-54 頁

- [42] 『漢書』卷95, 3864 頁
- [43] 『漢書』卷95, 3864 頁
- [44] 『漢書』卷95, 3864 頁
- [45] 廣瀬憲雄『古代日本外交史-東部ユーラシアの視点から読み直す』講談社, 2014 年, 38 頁
- [46] 高榮「月氏、烏孫和匈奴在河西的活動」『西北民族研究』2004 年, 第3 期, 23-29 頁
- [47] 『漢書』卷96 上, 3872 頁
- [48] 王子今「論匈奴僮僕都尉“領西域”“賦稅諸國”」『石家莊學院學報』第4 期, 2012 年, 21-24 頁
- [49] 『漢書』卷96 上, 3896 頁
- [50] David A. Lake: *Hierarchy in International Relations*, Cornell University Press, 2011, 45-62
- [51] Sophia-Karin Psarras: “Han and Xiongnu: A Reexamination of Cultural and Political Relations (I),” *Monumenta Serica* 51(1), 2003, pp. 131-143
- [52] 『漢書』卷94 上, 3754 頁
- [53] 『漢書』卷94 上, 3762 頁
- [54] 紉山明『漢帝國と辺境社会-長城の風景』中央公論新社, 1999 年; 張文「論古代中国的国家觀与天下觀-辺境與边界形成的歷史坐標」『中国辺疆史地研究』第3 期, 2007 年
- [55] 李雲泉『朝貢制度史論-中国古代对外關係体制研究』新華出版社, 2004 年, 15 頁; 時殷弘「武装的中国: 千年戰略傳統及其外交意蘊」『世界經濟与政治』第6 期, 2001 年, 11 頁
- [56] 杉山正明『遊牧民から見た世界史-民族も国境もこえて』日本經濟新聞者, 2003 年, 146-147 頁
- [57] 于逢春「論“大漠遊牧文明板塊”在中国疆域最終底定過程中的地位」『內蒙古師範大學學報(哲学社会科学版)』第3 期, 2010 年, 78-80 頁
- [58] 杉山正明『中国の歴史(08) 疾駆する草原の征服者: 遼 西夏 金 元』講談社, 2005 年, 209-211 頁
- [59] 古松崇志「契丹・宋間の澶淵体制における国境」『史林』第90 卷第1 号, 2007 年, 31-35 頁
- [60] 『漢書』卷94 上, 3765 頁
- [61] 『漢書』卷94 上, 3770 頁
- [62] Thomas J. Barfield: "The Shadow Empires: Imperial State Formation along the Chinese-Nomad Frontier," in Susan E. Alcock, Terence N. D'Altroy, Kathleen D. Morrison and Carla M. Sinopoli, eds.: *Empires: Perspectives from Archaeology and History*, Cambridge University Press, 2001, pp. 29-33
- [63] 『漢書』卷96 上, 3873 頁
- [64] 陳勝武「漢武帝時期漢匈戰爭双方戰略運用比較」『軍事歷史研究』第2 期, 2011 年, 111-113 頁

第三章 東部ユーラシア国際システムにおける国家間相互作用：漢と匈奴との争覇

紀元前 121 年、河西の戦いに勝った漢は河西回廊を奪取し、投降した匈奴の渾邪・休屠二王の領地に五つの属国を置き、その後、河西四郡の設置を通じて、匈奴によって遮断された西域への通路を開いた。これを境にして、東部ユーラシアは、農耕地域・遊牧地域・西域(オアシス地域)を包含する一つの国際システムとして最終的に成立したことになる。その後、東部ユーラシアにおける国際システムは、漢と匈奴が漠南で直接対抗しながら、西域をめぐる覇権を争う相互作用の中で継続し、紀元 91 年の北匈奴滅亡による構造的変化の結果として、漢匈二極から漢による単極になった。しかし、北匈奴滅亡の後、東部ユーラシア国際システムを維持させる重任が漢のみに置かれることとなった。システムの各地域を繋げる漢の能力の喪失とともに、東部ユーラシアでは、順次西域、遊牧地域、農耕地域の離脱によって、国際システムが解体した。

第一節 漢と匈奴との争覇による対抗時代

前章で述べたように、武帝は、長年の休養を通じて国力を回復し、諸侯王の問題の解決のため国内の団結を確保したことを背景に、対匈奴政策を和親から戦争に転じて、紀元前 133 年に関市で貿易を行う匈奴の警戒心の薄さを利用して、関市の付近の馬邑城に匈奴を待ち伏せる作戦を展開した。これを境にして、漢と匈奴は和親協約による平和関係を絶って対抗関係に入った。

一 武帝期における漢匈争覇

武帝期の漢匈争覇は二つの段階に分けられ、第一段階が漠南での漢と匈奴との直接的軍事対決で、第二階段が西域と漠北に対する漢の攻勢である。二つの階段には、漢と匈奴との対外政策の重心の相違及び外交を通じる緩和のため、一時的な共存状態が現れた。

第一段階では、匈奴と和親を絶った漢は匈奴を主動的に攻撃する経験を欠いていたため、匈奴への進攻のために一定の過渡期を必要とし^[1]、馬邑事件の後に匈奴に攻勢を行わず、代わりに、匈奴は先に攻勢を行っていった。紀元前 129 年から、匈奴は毎年連続して漢に侵攻を加えていた。この時、漢は防御-反撃策をとって、匈奴軍を撃退させた後で漠南に反

撃した。匈奴への反撃戦の成果として、紀元前 127 年に河南の戦いを通じて、河南を奪回し、そこに設置した朔方郡と五原郡を拠点として、漠南に対する攻勢の準備を整えた。一方、紀元前 126 年、軍臣単于が死んで、彼の弟が伊稚斜単于になった。これは冒頓単于以降、初回の兄弟相続であったため、匈奴に混乱をもたらし、軍臣単于の太子の単が漢に投降するに至った。したがって、伊稚斜単于の即位を匈奴の衰弱の始めとも考えられる^[2]。匈奴における内訌による不安定の状態を機に、漢は対匈奴作戦に舵を切って殲滅戦を展開し、紀元前 124 年の漠南の戦いと紀元前 121 年の河西の戦いを通じてオルドスと河西回廊を奪取し、その上、紀元前 119 年の漠北の戦いに勝って、「是後匈奴遠遁、而幕南無王庭」^[3]とあるように、漠南から匈奴を駆逐し、北辺に対する匈奴の軍事的脅威を排除した。

漢は匈奴との戦争の間に、勝利を確保するために二つの政策をとった。まず、漢は、新たに併呑した辺境の地域に郡県を設置し、そこに屯田と移民を通じて、対匈奴作戦の防衛線をいっそう前方に移すという辺郡建設策をとった。ここには河西に対する経営を例として漢の辺郡建設を説明する。紀元前 121 年の河西の戦いに負けた後、河西回廊にいる渾邪王・休屠王は伊稚斜単于に戦敗の責任を咎められたため、懲罰を恐れ、漢への投降を謀った。漢は李息を派遣して、後悔した休屠王を殺してその部衆を率いて投降して来た渾邪王を迎えて、河西回廊を併呑した。「渾邪王率衆降漢、而金城・河西並南山至塩沢、空無匈奴。匈奴時有所到、而希矣」^[4]とあるように、匈奴の勢力は渾邪王の投降とともに河西回廊から消えた。その後、漢は河西回廊を新たな辺郡として建設を行った。まず、漢は酒泉・武威・張掖・敦煌という河西四郡を設置していた。しかし、河西四郡は、同時に設置されたはずではなく、

渾邪王以衆降数万、開河西酒泉之地、西方益少胡寇^[5]。

初置酒泉郡、後稍發徙民充實之、分置武威・張掖・敦煌、列四郡、據兩關焉^[6]。

とあるように、まず、渾邪王・休屠王の旧地に酒泉を設置して、その後、武威・張掖・敦煌を次第に分置した^[7]。一方、漢は対匈奴作戦の第一防衛線と内長城との間における中間地帯に五つの属国を設置し、渾邪王及びその部衆をそこに配置し、軍事防衛の任務を任せた^[8]。郡県設置と同時に、漢は河西回廊の北には令居の西から酒泉まで、酒泉の西から玉門関まで、玉門関の西から塩沢まで、居延沢という四つの地帯に辺塞を築いて、これらの辺塞を繋げることを通じて長城のような弧形の防壁を形成させた^[9]。政治上の郡県設置及び軍事上の辺塞建築の後、漢は河西に屯田と移民を行なって、経済上での自給自足及び軍事上での防衛・攻撃能力を実現させた。

一方、匈奴は漢に進攻するにあたって、東での自国に隷属していた烏桓と西での羌から協力を得て、東西から漢を挟み撃つ攻勢ができた。そのため、匈奴に勝った後、漢は、烏桓・羌と匈奴の連携を中断しようと努力した。先に述べた河西四郡の設置は、単に匈奴に対する防衛線を形成させたのみならず、

初開河西、列置四郡、通道玉門、隔絶羌胡、使南北不得交關^[10]。

匈奴既失甘泉、又使休屠・渾邪王等居涼州之地。二王後以地降漢、漢置張掖・酒泉・敦煌・武威郡。其後又置金城郡、謂之河西五郡。漢改周之雍州為涼州、蓋以地處西方、常寒涼也。地勢西北邪出、在南山之間、南隔西羌、西通西域、于時号为断匈奴右臂^[11]。とあるように、匈奴と羌との交通を切断した。一方、漢は漠北の戦いの後、烏桓の一部の部族を東北の辺郡（上谷・漁陽・右北平・遼西・遼東）の外に移住させ、匈奴の動静を偵察する任務を任せ、烏桓の管理のために護烏桓校尉を設置した。こうして、漢は、「以断匈奴之左臂」^[12]とあるように烏桓と匈奴との連携を中断させたのみならず、以夷制夷策をとって烏桓に匈奴への牽制の役割を形成させて、対匈奴作戦の第一防衛線の外に軍事的協力を確保した。

一方、連続に敗戦を喫し、国内に単于継承による内訌を收拾したばかりの匈奴は、伊稚斜単于が漢からの進攻を避けるために、漢に使者を派遣し和親を請うた。匈奴の和親要請に対して、二つの対立の意見に分かれた。和親派の代表者として、博士の狄山は戦争を災いとみなし、漢の財政の困難を理由にし、戦争より和親すべきだと主張した。もう一方、臣服派の代表者として、丞相長史の任敞は、「匈奴新困、宜使為外臣、朝請於辺」^[13]とあるように、匈奴を外臣にしようとした。武帝は、表面上に狄山の意見に同意したが、彼を辺境の県に赴任させて匈奴の手を借りて殺した。こうして、漢の中では和親派が震懼して、和親の声が次第に消滅していき、代わりに、臣服派の意見が主流となった。換言すれば、漢には、毎年連続して軍事的勝利を通じて、漢初での匈奴に対する恐怖感を消して、匈奴を臣服させることに自信を持ってきた。そのため、漢は、匈奴の和親要請に応じて、使者を派遣し、匈奴の臣服を和親の条件にする返事を伝えた。このような返事に対して、伊稚斜は激怒し、使者を抑留した。伊稚斜が死んだ後、烏維単于是かれの和親政策を継いだため、漢と匈奴は和親をめぐる外交を行った。しかし、伊稚斜とは異なり、烏維単于是漢の臣服の要求に対して、一方「非故約。故約、漢常遣翁主、給繒絮食物有品、以和親、而匈奴亦不復擾辺。今乃欲反古、令吾太子為質、無幾矣」^[14]とあるように前漢初期の和親約と違うために拒否し、もう一方「吾為遣其太子入質於漢、以求和親」^[15]とあるように漢を

宥和して同意した。匈奴の態度の反復からみると、この時、匈奴は、漢の要求をよく把握し、外交上に宥和政策で漢の敵意を緩和し漢からの攻撃を回避することを通じて、国力を回復することを目指していた。そのため、漢と匈奴は、互いに何回も使者を派遣したが、最後まで合意を得なかった。

しかし、漢が匈奴の外交手段に騙されるはずではなく、漢の匈奴への攻勢が中止されたのはどのような理由によるものだろうか。まず、財政的側面からみると、漢は、大勝利を収めたとは言え、

漢土物故者亦万数、漢馬死者十余万匹。匈奴雖病、遠去、而漢馬亦少、無以復往^[16]。

是後、外事四夷、内興功利、役費並興、而民去本^[17]。

とあるように、文景時代に蓄積された資源を何年にもわたる戦争の中にほとんど消耗して、人を戦争に動員し農業生産を停滞させたため、北へ移した匈奴に長距離を移動して大規模な戦役を行うことが不可能になった。また、漠北の戦の後、「漢方復收士馬、会票騎將軍去病死、於是漢久不北擊胡」^[18]とあるように、対匈奴作戦の指揮官の霍去病と衛青が相次いで亡くなって、その後、彼らを継ぐ将軍が輩出しなかったことも、匈奴に対する戦争にブレーキをかけることに一定の影響を与えた。^[19]しかし、圧倒的な優位性を得た漢にとって、財政の問題は貨幣の改鑄・塩鉄の専売・算緡の徴収などの経済改革を通じて、完全に解決したとは言えないが、支障のない程になった。さらに、名将の代わりに、対匈奴戦争に育成・鍛錬されていた若い将領-例えば大宛征伐に成功した李広利-もいたから、対外に積極的な政策をとる人材がいなかったとは言えない。

実際に、この時、漢はその対外政策の中心を農耕地域の征服と西域への進出に置き、したがって、脅威を与えぬ匈奴に対する政策の重要性が低下した。第四章で詳しく説明するように、漢は匈奴による軍事的脅威を消した後、秦帝国から独立した地域（東北での朝鮮、東南での南越・東越、西南での東南夷）に対して、征服を全力的で展開した。結果として、前112年から前108年までの五年間、漢は順次に南越、東越、東南夷、朝鮮を統合し、その地に郡県を設置した結果として、農耕地域を秦王朝より幅広く帝国に統合することに成功した。

一方、漢は匈奴の「右臂」と呼ばれる西域諸国に目を向けた。前章で述べたように、漢は月氏と連携して匈奴と対抗するため、張騫を西域へ派遣した。張騫の第一次西域遠征は、月氏との連携を実現できなかったが、西域に対する知識及び交通情報を補完した。一方、河西回廊に設置した河西四郡を拠点に、そこに配置した辺塞を繋げて形成された漢代の長

城及び長城付近の烽燧を進攻の手段とする^[20]準備を整えた漢は西域進出を正式に對外戦略に入れた。

漢の西域攻略は紀元前 120 年に、烏孫との連携のための張騫の第二次西域遠征から始まった。河西の戦いに合流に遅れて李広の軍に酷い死傷を被らせたため処した斬刑を贖って庶民になった張騫は、

臣居匈奴中、聞烏孫王号昆莫。昆莫父難兜靡本与大月氏俱在祁連、焞煌間、小国也。大月氏攻殺難兜靡、奪其地、人民亡走匈奴。子昆莫新生、傳父布就翎侯抱亡置草中、為求食、還、見狼乳之、又烏銜肉翔其旁、以為神、遂持歸匈奴、单于愛養之。及壯、以其父民衆与昆莫、使將兵、数有功。時、月氏已為匈奴所破、西擊塞王。塞王南走遠徙、月氏居其地。昆莫既健、自請单于報父怨、遂西攻破大月氏。大月氏復西走、徙大夏地。昆莫略其衆、因留居、兵稍彊、会单于死、不肯復朝事匈奴。匈奴遣兵擊之、不勝、益以為神而遠之。今单于新困於漢、而昆莫地空。蛮夷恋故地、又貪漢物、誠以此時厚賂烏孫、招以東居故地、漢遣公主為夫人、結昆弟、其勢宜聽、則是断匈奴右臂也。既連烏孫、自其西大夏之属皆可招來而為外臣^[21]。

とあるように、匈奴に従属した烏孫が軍臣单于の死をきっかけに従属をやめようとすることを背景に、漢が利をもって烏孫と同盟して、匈奴の「右臂」をきるという策略を提示した。張騫の策略は実際に同盟分断戦略（Wedge Strategy）の再同盟（realignment）で、匈奴からの干渉を拒否しようとした烏孫を楔（Wedge）として西域における匈奴の同盟網に打ち込んで、その同盟網を内部から破壊させた。しかし、一般的に言えば、同盟分断戦略（Wedge Strategy）は同盟分化（disalignment）、同盟阻止（prealignment）、脱同盟（dealignment）、再同盟にわかれて、その中、最も難しいのが目標国を敵対同盟から友好同盟になさせる再同盟である。再同盟の成功には、多くかつ信用できる報奨及び高価な戦略約束を目標国に与えるのみならず、その前提が目標国と敵対同盟との間に深刻な紛争をもたらした。^[22]しかし、張騫の第二次西域遠征の時、烏孫は匈奴の遮断により漢のことができず、たとえ張騫が幣帛を贈り物として与えても、漢の実力、特に軍事力を判断できず、軽率に匈奴を裏切って漢と手を組むのは不可能であっただろう。したがって、漢は最初から最も難しい再同盟を烏孫に試みたが、当然ながら、烏孫が漢と連携することに躊躇したため、張騫の第二次西域遠征の目的は実現されなかったのであった。

一方、張騫は六年間で、烏孫の他にパミールにある大宛・康居・月氏・大夏までを訪れ、西域北路に対してさらなる情報を手に入れた。その後、「後歳余、其所遣副使通大夏之属者

皆頗与其人俱來、於是西北国始通於漢矣」^[23]とあるように、西域諸国は今回の遣使を通じて漢の存在及び強さを知って、漢との外交関係を始めることになった。そして、漢でも、「自騫開外国道以尊貴、其吏士争上書言外国奇怪利害、求使」^[24]とあるように、自ら西域に使節としておもむこうと申し出る吏士が途切れなく、西域ブームが現れた。だが、西域に派遣された吏士は、さまざまな人間が入り混じり、漢の威光を借りて奪略と窃盗などの悪事を行い、西域諸国で反感を招いた。そのため、西域諸国は食糧を供給しなかったり、匈奴と協力して使者を強奪したりして漢使を苦しめた。その中で、天山北路との天山南路にそれぞれの東端に位置した車師と楼蘭は最も障害を与えた。武帝は、「使者争言外国利害、皆有城邑、兵弱易撃」という使者による情報を信じて、紀元前 109 年に車師と楼蘭に軍を發した。翌年、車師と楼蘭が漢に撃破された。

これによって、漢は、「因暴兵威以動烏孫・大宛之属」^[25]とあるように、軍事力で西域の大国にショックを与えて權威を樹立しただけではなく、河西四郡と繋がる要衝としての車師と楼蘭を陥落させ、「酒泉列亭鄣至玉門矣」^[26]とあるように边防工事をさらに西に推進したことを通じて、西域進出の拠点を確保した。結果として、漢は張騫の第二次西域遠征と車師・楼蘭征伐を通じて、天山北路への進出を次第に安定させて、漢の影響力をも漢の使者と軍隊とともに天山北路の沿線の諸国に及ぼし、匈奴の西域支配にある程度の衝撃を与えた。

匈奴は漢に和親政策を取ったとは言え、漢の西域攻略を黙って放任するはずはないが、第二次西域遠征の終わった翌年に、羌に使者を派遣して共に漢を攻撃することに合意を得た。そして、紀元前 112 年、匈奴は、南越と隣接する羌を通じて、漢が南越征服戦を行い、北・西辺境での軍事力の不足ことを知って、西から漢に進攻する十万の羌軍とともに、北から漢に進行していった。しかし、漢は匈奴と羌との攻勢に対して速やかに反撃を行い、紀元前 111 年に羌軍を撃破し湟中から羌を駆逐して、匈奴に反撃した後、張掖・敦煌郡を設置し、そこに民衆を移住させて、沿線に防衛工事としての障・塞・亭・燧を築いて、結果として、「隔絶羌胡、使南北不得交関」^[27]とあるように匈奴と羌との交通を遮断した。

羌の協力をもって漢に攻撃することに失敗した匈奴は西域に向かって、漢に負けて臣服した楼蘭に軍を發して質子を強要した。この時、楼蘭は漢に質子を送ったが、歴史上には匈奴に臣服したり、地理上には匈奴に近かったりする理由で、新匈奴的態度をとったものと思われる。したがって、匈奴は天山南路の入り口に位置する楼蘭を臣服させたことを通

じて漢が天山南路への進出することを妨げていた。一方、天山北路に対して、匈奴は、漢と接近していった烏孫を攻撃しようとした。この時、再同盟の前提としての目標国と敵対同盟との間での深刻な紛争が現れ、漢と烏孫との同盟が可能になった。紀元前 105 年、漢は、匈奴の攻撃を恐れた烏孫からの要請に応じて、烏孫が漢の聘礼要求を果たした後、公主を昆莫に嫁して、烏孫と昆弟になり、同盟を結んだ。一方、烏孫が漢と同盟を要請したことは、単に匈奴の軍事脅威のみならず、国内の分裂にも起因した。その時、烏孫は

初、昆莫有十余子、中子大祿彊、善將、將衆万余騎別居。大祿兄太子、太子有子曰岑陁。太子蚤死、謂昆莫曰：「必以岑陁為太子。」昆莫哀許之。大祿怒、乃收其昆弟、將衆畔、謀攻岑陁。昆莫与岑陁万余騎、令別居、昆莫亦自有万余騎以自備。国分為三、大総羈属昆莫^[28]。

とあるように国王の昆莫、昆莫の中子の大祿及び昆莫の孫の岑陁に分かれて、その中で大祿の勢力が最も強かった。昆莫は岑陁を後継者としたが、その後、岑陁に公主を嫁したことから見ると、漢を大祿の牽制力として岑陁の順調な即位を目指したのだった^[29]。一方、漢の協力を得た烏孫に対して、匈奴は戦争策をやめて烏孫に公主を嫁したことを通じて、烏孫のさらなる親漢化から匈奴の味方に引き戻そうとした。結局、大宛征伐戦に烏孫が

初、貳師後行、天子使使告烏孫大發兵擊宛。烏孫發二千騎往、持兩端、不肯前^[30]。

とあるように漢の出兵要請に応じたが実際に戦争に参加しなかったことから見ると、烏孫は完全に漢に偏らず、匈奴に距離をとり自主性を得て、漢と匈奴との間に一定のバランスを保った^[31]。

烏維単于の治世には、漢に幾らかの小規模な奇襲を与えて、西域に武力で漢の影響を抑制しても、基本的に和親政策をとって、漢と平和的に共存していた。烏孫に公主を嫁した同年、烏維単于が死んで、彼の子である詹師廬は、兒単于になって、対漢政策を抜本的に変え、「自是後、単于益西北。左方兵直雲中、右方兵直酒泉・敦煌」^[32]とあるように、匈奴の主力を漠南と河西回廊へ移転して漢の北と西北の辺境に軍事的脅威を与えた。これを境に、15 年の平和共存が終わって、漢と匈奴は対抗と戦争に戻った。氣勢激しい兒単于に対して、紀元前 104 年、漢は離間策をとって、同時に二人の使者にそれぞれ単于と右賢王を吊わせて、兒単于に対する不満を激化させ、匈奴の分裂を図った。また、同年の冬に、匈奴は大雨と雪害にあつて家畜が沢山なくなった。結果として、兒単于に対する不満と不安が生まれ、左大都尉は秘密に漢に使者を派遣し、兒単于を殺して漢に投降しよと伝えた。兒単于は左大都尉が漢に投降し迎えられたことに乗じて、漢軍を包圍して滅ぼし、その後、

左大都尉のために築いた受降城を占領しようとしたが、失敗した。翌年に、児单于是自ら軍隊を率いて受降城を攻略する途中で病死した。ところで、匈奴が前 119 年以降初めて 8 万の大軍を派遣したのは国力の回復を背景に漢と覇権を争う能力を持つことを告げた。再び脅威を与える匈奴に対して、漢は辺境に防衛工事を築き、辺境での屯田・駐軍を強化した。紀元前 102 年、新たに即位した句黎湖单于是漢の北と西北の辺境に寇掠を加えたが、大した成果を収めなかった。

漢は匈奴と対抗のために西域に対する攻略を中止したりはしなかった。紀元前 104 年、漢が大宛に使者を遣わして善馬を買おうと提案したが、大宛は姑師・楼蘭と同じく、道のりの遠いため漢が自国を攻撃することは不可能だと考え、漢使を殺して、その使節団の財宝を奪った。天山北路の終点の外に位置する大宛が姑師・楼蘭より漢から遥かに遠く、さらに漢が正式に西域を攻略してきたとは言え、この時の天山北路がまだ匈奴の影響を受けていたため、漢が大宛を攻撃する際に、途上で天山北路諸国から補給を得る可能性も低かった。このように客観的な要素から見ると、大宛の判断が合理的なのだった。しかし、西域攻略に対する漢の決心という主観的な要素が見逃された。紀元前 104 年から紀元前 102 年までの李広利の二回の大宛征伐を通じて、漢は敗戦が避けられないと判断して王を殺した大宛貴人の投降を受けて、前に漢使を礼待した貴人・昧蔡を大宛王として擁立し、大宛と盟を結んだ後にかえって、大宛の王城には入らなかった。紀元前 101 年、凱旋していた漢軍の経由した西域諸国は「皆使其子弟從入貢獻、見天子、因為質焉」^[33]とあるように、自ら漢に朝貢・納質をした。翌年、大宛貴人は昧蔡に漢からの攻撃の罪を課して、彼を殺して、前の王の弟である蟬封を擁立し、漢に質子を遣わせた。今回、漢は寛大になって、使者を派遣し、再び蟬封と約を結んだ。この後、「西域震懼、多遣使來貢獻、漢使西域者益得職」^[34]とあるように、西域諸国は二回の大宛征伐に現れた漢の長距離的な機動力・莫大な軍事力・西域攻略に対する決意に驚いて、漢を重んじてきた。

しかし、これは西域諸国が匈奴を裏切って漢と連合するとは意味しなかった。たとえ漢と同盟関係を結んだ烏孫は、漢からの軍事支援に同意したが、実際に「烏孫發二千騎往、持兩端、不肯前」^[35]とあるように傍観して参戦しなかった。さらに、西域の小国は、漢に朝貢・納質しながらも、匈奴に臣服せざるをえなかった。李広利が撤退の時に龜茲を通過して、龜茲に送られた杆彌の質子である頼丹を発見し、龜茲王を責めて頼丹を連れて帰った。

「外国皆臣屬於漢、龜茲何以得受杆彌質」^[36]との龜茲王に対する訓辞からみると、漢は従属国の間に納質を許さない。同じ理由で、楼蘭が匈奴に納質したことに気がついた任文は

楼蘭王を捕らえた。楼蘭王は「小国在大国間、不兩属無以自安。願徙国入居漢地」^[37]と弁解した。漢は彼の弁解に納得し、彼を帰した。前 92 年、匈奴に使わせた質子・安帰は楼蘭王になった後、匈奴に離間され、漢使への補給の重さと漢使による圧迫を痛感して、漢使を遮って殺した。これから見ると、西域諸国はたとえ納質までを行うように漢を重んじながらも、依然として匈奴の勢力圏にあったことが明白なのである。言い換えると、漢は西域にある程度の影響力を形成できたが、伝統的な匈奴の影響を排除することができなかった。

児单于と句黎湖单于との二代に渡って漢に対する軍事行動について成功を収められず、そして、漢が大宛を征服した後にその対外政策の中心を再び匈奴に置いたことに対して、紀元前 101 年即位した且鞮侯单于是対漢政策に舵を取って、前に抑留した漢使を帰して、「我兒子、安敢望漢天子！漢天子、我丈人行」^[38]とあるように従順な言葉を通じて漢に和親を請うた。漢は匈奴の善意に応じて、蘇武を使者として派遣し单于に賂遺した。だが、この時、单于是急に態度を変えて傲慢になった。

態度が反復していた匈奴に対して忍耐が尽きるか、大宛征伐の勝利によって軍事的な自信が生まれたため、漢は匈奴に対して大規模な攻勢を再開し、大宛を攻め落とした李広利を総司令として、紀元前 99 年、紀元前 97 年、紀元前 90 年の三回にわたり匈奴征伐を行なった。しかし、霍去病・衛青のように見事な勝利を収めたのとは逆に、李広利は敗れても戦い続けて、最後に匈奴に捕われて投降した。第二階段での対匈奴戦争の失敗は、表面上で、霍去病・衛青のように有能な将領が足りなかったり、何年にもわたる挙兵による財源と馬が枯渇していたり、巫蠱の禍が士気を損じたりすることによった。だが、実際には、対匈奴作戦政策と漢の対外拡張戦略にある問題が致命的なのである。李広利は基本的に漠北の戦を参考にし、匈奴と大決戦を目指した。この時、匈奴の主力が漠北の戦と比べるとさらに北に布陣したため、漢は匈奴と決戦を求めさらに北に進軍しなければならなかった。だが、長距離的な進軍にともなう補給は、武帝初期の文景時期に蓄積された資源で確保されたが、第二階段にはその戦場が匈奴の国内だったため距離が長かったり、軍事規模が膨らんだり、何年にもわたる拡張によって財政が崩壊の寸前になったりすることで、確保することが不可能になった。さらに、武帝初期には、匈奴に対する偵察が適切に行われたため、戦争のための情報が完璧と言えなくとも十分だった。この時、匈奴に対して戦争が稀になって、漢の偵察が基本的に辺境の防衛工事をめぐって行われたため、匈奴と戦争のための情報は深刻に不足していた。代わりに、匈奴は、前の失敗に教訓を学んで、騎兵の機

動力を借りて迂回戦略を展開し、漢軍の不注意の時に致命的な攻撃を与えた。^[39]さらに、この時、漢の対外拡張は、単に匈奴に集中せず、西域諸国にも及んだ。李広利の第一回と第三回の匈奴攻撃には、漢は同時に車師に出兵した。もちろん車師出兵は、匈奴が車師を通じて西から漢軍を北の軍隊と挟撃することへの対抗策なのだった。さらに、毎回車師出兵に楼蘭などの天山南路の国からの軍事協力を得たとは言え、両面作戦のため軍事力が分散され、主力戦を行った匈奴に勝つことが困難になって、代わりに、車師が親匈奴だったので、匈奴が車師と協力して漢の作戦線を切断することが容易になった^[40]。

匈奴は勝利を収めるとすぐ漢に使者を派遣して、「南有大漢、北有強胡。胡者、天之驕子也、不為小禮以自煩。今欲与漢闔大関、取漢女為妻、歲給遺我麋酒万石、稷米五千斛、雜繒万匹、它如故約、則辺不相盜矣」^[41]とあるように、前漢初年の和親約を復活させ、平和関係を結ぼうと提案した。ここの「胡者、天之驕子也」ということから見ると、匈奴は漢の進攻を撃退した後、再び前漢初期の自信を回復した。だが、第一段階の漢匈争覇の勝利を得た後、漢は、和親の意味を、漢初のような屈辱的な宥和政策から、「以单于太子為質於漢」^[42]とあるように匈奴が質子を送ることによる漢への臣服に変えたため、前漢初年の和親約の復活を当然のように拒否した。

惨烈な失敗をうけた武帝は、紀元前 89 年に桑弘羊などが西域攻略のために輪台に屯田を設けようとした提言をきっかけに、『輪台罪己詔』を発して、対匈奴作戦の失敗を、占いの関係、ロジスティクス問題及び匈奴の情報把握の適切性などに見出し、国家戦略を対外拡張から対内休養・軍事行動中止に転じた。これによって、漢の西域攻略は中止したが、武帝の 52 年にわたる事業の成果が烏有に帰するわけではない。もちろん、漢が西域にある作戦線を後退させた後、匈奴は速やかにそれ以前に失っていた勢力圏を回復した。紀元前 87 年、匈奴は紀元前 90 年に漢に屈服した車師に四千の騎兵を屯田させた。一方、匈奴は、漢の三回の攻撃を撃退して強勢になっても、「漢兵深入窮追二十余年、匈奴孕重墮殯、罷極苦之」^[43]とあるように、財政上と人力上の大きな損失を被ったり、漢の軍事力の強さに対する憂慮から完全に抜け出せなかったり、单于位をめぐる内訌が生まれたりしたことを理由として、漢に大規模な攻勢を展開させる能力がなかった。結果として、漢と匈奴の関係は、その舞台が再び戦場から外交に移って、第二次共存状態に入った。

二 昭・宣帝期での漢匈争覇

『輪台罪己詔』を境にして、漢が拡張政策を放棄し防衛政策に転じて、武帝の子の昭帝

はこの対外政策を悉く継承した。一方、紀元前 85 年、壺衍鞬単于が即位する時、匈奴は、国力の衰弱及び国内の内訌に陥って、漢がこれを機に攻撃を展開することを懸念し、漢との関係修復を行った。紀元前 81 年、抑留した漢使の釈放を好意として漢に使者を派遣し、和親を請うた。だが、壺衍鞬単于は即位以降、幾つかの小規模な侵入-紀元前 83 年の代郡への侵入、紀元前 80 年の辺寇、紀元前 78 年の張掖・五原への侵入-を行った。漢は防衛工事の建築、辺境への増兵などをつうじて匈奴の侵入を十分に用意して、大した損失を被らなかったが、匈奴の和親の誠意を疑った。一方、長年で休養生息していた漢は昭帝の末期に匈奴の侵入に対して反撃・追撃をも行って一定の戦果を手に入れた。紀元前 80 年、匈奴の二万の騎兵での辺寇を追撃する時に、甌脱王を捕らえて、その領地に軍隊を駐屯させた。紀元前 78 年、張掖、五原に侵入した匈奴を撃破して、漢の防衛工事によって匈奴が再び侵攻しようとする闘志を消滅させた。国力を回復した漢に対して、匈奴は、単于の弟の左谷蠡王が漢の使者を説いて、彼らに和親の意志を漢に伝えさせた一方、漢に対する略奪と窃盗を中止し、漢使を厚遇していた。匈奴からの言行に平和の可能性を感じた漢も匈奴を羈縻していた。このように、漢と匈奴は互いに使者を通じて好意を言行で伝えていた結果として、再び共存状態になっていた。

匈奴と共存していたと同時に、漢は実力の回復とともに、昭帝末年から漢は西域攻略を再開した。紀元前 77 年、漢は質子の杆彌太子・頼丹を校尉將軍として輪台屯田策を行って、輪台と隣接する渠犂にまで拡張しようとした。一方、漢は以前に匈奴の質子として派遣した楼蘭王を刺殺して、漢に亡命した楼蘭の尉屠耆を擁立して、楼蘭を鄯善に改名した。さらに、尉屠耆の請求に応じて、漢は伊循城に屯田して、都尉としての伊循官を設置した。結局、漢匈の共存状態の期間に、漢は河西からパミールまでの西域国家と外交関係を維持しながら、天山南路北道を中心に西域攻略に成功した。

漢の西域攻略で危機感を感じた匈奴は漢と烏孫との同盟を解体させるため、紀元前 74 年から、漢公主の俘虜を目的に烏孫に攻撃を始めた。匈奴の烏孫征伐は以下の理由によると考えられる。漢は烏孫との同盟関係を基礎に天山北路の通過を確保しながら、烏孫との連携によって匈奴の天山北路での同盟網を突破する可能性がある。匈奴から見ると、自国の影響力を最も強く受けていた天山北路を失ったら、ドミノ効果が働いて、天山南路北道と南道も次第に自国の勢力圏から退いていく。漢と烏孫との同盟関係、及び烏孫に対する漢の不攻撃の約束によって、漢によるその保証として、漢公主が必要不可欠な存在である^[44]。もし漢公主が匈奴に俘虜されるようなことがあれば、漢と烏孫との同盟関係には漢の

保証がなくなり、烏孫が漢の信頼を失う可能性が高いため、機能に不全が生じることになる。一方、漢の堅固の防衛線と比べると、烏孫をより撃破しやすい対象とみなすため、匈奴は烏孫を撃破することに自国の実力を誇示し、漢との交渉に優位性を得ることをも目指したかもしれない^[45]。

烏孫を重要な同盟相手とみなしたため、漢は烏孫の援助の要求を許諾し、紀元前 72 年に十五万の騎兵を五名の将軍に率いさせ、常恵には烏孫の五万の騎兵を監護させて、匈奴に出征した。漢軍は大した勝利を収めなかった一方、常恵と烏孫軍は右谷蠡王庭まで進軍して、俘虜と畜産を沢山得た。その冬、匈奴が烏孫に報復するために攻撃・奪略した後、撤退時に大雪にあって一割の軍隊しか帰らなかった。この機会に乗じて、丁零は北から、烏桓は東から、烏孫は西から匈奴を攻撃した。さらに、厳しい気候のため、匈奴では食糧が不足し、三割の人民と五割の畜産が餓死した。結果として、「諸国羈属者皆瓦解、攻盜不能理」^[46]とあるように、匈奴の勢力圏は崩壊寸前になった。連続の敗戦、何年にもわたる飢饉、及び漢の攻勢に対する防衛が重い負担を匈奴に負わせた。紀元前 68 年、壺衍鞬单于が死んで、弟の左賢王が虚閼渠渠单于になった。虚閼渠渠单于是、漢が辺境の防衛工事を撤去したことによって喜んで、漢との和親を貴人と共に企てた。しかし、虚閼渠渠单于の即位が匈奴に内乱を生み出した。罷免した顓渠閼氏の父の左大且渠は虚閼渠渠单于に蟠りがあって、漢との和親を阻害した。その後、漢が再び辺境の防衛を固めた。それ以外、匈奴に占領された西嚕居左地にいる人たちは反旗を翻し、甌脱で匈奴軍を多く殺した後、漢に投降した。このように、匈奴は内憂外患に陥り、漢と覇権を争う能力も失っていった。

漢は匈奴の衰弱を機に、亀茲征伐と車師征伐を通じて天山南路北道と天山北路東部に勢力を浸透させようとした。長安に凱旋した常恵は、亀茲が頼丹を殺して漢に征伐されなかったことを懸念して勝利の勢いで亀茲を罰として攻めろと宣帝に諫言したが、宣帝からの許可を得ず、大將軍霍光の「便宜行事」にしたがって、紀元前 71 年に亀茲の西・東の諸国と烏孫を動員させて、亀茲を攻撃した。大軍が国境に迫ってきたことに向かつて、亀茲王は頼丹の死を貴人の姑翼に咎めて、彼を縛って常恵に渡し、投降した。その後、漢との関係を親しくしようとする亀茲王は、自国に通っている烏孫公主の娘を抑留し、烏孫の同意を得た後、烏孫公主の娘を娶たことを通じて、漢とは姻戚関係を結んだ。したがって、天山南路北道の中部に位置する大国の亀茲を勢力圏に取り込んだことを通じて、漢は天山南路北道に匈奴の勢力を圧倒した。

この時、漢は、天山南路の門口としての鄯善を屈服させて天山南路への進出を確保した

が、天山北路の門口としての車師が親匈奴になったため、天山北路への進出に阻害があった。車師は、匈奴に質子として派遣した烏貴が王になって匈奴と婚姻関係を結んだため、匈奴の忠実な協力者として、漢の西域への進出を遮断していた。西域への二つのルートを完全に打開するために、漢は車師攻略を展開し、紀元前 68 年の交河城の戦いと紀元前 67 年の石城の戦いを通じて、匈奴から軍事支援を得なかった車師を屈服させた。これに対して、匈奴は、「車師地肥美、近匈奴、使漢得之、多田積穀、必害人国、不可不爭也」^[47]とあるように車師が漢の匈奴攻撃の拠点になることを理由に、漢軍の主力の撤退を機に、車師奪還戦を始めた。4 年にわたる戦いの結果として、「及破姑師、未盡殄、分以為車師前後王及山北六国。時漢独護南道、未能盡并北道也、然匈奴不自安矣」^[48]とあるように、車師は匈奴の代理国としての車師後国と漢の代理国としての車師前国に分裂し、匈奴にとっては、その戦争の目標が果たされ、車師後国及び山北六国が依然として匈奴の勢力圏にあったため、漢の天山北路への攻勢を止めた^[49]。一方、漢もある程度まで目的を果たし、戦争初期に烏貴の妻と子を、撤兵後の翌々年に烏孫から烏貴を、人質として長安に引き渡して保護して、元々匈奴に質子として派遣することを逃避するために焉耆へ亡命した軍宿を車師王として擁立したことを通じて、車師前国に親匈奴勢力を一掃したことである。

車師奪還戦を境に、漢が対外拡張策を中止し、匈奴が国力回復政策に転じたため、宣帝期での漢匈争覇が終わった。武帝期と比べると、昭・宣帝期の漢匈争覇は、漢と匈奴が漠南をめぐる直接的対抗より、西域をめぐる闘争に重心が置かれた。結果として、漢は、烏孫と共に匈奴を作戰したことを通じて、前に漢か匈奴かどちらに連合するかについて躊躇していた烏孫の国内に親漢の勢力を固めて、さらに、龜茲の降伏を通じて、影響を天山南路北道までに浸透させ、最後に、武帝のようにやたらに武力を振り回すことに警戒し、車師奪還戦で車師を匈奴に譲ったが、親漢の車師前国を建てることを通じて天山北路の門戸を確保したのだった。

第二節 匈奴称臣による平和時代

紀元前 60 年、匈奴には単于継承をきっかけに内訌が起きた。虚閼權渠単于が死去した後、屠耆堂は自分と不倫していた虚閼權渠単于の顓渠閼氏と彼女の弟の左大且渠に擁立され、握衍朐鞬単于になった。このような単于継承が当然ながら匈奴の内部に不満を引き起こしたが、握衍朐鞬は強硬な対策を取り、虚閼權渠単于の旧勢力を鎮圧しながら、左大且

渠と自分の子達の重用を通じて集権を目指した。結果として、匈奴は内訌状態になり、離反と反乱が繰り返された。握衍胸鞬の単于即位と同年に西域の管理役を務める日逐王が漢に投降し、紀元前 58 年、稽侯狁は左地貴族に呼韓邪単于として擁立された。その後、呼韓邪単于が握衍胸鞬単于に勝ったことを境に、匈奴は完全な内乱に陥り、呼韓邪、屠耆、呼揭、車犁、烏藉という五つの単于の闘争を経て、最終に紀元前 54 年に呼韓邪単于の東匈奴と郅支単于の西匈奴に分裂した。

匈奴には、前に何回も兄弟相続による内訌があったが、分裂には至らなかった。なぜ今回の単于継承による内訌が東西分裂にまで至ったのだろうか。まず、経済面で、気候変化による生産不良が飢餓と貧困をもたらした。竺可楨の研究によると、平均気候が、秦から前漢までには今より 1.5°C 高く、後漢には今より 0.7°C 低かったこと^[50]にもとづいて、匈奴東西分裂の前後には気候が寒くなって、したがって、生産も低下していったという。このような状況は、

会天大雨雪、一日深丈余、人民畜産凍死、還者不能什一。……又重以餓死、人民死者什三、畜産什五^[51]。

是歳也、匈奴飢、人民畜産死十六七^[52]。

とあるように、史籍に記録された。そして、「飢饉は彼等の部族間の連盟統一を破壊し、…内紛を生ぜしめるもので、農耕国家に侵入する力を欠くことが多」^[53]い、という内田吟風の分析のとおり、この時、匈奴は漢に寇掠を加えて物質を補充することができなくなった。実際に、握衍胸鞬単于が即位した後には虚閼廆渠単于の和親政策を継いで和親のために漢に使者を派遣した。一方、元より匈奴の経済補充の主な対象としての西域には、漢の西域攻略と日逐王の漢への投降によって、匈奴の影響力が次第に減少していった。結果として、匈奴は、以前のように西域に税金を納めさせることを通じて経済上の困難を克服することもできなくなった。そして、安全保障面から見ると、匈奴に服順していた国々（例えば丁零・烏桓）が匈奴に反目し、その衰弱を利用して、匈奴に寇掠を加えた一方、漢が西域諸国と連合して匈奴に攻撃を与え続けた結果、匈奴は財政不況の時にも対外的防衛線を固めなければならなかった。このような内憂外患の時に即位した握衍胸鞬単于は、権力をめぐって争う直系勢力と傍系勢力の間で調和をせず、中央集権策を用いて、貴族層から地方までの重要な官職として、異分子を自分の腹心と取り替えて、中央だけではなく地方勢力との闘争にまで及んだ。だが、握衍胸鞬単于は匈奴における地方勢力の強さと自主性及び中央に対する地方からの忠誠に対する判断を間違った。遊牧政権には、地方勢力がま

ず自分の首領に忠誠をあたえて、地方首領が中央に忠誠を示すことを通じて中央との関係ができた^[54]。そして、匈奴は、部族連合を基礎に多くの非匈奴族の遊牧民を統合したことを通じて帝国を建てたため^[55]、地方勢力を完全に圧倒することができなかった。結果として、呼韓邪、屠耆、呼揭、車犁、烏藉などの地方勢力の代表者は次第に単于として擁立された。このように擁立された単于はあくまで実力にもとづく「自立」なのであった^[56]。したがって、今回の分裂は、継承をきっかけに、中央集権と地方分権との闘争として、各地域に割拠した「自立」の単于が匈奴の支配権を争ったことにあった。

一方、内訌から内戦に至った匈奴に対して、漢には、それを機会を活かして匈奴を滅ぼすという意見が朝廷の主流になったが、蕭望之は

春秋晉士匄帥師侵齊、聞齊侯卒、引師而還、君子大其不伐喪、以為恩足以服孝子、誼足以動諸侯。前單于慕化鄉善稱弟、遣使請求和親、海內欣然、夷狄莫不聞。未終奉約、不幸為賊臣所殺、今而伐之、是乘亂而幸災也、彼必奔走遠遁。不以義動兵、恐勞而無功。宜遣使者弔問、輔其微弱、救其災患、四夷聞之、咸貴中國之仁義。如遂蒙恩得復其位、必稱臣服從、此德之盛也^[57]。

とあるように、この時挙兵したら仁義がなくなり四夷の反目をもたらすと反論した。宣帝は蕭望之の諫言を認めて、使者を通じて漢の威信を宣揚した。漢の態度を知った後、呼韓邪と郅支は漢に質子を送って漢との関係緩和を求めた。

一 呼韓邪称臣の後での漢と匈奴、西域関係

匈奴が分裂した後、呼韓邪が郅支に敗れて東に転移し、郅支の激しい攻勢を前にして危急存亡の時に至った。この時、対外政策をめぐって、東匈奴には激しい論争が行われた。漢が匈奴に内戦を機に攻撃を加えず、使者を派遣し威信を宣揚したことから漢に好感をもつ左伊秩訾王は漢に称臣し、漢の力を借りて西匈奴と対抗しようと諫言した。しかし、他の大臣はみな反対して、

不可。匈奴之俗、本上氣力而下服役、以馬上戰鬪為國、故有威名於百蠻。戰死、壯士所有也。今兄弟爭國、不在兄則在弟、雖死猶有威名、子孫常長諸國。漢雖疆、猶不能兼并匈奴、奈何亂先古之制、臣事於漢、卑辱先單于、為諸國所笑！雖如是而安、何以復長百蠻^[58]！

とあるように反論した。要するに、匈奴の内戦はどのような結果になっても、匈奴内部の問題であり、漢とは関係せず、一方、漢がこれを活かして匈奴を滅ぼすことができず、も

し今漢に臣服したら、匈奴の誇りと威信が失って、統一した後に百蛮を再び臣服させることもできなくなる。これに対して、

不然。疆弱有時、今漢方盛、烏孫城郭諸国皆為臣妾。自且鞮侯单于以來、匈奴日削、

不能取復、雖屈疆於此、未嘗一日安也。今事漢則安存、不事則危亡、計何以過此^[59]！

とあるように、左伊秩訾王は漢が盛んで西域諸国を屈服させた一方、匈奴が衰弱しつつあることを背景に、東匈奴が漢と対抗するより漢に頼る方が安全を確保できると弁解した。ここには、実際に二つの立場が現れた。大臣にとって、呼韓邪か郅支かどちらが勝っても、匈奴が存在し続いたら、自分の利益が確保される。しかし、もし漢に臣服した後に呼韓邪が負けたら、彼らも呼韓邪と同じく匈奴の裏切り者として郅支に受け入れられることできなくなる。そのため、大臣が匈奴帝国の国益を呼韓邪の地方勢力の利益の上に置く。代わりに、左伊秩訾王は呼韓邪を擁立した左地貴族の一員であり、呼韓邪の勝敗が自分の運命にかかわるため、呼韓邪の地方勢力の存続を匈奴帝国の国益の上に置き、左伊秩訾王と同じような立場に立つ呼韓邪は、優勢な軍事力を持つ西匈奴と対抗するためには、当然ながら、漢への臣服を選ばざるを得なかった。

呼韓邪は、紀元前 54 年に弟の谷蠡王と、翌年に子の右賢王を質子として派遣し、臣服の意思を伝えて、その上、紀元前 52 年に五原塞に行つて翌年正月の朝覲を請うた。呼韓邪の朝覲に対して、漢には激しい議論が行われた。大多数の大臣は、

聖王之制、施德行禮、先京師而後諸夏、先諸夏而後夷狄。詩云：『率禮不越、遂視既

發；相土烈烈、海外有截。』陛下聖德充塞天地、光被四表、匈奴单于鄉風慕化、奉珍

朝賀、自古未之有也。其禮儀宜如諸侯王、位次在下^[60]。

とあるように、匈奴を内臣たる諸侯王に対する礼儀に倣って遇し、諸侯王の下に置こうと主張した。これに対して、蕭望之は反対して、

单于非正朔所加、故称敵国、宜待以不臣之禮、位在諸侯王上。外夷稽首称藩、中国

讓而不臣、此則羈縻之誼、謙亨之福也。書曰『戎狄荒服』、言其來服、荒忽亡常。如使

匈奴後嗣卒有鳥竄鼠伏、闕於朝享、不為畔臣。信讓行乎蛮貉、福祚流于亡窮、万世之

長策也^[61]。

と反論した。漢廷にも二つの立場が現れた。大多数の大臣は理想派として、華夏が先進かつ文明的なので落後かつ野蛮な夷狄が中華を尊すべきという華夷思想から、呼韓邪の臣服を郷風慕化とみなして、呼韓邪を内臣になさせる。一方、蕭望之は現実派として、匈奴の内戦及び呼韓邪の状況から、彼の臣服があくまでも一時的な便宜上の措置に過ぎないと判

断した。匈奴を外臣に為させたら、匈奴が漢に臣服せず離反する時に、匈奴を征伐しなければならない。しかし、漢が実力を回復した匈奴に勝つことは、それほど簡単ではなく、その上、もし成功しなければ、漢の威信が傷つくことになった。そのために、匈奴を、外臣として統御することではなく、客臣として羈縻する方がよい。一方、宣帝期の対外政策は、その指導思想が『春秋公羊伝』の攘夷思想から『春秋穀梁伝』の華夷混一に変化した結果として、中華と華夷が共存することを是認できた^[62]。このような背景には、宣帝が蕭望之の諫言を受け入れて、

蓋聞五帝三王教化所不施、不及以政。今匈奴单于称北藩、朝正朔、朕之不逮、德不能弘覆。其以客禮待之、令单于位在諸侯王上、贊謁称臣而不名^[63]。

とある詔を下し、客礼にしたがて来朝の呼韓邪を遇して、单于を内臣たる諸侯王の上に置き、彼に臣を称させたが名を呼ばせなかった。

紀元前 51 年、

呼韓邪朝甘泉宮、漢寵以殊禮、位在諸侯王上。贊謁称臣而不名^[64]。

とあるように、呼韓邪は宣帝に朝覲・称臣し^[65]、この時で漢に殊礼に遇された。1 カ月余りの後に帰る時に、呼韓邪は受降城の付近の光祿塞に留守しようと請うた。宣帝は兵を与えた董忠等に呼韓邪を朔方の雞鹿塞から光祿塞まで護送させ、到着後に单于に服しない勢力を取り除くために董忠等を駐在させた。そして、匈奴の経済の疲弊に対して、漢は三万四千斛の糧食を辺境から徴発し呼韓邪に与えた。したがって、称臣した東匈奴は、漢から軍事と経済との援助を受けて、対外的に西匈奴との対抗の能力を高め、自分の領域内には国力回復のための資源も備えた。

ここには一つの問題がある。すなわち、呼韓邪の臣服によって漢と東匈奴との関係は一体どのようになったのだろうか。これに対する見解は、匈奴が漢に臣服していないというものから匈奴が漢の一部に取り込まれたというものまで、極めて多様である。まず、岡安勇は、呼韓邪に対する礼遇形式により、呼韓邪に客礼で待遇し、「客」が「不臣」と意味するため、東匈奴が漢の臣でないという結論に至る^[66]。好並隆司は、呼韓邪に与えた璽印を「賓客」に与えるものにより、呼韓邪を「賓客乃至漢王朝に（匹）敵する国の君主」と指摘する^[67]。言い換えると、漢と東匈奴との関係は、漢のレトリック上には君臣関係であるが、実際には主客関係にある。バーフィールドは、この主客関係を朝貢関係とみなして、東匈奴が漢の朝貢関係に形式上に参加することを通じて漢からの経済と軍事との援助を受けながら、漢の直接的な干渉を避けて自治性を保つことを内辺境戦略と定義した^[68]。そして、

栗原朋信は、璽印の様式と宣帝の詔にもとづき、東匈奴を漢の客臣とみなして、「一般外臣や内臣とは異なって、より対等的であるにちががなく、結んだ約束は双務契約としての性質が、一層強い」と指摘する^[69]。また、劉瑞は外臣の特徴を、漢の統治地域の外にあること、漢に朝貢・朝請・辺境防衛・質子派遣などの義務を負う同時に漢に冊封・賞賜されること、自国に完全な主権をもつこととして、呼韓邪の時の東匈奴を外臣とみなす^[70]。客臣にせよ、外臣にせよ、いずれも漢の外にある政権で、漢の一部ではない。これに対して、東匈奴を内臣とみなす研究者は、東匈奴を漢帝国の一部分と考える。王慶憲は、政治上で呼韓邪が漢の璽印を受けたため東匈奴が漢の臣下になることを認めたり、漢が東匈奴の領土に駐軍したり、東匈奴が漢からの経済援助で自ら勢力を維持したり、東匈奴が独立に外交を行うことができなかつたりする理由で、東匈奴を漢の内臣であつたと判断した。そして、尾形勇は、呼韓邪に対する礼遇形式に、呼韓邪が『内臣』における『称臣不名』を自称形式とする『殊礼』を以て待遇された^[71]という新たな解釈を与え、東匈奴を漢の内臣と主張する。一方、堀敏一は臣と客との用語に拘わらず、「呼韓邪単于の漢にたいする従属的地位」により、東匈奴が冊封を含める羈縻関係を通じて「ルースな結合関係」による漢の世界帝国に取り込まれると指摘する^[72]。

漢と匈奴との関係を判断するには、それぞれの義務と権利を明らかにしなければならない。まず、東匈奴が漢に対してどのような義務を負っていたのを見る。史籍によると、呼韓邪が称臣した後、東匈奴は納質・朝貢・朝覲が当然ながら義務付けられた。東匈奴からの朝貢が史籍に稀に記録された。しかし、これは東匈奴があまり朝貢しなかつたということではない。紀元前 2 年、匈奴は翌年に朝覲する時に従者を 200 人から 500 年に増加しようとして願ひ出た。この記載の前に「故事、単于朝、從名王以下及從者二百余人」^[73]とある従者の人数のルールを付ける。このことから見ると、匈奴による朝貢が定期化され規範化された。そのため、匈奴からの朝貢に特筆する必要がないのではないかとする。一方、呼韓邪の死亡から王莽の篡奪まで、時間順に、復株累若鞮、搜諧若鞮、車牙若鞮、烏珠留若鞮という四つの単于は即位の同年に自分の子を質子として遣わせた。最後、三回朝覲した呼韓邪を特殊時期として除いて、単于がその治世に漢に一回ほどの朝覲を行うことが必要であつた。復株累若鞮単于と烏珠留若鞮はそれぞれ即位の 6 年と 7 年の後に漢に朝覲して、搜諧若鞮単于は即位の 8 年後に朝覲を請うたが塞に入る前に病死した。車牙若鞮単于が唯一朝覲しなかつたことは、3 年しか在位しなかつたため、朝覲の準備を整えなかつたのだろう。

一方、漢は匈奴に対して軍事的かつ経済的援助を承諾した。軍事援助について、漢は呼韓邪第一次朝覲の後に1万6千の騎兵を發して呼韓邪を守っていった。紀元前49年での呼韓邪第二次朝覲の後に屯兵がいるため再び騎兵を發しなかったことから見ると、今回の軍事援助が充分だと考えられた。その後、漢が西匈奴を滅したため、東匈奴は匈奴を再び統一し、漢からの軍事援助が必要ではなくなった。そして、東匈奴にとって、西域からの持続的かつ安定的な貢物が大部減少され、漢に軍事行動を通じて物質を奪略することも不可能になったため、漢からの経済援助が最も重要となった。実際に、単于が朝覲する度に、漢は増えつつある賞賜を与えるだけではなく、数多い同行者を入京させて、商売の特権を与えた。実際、前漢の初期と末期の対匈奴経済支出を比べたら、末期に経済支援により匈奴の服順を維持したことは、初期の和親約による賂遺よりも負担が大きくなった、と余英時は指摘する^[74]。結果として、匈奴は統一した後、軍事的奪略よりも漢との客臣関係を維持するほうが安全かつ経済的にも有益な選択肢となった。匈奴を統一した後も東匈奴が漢とこの関係を維持するのは、経済面からみると、軍事的奪略より、安全かつ豊富になるからである。

このように、匈奴は政治上で漢に納質・朝貢・朝覲などの義務を負って漢の政治的必要を果たす一方、漢は軍事と経済上で匈奴に援助した。要するに、漢と匈奴はこの両国関係を通じて、各自の必要に応じて利益を得た。これから見ると、漢と匈奴は必ずしも従属関係にあったとは考えられない。

そして、前漢初期に漢と匈奴が和親約を結んだように、呼韓邪の臣服の後、紀元前44年に漢と匈奴は新たな盟約を結んだ。この盟は漢と匈奴との双方の承認を得たため、史籍にある漢のレトリックより、その時の現実により合うのではないか。盟の内容が「自今以來、漢与匈奴合為一家、世世毋得相詐相攻。有窃盜者、相報、行其誅、償其物；有寇、發兵相助。漢与匈奴敢先背約者、受天不祥。令其世世子孫盡如盟」^[75]とある。すなわち、漢と匈奴は互いに侵攻・盗竊せず、もし他の国家の攻撃を受けたら軍事援助を与えることを天にかけて誓う約束である。こうして、漢と匈奴との間には君臣関係がなく、代わりに、一種の安全保障上の同盟関係が見られる。実際に、居延と敦煌に発掘された漢簡を見ると、呼韓邪の称臣から王莽による関係決裂までには、漢と匈奴との間に小規模な軍事衝突すらなかった^[76]。

しかし、漢は東匈奴に対して安全保障上において警戒をしなかったとは言えない。紀元前33年、呼韓邪は、一昨々年に郅支が漢に消滅されたことで脅えて、第三次朝覲を行い、

上谷の西から敦煌までの辺塞を取り消すことを請うた。これに対して、辺境事務に習熟する郎中の侯應は

辺長老言匈奴失陰山之後、過之未嘗不哭也。如罷備塞戍卒、示夷狄之大利、不可一也。今聖德広被、天覆匈奴、匈奴得蒙全活之恩、稽首來臣。夫夷狄之情、困則卑順、彊則驕逆、天性然也。前以罷外城、省亭隧、今裁足以候望通饗火而已。古者安不忘危、不可復罷、二也。中国有禮義之教、刑罰之誅、愚民猶尚犯禁、又況單于、能必其衆不犯約哉！三也。自中国尚建関梁以制諸侯、所以絶臣下之覬欲也。設塞徼、置屯戍、非独為匈奴而已、亦為諸属国降民、本故匈奴之人、恐其思旧逃亡、四也。近西羌保塞、与漢人交通、吏民貪利、侵盜其畜産妻子、以此怨恨、起而背畔、世世不絶。今罷乘塞、則生慢易分争之漸、五也。往者從軍多没不還者、子孫貧困、一旦亡出、從其親戚、六也。又辺人奴婢愁苦、欲亡者多、曰『聞匈奴中樂、無奈候望急何！』然時有亡出塞者、七也。盜賊桀黠、羣輩犯法、如其窘急、亡走北出、則不可制、八也。起塞以來百有余年、非皆以土垣也、或因山巖石、木柴僵落、谿谷水門、稍稍平之、卒徒築治、功費久遠、不可勝計。臣恐議者不深慮其終始、欲以壹切省繇戍、十年之外、百歳之内、卒有它変、障塞破壊、亭隧滅絶、當更発屯繕治、累世之功不可卒復、九也。如罷戍卒、省候望、單于自以保塞守御、必深德漢、請求無已。小失其意、則不可測。開夷狄之隙、虧中国之固、十也^[77]。

とある十個の理由を列挙し、辺塞の取り消しに激しく反対した。これらの理由の中で匈奴と直接に関わるのは、一と三と九と十である。一は、辺境の防衛が撤廃されれば、匈奴に旧領土を奪回する好機会を与えることとなる。三は、漢ですら民が禁を犯すことを統制できないのに、匈奴にそれができるわけがない。九は、一旦長年にわたって築いた防衛が撤廃されれば、短期間に防衛を整えるのが不可能である。十は、もし辺境の安全を匈奴に任せたら、匈奴が様々な要求を出す可能性がある。元帝は應習の諫言を受け入れて、王昭君を呼韓邪に嫁したが、辺塞の取り消しを拒否した。こうして見ると、漢と匈奴は盟にもとづいて平和関係を結んだものの、相手からの軍事脅威を注意深く警戒していた。

そして、呼韓邪の称臣により漢と東匈奴が藩属関係になったと考える研究者は、東匈奴の領土をも漢の領土の一部と見なる^[78]。しかし、紀元前8年の漢の土地要求に対して「孝宣・孝元皇帝哀憐父呼韓邪單于、從長城以北匈奴有之」^[79]とある單于の返事に見られるように、前漢初年に長城を境界線に漢と匈奴の国境を定めたことは残っていた。

最後には、漢だけではなく、匈奴が漢匈関係をどのように見ていたかということも判断

の根拠だと考えられる。王莽に印章を変えられた時、烏珠留若鞮単于は「漢賜単于印、言『璽』不言『章』、又無『漢』字、諸王已下乃有『漢』言『章』。今印去『璽』加『新』、与臣下無別。願得故印」^[80]とあるように、匈奴が漢の臣ではないため、臣に与える章を納得することができないと抗議した。これから見ると、匈奴にとって、漢匈関係は、匈奴が形式的に漢に臣服するかたちをとったが、実際には盟にもとづく平等関係であったと考えられる。

要するに、呼韓邪が称臣した後、漢と（東）匈奴は盟にもとづいて平等な関係を結んで、初期に和親約によって漢女・賂遺などの義務を漢につける形で匈奴に傾いたのを反転し、末期には納質・朝貢・朝覲・称臣などの義務を匈奴に付加する形で漢に政治上より有利なものとなった。

一方、匈奴内戦以降西域には天地をくつがえすほどの変化が起こった。西域事務を担当する日逐王の先賢揮が漢に投降したことを機に、紀元前 59 年^[81]に、漢は天山南路の監護役を務める鄭吉を都護として任命して、天山北路と天山南路との監護の機能を兼備する西域都護を天山南路の烏壘城に設置した。一方、西域から税金を徴収してその事務を管理する西域僮僕が終わった。その後、「大国莎車・于闐之属、数遣使置質于漢、願請属都護」^[82]とあるように、莎車・于闐をはじめとする天山南路南道の諸国も漢に臣服した。実際に、天山南路南道の西端の莎車は、紀元前 65 年、烏孫に嫁した漢公主の子の万年を莎車の国王にすることを漢に要請した。万年は即位後、暴虐的統治を行い、莎車の前王の弟の呼屠徴に殺された。呼屠徴は莎車王になった後、漢使を殺して、匈奴に帰して天山南道南道を遮断しようとした。大宛に出使する馮奉世は南道の諸国を動員し、呼屠徴を自殺させ、彼の弟の子を莎車王と擁立した。結局、「諸国悉平、威振西域」^[83]とあるように、天山南路南道に権威を樹立した。西域都護の設置後、莎車・于闐など天山南路南道の諸国が西域都護に属しようと請うたのにはこのような背景があった。結果として、「漢之号令班西域矣、始自張騫而成於鄭吉」^[84]とあるように、西域都護の設置は西域をめぐる漢と匈奴との争覇に漢の勝利を告げた。

だが、西域都護の設置初期に、「都護督察烏孫、康居諸外国動靜、有変以聞。可安輯、安輯之；可擊、擊之」^[85]とあるように、烏孫と康居などの大国の動静を偵察する任務を西域都護に与えたことから見て、烏孫のような大国はまだ漢に臣服していなかった。実際に、紀元前 64 年に烏孫昆彌の翁歸靡は、自分と公主との子の元貴靡に昆彌の座を相続させるために、漢に公主を嫁することを請うた。宣帝は朝臣の反対を無視し、紀元前 60 年に常恵

に公主を烏孫まで護衛させた。しかし、この時、烏孫の貴人が岑陬と翁歸靡との約束を守って、翁歸靡が死んだ後に岑陬と匈奴妻との子の泥靡を擁立した。結局、漢と烏孫との政治婚姻ができなくなり、これは「漢の外交上の勝利を転覆させる事件」^[86]とも考えられる。そして、匈奴系の泥靡を擁立したことから見ると、烏孫には親匈奴の勢力が依然として強かったに違いない。その後、西域都護に「都護督察烏孫、康居諸外国動靜」という任務を任せるのは、烏孫の裏切りによる烏孫に対する不信感によることであつた一方、匈奴の東西分裂の後、烏孫が匈奴の威力を借りて漢と対抗する可能性が次第になくなったことを背景に、漢が烏孫に武力的に干渉を加え、烏孫を臣服させる準備を行なつたのではないか。それで、紀元前 53 年に、漢は、狂王刺殺から、烏孫の王位に露骨な干渉を加え、自立していた烏就屠を降服させて、漢公主の子の元貴靡を大昆彌として、烏就屠を小昆彌として擁立した。紀元前 51 年、漢は新たな大昆彌の星靡が怯弱で国内を統御できないため、馮夫人を派遣し彼を補助しながら、西域都護の段会宗に大昆彌から逃亡・離反した民衆を呼び戻す任務を任せた。しかし、この時、親漢勢力が漢の動きによって強化され政治の主流に上昇したが、民意の多くが小昆彌に寄せられたように、親匈奴勢力が民衆の支持を通じて依然として強固だった。とは言え、「自烏孫以西至安息……及呼韓邪單于朝漢後、咸尊漢矣」^[87]とあるように、天山北路からパミールまでの諸国は匈奴から離反し、漢に寄せて尊意を示したため、漢は匈奴の影響を強く受けた天山北路までに勢力を浸透させたのだった。

二 西匈奴滅亡後の漢の帝国化政策

西匈奴は東匈奴と漢との連携を憚った一方、西域及び中央アジアで経済利益を目指すために^[88]、紀元前 51 年から西へ移った。郅支が最初に匈奴系の小昆彌に連携を誘った。しかし、この時、小昆彌は、漢の力が確実に浸透され、郅支を拒否し、漢に功績をあげるためか、或いは忠心を示すためか、郅支の使者を殺し使者の頭を都護に送って、郅支の主力を迎撃して行った。実際、この時、小昆彌と接触したのは、郅支だけではなく、呼韓邪でもある。居延漢簡によると、元帝の初期、呼韓邪が郅支が西に転移することを把握するために、小昆彌と接触した^[89]。したがって、小昆彌が郅支を拒否したのは漢を後ろ盾にした東匈奴の影響を受けたためとも考えられる。結果として、西匈奴はさらに西に転移し、離反した烏揭、堅昆、丁零を征服して、都を堅昆に移し、その後、よく烏孫に寇掠を加えた。この時、烏孫に害されていた康居は、西匈奴の力を借りて烏孫を打倒するために、西匈奴に連携の提案を出した。紀元前 44 年、西匈奴は、康居の誘いに応じてパミールでの康居に

まで戦略的に移動した。だが、康居が西匈奴に充分の尊意を示さないため、郅支は康居王を殺して、2年をかけて康居人に単于城を築かせて、そこに留住了。こうして、この時、西匈奴は、康居を本拠にし休養生息策を施していった。もしこれを放任したら、西匈奴は西域をめぐって漢と覇権を争う能力を回復する可能性が高いと考える西域副校尉の陳湯は

夷狄畏服大種、其天性也。西域本属匈奴、今郅支单于威名遠聞、侵陵烏孫・大宛、常為康居画計、欲降服之。如得此二国、北擊伊列、西取安息、南排月氏、山離烏弋、数年之間、城郭諸国危矣。且其人剽悍、好戰伐、数取勝、久畜之、必為西域患。郅支单于雖所在絶遠、蛮夷無金城強弩之守、如發屯田吏士、毆從烏孫衆兵、直指其城下、彼亡則無所之、守則不足自保、千載之功可一朝而成也^[90]。

とあるように、西匈奴が回復したら必ず漢の西域支配にとっての禍患になるため、今の衰弱の状態を利用して、烏孫の兵を發して西匈奴を一気に滅ぼすべきだと、使護西域騎都尉の甘延壽に勧誘した。だが、甘延壽はこのような要事は朝廷の命令に従うべきであるという判断を堅持し、陳湯の意見を受け入れなかった。そのため、紀元前36年、陳湯は詔を独断で偽って西域諸国の兵を率いて、康居の内応を通じて郅支を殺し、西匈奴を滅亡させた。そのため、呼韓邪は匈奴を統一したが、前文の述べたように、漢の力を恐れて紀元前33年に朝覲を通じて漢の女を娶ること及び上谷の西から敦煌までの辺塞を取り消すことを請うた。元帝は王昭君を呼韓邪に嫁したが、辺塞の取り消しを拒否した。

漢が力で匈奴に干渉を加えることを呼韓邪が憂慮していたことは心配しすぎたのではない。実際、成帝即位の紀元前32年を境に、漢は匈奴に対して内政不干渉の原則を次第に放棄し、帝国化政策を行なっていった。紀元前8年、漢は匈奴に張掖郡付近での匈奴の飛び地を割譲するよう強要した。烏珠留单于是

孝宣・孝元皇帝哀憐父呼韓邪单于、從長城以北匈奴有之。此溫偶駱王所居地也、未曉其形狀所生、請遣使問之。……父兄傳五世、漢不求此地、至知独求、何也？已問溫偶駱王、匈奴西辺諸侯作穹廬及車、皆仰此山材木、且先父地、不敢失也^[91]。

とあるように、長城による境界線にもとづいてこの要求を断固として拒絶した。この要求が無理だと分かった成帝は、土地割譲の強要を夏侯藩が独断で行ったためであると返事し、匈奴との関係の悪化を回避した。しかし、紀元前1年、平帝即位の時に漢の朝政が王莽に握られたことから王莽時代が始まった。王莽は匈奴にいつそう露骨に干渉し、匈奴の実質的利益を損ねた。漢は紀元2年に匈奴に亡命した車師後王の姑句と去胡來王の唐兜を漢に渡すよう要求した。匈奴は依然として、

孝宣・孝元皇帝哀憐、為作約束、自長城以南天子有之、長城以北單于有之。有犯塞、輒以狀聞；有降者、不得受。臣知父呼韓邪單于蒙無量之恩、死遺言曰：『有從中國來降者、勿受、輒送至塞、以報天子厚恩。』此外國也、得受之^[92]。

とあるように、長城による境界線があることを理由に漢の要求を拒否した。だが、漢使は、「匈奴骨肉相攻、国幾絶、蒙中国大恩、危亡復續、妻子完安、累世相繼、宜有以報厚恩」^[93]とあるように、盟ではなく、匈奴に対する漢の恩をもって匈奴を説いた。その後、「中国人亡入匈者、烏孫亡降匈奴者、西域諸国佩中国印綬降匈奴者、烏桓降匈奴者、皆不得受」^[94]とあるように四つの条文を詔った。要するに、匈奴が受け入れることのできない亡命者の対象は、元々の漢人の他に、烏孫、漢に印綬を受けた西域諸国および烏桓にまで拡大した。このような要求は明らかに長城による境界線に逆らうものである。四つの条文の後すぐ、漢は、護烏桓使者を通じて匈奴に皮布税を納めることを禁じる命令を烏桓に下した。その後、匈奴は、烏桓がこの四つの条文を盾に皮布税の納付を拒否したことに怒り、烏桓を攻撃し、その人を左地に拉致し、贖金を要求した。

一方、漢は西匈奴の西遷を機に、帝国化政策をとって西域支配を強化していった。漢の最初の対象は天山北路の門戸に位置する車師後国と北山六国である。前文に説明したように、宣帝の時、漢は車師前国を勢力圏に取り込んだが、車師後国と北山六国が依然として匈奴の勢力圏にあった。しかし、西匈奴の西遷により、天山地域に権力真空が現れた。これを機会に、紀元前 48 年、漢は、車師前国での戊・己校尉との二つの校尉^[95]を設置し、投降してきた匈奴の東蒲類王の茲力支の配置という名目で、車師後国の一部分を切り離してそこに烏貪髻離を建国させた。これを通じて、実際に匈奴と緊密な関係をもつ車師後国を監視・支配することができた。その後、西北漢簡によると、漢と車師^[96]との関係がより緊密になった^[97]。そして、紀元 2 年、戊己校尉徐普は、車師後王の拒否を無視し、車師後国を貫く新道を開いた。この新道を通じて、漢は、玉門関から車師前国所在のトゥルファン盆地までには、その間における白竜堆という險を避け、直接に通過するため、距離を半分に減少し^[98]、戦力投射がより有効になった。車師都尉国・車師後城長国の設置を加えて、漢は天山北路東端の天山地域を完全に勢力圏に取り込んだ。

西匈奴を滅ぼした後、漢は再び烏孫を攻略し、紀元前 21 年から紀元前 11 年まで、繰り返される大昆彌と小昆彌との紛争を利用し、ほしいままに大・小昆彌を擁立した。紀元前 11 年に、烏孫の大臣に優待としての金印紫綬を銅印墨綬に変えたことから見て、漢は烏孫を完全に外臣国にまで格下げした^[99]。烏孫は、元々漢と平等な同盟関係を結んでいた匈奴

が衰弱するにつれて、漢に重視される資源と漢に対抗する後ろ盾を失って、漢に臣服するに至った。したがって、天山北路を勢力圏に取り込んで、天山南路北・南道の支配機構としての西域都護を加えて、「最凡国五十。自訳長・城長・君・監・吏・大祿・百長・千長・都尉・且渠・當戸・將・相至侯・王、皆佩漢印綬、凡三百七十六人」^[100]とあるように、西域諸国に印綬の付与を通じる冊封関係をもって西域に対する覇権を最終に樹立したのだった。

その後、漢は西域諸国に対する善意を次第に失っていき、西域諸国に対して領土保全と内政不干渉を無視して放恣に強要した。紀元 2 年、戊己校尉の徐普は、車師後国を通る新路の開拓に非協力的な車師後王の姑句を拘置した。そして、漢は西域の安定のために軍事力で紛争中の諸国を仲介することをほとんど怠った。紀元 2 年、婁羌の去胡來王の唐兜は、西域都護の但欽に赤水羌に屢々侵略されたことを報告し助けを請うたが、返事と軍事援助を受けることができなかった。

だが、漢は、西域支配を強化したとは言え、西域を帝国に取り込むことができなかった。実際に数多くの西域国家が漢に納質・朝貢するのは漢と通商をするためなのである。紀元前 26 年、罽賓使者の護送をめぐって、

前罽賓王陰末赴本漢所立、後卒畔逆。夫德莫大於有国子民、罪莫大於執殺使者、所以不報恩、不懼誅者、自知絶遠、兵不至也。有求則卑辞、無欲則嬌嫚、終不可懷服。凡中国所以為通厚蛮夷、愿快其求者、為壤比而為寇也。今鼎度之阨、非罽賓所能越也。其鄉慕、不足以安西域；雖不附、不能危城郭。前親逆節、惡暴西域、故絶而不通；今悔過來、而無親属貴人、奉献者皆行賈賤人、欲通貨市買、以献為名、故煩使者送至鼎度、恐失実見欺^[101]。

とあるように、罽賓が実際に漢に通商するために使者を使わせたからわざとその使者を国まで送る必要がないと、杜欽は大將軍王鳳を説いた。王鳳は杜欽の意見を受け入れて罽賓使を皮山だけに送った。ここからみると、遠い国に対して、漢はその王を擁立してもその国を統御することができなかった。

一方、西域都護が天山南北路を監護する役目を果たしたが、実際に西域大国、特にパミールにある国を直ちに統御することもできなかった。紀元前 11 年、漢と距離が遠いため傲慢な態度をとった康居に対して、

本匈奴盛時、非以兼有烏孫・康居故也；及其称臣妾、非以失二国也。漢雖皆受其質子、然三国内相輸遺、交通如故、亦相候司、見便則發；合不能相親信、離不能相臣役。

以今言之、結配烏孫竟未有益、反為中国生事。然烏孫既結在前、今与匈奴俱称臣、義不可距。而康居驕黠、訖不肯拜使者。都護吏至其国、坐之烏孫諸使下、王及貴人先飲食已、乃飲啗都護吏、故為無所省以夸旁国。以此度之、何故遣子入侍？其欲賈市為好、辞之詐也。匈奴百蛮大国、今事漢甚備、聞康居不拜、且使单于有自下之意、宜歸其侍子、絶勿復使、以章漢家不通無禮之國。敦煌・酒泉小郡及南道八国、給使者往來人馬驢橐駝食、皆苦之。空罷耗所過、送迎驕黠絶遠之國。非至計也^[102]。

とあるように、都護の郭舜は嘗て百蛮大国の匈奴すら康居と烏孫を統御できず、今康居が通商のために漢に納質・朝貢することを理由にし、質子を返して康居との外交関係を絶しようとして諫言した。この諫言は最後的に受け入れられず、漢は康居と羈縻関係を維持した。

第三節 新と匈奴との決裂から漢と匈奴との争覇までの対抗状態

成帝以降、漢は西域と匈奴に対して徐々に帝国化政策を施していった。だが、漢に臣服するかたちをとったとはいえ、匈奴と西域諸国（特に大国）は自国が漢の臣とは認めず、そのため漢による内政・外交への干渉を容認することが不可能であった。したがって、漢は対外政策を変化させなければ、システムの安定を保つことができなくなる。だが、王莽は漢を篡奪し新を建国した後、帝国化政策を再検討せず逆にいつそう強化し、西域と匈奴を新帝国に取り込もうとした。王莽は、宣帝以降の華夷混一にもとづいて漢と諸国を調和する対外政策の基調を変えて、天下の大一統の実現を通じて理想的帝国を目指した^[103]。したがって、王莽にとって、新の以外の諸国は理念上には新帝国の一部に過ぎず、

天無二日、土無二王、百王不易之道也。漢氏諸侯或称王、至于四夷亦如之、違於古典、繆於一統。其定諸侯王之号皆称公、及四夷僭号称王者皆更為侯^[104]。

とあるように、夷狄が王と称することを僭称とみなす。そのため、新は四方へ使者を遣わして夷狄を王から侯に格下げし、漢から与えられた印綬を変えていった。これをきっかけに、匈奴と西域諸国は地位が低下したため怨恨と叛心がいつそう激化した。

一 匈奴と新・漢との対抗

印綬を格下げされた後に、匈奴は漢に使者を派遣し抗議した後に漢に多めに賂遣されたため、すぐに漢と反目しなかった。その後、漢使は匈奴の左犁汗王の地を通る時、以前に匈奴に毛皮税を拒否したため拉致された烏桓人を発見し、左犁汗王にこれらの烏桓人を釈

放させようとした。漢は匈奴を臣として扱って、匈奴の内政にほしいままに干渉を加えることが露骨になった。したがって、新建国の翌年の紀元 10 年、匈奴は 64 年ぶりの辺境侵入を行なった。王莽は激怒し、軍事的には匈奴の罪を宣告して十二将軍に 30 万の軍で匈奴へ出征させようとし、政治的には呼韓邪の子孫の 15 人を単于として擁立しようとした。その後、新と匈奴は、長年漢に臣服した匈奴の中で王昭君の後代を中心にする親漢勢力が両国関係の緩和に努力していたため、大規模な戦争を行えなかったが、王莽が帝国化政策を堅持するため、短時間の緩和の後すぐに軍事的衝突に入った。この苦境を克服するために、王莽は単于擁立を試み、匈奴の大且渠の奢に自分の庶女の陸邊任を嫁して、軍事力で彼を単于に擁立しようとした。結局、王莽の単于擁立という茶番劇は内戦の中で実施されずに終わった。

玄漢が新を滅ぼして建国した後、匈奴に漢の旧制の璽綬を使者に送らせた。だが、この時、匈奴はその実力では漢よりも優勢なため、

匈奴本与漢為兄弟、匈奴中乱、孝宣皇帝輔立呼韓邪单于、故称臣以尊漢。今漢亦大乱、為王莽所篡、匈奴亦出兵擊莽、空其边境、令天下騷動思漢、莽卒以敗而漢復興、亦我力也、當復尊我^[105]。

とあるように、漢が匈奴の力を借りて王莽から国を奪還したことと呼韓邪が漢の力を借りて匈奴を統一したこととの性質が同じなので、前に匈奴が恩義のため漢を尊んだように、今は漢が匈奴を尊ぶべきだと主張した。結局、漢と匈奴との関係は決裂した。

その後、匈奴は後漢の建国初期に地方に割拠していた勢力を活かして、王莽の単于擁立を真似て盧芳を漢帝として擁立し、漢の地方軍閥としての彭寵に軍事支援を与え、漢の北辺に侵攻を加えた。盧芳にせよ、彭寵にせよ、いずれも北辺の地方勢力であり、匈奴と深い関係を持っていた。こうして、匈奴は漢の地方勢力を扶植することを通じて、漢に影響を伸張することを目指したとも考えられる。そして、匈奴は、協力者を自国に順服していた烏桓と鮮卑にし、両国を連れてほぼ何年にもわたって漢に侵入していた。その時、漢は南と東との割拠勢力を鎮圧・統一することに重心を置き、北辺に対する防衛が次第に緩んでいた。結局、「五郡民庶、家受其辜、至於郡県損壞、百姓流亡、辺陲蕭條、無復人跡」^[106]とあるように、漢の北境は軍事的騒乱によって荒れ果てた。内田吟風によると、この時、漢が対匈奴防衛線を南へ後退させたため、「当時の上谷・雁門・雲中・五原・朔方・北地等の諸郡は遂に後漢の防備線外に取り残されてしまったのである」^[107]。こうして、空いていた北辺が緩衝地帯として働いて、漢と匈奴は対峙状態になった。

二 新と決裂した西域の匈奴への臣服及び莎車の台頭

紀元 10 年、車師後国の狐蘭支が匈奴と協力して新を攻撃したことから西域諸国の反抗も始まった。だが、この時、新の西域支配は西域都護が機能していたため完全に喪失しなかった。紀元 13 年、王莽は烏孫を対匈奴陣営に引き込むため、慣例にしたがわず、大昆彌より強い小昆彌の使者を大昆彌の使者の上に座らせて、大昆彌と小昆彌との君臣関係を反転させた。礼ではなく利にしたがって西域諸国を遇したことは、「夷狄以中国有禮誼、故詘而服從」^[108]とあるように漢が礼にしたがうために漢に臣服した西域諸国にたいする權威を損ねた。その後、焉耆が叛き西域都護の但欽を殺したことをはじめとして、西域諸国は新と決裂した。匈奴との対立関係が表面的に緩和した新は西域都護の李崇などを西域に遣わして西域支配を回復しようとした。だが、李崇が焉耆の奇襲及び姑墨、尉犁、危須の攻撃を受けて、亀茲を退いて守りに入った。李崇の死によって、西域都護がなくなって、百年をかけて漸く実現した西域に対する支配が烏有に帰した。その後、「与中国遂絶、並復役属匈奴。匈奴斂税重刻、諸国不堪命」^[109]とあるように、匈奴は西域の権力真空を機に、西域諸国を再び勢力圏に組み込んで、以前のように経済的搾取を復活させた。

しかし、この時、西域の最強国の莎車は「匈奴单于因王莽之乱、略有西域、唯莎車王延最強、不肯附属」^[110]とあるように匈奴に服順せず、代わりに、漢に質子として長く暮らした莎車王の延が漢の典章制度を慕って国内に倣って、諸子に漢を世代で奉ずべきだと説教した。だが、匈奴と対抗するために、莎車は「康率傍国拒匈奴、擁衛故都護吏士妻子千余口、檄書河西、問中国動靜、自陳思慕漢家」^[111]とあるように漢に支持を求めた。紀元 29 年、軍閥の河西大將軍の竇融が漢の旧制にしたがって、康を漢莎車建功懷德王・西域大都尉と冊封した。この時、『後漢書』には「五十五国皆属焉」^[112]という後書きが冊封の後に付くが、当時漢がまだ内戦から手を離さなかったため、西域に対してほぼあまり影響を及ぼさず、康に冊封する西域大都尉を西域都護に比定して、西域都護の影響力を参考して莎車の影響力を推定したと考えられる。言い換えると、この時、莎車の影響は西域の五十五国に及ぼしたことではない。漢を後ろ盾にし、康の弟の賢は紀元 33 年に莎車王に即位し、拘彌と西夜を征服し、天山南路南道の西部を完全に勢力圏に組み込んだ。拡張政策の他、賢は漢と連合して匈奴に対抗する対外戦略を継承し、紀元 38 年に鄯善とともに漢に朝貢し漢との関係を固めて、紀元 41 年の朝貢の時に西域都護として冊封することを請うた。光武帝は最初にこの請求を許可し西域都護の印綬を莎車使者に渡したが、「夷狄不可假以

大権、又令諸国失望」^[113]とある敦煌太守の裴遵の諫言を受け入れ、西域都護の印綬を漢大將軍の印綬に変えた。「並護南北二道，故謂之都」^[114]とあるように、天山南、北二道を監護する西域都護の機能からみて、賢が西域都護に冊封してもらうのは莎車が天山南、北二道への拡張するためであった。西域都護に冊封されなくても、賢は西域諸国に対して大都護と詐称して、西域諸国に詔書を下して服従させ、西域諸国に単于と尊称された。

権威を立てた莎車は、服順しない国を攻撃しつつ、服順する国に重い税金を課していった。莎車を牽制するために、鄯善、車師前などの18国は紀元45年に漢に対し、納質と朝貢をして、漢が西域都護を設置することを請うた。だが、匈奴の攻撃に精一杯に対応していた漢は、質子を返して西域都護の設置を拒否した。これを知った賢は反抗し、鄯善、龜茲、鳩塞を撃ち滅ぼして、天山南路の南北二道を勢力圏に組み込んだ。強勢の莎車に対抗するために、鄯善などの天山南路南道の諸国は再び漢に納質して漢に西域都護を設置することを請うた。だが、光武帝は「今使者大兵未能得出、如諸国力不從心、東西南北自在也」^[115]とあるように冷たく拒否し、諸国に自らの活路を探させた。結果として、西域諸国は保護のため匈奴に再び臣服した。

ここに、一つの問題が現れた。すなわち、なぜ莎車は匈奴が西域に対する影響力を回復した後に台頭していったのだろうか。まず、匈奴と対抗することを對外政策の基調に決めた莎車王の延は、「元帝時，嘗為侍子，長於京師，慕樂中国，亦復參其典法」とあるように、王になる前に漢に質子として長年にわたって長安に生活し、その時、漢の「典法」を学んで、王になった後に莎車に漢の典章制度を移植した。莎車は元々オアシスでの都市国家であり、農業帝国の漢の制度を見習うことが適当だと考えられる。したがって、漢の先進の制度を通じて、国力をいっそう上げた背景に、莎車は匈奴と対抗する実力をある程度まで持っていた。だが、龜茲も同じくオアシスでの都市国家で、

後数來朝賀、樂漢衣服制度、歸其国、治宮室、作徼道周衛、出入傳呼、撞鐘鼓、如漢家儀。外国胡人皆曰：「驢非驢，馬非馬，若龜茲王，所謂羸也」^[116]。

とあるように、西域諸国の嘲笑をもたらした程に漢の典章制度を国内に直接に移植したが、新末から後漢初期までには匈奴に臣服しなければならなかった。これについて、莎車の台頭について地政学的条件を説明する。莎車は天山南路南道の西端に位置し、西域に対する匈奴の影響の中心地域としての天山北路と天山南路北道とはかなりの距離がある。したがって、匈奴は莎車までに進攻するためにはロジスティクス上の負担が重い。そして、匈奴は、元より天山南路南道にそれほどの利益を持つはずではなく、莎車が匈奴の利益を直接

に犯さなかったら、莎車に高コストの軍事攻撃を加える必要がないと考えられる。もちろん、一旦莎車が匈奴の利益を犯したら、匈奴は、紀元 47 年に亀茲の王を擁立し、軍事力で亀茲を守ったように、果敢に反撃を行った。一方、莎車は、その付近には千戸を持たぬ都市国家しかないため、莎車を牽制することができる国がなく、増加しつつあった国力をもって付近の都市国家を屈服させることが容易だったのだろう。

三 匈奴の南北分裂と北匈奴の西域拡張

呼都而尸道皋若鞮单于の輿は呼韓邪单于に決められた兄弟相続のルールを破って、子の烏達鞮侯に单于位を継承させるために、单于後継者としての左賢王の伊屠知牙師を殺した。呼韓邪による兄弟相続のルールは、必ずしも彼の全ての子に適用されるわけではなく、有力氏族の母の子だけに適用できる^[117]。こうして、この兄弟相続のルールは「匈奴の従来の制を無視した違法」^[118]であっても、国内の有力者（貴族）の支持を得て、実施された。したがって、呼韓邪による兄弟相続のルールに適用される最後の対象は漢を後ろ盾にする王昭君の子の伊屠知牙師である。しかし、この時、匈奴が漢と決裂したため、伊屠知牙師は外戚からの助けがなくなって殺されても大した波が立たなかった。こうして、紀元 46 年に輿が死んだ後、烏達鞮侯が单于になったがすぐ死去して、烏達鞮侯の弟の蒲奴が即位した。とは言え、この 77 年間続いてきた継承ルールの破壊は匈奴における各勢力間の矛盾を激化させた。一方、この時、匈奴は再び深刻な自然災害を被って、「匈奴中連年旱蝗、赤地数千里、草木盡枯、人畜飢疫、死耗太半」^[119]とあるように、極めて疲弊状態に陥り、したがって、漢に対して寇掠をやめて和親を請うた。

このような背景から、单于にならなかった右薁鞬日逐王の比は秘密裡に匈奴地図を進呈して漢に附そうとした。比の陰謀が暴露された後、蒲奴は比を攻撃しようとしたが、比の軍の数が多いため撤退した。蒲奴の撤兵は比の氣勢を助長した。翌年、比は八部大人に单于として擁立され、大父の呼韓邪单于の故事を継ぐために再び呼韓邪を号した後、漢に使者を遣わして、北の垣根として匈奴の攻撃から漢を防衛することを請うた。漢はその請求に同意して、比を呼韓邪单于として冊封した。結局、匈奴は再び分裂して、蒲奴单于が北匈奴に、呼韓邪单于が南匈奴になった。

注意すべきは、南匈奴と東匈奴とはその性質が根本的に異なることだ^[120]。光武帝時の呼韓邪单于の勢力は、宣帝時の呼韓邪单于より、単に匈奴の南の八つの郡を支配するため、圧倒的に弱い。そのため、稽侯狁が呼韓邪单于になったのは、左地貴人の擁立によってだ

け成立し、漢の冊封が必要ではない。代わりに、比は八部大人が擁立した後、漢の冊封による権威を借りて単于になった。このようにみると、比は、呼韓邪の故事を継いでいるというよりも、後漢初年に匈奴に擁立された漢帝盧芳の性格と似ている。そして、漢は比を呼韓邪単于に冊封した後、南匈奴を漢の北辺に移住させ^[121]、一連の政策を通じて南匈奴を渡邊義浩のいうような「体制内異民族」^[122]として統合し、属国的統治と同じように、内政に対しても相対的な自治権を与えたが、軍隊の駐在と使匈奴中郎将・度遼將軍など官僚機構の設置を通じて南匈奴の政務と軍務を統轄しながら、南匈奴の外交権を支配した。南匈奴に対する支配は第四章に詳しく説明するため、ここには割愛する。

烏桓が匈奴分裂を機に北匈奴に激しい攻撃を行った結果、北匈奴は「匈奴転北徙数千里、漠南地空」^[123]とあるように漠南から部衆を北へ転移した。漢は国力が完全に復興せず、防衛から攻撃に転じる能力がなかったため、北匈奴に対して離間策と以夷制夷策をとった。南匈奴を対北匈奴の最前線における防壁として働かせた他に、漢は北匈奴と反目した烏桓と鮮卑を引き込み、買収を通じて、烏桓と鮮卑に匈奴を攻撃させ、漢の辺塞の防衛の役目を任せた。結果として、「北虜遠遁、中国少事」^[124]とあるように、漢の北・東北の辺境は北匈奴の北への移動によって平和になった。

北匈奴は、漢が南匈奴と烏桓・鮮卑と連携して自国を攻撃することを憚って、漢に緩和政策を実施し、紀元 51 年、紀元 52 年と紀元 55 年の再三にわたって朝貢して和親を請うた。後に明帝になる皇太子は

南单于新附、北虜懼於見伐、故傾耳而聽、争欲歸義耳。今未能出兵、而反交通北虜、

臣恐南单于將有二心、北虜降者且不復來矣^[125]。

とあるように、以夷制夷策の視角から、北匈奴との緩和が南匈奴を反離させるため、これを拒否すべきだと諫言した。光武帝はこの諫言を受け入れ、北匈奴の和親要求を拒否した。このように、漢と北匈奴との間は、和親関係に戻らなかったが、互いに軍事的行動を行わなかったため、共存状態に入った。

だが、注意すべきは、紀元 52 年の北匈奴の朝貢のとき、西域諸国の胡客が匈奴の使者に連れられて漢に來たことである。今回の朝貢は匈奴が西域における影響力の強さを西域諸国の胡客を同行させることで漢に示した。実際に、匈奴は漠南の地から北へ移動した後、南匈奴と烏桓・鮮卑による漠南の防衛線に南下することができなくなって、新たな経済的補充を確保するために、間も無く西域攻略を再開した。北匈奴が西域に攻略を再開する前に、莎車は天山南路南道の西部に対しては將軍を駐在・統治させる直接支配、天山南路南

道の東部および天山南路北路の西部に対しては自国の貴人を王として擁立しその国を統治させる間接支配、そしてパミールおよび天山北路の南部分に対しては匈奴における税金と同じ様にその国に貢納物を納めさせる経済上の藩属関係、という三つの統治方法をとって西域に台頭した。経済的搾取を強要し安全保障上の支援を与える匈奴の支配と比べると、莎車の支配は経済的搾取がより重く、他国に対する干渉がより直接かつ横暴であった。その中でも、直接的支配を受けていた天山南路南道西部の諸国は最も甚だしい害を受けた。そのため、反莎車の動きは天山南路南道西部の于闐の反抗から始まった。北匈奴は、天山南路南道の反莎車闘争の成果を奪ったことを通じて、天山南路南道の西部までに影響を及ぼした。莎車の没落と同時に、鄯善は天山南路南道の東部にある小宛・精絶・戎廬・且末を、車師が天山北路の東部に位置する郁立・単桓・孤胡・烏貪訾離を併合した。こうして、于闐・鄯善、車師、龜茲の台頭により、天山北路と天山南路南、北道には、中心的な地位を得た大国が西域を分割した。だが、これらの大国は、龜茲のように北匈奴に国王を擁立されたり、鄯善と車師のように北匈奴に附したり、于闐のように北匈奴に納質と賂遺の協約を結んだりする形で、北匈奴の影響を強く受けていた。結局、北匈奴は、ハブ・アンド・スポークの支配を形成させて、車師を通じて天山北路を、龜茲を通じて天山南路北道を、于闐と鄯善を通じて天山南路南道を確保し、西域を覆う覇権に組み込んだ。

四 漢と北匈奴との争覇の決着

1 世紀 50 年代には北匈奴は戦略の中心を西域に転じて、西域諸国を勢力圏に組み込もうとした一方、漢は匈奴の攻撃を防衛するために以夷制夷策をとって南匈奴と烏丸・鮮卑に漠南にある北匈奴との緩衝地帯に辺塞の防衛任務を任せて内戦による国内の疲弊を治すために国力回復政策を行っていた。結局、漢と北匈奴は和親をせず共存状態に入った。60 年代に入っても無く、西域に対する経済的搾取を背景に、北匈奴は早めに国力を回復し、再び漠南に向かっていった。紀元 62 年、北匈奴は分裂以後に初めて漢に侵攻を行い、五原塞を打ち破った後で雲中と原陽との一帯を寇掠して、最後、南匈奴の抵抗と漢軍の増援のため撤退した。だが、これを境にして、北匈奴は漢の辺境に対する寇掠を続けていた。北匈奴の侵攻に対して、明帝は、光武帝の対北匈奴政策を変えて、北匈奴の開市再開の要求を機にして、北匈奴と緩和関係を結び、一方、辺郡に増兵し人民を移住させて、辺境の防衛を固めた。だが、明帝が太子の時に言った通り、北匈奴と関係を緩和したら、南匈奴は疑心を起こし、北匈奴に投降しようとする勢力が現れた。これを察した漢は、南匈奴に対

する支配を強化するために度遼營を設置し、北匈奴と南匈奴との交通を遮断させた。一方、漢は、辺郡に増兵し人民を移住させて、辺境の防衛を固めた。結局、北匈奴と漢は、関市を通じて一定の交流を維持しながら、軍事的対峙を続けた。

70年代に入って、漢が疲弊からほぼ回復したことを背景に、明帝は「時天下又安、帝欲遵武帝故事、擊匈奴、通西域、以固明習辺事」^[126]とあるように武帝の拡張政策を継承し、再び匈奴と対決し西域を勢力圏に取り戻そうとし、紀元73年に竇固に北匈奴征伐を命じた。北匈奴征伐によって漢の西北辺境と北境の付近にいる北匈奴の軍事的存在を一掃した。烏丸と鮮卑に賄賂で東北辺境の安全を任せたことに加えて、漢は基本的に北匈奴からの軍事的脅威を完全に払拭した。一方、漢は車師を陥落させて天山北路への進出のための拠点を確認し、二回遣使を通じて天山南路南道の諸国を屈服させたことを通じて、西域都護と戊己校尉の復活に象徴されるように西域攻略で一定の成果を収めた。

しかし、匈奴は、対立が緩和されたにもかかわらず漢が宣戦なく開戦したため、すぐに軍事的準備を整えることができず敗戦を喫したが、紀元75年に竇固が主力を率いて撤兵したことを機に、車師争奪戦を始めた。漢軍は金蒲城と疏勒城との戦いで匈奴の攻撃を撃退したが、軍事力の差のために、匈奴に囲われていた。さらに、明帝の死亡が天山北路にある焉耆と天山南路北道にある龜茲を刺激して漢に対する反抗をもたらした。結局、匈奴と焉耆、龜茲などの西域諸国の攻勢の前に、漢は西域都護と戊己校尉をやめて西域攻略の成果を自ら放棄し、西域攻略の失敗を告げた。紀元77年、匈奴は漢が撤兵した伊吾に駐軍して漢からの攻撃に対する前線基地を立てた。

だが、漢の西域攻略が完全に停止したわけではなく、西域に滞在していた班超は独力で疏勒の臣服、姑墨の陥落、康居との協力などの夥しい成果を収め、西域攻略の戦略を定めた。班超の西域攻略に対する戦略は、

「臣竊見先帝欲開西域、故北擊匈奴、西使外国、鄯善・于闐即時向化。今拘彌・莎車・疏勒・月氏・烏孫・康居復願帰附、欲共并力破滅龜茲、平通漢道。若得龜茲、則西域未服者百分之一耳。臣伏自惟念、卒伍小吏、實願從谷吉效命絶域、庶幾張騫奔身曠野。昔魏絳列国大夫、尚能和輯諸戎、況臣奉大漢之威、而無鉛刀一割之用乎？前世議者皆曰取三十六国、号為断匈奴右臂。今西域諸国、自日之所入、莫不向化、大小欣欣、貢奉不絶、唯焉耆・龜茲独未服從。臣前与官属三十六人奉使絶域、備遭艱阯。自孤守疏勒、於今五載、胡夷情数、臣頗識之。問其城郭小大、皆言『倚漢与依天等』。以是效之、則葱嶺可通、葱嶺通則龜茲可伐。今宜拜龜茲侍子白霸為其国王、以步騎数百

送之、与諸国連兵、歲月之間、龜茲可禽。以夷狄攻夷狄、計之善者也。臣見莎車・疏勒田地肥広、草牧饒衍、不比敦煌・鄯善間也、兵可不費中国而粮食自足。且姑墨・溫宿二王、特為龜茲所置、既非其種、更相厭苦、其執必有降反。若二国來降、則龜茲自破^[127]。

とあるように、西域に漢に対抗する国家が少ないことを背景に、龜茲攻略を西域攻略の中心にし、龜茲を臣服するために、パミールの諸国と協力すること、龜茲の質子を国王として擁立し龜茲を攻撃させること、及び龜茲に支配された姑墨と溫宿を降服させることを必要にする。章帝の同意を得た班超は西域攻略を次第に展開した。決定的な成果を得たのは紀元 87 年に班超が龜茲の発した溫宿・姑墨・尉頭の 5 万の援軍を受けた莎車を撃破し投降させたことである。その後、「龜茲等因各退散、自是威震西域」^[128]とあるように、班超は軍事力で西域に権威を樹立し、未来の西域攻略に対して準備を整えた。

80 年代に入った後、旱害と蝗害による飢餓と南匈奴、烏丸、鮮卑による襲撃を受けつつあった北匈奴からは、数多くの部族が頻繁に漢に投降した。紀元 88 年、南匈奴は、北匈奴の惨況を機に匈奴を統一するために、称制する竇太后に北匈奴征伐を提案した。竇太后は朝廷の反対を無視し、南匈奴の動議に同意し、竇憲を主帥に任命して、北匈奴征伐を始めた。竇憲の北匈奴征伐は空前の成功を収め、四次の攻勢を通じて壊滅的な打撃を北匈奴に与えた。北单于是北方に亡命して行方不明になり、彼の弟の右谷蠡王の于除鞬は漢に投降して单于として擁立した後、叛いて北庭に戻ったことを理由として、漢において部衆とともに殺された。北单于の行方は、「明年、北单于為耿夔所破、遁走烏孫、塞北地空、余部不知所属」^[129]とあるように、『後漢書・袁安伝』に烏孫と記録された。実際に次の節に説明したように、北匈奴の残存勢力が天山北路に割拠したことから見ると、北单于が烏孫に亡命したことには間違いない^[130]。漠北は北匈奴が退いたため権力が真空状態になった。これを機に、「鮮卑因此転徙拋其地。匈奴余种留者尚有十余万落、皆自号鮮卑、鮮卑由此漸盛」^[131]とあるように、鮮卑は漠北に移住してそこに残る匈奴人を吸収して、台頭の軌道に乗った。これによって、南匈奴の匈奴統一の可能性が根本から絶えた。こうして、三百年以上続いた匈奴は、西域で活動していた北匈奴の残存勢力と漢に吸収された南匈奴がまだ存在してはいたが、漢と覇権を争うことができる帝国としては完全に滅びた。

北匈奴の滅亡が予測されるようになると、西域諸国は次第に北匈奴に叛き、漢に臣服を示していった。漢が伊吾を奪回した後、天山北路の車師はすぐ漢に質子を送って臣服して、漢から印綬を与えられた。翌年、天山南路の龜茲・姑墨・溫宿も投降した。これによって、

漢は西域都護と戊己校尉官を復活させた。最後に、紀元 94 年、西域都護の班超は龜茲・鄯善などの八国の兵を發してまだ漢に臣服していなかった焉耆と尉犁を屈服させた。こうして、西域諸国は漢と対抗するための援助を北匈奴に求めることができなくなった後、「西域五十余国悉皆納質内属焉」^[132]とあるように漢の覇権に組み込まれた。

第四節 漢による単極時代

東部ユーラシアには、300 年近く漢と匈奴が漠南と西域をめぐる争覇は、北匈奴の滅亡によって、漢の完全な勝利を告げた。北匈奴の滅亡を境に、東部ユーラシアは、漢が南匈奴の統一を拒否し、漠北の地を占領した鮮卑が部族段階にあつて漢と対抗できなかったため、漢と（北）匈奴による二極構造から漢による単極構造になった。

一 漢の西域撤退と西域攻略再開

漢は、班超が西域都護になった 12 年間に西域における覇権をうまく維持した。このような成功は、「塞外吏士、本非孝子順孫、皆以罪過徙補辺屯。而蛮夷懷鳥獸之心、難養易敗。今君性嚴急、水清無大魚、察政不得下和。宜蕩佚簡易、寬小過、綏大綱而已」^[133]とあるように、班超の西域対応策の柔軟性及び寛容性によることである。だが、「寬小過」と「綏大綱」との限界がはっきりされる。車師後国に対する討伐の例をとって漢の対西域政策を説明する。紀元 96 年、戊己校尉の索輿は車師後王の涿鞬を廢位させて、破虜侯の細致を擁立しようとした。涿鞬はこれを車師前王の尉卑大の裏切りとみなして、彼を攻撃した。翌年、漢は車師後を討伐して、北匈奴に亡命しようとした涿鞬を捕らえて殺した後、彼の弟の農奇を車師後として擁立した。班超の言葉と合わせてみると、漢は、この時、軍事力で西域に覇権を樹立したが、基本的に不干渉的政策あるいは西域諸国に堀敏一のいうルーズな支配を行っていた。一旦ある国が西域の秩序を壊して紛争を起こったら、直接に干渉して状態悪化及び威信損失を防止することは必ず行なった。そして、班超の任期には、漢は大秦と呼ばれるローマ帝国にも甘英を使者として遣わして、距離の遠さため到着はしなかったが、パミールを超えて東部ユーラシア以外の世界との繋がりを開始した成果もあった。しかし、漢とローマとの相互作用は稀な貴重品貿易のレベルに留まって、システムから見ると大した意味がないため、ユーラシア・システムは形成されなかった。

しかし、紀元 106 年に班超を引き継ぐ任尚は赴任した後、班超の勸告を無視し、西域に

対して不干渉政策をやめて西域諸国の反抗を招いた。数月の戦いの後、漢軍が勝利したが、「公卿議者以為西域阻遠、數有背叛、吏士屯田、其費無已」^[134]とあるように、漢は、距離の遠さ、反乱の頻繁さ及び財政負担の重さのため、西域を放棄した。実際に、漢の西域放棄は、「会間者羌乱、西域復絶」^[135]とあるように、国内異民族、特に羌の反乱にも関わる。この時、漢の異民族統治強化の副作用として、異民族の反乱が激しく起こった。その中で、漢が羌人の地を蚕食しつつあった結果として多くの羌の部族が漢に移住し、漢の国内異民族になった。したがって、羌乱は塞外の羌人と塞内の羌人との連携という形で外患から内憂になった。紀元 92 年から紀元 102 年までの 10 年間続いた羌乱を漸く鎮圧した漢は、西域の反抗に対して一時的に反応不能になった。そして、西域への進出にとって出発点としての并・涼二州は、羌乱のために、荒涼になった。ここから西域に補充を与えることができなくなって、中央と西域との連絡が中断される恐れもあった。また、鮮卑が漠北の地を占領した後、その一部の部族が蘇拔廆の統領で漢に寇掠をし続けた。鮮卑は、元々北匈奴を攻撃することで漢から賞賜を得ることを通じて経済的補充ができたが、北匈奴の滅国によって軍事行動による賞賜がなくなった。その代わりに、羌乱を蒙っていた漢を寇掠することが好ましくなった。そのほか、鮮卑が漢に侵攻することは鮮卑に投降に来た大勢の匈奴人を統一するためだと、バーフィールドは指摘する^[136]。内憂外患を蒙った漢は紀元 107 年に西域都護を放棄し、西域から一時的に撤退した。

漢の西域撤退を知った北匈奴の敗残勢力はすぐ西域に進出し、車師を屈服させたことを通じて天山北路の東部に勢力を振るった。一方、漢の勢力がなくなった後、西域の大国が次第に勢力の拡張を目指すようになり、于闐を中心とする天山南路南道の中部、莎車あるいは疏勒を中心とする天山南路南道の西部、そして亀茲を中心とする天山南路北道という三つの勢力圏が現れた。だが、『後漢書』によると、「初、西域諸国既絶於漢、北匈奴復以兵威役属之、与共為辺寇」^[137]とあるように、北匈奴は再び西域諸国を勢力圏に組み込んだ。もっともこれは記録上の間違いと考えられる。まず、この時の北匈奴は遊牧地域を完全に失って、西域を全て勢力圏に取り込むほどの実力を持ったのか疑わしい。次に、紀元 123 年に西域攻略再開をめぐって行われた議論は其中で北匈奴の勢力範囲に触れた。敦煌太守の張璠は、「北虜呼衍王常展轉蒲類・秦海之間」^[138]とあるように、北匈奴の活動範囲を蒲類と秦海の間に説明した。この地域は基本的に前漢の蒲類六国の地域であり、後漢には車師後の拡張によって車師六国になった^[139]。さらに尚書の陳忠は、「今北虜已破車師、執必南攻鄯善、弃而不救、則諸從矣」^[140]とあるように、北匈奴の次の拡張対象を鄯善と判断

した。最後に、歴史の記録では、北匈奴とともに、漢に侵攻を行い、漢の西域攻略に抵抗したのは車師六国を支配した車師後国だけである。そうであるとする、「北匈奴復以兵威役属之」の対象は西域諸国ではなく、北匈奴の敗残勢力に近い天山北路の東端での車師後をはじめとする車師六国だと考えられる。

漢は北匈奴と車師後による河西への侵攻を何年にもわたって受けていた。安全保障のために、敦煌太守の曹宗は紀元 119 年に伊吾に索班を屯田させて、西域諸国に投降帰順を勧めた。間もなく、車師前と鄯善が臣服に来た。数ヶ月後、北匈奴は車師後とともに索班を攻め殺して、車師前王を捕らえた。危険を感じた鄯善王が曹宗に軍事的援助を求めた。しかし、班超の子の班勇は、

今曹宗徒恥於前負、欲報雪匈奴、而不尋出兵故事、未度當時之宜也。夫要功荒外、万無一成、若兵連禍結、悔無及已。況今府藏未充、師無後繼、是示弱於遠夷、暴短於海内、臣愚以為不可許也。旧敦煌郡有營兵三百人、今宜復之、復置護西域副校尉、居於敦煌、如永元故事。又宜遣西域長史將五百人屯樓蘭、西當焉耆・龜茲徑路、南疆鄯善、于闐心膽、北扞匈奴、東近敦煌^[141]。

とあるように、曹宗の目的を復讐と考え、羌乱による財政及び軍力の枯渇を理由にして出兵に反対して、代わりに敦煌に西域副校尉を設置して、天山南路の出発点にある楼蘭に西域長史を屯田させる対策を提案した。実際、この時、漢は東北の辺境に対する鮮卑の連続の侵攻に苦しんでいた。要するに、羌乱、鮮卑の侵攻と北匈奴攻撃という三線作戦が不合理なため、北匈奴に進攻しなかった。紀元 123 年、漢は羌乱の後始末をし、班勇を西域長史にして西域攻略の再開を命じた。ここに注意すべきは漢が西域に西域都護を復活せず、西域都護の部下としての西域長史だけを設置した。ここから見ると、漢にとって、西域の重要性が明らかに減少したのではないか。班勇の西域攻略は、天山南路に対して外交行動を中心にするのに反して、天山北路に対して軍事行動を中心とした。班勇は紀元 124 年に懐柔策で鄯善と龜茲を臣服させて天山南路を勢力圏に取り戻し、その後、2 年にわたって、北匈奴の敗残勢力を撃退させて天山北路東部の拠点を取り戻し、天山南路諸国を連れて車師後と焉耆を征服し、天山北路の東部と中部をも勢力圏に取り戻した。その後、漢は西域に対する進出の確保のために、紀元 131 年に伊吾での屯田を復活させて、伊吾司馬を設置した。

西域に対する支配を確保するために、漢は北匈奴の敗残勢力と断続的に戦い、紀元 135 年から紀元 136 年まで北匈奴の呼衍王が車師後を攻撃したことをきっかけに呼衍王を誅殺

し^[142]、紀元 151 年に伊吾の屯田に対する北匈奴の侵攻を撃退した。紀元 155 年、次の説明のように、鮮卑の檀石槐の台頭によって、北匈奴は西域における拠点が占領されて、止むを得ずパミールまでに西遷して、結局、永遠的に西域から退場したのだった。

二 鮮卑の台頭

鮮卑は匈奴の地を吸収した後、漢に侵攻を加えていた。だが、紀元 107 年、鮮卑の大人の燕荔陽が漢に朝貢・朝覲して、印綬を与えられ、関市を開くことに同意を得た。その時、鮮卑はまだ部族段階にあって、各部族を統領する君主がないため、部族を単位に質子を送っていた。数多い鮮卑質子の配置のために、漢は烏桓校尉の所在の寧城に南北質館を築いた。これを境にして、鮮卑による侵攻が一時的に停止したが、「是後或降或畔、与匈奴・烏桓更相攻撃」^[143]とあるように、漢に臣服した鮮卑は、時に叛いたり、匈奴と烏桓と戦い合ったりした。

しかし、紀元 115 年から幽州の外にある鮮卑は漢に攻撃を再開した。紀元 120 年、遼西鮮卑の大人の烏倫と其至鞬は漢に投降に来て、それぞれ率衆王と率衆侯として冊封された。以前に燕荔陽を冊封した後に鮮卑の侵攻が停止したこととは異なっている。烏倫と其至鞬が多分平等関係であるが、其至鞬は、漢の冊封によって烏倫が自分より上位になったことで恨みが生まれるためか、翌年に叛いた。紀元 121 年から紀元 133 年までの 12 年間、其至鞬はほぼ毎年幽州を寇掠してきた。この時、漢は西域攻略に集中していたために、鮮卑に攻撃をせず、辺塞を修繕・設置したり、罪人を兵として幽州に派遣したり、弓の作戦に優れた鮮卑と対抗するために弓の訓練を要求したりする防衛策のみをとった。漢の防衛の強化のため、其至鞬の侵攻が徐々に弱まった。西域攻略の成功の後の紀元 131 年から紀元 133 年まで、漢は鮮卑に毎年反撃を行って、少なからぬ損失を与えた。結局、紀元 133 年、其至鞬の死を境に、鮮卑の脅威が消えた。

2 世紀 50 年代に入った後、鮮卑は檀石槐の統領で部族同盟の形で統一を実現した後、南の漢の辺境、北の丁令、東の夫余、西の烏孫を攻撃することを通じて台頭した。だが、この時の鮮卑は匈奴のように帝国を建てたのではなく、依然として部族同盟という国家形態をとった。しかし、蘇拔廆・燕荔陽・其至鞬とは異なって、檀石槐は、幽州の付近の鮮卑だけではなく、「東西部大人皆歸焉」^[144]とあるように鮮卑全体に君臨して、さらに、部族同盟を超えて国家組織を建てるために、匈奴に倣って、鮮卑の地を東・中・西三部に分けて各部に自分に属する大人を設置した。だが、鮮卑の部族同盟の結成は各部族が自発的に

行った結果なので^[145]、檀石槐は鮮卑を一つに統合させたものの、部族同盟を基礎に分割統治を行った^[146]。すなわち、檀石槐は各部族に直接に干渉することができず、基本的に三部の大人を通じて命令を下す形で鮮卑を統べた。さらに、三部の大人も同じく各部の部族に直接に干渉することができず、部族のリーダーとしての渠帥を通じて檀石槐の命令を伝えた。もしそうであるとすると、檀石槐の統一した鮮卑は、対外的に、特に軍事的に集団的行動を行う側面からみると国家になったともいえるが、対内的には依然として部族同盟に他ならず、変わったのはその範囲が鮮卑の一部分から全体にまで及ぶようになったことだと思われる。

問題は、対外行動において、軍事面以外で、檀石槐が鮮卑全体を代表して漢と外交を行うことができるかどうかである。鮮卑が絶えず漢の北辺を寇掠したことで、漢は厳しい安全保障上の脅威を受けた。そのため、檀石槐を冊封する意味をもつ印綬を使匈奴中郎將の張奐に持たせ鮮卑に派遣した。しかし檀石槐は印綬を受け入れず、和睦を拒否した。その後、檀石槐の国家建設が始まったのだった。この事例からは、二つの点を指摘することができる。檀石槐が漢の印綬を拒否したのは、匈奴の単于とは異なって、彼が軍事面以外の利益の分配に対する独占権を持たず、十分に強い権力を持っていなかったことを意味する^[147]。したがって、ひとたび漢と和睦したら、檀石槐は鮮卑の各部族がそれぞれ独自に漢から賞賜を得ることを禁じることができなくなり、このことでさらに自らの権威が失われていくというディレンマを抱えていた。他方で、漢との戦争状態を維持するなら、檀石槐は軍事行動に参加する部族を決める権力を持つことになり、そのことによって権威を強化することができた。檀石槐は、自らの限界を理解し、戦争状態を維持することで権威を強化し、匈奴に倣って国家建設を行った。外交的に言えば、檀石槐が外交的に鮮卑全体を代表することは、自身の権力を掘り崩すことになるがゆえに、印綬も和睦も拒否することになった。このように考えてくると、結局のところ、鮮卑には鮮卑全体を代表する実力が欠けていたと考えることができるのである。

三 東部ユーラシアの解体

漢は西域に覇権を復活させる時、同時に「烏孫・葱嶺已西遂絶」^[148]とあるように、その影響が天山北路の中部（すなわち焉耆）で中断され、天山北路の西部及びパミールには及ばなくなった。その後、烏孫とパミールの西の諸国についての叙述が史籍から消えたことからみて、東部ユーラシアの解体がこの時点から始まったと考えられる。一方、漢は西域

に覇権を復活したものの、内憂の羌乱と外患の鮮卑侵攻に軍事力を甚だしく消耗し、西域に有効かつ十分な戦力投入が次第にできなくなっていったため、紀元 132 年以降、「自陽嘉以後、朝威稍損、諸国驕放、転相陵伐」^[149]とあるように、西域に対する権威を失った。西域諸国は漢に憚らず互いに戦っていた。その後、漢が西域に対してその覇権を振るうことが有効だと考えられなくなったとは言え、西域長史が存在したため、漢は西域諸国に対して一定の権威を基礎に影響力を発揮していた。しかし、この時、敦煌太守が西域の事務を担当し、西域長史と戊校尉が敦煌太守に隷属した^[150]。したがって、漢は西域に対する影響を大部収縮した。その後、漢は紀元 159 年から紀元 169 年まで、東西羌の合流による第四次大規模羌乱を被って、西域へ進出の交通中枢としての涼州に対する管轄が緩くなったため、西域との繋がりも次第に中断されていった。史籍から見て漢と西域との相互作用は稀になって、システムを維持させる程にも達しなかったため、西域と農耕地域を一つのシステムとみなすことができなくなったと考えられる。

一方、鮮卑は、檀石槐の個人的権威で部族同盟を維持したため、紀元 181 年の檀石槐の死の後、その部族同盟は次第に崩壊し、部族からなる部を政治単位として解体した。その後、遊牧地域を統合する勢力の消失によって、漠南における部（例えば歩度根の部族）は漢と隣り合うため漢との相互作用を続けていたが、漠北における部は漠南の部の遮断によって南下することができなくなって、次第に漢との相互作用が絶えた。結局、遊牧地域の多くは、鮮卑の解体によって、東部ユーラシアにおける他の地域との相互作用が中断し、東部ユーラシアから離脱して独立した地域的システムとして機能したことになると考えられる。

最後に、漢は檀石槐の死の後に鮮卑の侵攻が消えたが、内部問題の激化のために崩壊した。地方では、後漢に入った後、漢の異民族支配の強化のため、異民族の反乱が絶えず起きていた。反乱の戦火は北辺の幽州・并州・涼州、西辺の益州及び南辺の荊州・交州に広がっていた。中央には、外戚、士大夫（党人）、宦官という三つの勢力が次第に形成され、権力をめぐって残酷な闘争を行っていた。腐敗した政府の統治の中で、漢人も残酷な搾取を受け、天災による飢饉をきっかけに多くの蜂起が起こっていた。2 世紀 80 年代に入った後、紀元 184 年に農民蜂起に始まる黄巾の乱、紀元 184 年から紀元 188 年までの羌族と漢人による第五次羌乱、及び紀元 187 年から紀元 189 年までの漢人と烏桓による張純の乱などの大規模反乱が発生する中で、漢では中央政府が次第に機能不能になって、軍権を基礎にする地方軍閥が割拠して戦い合っていた。その結果、農耕地域は軍閥による戦争の中

で解体していった。

結局、東部ユーラシア国際システムは、河西回廊の開通から 300 年以上をかけて、最初
は西域、次は遊牧地域、最後は農耕地域がシステムから離脱する形で、次第に崩壊してい
った。その後、西域、遊牧地域、農耕地域が地域的システムとして他の地域から相対的に
孤立し、自己完結的に動くに至った。

註：

- [1] 小林惣八「前漢に於ける匈奴帝国の内部分裂について」『駒沢史学』第 17 号, 1970 年, 55 頁
- [2] 陳序經『匈奴史稿』中国人民大学出版社, 2007 年, 248 頁
- [3] 『漢書』卷 94 上, 中華書局, 1964 年, 2770 頁
- [4] 『漢書』卷 61, 2691 頁
- [5] 『漢書』卷 55, 2492 頁
- [6] 『漢書』卷 96 上, 3873 頁
- [7] 河西四郡の設置の順序及び時代に関して、一致の意見がない。一般的に言えば、武帝期には、酒泉の設置の後に、酒泉の西の敦煌と東の張掖が前後に設置され、宣帝期には、張掖の東の武威が設置される（日比野丈夫「河西四郡の成立について」日比野丈夫『中国歴史地理研究』同朋舎, 1977 年 [初出 1954 年], 69-92 頁; 周振鶴『西漢政區地理』人民出版社, 1987 年, 157-171 頁）。一方、李炳泉は武帝期に河西四郡が全て設置されたと考える（李炳泉「西漢河西四郡の始置年代及疆域変遷」『東嶽論叢』第 12 期, 2013 年）。
- [8] 熊谷滋三「前漢における属国制の形成-『五属国』の問題を中心として-」『史観』第 134 冊, 1996 年, 30-31 頁
- [9] 高栄『河西通史』天津古籍出版社, 2011 年, 68-72 頁
- [10] 『後漢書』卷 87, 中華書局, 1965 年, 2876 頁
- [11] 『晋書』卷 14, 中華書局, 1974 年, 432 頁
- [12] 『後漢書』卷 47, 1575 頁
- [13] 『漢書』卷 94 上, 3771 頁
- [14] 『漢書』卷 94 上, 3773 頁
- [15] 『漢書』卷 94 上, 3772 頁
- [16] 『漢書』卷 94 上, 3771 頁
- [17] 『漢書』卷 24 上, 1137 頁
- [18] 『漢書』卷 94 上, 3771 頁
- [19] 小林惣八「武帝の對外政策--衛青・霍去病の匈奴対策」『駒沢史学』第 19 号, 1972 年, 62 頁
- [20] 翦伯贊『秦漢史』北京大学出版社, 1999 年, 163-170 頁
- [21] 『漢書』卷 61, 2691-2692 頁
- [22] T. W. Crawford: "Preventing Enemy Coalitions: How Wedge Strategies Shape Power Politics," *International Security* 35(4), 2011, pp. 164-167
- [23] 『漢書』卷 61, 2693 頁
- [24] 『漢書』卷 61, 2695 頁
- [25] 『漢書』卷 96 上, 3876 頁
- [26] 『漢書』卷 61, 2695 頁
- [27] 『後漢書』卷 87, 2876 頁

- [28] 『漢書』卷 96 下, 3902 頁
- [29] 手塚隆義「烏孫の国内事情と西域都護の成立」『史苑』第 14 卷第 1 号, 1941 年, 23-25 頁
- [30] 『漢書』卷 61, 2703 頁
- [31] 大河内隆「前漢の西域進出と烏孫の動向-漢の烏孫支配に関連して-」『史叢』第 26 号, 1980 年, 31 頁
- [32] 『漢書』卷 94 上, 3774 頁
- [33] 『漢書』卷 61, 2703 頁
- [34] 『漢書』卷 96 上, 3873 頁
- [35] 『漢書』卷 61, 2703 頁
- [36] 『漢書』卷 96 下, 3916 頁
- [37] 『漢書』卷 96 上, 3877 頁
- [38] 『漢書』卷 94 上, 3777 頁
- [39] 陳勝武「漢武帝時期漢匈戦争双方戦略運用比較」『軍事歴史研究』2011 年, 第 2 期, 111-113 頁
- [40] 台湾三軍大学編『中国歴代戦争史 第三冊』1983 年, 軍事訳文出版社, 200-202 頁
- [41] 『漢書』卷 94 上, 3780 頁
- [42] 『漢書』卷 94 上, 3773 頁
- [43] 『漢書』卷 94 上, 3781 頁
- [44] S. K. Psarras: “Han and Xiongnu: A reexamination of cultural and political relations (II),” *Monumenta Serica* 52(1), 2004, p. 38
- [45] 中川祐志「前漢期対匈奴政策: 宣帝期を中心として」『ゆけむり史学』第 8 号, 2014 年, 10 頁
- [46] 『漢書』卷 94 上, 3787 頁
- [47] 『漢書』卷 96 下, 3923 頁
- [48] 『漢書』卷 96 上, 3873 頁
- [49] 嶋崎昌「姑師と車師前後王国」『中央大学文学部紀要』第 41 号, 1966 年, 51-65 頁
- [50] 竺可楨「中国近五千年來氣候變遷的初步研究」『考古學報』第 1 期, 1972 年, 21、35-38 頁
- [51] 『漢書』卷 94 上, 3787 頁
- [52] 『漢書』卷 94 上, 3788 頁
- [53] 内田吟風「古代遊牧民族の農耕国家侵入の真因-特に匈奴史上より見たる-」内田吟風『北アジア史研究-匈奴篇-』1975 年〔初出 1955 年〕, 同朋舎, 21 頁
- [54] 巴菲爾德著、袁劍訳『危險的边疆: 遊牧帝国与中国』江蘇人民出版社, 2011 年, 51-52 頁
- [55] 烏恩岳斯図『北方草原考古学文化比較研究—青銅時代至早期匈奴時期』科学出版社, 2008 年, 346-350 頁
- [56] 小林惣八「前漢に於ける匈奴帝国の内部分裂について」63-66 頁
- [57] 『漢書』卷 78, 3279-3280 頁
- [58] 『漢書』卷 94 下, 3797 頁
- [59] 『漢書』卷 94 下, 3797 頁
- [60] 『漢書』卷 78, 3282 頁
- [61] 『漢書』卷 78, 3282 頁
- [62] 渡邊義浩「兩漢における華夷思想の展開」渡邊義浩編『兩漢儒教の新研究』汲古書院, 2008 年, 429-434 頁
- [63] 『漢書』卷 78, 3282-3283 頁
- [64] 『後漢書』卷 89, 2966 頁
- [65] 呼韓邪の称臣の時間に関して、岡安勇は四年前の紀元前 55 年に推定する。(岡安勇「匈奴呼韓邪単于の対漢『称臣』年代について」『東方学』第 80 号, 1990 年)

- [66] 岡安勇「中国古代における『客礼』の礼遇形式-匈奴呼韓邪単于への礼遇を手掛りとして-」『東方学』第74号, 1987年, 30-42頁
- [67] 好並隆司「『称臣而不名』再考」『史学研究』第233号, 2001年, 34-35頁
- [68] 巴菲爾德『危險的边疆：游牧帝国与中国』79-85頁
- [69] 栗原朋信「文献にあらわれたる秦漢璽印の研究」『秦漢史の研究』吉川弘文館, 1960年, 229-242頁
- [70] 劉瑞「秦、西漢的『内臣』与『外臣』」『民族研究』第3期, 2003年, 69-71、78頁
- [71] 尾形勇『中国古代の「家」と国家-皇帝支配下の秩序構造-』岩波書店, 1979年, 149頁
- [72] 堀敏一『律令制と東アジア-私の中国史学(二)』汲古書院, 1994年, 116-125頁; 堀敏一『東アジア世界の形成-中国と周辺国家』汲古書院, 2006年, 27-37頁
- [73] 『漢書』卷94下, 3817頁
- [74] 余英時著, 鄒文玲訳『漢代貿易与拡張-漢胡經濟關係結構研究』上海古籍出版社, 2005年, 47-50頁
- [75] 『漢書』卷94下, 3801頁
- [76] 高村武幸「河西における漢と匈奴の攻防-前漢後半期から後漢初期の史料分析を通じて」『東洋学報』第82巻第3号, 2000年, 358頁
- [77] 『漢書』卷94下, 3803-3804頁
- [78] 李大龍『漢唐藩属体制研究』中国社会科学出版社, 2006年, 96-105頁
- [79] 『漢書』卷94下, 3810頁
- [80] 『漢書』卷94下, 3821頁
- [81] 西域都護の設置時間に対して、神爵二年の紀元前60年と神爵三年の紀元前59年が主流の見解であり、紀元前68年という見解もある。洪濤「漢代西域都護府研究述評」『新疆師範大学学報(哲学社会科学版)』第2期, 2007年, 5-7頁
- [82] 『漢書』卷96下, 3930頁
- [83] 『漢書』卷79, 3924頁
- [84] 『漢書』卷70, 3006頁
- [85] 『漢書』卷96上, 3874頁
- [86] 手塚隆義「烏孫の国内事情と西域都護の成立」41頁
- [87] 『漢書』卷96上, 3896頁
- [88] 久保靖彦「戊己校尉設置の目的について」『史苑』26巻2/3号, 1966年, 63頁
- [89] 大河内隆「前漢の西域進出と烏孫の動向--漢の烏孫支配に関連して」36-37頁
- [90] 『漢書』卷70, 3010頁
- [91] 『漢書』卷94下, 3810頁
- [92] 『漢書』卷94下, 3818頁
- [93] 『漢書』卷94下, 3818頁
- [94] 『漢書』卷94下, 3819頁
- [95] 旧説によると、戊己校尉は前漢の時戊己と呼ばれる校尉で、後漢の時に戊校尉と己校尉に分かれると考えられるが、最近の考古的発見によって、戊己校尉は最初から戊校尉と己校尉に分かれることが明らかになった。旧説に関する文献は以下のようにある。余太山「兩漢西域戊己校尉考」『史林』第1期, 1994年; 趙貞「漢代戊己校尉闡釈」『敦煌研究』第4期, 1999年。最近の考古的発見についての文献: 李楠「兩漢戊己校尉職数再考證」『内蒙古大学学報(哲学社会科学版)』第3期, 2016年
- [96] 一般的に言えば、漢の文書に記録される車師は広義の車師-前漢での車師前・後国と山北六国、後漢での車師六国-を指す(嶋崎昌「姑師と車師前後王国」, 64-65頁)。
- [97] 馬智全「漢簡所見西漢与車師的交往」『魯東大学学報(哲学社会科学版)』第3期, 2011年, 67-69頁
- [98] 嶋崎昌「姑師と車師前後王国」, 61-62頁
- [99] 栗原朋信「文献にあらわれたる秦漢璽印の研究」185-186頁
- [100] 『漢書』卷96下, 3926頁

- [101] 『漢書』卷 96 上, 3886 頁
- [102] 『漢書』卷 96 上, 3892-3893 頁
- [103] 渡邊義浩「理念の帝国-王莽の世界観と『大一統』-」堀池信夫『知のユーラシア』明治書院, 2011 年, 291-227 頁
- [104] 『漢書』卷 99 中, 4105 頁
- [105] 『漢書』卷 94 下, 3829 頁
- [106] 『後漢書』卷 90, 2982 頁
- [107] 内田吟風「南匈奴の中国移住」『北アジア史研究-匈奴篇-』同朋舎出版, 1975 年〔初出 1932 年〕, 207 頁
- [108] 『漢書』卷 99 中, 4133 頁
- [109] 『後漢書』卷 88, 2909 頁
- [110] 『後漢書』卷 88, 2923 頁
- [111] 『後漢書』卷 88, 2923 頁
- [112] 『後漢書』卷 88, 2923 頁
- [113] 『後漢書』卷 88, 2924 頁
- [114] 『漢書』卷 70, 3006 頁
- [115] 『後漢書』卷 88, 2924 頁
- [116] 『漢書』卷 96 下, 3916-3917 頁
- [117] 内田吟風「南匈奴の中国移住」, 210-217 頁
- [118] 手塚隆義「日逐王比の独立と南匈奴の単于継承について」『史苑』第 25 卷第 2 号, 1964 年, 100 頁
- [119] 『後漢書』卷 89, 2942 頁
- [120] 一部の欧米学者は南匈奴と東匈奴との性質を同じとみなす。例えば: S. K. Psarras: “Han and Xiongnu: A reexamination of cultural and political relations (II),” pp. 40-42; 巴菲爾德『危险的边疆: 游牧帝国与中国』96-97 頁
- [121] 漢が南匈奴を北辺に移住させるのは、後漢初年に防衛を放棄した北辺の諸郡の回復に関わる。(内田吟風「南匈奴の中国移住」, 222-225 頁)
- [122] 渡邊義浩「後漢の匈奴・烏桓政策と袁紹」『早稲田大学総合人文科学研究センター研究誌』第 3 号、2015 年, 530-533 頁
- [123] 『後漢書』卷 90, 2982 頁
- [124] 『後漢書』卷 19, 716 頁
- [125] 『後漢書』卷 89, 2945-2946 頁
- [126] 『後漢書』卷 23, 809-810 頁
- [127] 『後漢書』卷 47, 1575-1576 頁
- [128] 『後漢書』卷 47, 1580 頁
- [129] 『後漢書』卷 45, 1520 頁
- [130] 北単于が烏孫に亡命したことを証明する研究は: 内田吟風「匈奴西移年表: 附・フンネン=匈奴に関する再考察」『東洋史研究』第 2 卷第 1 号, 1936 年, 23-30 頁; 斉思和「匈奴西遷及其在歐洲的活動」『歴史研究』第 3 期, 1977 年, 130-132 頁; 郭平梁「匈奴西遷及一些有關問題」中国社会科学院民族研究所民族歴史研究室編『民族史論叢 第 1 輯』中華書局, 1987 年, 103-114 頁
- [131] 『後漢書』卷 90, 2986 頁
- [132] 『後漢書』卷 47, 1582 頁
- [133] 『後漢書』卷 47, 1586 頁
- [134] 『後漢書』卷 47, 1591 頁
- [135] 『後漢書』卷 47, 1578 頁
- [136] 巴菲爾德『危险的边疆: 游牧帝国与中国』111 頁
- [137] 『資治通鑑』卷 50, 中華書局, 1956 年, 1602 頁
- [138] 『後漢書』卷 88, 2911 頁

- [139] 薛宗正「車師考—兼論前、後二部的分化及車師六国諸問題」『蘭州學刊』第 8 期，2009 年
- [140] 『後漢書』卷 88，2912 頁
- [141] 『後漢書』卷 47，1587-1588 頁
- [142] 紀元 136 年、敦煌太守の裴岑は呼衍王を誅殺したことは史籍に記録されないが、『新疆裴岑紀功碑』にある（吳軍、劉艷燕『敦煌古代石刻藝術』甘肅人民出版社，2016 年，54-59 頁）。
- [143] 『後漢書』卷 90，2986 頁
- [144] 『後漢書』卷 90，2989 頁
- [145] 巴菲爾德『危險的边疆：游牧帝国与中国』109 頁
- [146] 王明珂『游牧者的抉抉：面对漢帝国的北亞游牧部族』北京師範大学出版社，2008 年，216-219 頁
- [147] 巴菲爾德『危險的边疆：游牧帝国与中国』111 頁
- [148] 『後漢書』卷 88，2912 頁
- [149] 『後漢書』卷 88，2912 頁
- [150] 高榮『河西通史』131-133 頁

第四章 東部ユーラシア国際システムにおける帝国内の相互作用：漢帝国の成立と異民族支配

東部ユーラシアは西域、遊牧地域、農耕地域に分かれる。第二章で述べたように、この中で、農耕地域には、六国を併合した秦の拡張によって、統一の傾向が初めて現れた。もっとも、短命だったために、秦はもとの異民族の地（閩越・南越・西南夷・朝鮮）に行政区画を形式的に設置したが、確実な統治を実行しなかった。秦の崩壊の後、農耕地域における中原以外の部分（東北の朝鮮、南での閩越と南越、西南での西夷と南夷）は、秦の郡県制とともに移住した漢人あるいは土着勢力の統率の下で、部族連合体を維持したり、秦の制度を倣って建国したりする形で独立することとなった。建国初期、内憂外患のために、漢にはこれらの国家を武力で征服する余裕がなく、影響を及ぼさない地域に対しては、その政権を放任しながら、自国との相互作用の深い国家に対しては、その王を冊封し、その存在を認めざるをえなかった。一方、冊封国としての南越と朝鮮は、漢の冊封による権威を借りて、次第に周囲の国家や部族に対して拡張政策をとって自らの勢力圏を作り、地方大国にまでなった。ここまでは、漢とこれらの国家との関係は、匈奴・西域諸国との国家間関係と同じであった。けれども、漢と匈奴との第一階段争覇に勝った後、武帝はこれらの国家を征服戦争を通じて併合し、その地に郡県制を設置した。これを境に、農耕地域が漢に統一され、そこでの相互作用は国家間関係から、帝国における国家内関係になった。

中央政府と異民族との関係は、帝国内においては「帝国は……その内部構造が常に部族間外交関係と類似する」^[1]とキース・ファン・デル・ピール（Kees Van Der Pijl）が述べているとおり、国内関係とは異なって、自治領・属州（属国）のような階層性の強い国家間関係だと考えられる。実際には、漢はこれらの国家・部族連合体を征服した初期に郡県制を実施したものの、限られた地域に対してのみ直接統治を行い、その他の地域に対してその土着首領を冊封し自治させる間接統治を行った。だが、自治権を受けた土着首領（特に部族形態にと留まった土着首領）は漢にそれほどの忠誠心を持たず、利益衝突があれば、反乱を起こすのが普通だった。そのため、漢は一方で、影響を及ぼし難い辺縁の郡県を廃止して帝国の無謀な拡張を停止し、他方で、間接統治の地域に中央の影響を浸透させることを通じて、その異民族を直接に郡県に掌握させ、内郡と同じく直接統治を行おうと努力していた。結局、異民族に対する漢の直接統治が、賦税・官僚の搾取・生存空間などの問題を中心に、異民族と漢との矛盾を激化させたため、大規模な異民族反乱は絶えず勃発し

ていった。その際、規模の大きな羌族による反乱と夥しい南方の異民族による反乱は最も致命的になった。後漢中期以降、漢は異民族による内乱のため、経済的及び軍事的資源が激しく消耗されたため、対外拡張及びシステムの維持を行う余裕が次第になくなっていった。

第一節 農耕地域の辺縁（閩越・南越・西南夷・朝鮮）における帝国建設

第二章で述べた通り、農耕地帯の外縁にある地域（閩越・南越・西南夷・朝鮮）は、秦の拡張によって統合されたが、秦の崩壊をきっかけに、土着の撤退の後に部族連合という形で独立してきた一方、在地官僚か元貴族が秦人（漢人）を率いて土着民と連携した形で建国した。漢の統一の後、これらの国は能動的か受動的に漢と外交関係を回復させた。南越は建国後、漢からの印綬を受けて漢に称臣し；驩無諸は漢に協力し項羽と戦った功績で閩越王として冊封され；その後、同族の驩搖は功績及び民意のあるため恵帝に東海（東甌）王として冊封されて閩越から独立し；朝鮮は恵帝の時、遼東太守と約を結んで漢の外臣国になった。とは言え、これらの国（特に南の南越と北の朝鮮）は、外臣国としての義務を破り、漢と軍事的衝突を行ったことから見ると、冊封により漢に臣服しようとしたのではなく、代わりに、漢の権威を借りて、自国の周辺へ拡張策をとって、廣瀬憲雄のいう「小帝国」^②を作り上げた。結果として、農耕地域の周辺には「小帝国群」が現れた。最後に、西南夷に対して、漢は紀元前 182 年に犍道に都市を築いて青衣県を設置したが、基本的に「雖王有巴・蜀、南中不賓也」^③とあるように、その影響は巴郡と蜀郡だけに留まり、その南と西における西南夷とは明らかに切断状態のままなのである。

一 前漢初期における農耕地域に対する拡張

漢は、文景の治により経済復興を達成し、景帝・武帝による対諸侯王政策の成功により実質的な統一を実現し、最後に、対匈奴第一段階争覇に勝って匈奴と共存状態に入ったため匈奴からの安全保障上の脅威を消えた。内憂外患を一掃した漢は農耕地域に対して、放任策を征服・統合策に転じたのだった。

農耕地域に対する漢の拡張は、漢匈争覇第一段階を境に、前期と後期に分けられる。漢の前期拡張は東甌・南越に対する閩越の軍事的攻勢をきっかけに行われ、南越、閩越および西南夷の幾らかの小国に、征服ではなく、影響を及ぼすことを中心にした。武帝即位 3

年後の紀元前 138 年、閩越は亡命してきた呉王の子の駒に説かれて東甌を攻撃した。漢は東甌の求めに応じて援軍を発した。漢と戦争を避けるため閩越兵は撤退した。その後、東甌王は国を挙げて漢に内属した後、その民が江、淮の間に移住させられた。東甌人の移住に対して、「年表云東甌王広武侯望、率其衆四万余人來降、家廬江郡」^[4]とある徐広の指摘を参考にするなら、漢が移住させたのは、東甌人の全てではなく、東甌王に率いられた東甌人だけを移住させたのだった。そうであるとする、漢は、戦わずに東甌を征服したが、その支配をすぐに東甌の地に及ぼすことはなかったことになる。

閩越は、東甌から撤退した 3 年後の紀元前 135 年、南越王の趙佗の死を機に、南越に攻撃し、再び拡張を目指した。南越王になったばかりの趙胡は、漢に使者を派遣し、「兩越俱為藩臣、毋得擅興兵相攻撃。今閩越興兵侵臣、臣不敢興兵、唯天子詔之」^[5]とあるように、南越と閩越が共に漢の藩臣であるため互いに攻撃することが許されないことを理由に、漢に軍事援助を請うた。漢の南境にある淮南王の劉安は、南越と閩越のことをよく知って、南越の軍事援助を拒否することを武帝に説いた。しかし、武帝は南越に軍事援助を与え、閩越を討伐した。漢軍くの前、閩越王の郢が弟の余善に殺され、余善が閩越を代表して漢に投降した。漢は、閩越が引き続き拡張することを問題視し、閩越を削弱するために、故意に、功績のある余善ではなく、無諸の孫の丑を越繇王として冊封し、彼に閩越を任せた。余善はこの結果を納得せず、威信をもって民衆を集め、自ら王と称した。漢は、出兵の必要がないと判断し、余善を東越王に冊封した。一見すると、漢は、閩越に対して実質的な影響力を持っておらず、余善を王として追認せざるを得ないが、実際には、元々漢の影響から脱して台頭していた閩越に対して分割統治策をとって、丑と余善を互いに牽制し合わせ、閩越の台頭を止めた。もっとも、このような分割統治策は、漢に対する余善の不満をもたらして、閩越に反漢勢力の形成を促した^[6]。

閩越に勝った後、漢は、南越に嚴助を派遣し、趙胡の入朝と納質を要求した。趙胡は、「且先王昔言、事天子期無失禮、要之不可以説好語入見。入見則不得復歸、亡国之勢也」^[7]とある南越の大臣の諫言を受け入れ、太子の嬰斉を質子として漢に派遣したが、病と称して自らの入朝を回避した。ここから見ると、趙胡は、趙佗の時の対漢政策を継いで、形式的に漢に臣服する姿を見せる一方、実質的には漢と距離をとって、漢からの干渉を拒否しつつあった。さらに、南越文王墓から出土した「文帝行璽」^[8]からみると、趙胡は依然として、国内と周辺の小国に対し帝号を称した。したがって、漢は南越を臣服させなかった。

一方、漢に十余年暮らし、漢の女性と結婚した南越の質子の嬰斉はかなり漢の影響を受けたことは疑いない。嬰斉が南越王になった後、南越の帝璽を隠して僭越的行為をやめながら、漢に上書し妻の漢女を王后にすることを請うて、子の次公を質子として派遣した。最も重要なのは、嬰斉の入朝の回避のため、「嬰斉尚樂擅殺生自恣、懼入見要用漢法、比内諸侯、固称病、遂不入見」^[9]という理由が提示されたことである。「嬰斉尚樂擅殺生自恣、懼入見要用漢法、比内諸侯」とは、嬰斉は国内で行なった暴虐統治が漢法に違反し、漢に行ったら、漢の諸侯（内臣）に倣って漢法で適用された恐れを憚ることを意味する。このように、嬰斉は、意識上には、趙佗・趙胡のように漢に形式的に臣服するだけではなく、長年の漢の教育および影響を受けた結果として、外臣よりさらに低い地位の漢の内臣に倣う存在と自分を認めた。言い換えると、漢は武力を使わず、質子に思想的な影響を及ぼして漢の意識を注ぎ込むことを通じて、南越を自我認識面で外臣から内臣にまで格下げした。とは言え、南越は、漢とは異なって、漢の中央集権を学んで王の権威を強化したものの、土着勢力の影響も強かったことは否定できない。王としての趙氏が漢に意識的に臣服しても、土着勢力は依然として漢に屈服しなかったのであった。

紀元前 135 年での南越への閩越の攻撃は漢の西南夷攻略をももたらした。唐蒙は王恢の命令を受けて閩越に対する勝報を伝えるために南越に行って、そこに蜀の枸醬を食べて、枸醬の経路を聞いて、南越の西北の夜郎から南越までの通路を把握した。長安に戻った後、南越が形式的に臣服するが実際に漢と対抗する意思を持つことを理由に、夜郎を通して南越を奇襲するという策で、武帝を説得し使者として夜郎に行った。「厚賜、諭以威德、約為置吏、使其子為令。夜郎旁小邑皆貪漢繒帛、以為漢道險、終不能有也、乃且聽蒙約」^[10]とあるように、唐蒙は、経済的手段で、夜郎をはじめとする西南夷の諸国・諸部族と約を結ぶことを通じて、漢の官位の設置することを同意させた。その後、これらの諸国・諸部族の所在地に犍為郡を設置した。中央と犍為郡と交通のために、唐蒙に夜郎に通じる道を築かせた。道の建築は巴と蜀に大きい負担を負わせて、2 年を過ぎても完成しなかったため、反対の声が大きくなった。紀元前 130 年、武帝は司馬相如を派遣し、巴と蜀との民衆を怀柔した。長安に戻った司馬相如は「邛・笮之君長聞南夷与漢通、得賞賜多、多欲願為内臣妾、請吏、比南夷」^[11]とあるように、西夷の邛、笮などの部族が賞賜のため漢に臣服し、官吏を派遣することを請うたことで、武帝を説得し郎中將として西夷に行った。邛・笮・冉・駹・斯榆などの西夷部族が漢に臣服した結果として、漢は、その地に蜀郡に属する十余県を設置し、一つの都尉にこの十余県を任せた。これらの十余県の行政区画の他に、漢

の西の国境にある辺関が撤去され、邛・笮までに通じる道を築いた。拡張は順調に進展したが、夜郎に通じる道の建設が難航し^[12]、臣服した西南夷が屢々反乱を起こした。このような状況に向かって、対匈奴作戦で殲滅戦に転じた紀元前 126 年、武帝は、西南夷を視察した公孫弘の諫言を受入れ、匈奴との対決に集中するために、西夷を放棄し南夷に二つの県と一つの都尉を残して、犍為郡に自我防衛を任せた。この時、南夷にある程度の行政組織を残したのは、夜郎から南越への奇襲策を堅持し、あるいは、南越の腕の一つを切るためだったかとも思われる。それは言い換えると、将来の南越攻略のために、前線基地を確保することでもあった。

農耕地域に対する漢の前期拡張は、匈奴との対決により停止した。成果から言うと、この段階を通じて、漢は、閩越と南越に親漢勢力の扶植を通じて影響をある程度まで及ぼした。しかし、この両国には、漢に対する不満を持ったり警戒する勢力が依然として強かったため、漢は両国に干渉を行うことができなかった。一方、漢は南夷と西夷に行政組織の設置を通じて形式的に帝国に組み込まれたが、道路の不備、異民族の反乱、匈奴との決戦の集中のため、止むを得ず多くの成果を放棄したのだった。

匈奴に対する軍事的勝利により、匈奴からの安全保障上の脅威が消えた。そのため、漢は、以前のように匈奴を警戒するため相当な軍事力を北辺に配置する必要がなくなって、農耕地域に対して十分な軍事力を使うことができるようになったため、その目的を征服・統治に設定し、漢の後期拡張は、南越の内臣化の要請をきっかけに、征服を目的にして行われた。紀元前 113 年、嬰斉と漢女との子の興は、即位した後すぐに、趙佗の対漢政策を放棄し、「王・王太后以入朝、比内諸侯」^[13]とある漢使の安国少季の告諭を受け入れた。だが、王太后は、嬰斉と結婚する前に安国少季と密通することが南越人に知られ、国内の支持をあまり得なかった。実際に、王太后の私情はともあれ、親漢勢力を代表する南越王が漢に臣服することは、必ず土着勢力と親漢勢力との矛盾を激化させる。王太后は先手を取り、「請比内諸侯、三歲一朝、除辺関」^[14]とある書を漢に送った。武帝は速やかな返事を行い、「賜其丞相呂嘉銀印、及内史・中尉・太傅印、余得自置。除其故黥劓刑、用漢法、比内諸侯。使者皆留填撫之」^[15]とあるように、丞相に印を与えて漢との君臣関係を成立させ、南越法を廃棄し漢法を適用させ、さらに使者を駐在させて南越を鎮めることを通じて、南越を国内の諸侯国にさせた。言い換えると、もしこれらの政策が実施されたとすれば、南越は漢に統合されたことにほかならなくなる。南越王と武帝との呼応は南越の土着勢力を徹底的に激怒させた。土着勢力の代表としての呂嘉は反旗を翻した。これを境に、漢の南

越統合は平和的内属から南越の土着勢力に対する武力征服に変わった。紀元前 112 年、漢は南越王の軍事的請求に応じて南越に出兵して、2 年をかけて、呂嘉の代表した土着勢力を打ち破って、南越に儋耳・珠崖・南海・蒼梧・九真・鬱林・日南・合浦・交趾などの九つの郡を設置した。これによって、南越は秦帝国から独立し建国した 93 年後、再び農耕帝国の一部分として組み込まれたのだった。

漢は南越征服戦を始めた時、閩越と南夷に軍事的協力を命じて、東からの閩越軍、西からの南夷軍と北からの漢軍という三路の大軍を同時に南越に進攻させようとした。しかし、閩越は、出兵したが、漢と南越との戦いを傍観しながら、南越に使者を密やかに遣わした。漢は、南越作戦に集中したため、閩越を大目に見た。だが、漢に不満のある余善は、先手をとって漢軍撤退の道を遮断した。漢は、すぐに閩越征伐を起こす気がなく、閩越に使者を遣わして投降を勧説したが、拒否された後、閩越と開戦した。間もなく、漢に扶植してきた親漢勢力の丑などは余善を殺して投降した。その後、「東粵陬多阻、閩粵悍、数反覆」^[16]という理由によって、武帝は閩越の民を江と淮と間に遷移させて、閩越の地は荒涼となることになった。

一方、漢の徴兵に対して、南夷には、且蘭君が周辺の小国と連携して反乱を起こし、漢の使者及び犍為太守を殺し、夜郎王が南越に一辺倒し、漢と対抗した。漢は、南越征伐戦の 14 年前に西南夷から部分的に撤退したが、南夷にはある程度の影響を保有し、そして、紀元前 122 年に張騫の提案^[17]により西夷攻略を再開し、蜀と犍為から駹、冉、徙、邛・僰という四つの方向に沿って、北には氐・笮、南には嵩・昆明、西には滇国に到着した。攻略再開とは言え、この時、漢は匈奴との戦争が白熱したため、西南夷に軍事行動を行わなかった。今回の且蘭の反乱を機に、漢は、紀元前 111 年に西南夷征服を展開し、且蘭を陥落させ後、西に行って邛と笮をも撃破してその君主を殺した。夜郎は南越の滅亡により、その王が漢に入朝・投降し、夜郎王に冊封された。一方、冉と駹は、強い漢軍に怯えて、漢に臣服し、官僚の駐在を請うた。これによって、漢は蜀郡の周辺の西南夷を統合して牂柯・越嵩・沈黎・汶山・武都などの五つの郡を設置した。その後、漢が滇王に南越征服及び南夷撃破の功を伝えて投降を勧めた。だが、滇王は東北の劳深と靡莫と協力して漢と対抗していった。2 年後、漢は巴と蜀の兵を發して、劳深と靡莫を打ち潰して、滇に進軍していった。滇王は国を挙げて投降し官僚の駐在を請うて自ら朝覲した。結局、滇王は罪を赦され、王として冊封された。西夷攻略の成果として、漢は益州郡を設置した。しかし、益州の西に位置する嵩と昆明は未だ征服されず、益州から西に行く漢人を殺して、その財

物を奪った。言い換えると、「西南夷-大夏」道は依然として遮断されていた。漢は、「西南夷-大夏」道の確保のため、紀元前 109 年、昆明を撃破して益州郡に組み込んだ。

西夷攻略と同時に、漢は、朝鮮攻略をも展開した。実際に、朝鮮に対する漢の攻略の準備が紀元前 128 年の濊君の内属及び蒼海郡の設置に遡る。濊君の内属及び蒼海郡の設置により、漢は朝鮮方向への通路を開き、朝鮮を牽制し、朝鮮征伐の意図が生じた^[18]。だが、2 年後に蒼海郡を放棄したことからみると、漢はその時に朝鮮を征服する計画をまだ作り上げなかったのかもしれない。南越・閩越を征服した後、漢は紀元前 109 年に朝鮮に何譙を遣わして投降を勧告した。朝鮮王は勧告を受け入れず、何譙を護送する裨王長が何譙に殺されたことに怒って兵を發して何譙を殺した。これをきっかけにして、漢は朝鮮征服戦を起こした。漢軍の攻勢の前に、朝鮮貴人は朝鮮王を殺して漢に投降した。漢は、朝鮮の地に真番・臨屯・樂浪・玄菟などの郡を設置した。

武帝の征服により、農耕地域では、西南の閩越・東甌、南の南越、西南の西南夷、東北の朝鮮は、漢に統合され、郡県制の設置を通じて、帝国の一部として、漢との関係が国家間関係から中央と辺郡との国内関係になった。このような変化は、これらの地域に、『史記』のように別々に伝を付けることから、『漢書』の「西南夷兩粵朝鮮伝」のようにまとめて一つの伝を付けることに反映されている^[19]。南越（・閩越・東甌）、西南夷、朝鮮は、「三方」^[20]とか「三垂」^[21]といった辺境の意味を付けられることとなった。

武帝の拡張は、短期間に武力で実現されたため、異民族、特に農業を生業としない異民族の多い地域で、郡県制を通じて統治を行うことは簡単ではなかった。結局、漢は農耕地域の辺縁からある程度まで撤退した。西南夷は、紀元前 97 年に沈黎郡と紀元前 67 年に汶山郡を廃止し；南越は、紀元前 82 年に儋耳郡を廃止し珠厓郡に属させ、紀元前 52 年に珠厓郡を廃止し；朝鮮では、紀元前 82 年に臨屯郡と真番郡を廃止して玄菟を北に移した。

漢がこれらの地域から撤退したのは以下の理由により行われたのであった。まず、農耕地域に対応する郡県制は、農業を生業としない異民族に適応することができなかった。例えば、西夷である笮都の地に設置した沈黎郡は、廃止される前に 21 県を有して、その中に、漢の統治が 5 県のみ機能し、他の県には異民族の首長が漢の賞賜のため漢に官衛の設置を請うた。一方、そこの異民族は、「自崙以東北、君長以什数、徙・笮都最大；自笮以東北、君長以什数、毋駟最大。其俗或土箸、或移徙、在蜀之西」^[22]とあるように、部族段階に留まって農業と遊牧を兼ねて生業とした。そうであるとする、漢は、沈黎郡に県を設置し官僚を配置したが、定住していなかった異民族を実質的に支配することはできな

った。結果として、漢は、沈黎郡を廃止し、「置兩部都尉：一治旄牛，主外羌；一治青衣，主漢民」^[23]とあるように、旄牛県で羌を管理する都尉と青衣県で漢民^[24]を管理する都尉を設置した。言い換えると、漢は遊牧の異民族の地から撤退して、軍事官僚である都尉を設置し、その都尉にこれらの遊牧の異民族との交際を任せたのだった。

次に、漢の統治は、異民族の地に適用されたが、賦税の重さにより、異民族の反乱をもたらした。例えば、現在海南島に設置した儋耳郡と珠厓郡の廃止は、

其民暴惡、自以阻絕、数犯吏禁、吏亦酷之、率数年壹反、殺吏、漢輒發兵擊定之。

自初為郡至昭帝始元元年、二十余年間、凡六反叛^[25]。

武帝末、珠崖太守会稽孫幸調広幅布献之、蛮不堪役、遂攻郡殺幸^[26]。

中国貪其珍賂、漸相侵侮、故率数歳一反^[27]。

至宣帝神爵三年、珠厓三県復反。反後七年、甘露元年、九県反、輒發兵擊定之。元

帝初元元年、珠厓又反、發兵擊之。諸県更叛、連年不定^[28]。

とあるように、儋耳・珠崖に対する漢の搾取が重かったため、異民族の反乱が絶えずに起きたことによることである。汶山郡の廃止も、「汶山吏及百姓詣武自訟：『一歳再度、更賦至重、辺人貧苦、無以供給、求省郡』」^[29]とあるように、重税のために行われた。

そして、南越と朝鮮は小帝国を建てたが、漢のように強い中央集権を有するはずではなく、土着との連携の形で、周辺の異民族を帝国に組み込んだ。漢は、これらの小帝国を征服した後、その小帝国の中心と辺縁を区別せずに一律に郡県を設置した。小帝国の辺縁には、土着勢力が強いため、漢の支配の浸透が順調ではなかった。したがって、漢は、小帝国の辺縁から撤退した。例えば、真番郡と臨屯郡には、「以故満得以兵威財物侵降其旁小邑、真番・臨屯皆來服属」^[30]とあるように、朝鮮の支配を強く受けなかった異民族があつて、漢は郡県を設置しても、朝鮮と同じくこれらの異民族に対する統御力が弱いため、郡県が機能せず、そこから撤退したのだった^[31]。

最後に、漢が異民族の地を征服した後に設置した郡県は「初郡」である。「南陽・漢中以往、各以地比給初郡吏卒奉食幣物、傳車馬被具。而初郡又時時小反、殺吏、漢發南方吏卒往誅之、間歳万余人、費皆仰大農」^[32]とあるように、初郡には、その財政が付近の内郡に頼って補充され、もし反乱が起こったら、内郡が官吏と兵士を派遣して鎮圧する。そうであるとする、初郡の維持は漢にかなりの負担となった。したがって、漢は、統治コストが高くついたため、異民族の地域から撤退する可能性もあったのであつた。

異民族の地からの撤退は、漢にとって、あるいは漢の士大夫にとって、

陛下祇畏天戒、哀閔元元、大自減損、省甘泉、建章宮衛、罷珠崖、偃武行文、將欲度唐虞之隆、絕殷周之衰也。諸見罷珠崖詔書者、莫不欣欣、人自以將見太平也^[33]。

故孝元弃珠崖之郡、光武絕西域之國、不以介鱗易我衣裳^[34]。

とあるように、恥ずかしいことではなかった。そうではなく、高く評価されることだったのである。

二 農耕地域における異民族支配の強化

前述のとおり、漢は、農耕地域の辺縁での拡張に成功した後、その成果を確保するために、郡県制を設置した。南越には南海・蒼梧・鬱林・合浦・交趾・九真・日南・珠厓・儋耳などの9つの郡、西南夷には犍為・牂柯・越嶲・沈黎・汶山・益州などの7つの郡、朝鮮には楽浪・真番・臨屯・玄菟などの4つの郡、合計20郡を設置した。その後、漢は、異民族勢力が強く、漢の中央から遠く離れる地域から撤退して、沈黎・汶山・珠厓・儋耳・真番・臨屯などの6つの郡を廃止した。最後に、後漢時代に入ると、西南夷には、牢哀の内属により、永昌郡が紀元69年に設置された。したがって、漢は、南越・西南夷・朝鮮を含む農耕地域の異民族の地に、後漢の終わりまでに、15郡を保有したのだった。

他方、

元鼎六年定越地以為南海・蒼梧・鬱林・合浦・交趾・九真・日南・珠厓・儋耳郡、定西南夷以為武都・牂柯・越嶲・沈黎・汶山郡、及地理志・西南夷傳所置犍為・零陵・益州郡、凡十七^[35]。

とある晉灼の説明によると、南越と西南夷に設置されたのは「初郡」で、朝鮮に設置された郡県は、「初郡」に属しない。初郡では、

且以其故俗治、無賦税。南陽・漢中以往、各以地比給初郡吏卒奉食幣物、傳車馬被具。而初郡又時時小反、殺吏、漢發南方吏卒往誅之、間歲万余人、費皆仰大農。大農以均輸調鹽鉄助賦、故能澹之。然兵所過郡、郡以為訾給毋乏而已、不敢言輕賦法矣^[36]。

とあるように、異民族自治が行われ、その異民族に賦税を納めず、付近の内郡にその財政の補充と反乱の鎮圧との任務を任せた。言い換えると、漢は、これらの初郡を、形式的に帝国に取り込んだが、実際にあまりに干渉をせず、自治権を与えて間接統治を行うことになった。このような間接統治は、各部族の首長を冊封して、郡の太守がその部族に干渉せず、その首長を監視・支配する形で行われたのだった。

西南夷の場合には、漢は郡の下で王国と侯国を設置した。漢が西南夷に入る前に、そこ

には君主でもない部族から初期国家までの発展段階の異なる政治体が多くあったため、漢はその部族の大きさと発展段階によって、その首長を王・侯・君・長に任命し、王国・侯国・邑を設置し、一定の自治権を与えた。例えば、部族同盟あるいは初期国家階段にある異民族に対して、夜郎王・滇王・句町王・漏臥侯・同並侯のように、その首長を王と侯に冊封し；部族同盟初期あるいは部族階段にある異民族に対して、その首長を夷君か夷長に任命した^[37]。結局、漢は、これらの地域に政令を貫徹せず、有効な統治を行わなかったのである^[38]。

南越の場合には、漢は南越の統治体制を継承して、現在の広西・広東地域での南海・蒼梧・鬱林・合浦は南越の直接統治の地域であるため郡県制を通じて直接統治を行い、ベトナム北中部地域の交趾・九真・日南には土着の駱人勢力が強いため駱将制度を維持し、駱将に県令の職能を任せて間接統治を行った。しかし、現在海南島での儋耳・珠厓には対して、漢は最初は楚制を利用しその首長を執到に冊封して間接統治を行なったが、後に直接統治を行って、結局、郡県を廃止して、そこから撤退したのだった^[39]。

朝鮮の漢四郡が初郡に属しないのは、朝鮮に行く統治が郡県による直接統治であったことを意味する。漢は、前述のように早くから異民族の多い真番と臨屯を廃止し、その統治は楽浪郡を中心として行われた。楽浪郡はもとより衛氏朝鮮の統治の中心地で長い間に漢化政策を受けたため、漢の郡県制とは大した齟齬があまり生じなかった。『戸口簿』に記録される紀元前 45 年での 43825 戸・280541 口^[40]と『漢書』に記録される紀元 2 年の 62812 戸・406748 口と比べると、この 47 年間、戸と口との平均変化率はそれぞれ 0.77%と 0.79%であり、古代においては決して低くなかった。これから見ると、朝鮮に対する直接統治は、真番・臨屯廃止後の大楽浪郡時代に順調に行なわれたと考えられる。

このように見てくると、漢は、朝鮮には、あまり異民族の抵抗に遭わことがなく、その地と異民族民を順調に帝国に取り込んで、一方、西南夷・南越には、単に武帝の拡張により、その地域を帝国に実質的に取り込むことはまだ完成しなかった。その後、漢は、西南夷・南越を帝国に取り込むために、その異民族の勢力を弱体化させ、漢の支配を浸透させようと努力していた。

まず、漢は、以夷制夷の政策をとり、郡内の幾つかの異民族の間に矛盾の種を蒔いて、その異民族たちに互いに牽制し合わせた。例えば、紀元前 84 年、漢は益州の廉頭と姑繒の反乱をきっかけに、功績を得た句町侯の亡波を王に格上げし、彼に夜郎を牽制させた。その後、夜郎は、予測通り、句町との矛盾が激しくなって、結局、紀元前 27 年に句町を攻撃

していった。漢は調停を行なったが、夜郎の強硬的反応を受けた後、軍事力で夜郎を鎮圧した。漢の軍事的威力に対し、句町王と漏卧侯が服従的態度を示した。その後、夜郎王の妻の父と彼の子が余兵を集めて付近の 22 県を脅迫して共に反乱を行おうとしたが、蛮夷によって殺された。その後、夜郎王という称号が史籍に再び現れないことから見ると、漢は夜郎の影響力を実質的に消したに違いない。とは言え、夜郎の衰弱の後、句町が台頭してきた。以夷制夷の政策は、国内における異民族の問題を、一時的には解決するが、根本的には解決しなかったのである。

漢による統治の異民族地域への浸透は、王莽の称号変化と後漢初期における異民族反乱の鎮圧により完成した。王莽は、夷狄が王と称することを僭称とみなしたため、匈奴・西域の王だけではなく、国内の異民族の王号を侯号に格下げした。結果として、句町をはじめとする益州の蛮夷は激怒し、大規模な反乱を行なった。西南夷の問題は、内戦で滅した新から西南夷を懐柔した軍閥勢力の成家時代まで残って、再び統一を実現した光武帝が最終に解決した。光武帝は、最初は懐柔策で反乱の異民族を慰撫し、その君主を前漢のように王・侯に冊封し、異民族に自治権を留保した。したがって、漢は順調に異民族の多くの益州と交州を回復した。しかし、後漢初期、中央政府は、速やかに異民族の地に浸透することができず、投降により冊封された異民族の首長を通じて間接統治を継いだ。だが、その後、漢は紀元 40 年から紀元 43 年までのベトナム中・北部における徴姉妹の反乱と紀元 42 年から紀元 45 年までの西南夷における諸夷の反乱を機に、武力で反乱を鎮圧しながら、異民族勢力を打倒し、県レベルまでに直接統治を行なった。反乱の鎮圧策として、ベトナム中・北部には、駱將の拠点としての西于県を三分して駱將の権力解体を目指しながら^[41]、「援所過輒為郡県治城郭、穿渠灌溉、以利其民。條奏越律与漢律駁者十余事、与越人申明旧制以約束之、自後駱越奉行馬將軍故事」^[42]とあるように、漢の法律に悖る越人の慣習・法律を中央に報告した後に廃止し、再び旧制を申し渡して駱人を強く支配したことを通じて、駱將の権力解体の成果を法の側面から確保した。一方、西南夷には、漢はその首長を殺して反乱を鎮圧した。その後の最終的な措置は史籍に記録されていないが、『後漢書』には西南夷に王号・侯号を持つ西南夷の首長がないことから見ると、県レベルにあたる王国・侯国はこの後に基本的になくなって、漢は西南夷に対する統治を郡だけではなく、県にまでに及ぼすことになった。その後、紀元 51 年に牢哀王の賢栗が 2770 戸・17659 口、紀元 59 年に哀牢王柳貌が子を遣わして 51890 戸・553711 口を率いて漢に内属する時に、漢は、以前に夜郎王と滇王のように牢哀王を王として冊封しなかった。このように見てみると、

漢は、西南夷において、少なくとも郡と県レベルに至るまで、間接統治を直接統治に変えたとみることができる。

直接統治をうまく行うために、漢は地方統治の末端たる郷・里・亭をも異民族地域に設置した。漢は異民族地域への攻略の初期、「約為置吏」とあるように、異民族首長と約束して漢の官吏を設置した。ここの「吏」がどのレベルの行政区画の官僚であるかについて、「長吏郷亭更賦至重」^[43]とある記載から見て、県に属する郷・亭の官吏が含まることがわかる。しかし、後漢の光武帝までには、異民族勢力の強い地域に設置した県があまり機能していなかったため、このような郷・里・亭はほとんど県の治所に限られ、その付近の異民族の集落には及ばなかった。光武帝の武力的な支配強化の結果として、漢は次第に地方統治の末端たる郷・里・亭を県の治所から異民族の集落まで推進していった。郷・里・亭の官吏の重要な役目は戸籍の登録なので、異民族地域における郷・里・亭の設置は異民族民を戸籍に登録したことを裏付けるものである。異民族民を戸籍に登録するのは、前漢の時には記録がないことから見ると、基本的に行われないと考えられる一方、後漢の時には、「繁長張禪等題名」によれば実際に行われていた。『隸續』の『繁長張禪等題名』には、民、夷民、邑長・邑君、夷侯、夷王などの種類を記録したことからみて^[44]、漢は漢人だけではなく異民族民をも戸籍に登録し直接に統治した。だが、注意すべきなのは夷侯と夷王が存在したことである。この点を考えると、この地の異民族民は単に漢の統治のみならず、部族君長の統治をも受けたていたと考えられる。言い換えると、魏斌のいうように、「戸籍に登録された蛮民部族は部族君長と郡県郷亭という二重体制にいた」^[45]。しかし、この時の夷侯、夷王は、夜郎王・滇王のように皇帝の冊封により諸侯王になって県の支配を受けないものではなく、県の下に置く郷・里・亭の統治を受けながら、その部族の内部事務を担当するものだと考えられる。

こうして、辺縁における異民族に対しては、漢は行政区画の側面から支配強化を実現し、郡県の外に、異民族民を直接に掌握するために、地方統治末端の郷・里・亭を設置した。ここには、西南夷の越嶲郡の考古学的発見にもとづいて、漢の異民族統治の実態を立体的に説明する。越嶲郡は四川省西南部と雲南省東北部に跨がり、もとの邛都国の旧址に置かれた邛都県を郡庁の所在地にし、後漢で廃止された瀾街を除いて、その13県が邛都道、笮都道、卑水-定笮道に沿って設置された。そして、邛都道が官道の犂牛道と繋がって要路になった結果、異民族の散在していた笮都道と卑水-定笮道が郡の辺縁になった。考古学的発見から見て、邛都とその近くの蘇示には遺構が大量に発見され、邛都と蘇示の所在の邛都

道の沿線の県には遺構がわずかに発見され、笮都道と卑水-定笮道の沿線の県には遺構が基本的に残らなかった。このような遺構の分布にもとづいて、劉弘等は、邛都・蘇示が行政中心で、邛都道の沿線の他の県が行政中心と交通要路との安全のため一定の行政能力を備える一般行政点で、笮都道と卑水-定笮道の沿線の県が行政機能を完全に果たす資源のない象徴的行政点であることを指摘する^[46]。要するに、漢は異民族地に完成の地方統治制度を採用したが、実際にその地の重要性・郡庁との距離などによって、行政資源を分配した。結果として、郡庁・県庁及び要路の沿線の県だけは、行政機能を果たし、その異民族民を有効的に統治した。代わりに、重要性が低い、あるいは遠く離れている県は行政機能を象徴的に示すために設置され、その異民族民の統治をその首長（夷侯、夷王）に任せただった。

郡県制を実質的に実施することに助力を与えるために、漢は移民政策と漢化政策を行なった。漢が農耕地域の辺縁に拡張した後に、その地の異民族を直ちに帝国に吸収したため、その郡県には、異民族民が圧倒的に多かった。異民族の勢力を抑え、漢の支配を順調に行うには、そこで漢民の数を増やすことが必要である。異民族地への移民は、秦の百越への拡張から始められた。秦は蜀国を征服し蜀郡を設置した後、「戎伯尚強、乃移秦民万家実之」^[47]とあるように、蜀郡の北部に万戸の民を移住させた。この後、漢の西南夷への拡張とともに、その漢民が南へ移って西南位に設置した郡に遍在した^[48]。結果として、農耕地域の辺縁に位置する郡には、漢人の「大姓（豪族）」が現れてきた。西南夷を例として、異民族支配の強化に対する漢人大姓の影響に言及する。西南夷の所在の益州には、その住民の種族により、北にある三蜀地域（蜀・広漢・犍為）・巴郡と南にある南中地域（越嶲、牂柯、益州、永昌）という二つの部分に分けることができる。三蜀地域、特に犍為には、前漢の時に、異民族が多く存在したが、後漢に入った後、「本有僰人，故『秦紀』言僰童之富，漢民多，漸斥徙之」^[49]とあるように、漢人の大規模な移住により、その地の異民族が次第に他の地域に移した結果として、基本的に漢人を主にするようになった^[50]。一方、南中地域には、元の異民族の他に、三蜀から移住した異民族及び、漢の外から内属に來た異民族もあった。劉增貴の統計によると、両漢時代をかけたの 84 個の大姓は、前漢時代には、三蜀に集中し、南中にはなく；後漢時代には、三蜀と巴郡に 60 があり、南中には 4 がある^[51]。このような大姓分布は漢の西南夷の統治体制に影響を与えた。黎小龍によると、益州の官僚は、蜀・広漢に暮らすのは基本的に蜀人と漢人で、三蜀地域と南中地域との推移帯での犍為・越嶲は主に蜀・巴人で、牂柯・益州・永昌は全て蜀・巴人である^[52]。異民

族が圧倒的に多い牂柯・益州・永昌には、漢人の大姓は、異民族の風俗・宗教の遵守で政治影響を強めて^[53]、「為夷・漢所服」^[54]とある通り、異民族にも權威を持つことができた。そうであるとする、蜀・巴出身の官僚が在地の大姓である以上、漢の西南夷支配において、大姓の重要性を見逃すことができない。一方、漢は、漢民を異民族地に移住させただけでなく、異民族を故地から他の地域に移住させることもあった。例えば、漢は南越を征服した後、「孝武時通博南山、度蘭滄水・[ㄚ 耆] 溪、置嶠唐・不韋二県。徙南越相呂嘉子孫宗族実之、因名不韋、以彰其先人惡」^[55]とあるように、南越の土着を率いて漢に対抗した呂嘉の子孫を西南に設置した益州の嶠唐・不韋に移住させて、その罪を顕彰・懲罰するためにその一つの県を不韋と名付けたのだった^[56]。

移民政策を通じて異民族の地における漢人の比率の上昇で統治基盤を強めたと言え、漢化政策は異民族、特にその首長に漢に対する帰属感・忠誠心を形成させ、漢の支配への対抗心や不満の発生を押さえながら、彼らを代理人として、異民族支配をさらに浸透させるものだった。漢化政策は二つに分かれ、すなわち農耕を教えて薦めることと漢の礼儀と学問を普及させることであった。農耕の提唱は異民族地に赴任した郡太守か県令によって行われた。例えば、南越には、

延乃令鑄作田器、教之墾闢。田疇歲歲開広、百姓充給^[57]。

光武中興、錫光為交趾、任延守九真、於是教其耕稼^[58]。

西南夷には、

以広漢文齊為太守、造起陂池、開通溉灌、墾田二千余頃^[59]。

先有梓潼文齊、初為属国、穿龍池、溉稻田、為民興利、亦為立祠^[60]。

とあるように、赴任してきた郡太守は農耕を教え、農地を開拓し、水利事業を展開し、鉄器を導入した。結果として、

然秦惠文、始皇克定六国、輒徙其豪俠於蜀、資我豊土。家有塩銅之利、戸専山川之材、居給人足、以富相尚。故工商致結駟連騎、豪族服王侯美衣、娶嫁設餽餽之厨膳、婦女有百兩之從車、送葬必高墳瓦槨、祭滌邨羊豕夕牲、贈襚兼加、贈賻過禮、此其所失。原其由來、染秦化故也。若卓王孫家僮千数、程鄭亦八百人；而郾公從禽、巷無行人。簫鼓歌吹、擊鐘肆懸、富侔公室、豪過田文、漢家食貨、以為称首。蓋亦地沃土豊、奢侈不期而至也^[61]。

とあるように、農業生産がかなり発展し、生活も裕福になった。

そして、漢は礼儀・学問の普及を通じて異民族を従順にさせようとも努力した。例えば、

西南夷には、

肅宗元和中、蜀郡王追為太守、政化尤異、有神馬四匹出滇池河中、甘露降、白鳥見、始興起学校、漸遷其俗^[62]。

南越には、

光武中興、錫光為交趾、任延守九真、……制為冠履、初設媒娉、始知姻娶、建立学校、導之禮義^[63]。

とあるように、郡太守や県令は自らの言行と学校の建設を通じて異民族に漢の礼儀・学問を普及させた。一方、異民族地域に移民した漢人も、「郡人尹珍自以生於荒裔、不知禮義、乃從汝南許慎、應奉受經書図緯、学成、還鄉里教授、於是南域始有学焉」^[64]とあるように、漢の礼儀と学問を自ら学んで修得後その地に普及させた。結果として、異民族地には、漢の統治を受けながら、ある程度まで漢化をした異民族民が現れた。漢は、漢化した異民族民を戸籍に登録し、直接に人頭支配を行いながら、「明年秋、淩中・澧中蛮四千人並為盜賊。又零陵蛮羊孫・陳湯等千余人、著赤幘、称將軍、燒官寺、抄掠百姓。州郡募善蛮討平之」^[65]とあるように、彼らを利用して反乱を鎮圧したのだった。

第二節 接壤地帯における帝国建設

東部ユーラシアには、漠南・河西回廊及びその南の地域（現在の甘肅省と青海省との辺り）に跨る接壤地帯がある。第三章で述べたとおり、漢は匈奴との第一段階の争覇に勝った後、接壤地帯を占領し、そこに辺郡を設置し、その後に匈奴が侵攻を繰り返しても、基本的に辺郡を維持した。接壤地帯における帝国建設は農耕地域における帝国建設とは完全に異なる。農耕地域に対しては、漢は軍事行動を通じて、その地の政権を倒し、郡県制を通じて、その異民族を直ちに吸収して支配していった。しかし、接壤地帯に対しては、漢は、その地を占領した匈奴を倒した後に、匈奴をその地から駆逐し、郡県を設置し、対匈奴の前線を築いたのだった。そこに設置した郡、いわゆる辺郡は、その設置の初期、異民族の駆逐により、土地が広くて人口が少ない状況になり、匈奴の侵攻の防壁としては機能し難かった。そのため、漢は移民政策をとり、紀元前 127 年の「募民徙朔方十萬口」^[66]、紀元前 119 年の「乃徙貧民於關以西、及充朔方以南新秦中、七十余萬口」^[67]、紀元 111 年の「初置張掖・酒泉郡、而上郡・朔方・西河・河西開田官、斥塞卒六十萬人戍田之」^[68]とあるように、単に武帝の治世に数を記録した移民の総数は 100 万人級に達した。葛劍雄の

統計により、漢の西北・北の辺郡に、前漢末期までには、漢人移民とその子孫が少なくとも 150 万あって、人口の半数以上になった^[69]。そのため、農耕地域とは異なり、接壤地帯には、郡県制を設置する初期から、漢人が圧倒的に異民族より多かった。結果として、接壤地帯における帝国建設は、農耕地域において地方の異民族が中央からの支配に抵抗したり、反乱を行ったりするという阻害要素が少なく、より順調に展開していた。

一 接壤地帯の辺郡における異民族（匈奴・烏桓・羌）

とは言え、漢の辺郡にも異民族支配という問題もあった。辺郡にいる異民族は、主として匈奴・烏桓・羌であり、漢に移住する原因も多様である。

匈奴人が漢の辺郡に移住したのは、基本的に異民族の投降・俘虜によることである。前漢時代には、紀元前 121 年に 4 万余人を率いた渾邪王の投降と紀元前 60 年に万余人を率いた日逐王の投降を代表とする匈奴の大規模な投降があった。後漢時代に入った後、南匈奴の内附により、4～5 万の匈奴人が漢の辺郡に移住し、その後、北匈奴の滅亡により、大量の北匈奴の部衆が南匈奴に投降してきた結果として、「是時南部連剋獲納降、黨衆最盛、領戸三万四千、口二十三万七千三百、勝兵五万一百七十」^[70]とあるように、漢にいる匈奴人が 23 万以上になった。その他、部族を単位にする小規模な投降もあった。一方、漢は対匈奴戦争に勝った後に、匈奴人を俘虜として連れ戻すこともあり、例えば、紀元前 119 年と紀元前 71 年にそれぞれ 2～3 万の匈奴人を俘虜にした。葛劍雄の統計により、後漢の末期までには、漢にいる匈奴は少なくとも 50 万存在した^[71]。

烏桓人が漢の辺郡に移住したのは、基本的に漢の移民政策によるものである。

烏桓自為冒頓所破、衆遂孤弱、常臣伏匈奴、歲輸牛馬羊皮、過時不具、輒沒其妻子。

及武帝遣驃騎將軍霍去病擊破匈奴左地、因徙烏桓於上谷・漁陽・右北平・遼西・遼東五郡塞外、為漢偵察匈奴動靜^[72]。

とあるように、漢は、漠北の戦いに勝った後、東北の辺境の安全のために、匈奴に臣服した烏桓を上谷・漁陽・右北平・遼西・遼東との五郡の外の辺塞に移住させ、彼らに匈奴の動静の偵察に任せた。しかし、烏桓がまだ部族段階に留まり、全ての烏桓部族を統一する君主がいなかったため、漢は全ての烏桓を辺塞に移住させたとは考えられない。実際に、紀元前 78 年、范明友が「兵不空出、即後匈奴、遂擊烏桓」^[73]とあることを理由に、烏桓を攻撃したことから見て、漢軍が匈奴を攻撃するため辺塞から出た以上、漢に攻撃された烏桓は当然のことながら、以前に辺塞に移住された烏桓ではなく、辺塞の外にいる烏桓である。

そして、紀元 2 年、匈奴は烏桓が毛皮税を拒否したことで、烏桓を攻撃した。この時、匈奴は形式上漢に臣服したため、漢の辺塞にいる烏桓を攻撃するはずがなく、当然漢の辺塞の外の烏桓を攻撃した。つまり、漢の辺郡にいる烏桓は、烏桓の一部分に過ぎなかったのである。後漢に入った後、

二十五年、遼西烏桓大人郝旦等九百二十二人率衆向化、詣闕朝貢、獻奴婢牛馬及弓虎豹貂皮。……烏桓或願留宿衛、於是封其渠帥為侯王君長者八十一人、皆居塞內、布於緣邊諸郡、令招來種人、給其衣食、遂為漢偵候、助擊匈奴・鮮卑^[74]。

とあるように、漢は、朝貢にきて漢のために辺境を守ることを願望する烏桓人を塞内に移住させて、塞外の烏桓人の招来、匈奴・鮮卑に対する偵察と攻撃などの任務を彼らに任せるという政策をとった。烏桓人の数は、史籍に記録されないが、「布於緣邊諸郡」とあることから見て、少ないとは考えられない。

最後に、匈奴と烏桓と比べると、羌の漢への移住は、多少、西南夷の異民族と似て、漢の拡張政策の結果である。羌に対しては、「武帝征伐四夷、開地広境、北卻匈奴、西逐諸羌、乃度河・湟、築令居塞；初開河西、列置四郡、通道玉門、隔絶羌胡、使南北不得交関」^[75]とあるように、武帝は匈奴と羌との協力を破壊するために、征服した地域から羌を駆逐して、辺塞・郡を築いて羌を警戒・防備した。10 年後、河西を失った匈奴と駆逐された羌は、協力して 10 万以上の軍で漢に攻勢をかけたが敗北した。結果として、「羌乃去湟中、依西海、塩池左右。漢遂因山為塞、河西地空、稍徙人以実之」とあるように、漢は対羌戦争の勝利を機に、羌をさらに湟中から西海・塩池までに駆逐し、辺塞の設置・漢人の移民を通じて河・湟地域（現在青海省の東部）を占領した。紀元前 81 年に、金城郡の設置により、河・湟地域は漢の支配に置かれた。これまでには、漢は、羌に対して基本的に駆逐政策を取り、河西四郡と金城郡では羌の勢力をできる限り消した。しかし、紀元前 62 年から紀元前 60 年までの先零羌による大規模な侵攻が漢の対羌政策を変えた。羌を撃破するため、趙充国は、屯田政策を行って、羌軍と直接に戦うことを避けながら、勸降を主なやり方とする離間策をとった。結果として、

羌若零・離留・且種・兒庫共斬先零大豪猶非・楊玉首、及諸豪弟澤・陽雕・良兒・靡忘皆帥煎鞏・黃羝之属四千余人降漢。封若零・弟澤二人為帥衆王、離留・且種二人為侯、兒庫為君、陽雕為言兵侯、良兒為君、靡忘為獻牛君。初置金城属国以處降羌^[76]。

とあるように、羌の中に内訌が現れ、若零などの羌の部族がリーダーとしての先零の部族長を殺して漢に投降した。漢はこれらの羌人の配置のために金城属国を設置した。これに

よって、漢は、駆逐政策を廃止し、「先零侵境，趙充国遷之内地」とあるように、初めて羌を漢に移住させた。後漢に入った後、羌が漢に移住させられたことは、

（紀元 35 年）十一年夏、先零種復寇臨洮、隴西太守馬援破降之。後悉歸服、徙置天水・隴西・扶風三郡^[77]。

（紀元 58 年）永平元年、復遣中郎將竇固、捕虜將軍馬武等擊滇吾於西邯、大破之。……滇吾遠引去、余悉散降、徙七千口置三輔^[78]。

（紀元 101 年）羌衆折傷、種人瓦解、降者六千余口、分徙漢陽・安定・隴西^[79]。

とあるように、羌による反乱の鎮圧後の收拾策として、大規模に行われてきた。そして、前漢より、後漢には、羌は、故地の河・湟地域、西北の（河西四郡を管轄する）涼州だけではなく、首都圏の関中（現在の陝西省西安を中心とした一帯）、北の并州までに移住された。結果として、漢の西北・関中・北には、羌は多く散在して、その分布地域にもとづいて東羌と西羌に分かれた^[80]。後漢末期には、漢の西北・関中では、羌の人口が漢人の次に達した^[81]。

二 接壤地帯に対する異民族支配

接壤地帯には、投降、俘虜、移民、拡張などの理由で、匈奴・烏桓・羌が多くいた。これらの異民族は、基本的に遊牧的生業形態をとるため、農耕地域の辺縁の西南夷・南越に対して実施した漢の郡県制には、あまり適応できなかった。そのため、漢は匈奴・烏桓・羌に対して、異民族の集住地域に行政区画としての属国を、異民族の散在地域に少数民族統御官としての使匈奴中郎将・度遼將軍・護烏桓校尉・護羌校尉を設置した。

漢の属国は、紀元前 121 年に投降してきた渾邪王の 4 万余人を配置するために、初めて設置された後、匈奴と羌との集住地域に適用され、後漢時代に入った後、烏桓と西南夷に対しても適用された。前漢には、匈奴に対する安定属国・天水属国・上郡属国・五原属国・張掖属国・西河属国・北地属国、羌に対する金城属国があつて、後漢には、匈奴に対する安定属国・張掖居延属国・西河属国・上郡属国・張掖属国・酒泉属国、烏桓に対する遼東属国、西南夷に対する犍為属国・広漢属国・蜀郡属国があつた。

漢代の「属国」は、国家間関係における宗属関係ではなく、「存其国号而属漢朝」^[82]、「不改其本国之俗而属於漢、故号属国」^[83]、「属国謂諸外国属漢」^[84]とあるように、異民族がその本来の風俗を保持し、すなわち、自治権を受けながら、漢に属する行政区画を指す。漢は、属国を支配するために、都尉を設置した。都尉は軍事を司る官僚であり、理論上で

は、行政に干渉を行わない。したがって、漢は属国の設置の時から、属国都尉に、異民族に対する統治・支配の権限を与えず、異民族の自治のために、「属国内の蛮夷が故郷そのままの生活を営むのを監視するというような消極的な治民」^[85]という職権だけを付与した。しかし、熊谷滋三は、匈奴の投降によって設置された五つの属国には、投降してきた匈奴の五人の首長が漢に侯と冊封されたことから、彼らを同時に属国都尉と任命し、属国の自治及び軍事の義務を任せた^[86]、と推測した。しかし、属国都尉最初から治民の権限を有せず、そして、匈奴の五人の首長を属国都尉として任命した記録もなく、最後、史籍に記録された属国都尉が漢人だけであることから見て、熊谷滋三の推測には同意し難い。あるいは、属国都尉が属国を監視するために設置した官僚であるため、異民族の首長に自分を監視する任務を与えることには意味がないと考える。

一方、属国都尉は、異民族に干渉を行わないとは言え、軍事官僚である以上、属国の異民族に対して軍事の動員・指揮の職権を当然として有した。属国都尉の軍事職権は属国での異民族の軍事義務と関わる。属国が基本的に辺郡に設置され、そして、その異民族が基本的に軍事的能力を持つため、漢は属国の異民族に、経済義務（賦税）を免除した代わりに、重い軍事義務を負わせた。属国の設置以降、漢の対外戦争及び内乱鎮圧には、よく現れた「胡騎」・「羌騎」・「烏桓騎」などの異民族による軍隊は属国での異民族にからなる^[87]。軍事義務を負う異民族民は、

属国千長義渠王騎士射殺犁汗王、賜黄金二百斤、馬二百匹、因封為犁汗王^[88]。

とあるように、軍功を通じて、爵位を受けることができる。そうであるとすると、漢は、異民族の内部の秩序を破壊せず、封爵で「各属国に居住させた集団の統率者と目される人物を対象として、異民族の内部秩序に対応したラングづけを行っている」^[89]ことを通じて、属国の異民族を次第に漢帝国に取り込んだ。しかし、重い軍事義務は、

及王莽篡位、欲撃匈奴、興十二部軍、使東域將嚴尤領烏桓、丁令兵屯代郡、皆質其妻子於郡県。烏桓不便水土、懼久屯不休、数求謁去。莽不肯遣、遂自亡畔、還為抄盜、而諸郡盡殺其質、由是結怨於莽^[90]。

安帝永初元年夏、遣騎都尉王弘發金城、隴西、漢陽羌数百千騎征西域、弘迫促發遣、羣羌懼遠屯不還、行到酒泉、多有散叛^[91]。

中平四年、前中山太守張純反畔、遂率鮮卑寇辺郡。靈帝詔發南匈奴兵、配幽州牧劉虞討之。单于遣左賢王將騎詣幽州。国人恐单于發兵無已、五年、右部醯落与休著各胡白馬銅等十余万人反、攻殺单于^[92]。

とあるように、異民族を反乱させたことも少なくない。

要するに、属国には、異民族は相当な自治権を受けて、郡県の官僚からの干渉を受けない一方、内田吟風の指摘する通り、「決して其間に自主独立の統一的中心政權が存したのではなく、先ず完全に前漢政府の統治下に在ったことは疑いないところ」^[93]であり、漢による封爵により、次第に漢帝国の一部分として取り込まれたのだった。

後漢になった後、属国の職権がいっそう拡大した。属国の職権の拡大は、一方、属国の規模と人口が増したことに関わり、もう一方、光武帝の行政区画の改革により、「中興建武六年、省諸郡都尉、并職太守、無都試之役。省関都尉、唯辺郡往往置都尉及属国都尉、稍有分県、治民比郡」^[94]とあるように、郡の都尉を廃止して、郡には軍事官僚を特設せず、軍事職権を太守に任せたが、戦争の前線としての辺郡には、その太守が治民と戦争を両立させることが不可能である結果として、行政区画の側面で郡の中に置かれるものから郡と同列になった。そうであるとする、後漢の属国は、前漢の軍事職権の他に、属国内の民を統治する行政職権をも有した。最後、属国の職権の拡大は、漢の統治重心の東移にも関わる。後漢時代には、漢の核心が長安から洛陽に移って三輔が辺郡化になった後、元々第二防衛線にある属国は周辺の侵攻を直接に受けて第一防衛線になったため、さらなる重要性が生じた、と渡邊信一郎は指摘する^[95]。言い換えると、属国は、漢の統治重心の東移により、対外作戦の最前線になり、国境の安全をうまく守るためには、以前のように中央の命令を受けた後に行動が遅すぎて、自らの判断により速やかな対応が必要される。そのために、属国は郡のような軍事と行政との職権が認められる。属国は、その行政上の格が上げられた後、依然として前漢のように中央の典属国・大鴻臚だけに管轄され^[96]、一方、治民の職権を有した結果として州の刺史にも管轄された。言い換えると、属国の職権の拡大は、本質からいうと、漢が属国での異民族に対する支配を強化したことを意味するものと思われる。

一方、属国は最初に、郡において異民族の集住の地域だけに設置された。もし異民族が複数の郡に跨がって散在したら、固定の地域に限られる属国は設置することができなかった。そして、漢は、異民族を国内に移住させた時には固定の地域に集めず、代わりに、管理のために、異民族をできる限り分散させて、分割統治をとった。実際に、属国の設置は、漢が主動的に異民族を漢に移住させるより、多くの異民族の投降に対する対策に過ぎない。多くの異民族に反乱を激化させないため、異民族の内的秩序を温存した。しかし、漢は、烏桓・羌・南匈奴を主動的に漢に移住させた時、基本的に辺郡に分散させて、属国ではな

く、使匈奴中郎将・度遼將軍・護烏桓校尉・護羌校尉などの少数民族統御官を通じて、彼らを支配した。言い換えると、「郡の属官では広範囲の居住地域を持つ民族には対応できなかった。このことは長史についても同様であったろう。ここに行政区画に拘束されない持節領護官の設置が必要となってくる」^[97]と、小林聡は指摘する。

少数民族統御官は、上谷・漁陽・右北平・遼西・遼東の五郡の外の辺塞に移住された烏桓の管理のために設置された護烏桓校尉から始まった。続いて、紀元前 60 年、漢は先零羌の乱を鎮圧した後、羌の管理のために護羌校尉を設置した。その後、王莽の新的崩壊から東漢初期にかけて、護烏桓校尉と護羌校尉は一時的に廃止して、辺郡における烏桓と羌に対する支配の回復とともに再び設置され、後漢の終わりまで維持された。

職権から見て、

旧制益州部置蛮夷騎都尉、幽州部置領烏桓校尉、涼州部置護羌校尉、皆持節領護、理其怨結、歲時循行、問所疾苦。又数遣使驛通動靜、使塞外羌夷為吏耳目、州郡因此可得儆備^[98]。

とあるように、護烏桓校尉と護羌校尉は、内的には管轄下での烏桓人と羌人を統領・監護し、部族間の恨みを仲介し、年毎に各部族を訪れてその疾苦を聞いて、外的には使者を通じて塞外の烏桓人・羌人にその動静を偵察させる。職務を果たすためには、「今西羌逆類、私署將帥、皆多段頽時吏」^[99]とあるように、護烏桓校尉・護羌校尉は異民族の首長を下僚として登用したこともある。一方、護烏桓校尉と護羌校尉は、軍事官僚の校尉である以上、「護烏桓校尉任尚率烏桓・鮮卑、大破逢侯」^[100]、「章和元年春三月、護羌校尉傅育追擊叛羌、戰歿」^[101]とあるように、烏桓・羌を率いて辺郡防衛・對外作戰の軍事的職務をを担う。護烏桓校尉と護羌校尉は、軍事任務を果たすために、「謂郡有屯兵者、即護羌校尉屯金城、烏桓校尉屯上谷之類」^[102]とあるように、屯兵を持つ。後漢の中後期以降、護烏桓校尉・護羌校尉は、その軍事機能がいっそう上昇し、駐在地域を超えて州の制限を受けず、西北・北の辺境における反乱と戦争に対して、軍事行動を行ったのだった^[103]。

使匈奴中郎将の設置は、南匈奴が国内異民族化になった後、漢の辺郡に移住された南匈奴の支配のために設置された。匈奴は二回の分裂を経験し、その度に相対的な劣位に立つ分断政権が漢に投降して経済的及び軍事的援助を求めた。だが、後漢での南匈奴は前漢での東匈奴と比べると、その本質が異なった。第三章で述べた通り、東匈奴は、漢に客臣として遇され、万里の長城を境界にそれぞれの領土を定めて、そして元帝の時の盟によって漢と実質的な平等関係を結んだ。言い換えると、東匈奴は、内政から言うと、漢の統治あ

るいは支配を受けず、外交から言うと、単に漢との外交関係において漢が決定した一定のルールを守って、他の国との外交関係は漢に干渉されず、したがって、独立自主的な属性を失ってなかった。南匈奴は、漢に称臣をしようとする時、「遣使詣闕、奉藩称臣、献国珍宝、求使者監護、遣侍子、修旧約」^[104]とあるように、東匈奴と漢との関係、即ち漢に一定の服順を示す代わりに漢の援助を得る平等関係を前提にした。しかし、成帝以降、特に王莽の時代、漢・新は権力に迷わされて匈奴に対する支配の強化を試みた。それに激怒された匈奴の叛きに対して、王莽は初めて単于を冊封した。60年以上をかけて匈奴を臣下として見たことにより、後漢に入った後、光武帝は南匈奴の投降に対して、宣帝時の「客臣」関係を放棄し、代わりに王莽時の単于冊封を継承した。

二十四年春、八部大人共議立比为呼韓邪单于、以其大父嘗依漢得安、故欲襲其号。

於是款五原塞、願永為蕃蔽、扞禦北虜。帝用五官中郎將耿种議、乃許之。其冬、比自立為呼韓邪单于^[105]。

とあるように、南匈奴の比は八部の大人に単于として擁立された後、すぐに単于になったことではなく、漢の許可を受けてから単于になった。言い換えると、南匈奴の独立が漢の許可下で実現し、あるいは、漢が南匈奴を匈奴から建国させた。つまり、東匈奴は独立国家になった後に漢に臣服してきたのと異なり、南匈奴は、建国前に漢の冊封を受けて、漢の許可により成立した政権なのである。

そして、投降に來た単于に対する待遇からみると、南匈奴と東匈奴との違いは顕著なのである。漢は東匈奴を「殊禮」で遇し、拜謁の時臣を称させたが名を言うことを要求しなかった。代わりに、南匈奴は独立初期、北匈奴との戦争があったため、その単于が擁立された後すぐに漢に朝覲しなかった。擁立された2年後の紀元50年、漢は南匈奴に段郴などを使者として遣わした。漢の使者は「単于當伏拜受詔」^[106]とあるように、単于に跪いて拜んで印綬と詔書を受けることを要求した。漢の使者に跪いて拜で印綬と詔書を受けるのが臣下の義務であることから見て、漢は南単于を臣下視したわけである。

その上、所在地の違いから見ると、東匈奴と南匈奴の性格の区別が現れる。東匈奴は、漢の辺境の防衛を名義で五原郡の光祿塞に留居したいと請うたが、2万程の漢軍の護送で朔方郡の雞鹿塞から出て漠南に戻した。その後、護送の軍が東匈奴に駐在して防衛の役割を担った。一方、漢は南単于を、最初に雲中郡に、その後にさらなる南の西河郡に移住させ、一方、

使韓氏骨都侯屯北地、右賢王屯朔方、當于骨都侯屯五原、呼衍骨都侯屯雲中、郎氏

骨都侯屯定襄、左南將軍屯鴈門、栗籍骨都侯屯代郡、皆領部衆為郡県偵羅耳目^[107]。

とあるように、南匈奴の民衆を貴族の統領の下で北境の涼・并・幽などの3州の8県に分割的に移住させて、その貴族に軍事防衛及び偵察の任務を担わせた。要するに、漢は軍事援助を通じて東匈奴を北匈奴から防衛した一方、漢の北境への移住を通じて南匈奴に辺境防衛の義務を負わせた。言い換えると、東匈奴は漢の領土の外で漢の力を借りて西匈奴と対峙し、南匈奴は漢の領土の中で漢の安全保障のために北匈奴と対抗していたのだった。

最後に、漢は、東匈奴の内政には干渉を加えなかったのと異なり、国内異民族化した南匈奴に対して、干渉だけではなく、支配・統治をも行った。段郴が使者とし南匈奴に派遣された同年、

令中郎將置安集掾吏將弛刑五十人、持兵弩随单于所處、參辞訟、察動靜。单于歲盡輒遣奉奏、送侍子入朝、中郎將從事一人將領詣闕。漢遣謁者送前侍子還单于庭、交會道路。元正朝賀、拜祠陵廟畢、漢乃遣单于使、令謁者將送、賜綵繒千匹、錦四端、金十斤、太官御食醬及橙・橘・龍眼・荔枝；賜单于母及諸閼氏・单于子及左右賢王・左右谷蠡王・骨都侯有功善者、繒綵合万四。歲以為常^[108]。

とあるように、漢は南匈奴に対する支配を整えて、单于の所に安集掾吏を配置し、安集掾吏に訴訟の干渉と单于の監視との職務を任せただけでなく、单于が年毎に上奏と質子を送ること、及び正月の朝賀に参加した单于の使者に南匈奴に与える定額の賞賜を持ち帰らせることを決めた。紀元56年、南单于の死をきっかけに、漢は、

单于比立九年薨、中郎將段郴將兵赴弔、祭以酒米、分兵衛護之。比弟左賢王莫立、帝遣使者齎璽書鎮慰、拜授璽綬、遺冠幘、絳单衣三襲、童子佩刀、緹帶各一、又賜繒綵四千匹、令賞賜諸王、骨都侯已下。其後单于薨、弔祭慰賜、以此為常^[109]。

とあるように、单于の葬儀・弔祭・継承に関する規則を決めた。ここに、新单于は、即位の前に、使者が璽書を読み上げた後に漢の璽綬を受ける必要があった。当然のことながら、この時、新单于が跪いて拝んでいた。南单于に対する冊封は、東匈奴の時ではなく、代わりに、漢の諸侯王の冊封に似る^[110]。このようなルールを受けた南匈奴は実際に漢の諸侯王になったに違いない。

使匈奴中郎將は、南匈奴を国内異民族としたことを背景に、南匈奴が北匈奴に負けて、南单于を西河に移住させて防衛したことを機に、匈奴に派遣される使者という臨時的性格から、官府と官僚を有したことを通じて少数民族統御官という常設的性格になったものと考えられる。

於是復詔单于徙居西河美稷、因使中郎將段郴及副校尉王郁留西河擁護之、為設官府・從事・掾史。令西河長史歲將騎二千・弛刑五百人、助中郎將衛護单于、冬屯夏罷。自後以為常、及悉復緣辺八郡^[111]。

とあるように、使匈奴中郎將は、南单于のいる西河郡に駐在し、駐軍をもって、南单于を名目上、保護したが、実際には監護したのに他ならない。

紀元 65 年、北匈奴と緩和を実現した後、漢は、南匈奴と北匈奴との「交通」が復活する傾向を見出して、「以衛南单于衆新降有二心者、後数有不安、遂為常守」^[112]とあるように、南・北匈奴の交通の遮断と南匈奴に対する監察の強化のために、度遼將軍を設置した。小林聡は、度遼將軍の設置を北匈奴に攻勢を与える積極的な対外政策とみなして、軍事面で、度遼將軍が単に南・北匈奴の交通の遮断だけではなく、烏桓を含める北辺の異民族の侵攻・反乱、西北での羌乱をも鎮圧する職権をもつ^[113]、と指摘する。要するに、南匈奴に対して、使匈奴中郎將は主に内政的な干渉を行い、度遼將軍は監視の職務を持つが、主に軍事面的な干渉を行った。

北匈奴の滅亡により、漢は、使匈奴中郎將と度遼將軍を通じて、南匈奴に対する干渉をいっそう強化して、单于の人選をも左右し、決定した。紀元 140 年に南匈奴左部句龍王吾斯、車紐などによる反乱に対して、使匈奴中郎將になった陳龜は、「龜以单于本不能制下、逼迫之、单于及其弟左賢王皆自殺」^[114]とあるように、单于が反乱を制圧することができないため、单于とその弟を自殺させた。そして、「二年、中郎將張脩与单于不相能、脩擅斬之、更立右賢王羌渠為单于」^[115]とあるように、使匈奴中郎將の張脩は、单于と仲が悪かったため、单于を斬り殺し、右賢王の羌渠を单于として擁立した。その後、張脩が罪に咎められたが、羌渠は单于でありつつあった。結果から見ると、南匈奴は、漢の支配を受けて、次第に自主性を失いつつ、完全に漢の国内異民族になったのであった。

第三節 国内異民族による反乱

漢は、国際関係の側面では、第三章で述べたように、匈奴と東部ユーラシアにおける覇権を争いながら、国内関係の側面で、第一節と第二節に述べた通り、農耕地域の辺縁を郡県制の形で征服・占領し、土着勢力の抑圧・地方支配の浸透・移民政策・漢化政策により、異民族支配を次第に強化し、異民族民を個人的に支配することに至って、一方、匈奴に勝った接壤地帯を占領し、投降・俘虜・移民などにより来た異民族を特別な政治体制（行政

区画としての属国と少数民族統御官としての使匈奴中郎将・度遼將軍・護烏桓校尉・護羌校尉）を通じて支配したことを通じて、後漢の前期までに帝国建設を完成した。しかし、帝国建設の成功の後、異民族が漢の支配に耐えきれず、反乱を屢々起こしていた。結局、漢帝国は異民族の頻繁な反乱の波で、システムを維持させる能力を失っていただけではなく、帝国の崩壊をも迎えることとなった。

一 農耕地域の辺縁における異民族による反乱

農耕地域の辺縁には、前漢の時、漢が基本的に間接統治を行ったため、異民族は自治して、反乱をあまりにも起こさなかった。しかし、前漢の中後期から後漢の初期までに、漢は異民族に対する支配の強化を通じて、県レベルまでに基本的に間接統治を直接統治に変えて、異民族民を漢民のように個人的に支配してきた。結果として、後漢の中期から、農耕地域の辺縁にける反乱が絶えず絶え間なく起こった。

表 4-1 によると、光武帝の即位の紀元 25 年から後漢の崩壊の 219 年までの 194 年間に、史籍に記録される異民族の反乱は 44 回あった。一般的に言えば、後漢は前・中・後との三期を別れて、光武帝から和帝までの時期（紀元 25-105 年）を前期、殤帝から順帝までの時期（紀元 105-144）を中期、沖帝から献帝までの時期（紀元 144-219）とされる^[116]。後漢の分期から見て、異民族による反乱は、前期には 12 回あって平均的に 6.7 年ごとに 1 回起こり、中期には 12 回あって平均的に 3.4 年ごとに 1 回起こり、後期には 20 回あって平均的に 3.8 年ごとに 1 回起こる。前期での反乱の頻度が圧倒的に中・後期より低く、一方、中期での反乱の頻度と後期での反乱の頻度は誤差の範囲で同じだと考えられる。分期にもとづく異民族の反乱の頻度の分布は、漢が後漢前期に異民族支配の強化を完成したことに対応している。

一方、地域から見て、異民族による反乱は、西南夷の故地の益州には 13 回、南越の故地の交州には 7 回、荊州には 18 回あった。益州での反乱は、牂牁と漢中を除いて、各郡にあって；交州での反乱は、現在ベトナム北部での交趾・九真・日南に集中し；荊州の反乱は、主に武陵に集中し、武陵の北の南郡・長沙・江夏・零陵にも少しくあった。

ここに荊州での蛮による反乱について説明を補充する。漢における蛮は、主として、武陵郡での五溪流域を中心とする武陵蛮（槃瓠蛮）、南郡での夷水流域を中心とする南郡蛮（麋君蛮）、益州の巴郡での渝水流域を中心とする板楯蛮に分かれる^[117]。蛮に対する征服は、

秦昭王使白起伐楚、略取蛮夷、始置黔中郡。漢興、改為武陵^[118]。

及秦惠王并巴中、以巴氏為蛮夷君長、世尚秦女、其民爵比不更、有罪得以爵除。……
漢興、南郡太守靳彊請一依秦時故事^[119]。

昭王乃重募国中有能殺虎者、賞邑万家、金百鎰。時有巴郡閬中夷人、能作白竹之弩、
乃登樓射殺白虎。昭王嘉之、而以其夷人、不欲加封、乃刻石盟要、復夷人頃田不租、
十妻不筭、傷人者論、殺人者得以俵錢贖死。盟曰：「秦犯夷、輸黃龍一双；夷犯秦、輸
清酒一鍾。」夷人安之。至高祖為漢王、發夷人還伐三秦。秦地既定、乃遣還巴中、復
其渠帥羅・朴・督・鄂・度・夕・龔七姓、不輸租賦、余戶乃歲入寶錢、口四十。世号
為板楯蛮夷^[120]。

とあるように、秦が天下統一の前に完成し、前漢建国初期、漢が秦の統治・支配をそのままに受け継いだものである。零陵を初郡としたことから見て、蛮に対して設置した郡（武陵・南郡・巴郡）には、基本的に西南夷と南越とのように、蛮に自治権を与え、蛮の首長を通じて間接統治を行った。しかし、漢の異民族支配の強化は、西南夷と南越だけではなく、蛮にも及んだ。結果として、蛮は部族君長と漢の郡県郷亭という二重体制に取り込まれ。蛮の統治の強化の結果として、蛮の所在の地域により、蛮をさらに細分することができ、例えば、武陵蛮は澧中蛮、婁中蛮、零陽蛮などに分かれる^[121]。したがって、もし地域ではなく、反乱の主体から見て、異民族による反乱は、西南夷が 10 回、南越での異民族が 7 回、蛮が 21 回あったことになる。

最後に、反乱の規模・影響を見る。益州での反乱と交州での反乱は、紀元 176 年の益州諸夷の乱・紀元 136 年から紀元 138 年までの象林徼外の蛮夷の乱を除いて、その規模が基本的に部族レベルに留まったため、短時間に鎮圧された。荊州での反乱は、その規模が多く部族レベルに留まり、少しく部族連合レベルに達したため、その鎮圧が数月から 2、3 年までかかった。全体から見て、頻繁になったとは言え、南での異民族反乱は、基本的に部族を単位にし、多くの場合には漢の搾取に刺激され臨時的に起こり、各部族の連携・協力が稀に現れた。一方、『後漢書』により、「然其凶勇狡獪、薄於羌狄、故陵暴之害、不能深也」^[122]とあるように、南での異民族は、羌と匈奴などの遊牧民のような凶悪、勇悍及び狡猾を持たず、彼らによる損害がそれほど深刻ではないと評価される。

表 4-1：後漢時期での南における異民族反乱一覧表

時間	地域（州名：郡名）	反乱の主体
40-43	交州：交趾から九真、日南、合浦まで	徴側姐妹
42-45	益州：昆明	昆明諸種
47	荊州：南郡	〔㐁屠〕山蛮雷迁
47-49	荊州：武陵	五溪蛮精夫相单程
58	益州：越嶲	姑复夷
76	荊州：武陵	澧中蛮陳从等
76-77	益州：永昌	牢哀王類牢
79-80	荊州：武陵	澧中蛮覃兒健等
92-93	荊州：武陵	澧中、澧中蛮
94	荊州：武陵	澧中蛮
100	交州：日南	象林蛮夷
101-102	荊州：南郡	巫蛮
114	益州：蜀郡	三襄种夷
115	荊州：武陵	澧中蛮
116	荊州：武陵	蛮
116	荊州：武陵	澧中、澧中蛮
115-116	交州：蒼梧	蛮夷
117-119	益州：越嶲（永昌と蜀郡の夷が参加）	卷夷大牛种
123	益州：越嶲	旄牛夷
136-138	交州：日南	象林徼外蛮夷
136-137	荊州：武陵	澧中、澧中蛮
144	交州：日南	蛮夷
桓帝之世	益州：巴郡	板楯蛮数反
148	益州：广漢	白馬羌
151	荊州：武陵	蛮
153	荊州：武陵	蛮
156	益州：蜀郡属国	夷
157	交州：九真	蛮夷
157	荊州：長沙	蛮
159	益州：蜀郡	三襄夷
160	交州：九真	蛮夷
160-164	荊州：長沙（桂陽まで）	蛮
161	益州：犍為属国	夷
162-164	荊州：零陵	蛮
162-163	荊州：武陵	蛮
169	荊州：江夏	蛮
176	益州：益州	諸夷
178-181	交州：交趾、合浦	烏浒蛮
179-182	益州：巴郡	板楯蛮
180	荊州：江夏	蛮
186	荊州：武陵	蛮
188	益州：巴郡	板楯蛮

〔出典：『後漢書』と『華陽国志』を参考して作成する〕

二 接壤地帯における異民族による反乱

後漢中期以降、接壤地帯における匈奴、烏桓、羌は反乱を起こしたが、それぞれの規模と影響が異なる。匈奴は、紀元 94 年での逢侯による反乱・独立、紀元 109 年から紀元 110 年までの協力した南単于と烏桓による反乱、紀元 140 年から紀元 144 年までの南匈奴左部の句龍王の吾斯と車紐等による反乱、紀元 155 年での匈奴左薁鞬の臺耆と且渠伯德等による反乱、紀元 158 年での協力した南匈奴の休著屠各と烏桓による反乱、紀元 187 年から紀元 189 年までの南匈奴の右部の醯落・休著各による反乱など、全部で 6 回反乱を起こした。しかし、匈奴による反乱は、基本的に部を単位にして、短期間に鎮圧されたため、漢に大きな影響を及ぼさなかった。また、烏桓による反乱は、基本的に匈奴か鮮卑と協力した形で行われ、漢軍に攻撃されたら直ちに投降することが多かったため、匈奴の反乱よりもいっそう漢に対する影響が少なかった。

しかし、羌乱は、南匈奴か烏桓による反乱とは異なり、漢に大規模な損害を与えた。細分すれば、羌乱は、前漢から後漢前期までには、基本的に塞外の羌が漢の辺郡に侵攻・略奪した外患であって、しかも、後漢中期以降、大量の羌が漢に移住した結果として塞内・外の羌が連合した形で、長期間かつ広域的な内乱になり、漢に甚大な損害を与えた。

前漢時代には、羌乱は基本的に匈奴の介入によって起こった。だが、羌人は、基本的に部族を単位とする遊牧生活を送り、遊牧地をめぐる争奪により部族間には根深い恨みがあったため、反乱を起こす前に、部族間の恨みを晴らすことが必要される。漢は羌人の部族間の恨みを巧みに操って、以夷制夷政策をとって、漢と協力した部族で反乱した部族を鎮圧した。それだけではなく、漢は従順な羌部族を塞内に招き入れて、塞外の羌部族の動静を偵察したり、辺塞を防衛したり、漢の対外作戦に参加したりする軍事義務を負わせた。結局、このような対羌政策を通じて、前漢及び新の時代には、大規模な羌乱が起らなかった。新の崩壊から後漢前期まで、羌に対する支配は、一時的になくなったが、紀元前 33 年の護羌校尉の復活によって回復された。これ以後、漢郡にいた羌人は、部族を単位に、紀元 34 年から紀元 35 年での先零羌の乱、紀元 36 年から紀元 37 年での參狼羌の乱、紀元 56 年での參狼羌の乱という三回の反乱を起こした。焼当羌の台頭の後、羌乱は焼当羌を核心にした部族連合の形で、紀元 57 年から紀元 59 年、紀元 77 年から紀元 78 年、紀元 86 年から紀元 88 年三回起こった。後漢前期の羌乱は、大規模ではなく、塞外から辺郡

に対する侵攻・略奪したことから見て、前漢の羌乱とは大きな違いがなかった。

しかし、後漢以降、漢は第二節に述べた通り、羌による反乱の鎮圧後の收拾策として、投降した羌を涼州・関中・并州に多く移住させた。例えば、紀元 57 年から紀元 59 年における焼当羌の乱の最後に、この反乱を率いた焼当羌首長の滇吾が死んだ後、彼の子の東吾は漢に投降に来て塞内に移住した。一方、漢は羌乱をきっかけに、羌軍を撃破・追撃した後、羌人の地を蚕食しつつあった。例えば、紀元 86 年から紀元 88 年までの焼当羌の乱を平定した後、

和帝令迷唐將其種人還大・小榆谷。迷唐以為漢作河橋、兵來無常、故地不可復居、
辞以種人飢餓、不肯遠出。吳祉等乃多賜迷唐金帛、令糴穀市畜、促使出塞、種人更懷
猜驚。……明年、迷唐復還賜支河曲^[123]。

とあるように、漢が焼当羌の中心地としての大・小榆谷に戦力投射のために軍事的建造物を築いた。迷唐はそこに漢の軍事的圧力を避けて、遠く賜支の河曲に行った。言い換えると、漢は表面的に迷唐を根拠地に戻したが、実際にその根拠地を戦力投射の範囲に入れて迷唐を監視した。迷唐が賜支の河曲に行った後、漢は次第に屯田を通じて、大・小榆谷を占領した。結局、大・小榆谷に残った羌人は漢の支配下に置かれたのだった。

漢が羌人を内郡に移住させ、塞外の羌地を蚕食したことは、辺郡と内郡の羌人に接触及び協力の道を開くことになった。さらに、漢の統治による搾取という共通の敵によって羌の部族間の恨みが晴らされたため、羌乱は初めて塞外と塞内との羌人の連合の形で現れた。後漢中期以降、紀元 92 年から紀元 102 年までの焼当羌の迷唐による反乱、紀元 107 年から紀元 118 年までの先零羌の滇零による反乱、紀元 139 年から紀元 145 年までの塞内諸羌による反乱、紀元 159 年から紀元 169 年までの東西羌の合流による反乱、という四つの大規模な羌乱が起きた。四つの羌乱はその中心が次第に東に移動して、紀元 92 年から紀元 102 年までの羌乱は辺郡の要塞を中心に涼州全体に蔓延し；紀元 107 年から紀元 118 年までと紀元 139 年から紀元 145 年までの羌乱は涼州を中心に、益州の北部と并州と司隸に蔓延し；紀元 159 年から紀元 169 年までの羌乱は東西羌の合流のため涼州・并州・司隸に及んだ。

長期間に及びかつ広域な羌乱の鎮圧のため、「自羌叛十余年間、兵連師老、不暫寧息。軍旅之費、轉運委輸，用二百四十余億，府帑空竭。延及内郡，辺民死者不可勝数，并涼二州遂至虚耗」^[124]と「自永和羌叛、至乎是歳、十余年間、費用八十余億」^[125]とあるように、漢は莫大な軍事及び財政資源を消耗し、その辺郡が荒れ果て、遂に内郡がその影響に及ぼ

され、沢山の人が命を落とした。第三章に述べた西域からの漢の撤退もこの背景のもとで行われた。紀元 184 年で涼州の北地郡に起こった羌乱は、紀元 186 年、その指導権が韓遂等に奪われた後、後漢末期の軍閥闘争の一部になった。そうであるとする、後漢の中期からその崩壊まで、羌乱は漢に甚大な被害を絶えず与えて、最後に漢の崩壊のドミノの一枚をも倒したということになる。

三 国内異民族による反乱の原因

接壌地帯における異民族による反乱、特に羌乱は、農耕地域の辺縁における異民族による反乱より、規模が大きく、影響が深く、被害が酷かった。だが、二つの地域の異民族反乱は同質的な原因により生じた。すなわち、異民族は、漢による支配が強化された後、より酷い搾取を受けながら、自然資源だけではなく、漢化政策の一環としての農耕地域の拡大により土地が奪われて、生存空間を失っていった。結果として、異民族が生存の危機から脱するために反乱をせざるを得なかった。

まず、漢の支配強化により、異民族は、最初の賦税優待を失って、漢民のように戸籍に登録され、重酷な賦税を納めた。

異民族は帝国内に組み込まれた後、帝国の一部分として一定の義務を負わざるを得ず、その中で、一番顕著なのが賦税の義務である。異民族に課する賦税の程度を明らかにするために、漢民に課する賦税と比べる必要がある。一般的に言えば、漢の民は、田租・人頭税としての算賦と口賦という税と、兵役・力役という賦、及び地方から中央への貢献による献費を負担する義務がある。人頭税については、算賦が 15 歳以上の漢人を対象にした場合年間 120 銭で、口賦が 15 歳未満の漢人を対象にした場合年間 23 銭であった。兵役については、漢人は、徴兵制のため 23 歳になったら 2 年の軍事訓練を課され、その後、毎年に 1 ヶ月の卒更と三日の戍辺をも課された。卒更と戍辺は、必ず本人が行うことではなく、金を出して他人に自分の義務を果たさせることができ、その金が過更銭と呼ばれた。馬大英の統計によると、一戸には年間一人当たりの過更銭が 1500 銭になる。兵役の他に、戸籍に登録された漢人は各種の労働を力役の名で課される。金に換算できない力役を除いて、漢民は、戸を単にして、少なくとも、年間 2369 銭を納めなければならなかった^[126]。

秦から前漢までには、異民族は、収益税の田租と地方の貢献から派生した献費を課されないため、単に人口税と賦を負担した。漢は秦の基準を参考して、異民族民に税と賦を課した。ここには記録の詳しい蛮を例として説明する。南郡の蛮に対して、

及秦惠王并巴中、以巴氏為蠻夷君長、世尚秦女、其民爵比不更、有罪得以爵除。其君長歲出賦二千一十六錢、三歲一出義賦千八百錢。其民戶出幪布八丈二尺、雞羽三十緡。漢興、南郡太守靳彊請一依秦時故事^[127]。

とあるように、秦は巴の地を併呑した後、異民族民に不更爵による更卒義務の免除を与えたり、代わりに君長に賦の対価の税金を取りまとめさせたり、異民族民に戸ごとに特産物の幪布と雞羽を課したりした。『奏讞書』によると、「蠻夷大男子歲出五十六錢以當徭賦」^[128]とあるように、蠻夷の成年の男に毎年 56 錢が課される。したがって、異民族に課する人頭税は漢人の半数以下になって、さらに、君長の取りまとめた上納金が単に 36 人分しかない。巴郡での板楯蠻に対して、

秦地既定、乃遣還巴中、復其渠帥羅・朴・督・鄂・度・夕・龔七姓、不輸租賦、余戶乃歲入實錢、口四十^[129]。

とあるように、その首長階層に対して租賦が免除され、他の異民族民が毎年 40 錢の實錢を課された。武陵郡での蠻に対して、

漢興、改為武陵。歲令大人輸布一匹、小口二丈、是謂實布^[130]。

とあるように、首長に一匹の布を、異民族民に二丈の布を課した。この實布は特産物の名で呼ばれる賦税であり、実際に金で上納することができた^[131]。そうであるとする、漢が異民族に課した賦税は統治権及び所有権の顕彰のため、象徴的意味が強い。一方、「単に蠻夷を慰撫し賦税を軽減して特別税を課したことを示すだけのものではなく、巴氏の君長とその民に対する恩典を示したものである」^[132]と伊藤敏雄の言った通り、異民族に対する優待は、同時に漢の権威形成の一環に他ならなかったと考えられる。

一方、異民族民は賦としての兵役と力役を課されたのだろうか。巴郡板楯蠻と武陵蠻について、漢が賦を課した記録は残されていない。一方、賦を課しても、巴郡と南郡での蠻は、漢人の過更錢に倣って、上納金で賦を果たすことができた。だが、『奏讞書』には

十一年八月甲申朔己丑，夷道〔？介〕、丞嘉敢讞之。六月戊子發弩九詣男子毋憂，告為都尉屯，已受致書，行未到，去亡。毋憂曰：“蠻夷大男子歲出五十六錢以當徭賦，不當為屯，尉竈遣毋憂為屯，行未到，去亡，它如九。竈曰：南郡尉發屯有令，蠻夷律不曰勿令為屯，即遣之，不知亡故，它如毋憂。詰毋憂，律蠻夷男子歲出實錢，以當徭賦，非曰勿令為屯也，及雖不當為屯，竈已遣毋憂，即屯卒，已去亡，何解？毋憂曰：有君長，歲出實錢，以當徭賦，即復也，存吏，毋解。問，如辭。鞫之：毋憂蠻夷大男子，歲出實錢，以當徭賦，竈遣為屯，去亡，得，皆審。疑毋憂罪，它臬論，敢讞之，

謁報。署獄史曹發。吏當：毋憂當腰斬，或曰不當論。廷報：當腰斬^[133]。

とあるように、異民族民に兵役義務を課した記録がある。毋憂は毎年 56 銭の實銭の対価で徭役の賦を果たすと主張した。最後に毋憂が腰斬に処されたことから見ると、異民族には徭役が完全に免除されたとは言えない。この案件を改めて見ると、毋憂が都尉の所に屯することを要求され、都尉が地方官僚ではなく中央官僚なので、今回の軍事徴発は、常例の卒更と戍辺ではなく、臨時的に行われ、實銭で果たした賦とは別にされた。同年 7 月に淮南王英布が反乱したことからみると、織田晃嘉は今回の臨時軍事徴発が英布を警戒するためだと考える^[134]。要するに、異民族は、常例の賦を対価としての税金で免除される一方、臨時的な兵役に服する義務があった。実際に、後文のように、異民族は屢々所在の郡あるいは隣の郡に起こった反乱のため臨時的に徴発され、そして、その軍事徴発に不満が生じたため反乱を起こすことも稀ではなかった。

武帝によって漢帝国に組み込まれた地域（西南夷・南越）では、「漢連出兵三歳、誅羌、滅兩粵、番禺以西至蜀南者置初郡十七、且以其故俗治、毋賦税」^[135]とあるように、賦税が免除された。だが、前文の沈黎郡廃止からみて、漢が直接統治を行う地域に重い賦税を課したことが分かる。ここの「毋賦税」は、漢の直接統治の地域ではなく、間接統治の地域、特に特別な行政区画としての王・侯国に対する優待だと考えられる。このような優待策を受けた異民族がどの程の賦税を課されるかについて、後漢に設置した永昌郡に興味深い事例がある。鄭純が永昌太守になった後、永昌の哀牢夷と約を結んだ。そして「邑豪歳輸布貫頭衣二領、塩一斛、以為常賦」^[136]とあるように、その首長に毎年二領の特産物たる貫頭衣と一斛の塩を常賦として課した。こうして、哀牢に課する賦税は、漢初において蛮に課する賦税と同じく、象徴的意味が強かったことがわかる。

一方、北での異民族民（匈奴・烏桓・羌）は税金を負担する義務がない代わりに、辺境防衛、外敵偵察、対外作戦などの軍事的義務を負った。だが、前漢時代には匈奴の分裂によって 60 年以上の平和が維持されたため、北での異民族民に課する軍事義務をそれほど重くはしなかった。

後漢に入った後、異民族に対する支配を強化した結果、農耕地域の辺縁における異民族は、賦税優待を失って、戸籍に登録されたことにより、「順帝永和元年、武陵太守上書、以蛮夷率服、可比漢人、增其租賦」^[137]とあるように、象徴的な賦税ではなく、かなり重い賦税を納めさせられた。しかし、異民族は、漢民のように当時の先進的な技術で農耕を行ったわけではなかったため、生産能力の低い状況で、深重の賦税を納めることができなくなって、

結果として、「時郡県賦斂煩数、五年、卷夷大牛種封離等反畔、殺遂久令」^[138]、「其冬澧中・澧中蛮果争貢布非旧約、遂殺郷吏、拳種反叛」^[139]とあるように、反乱を起こした。さらに、農耕地域の辺縁における異民族による反乱が頻繁になったため、漢は以夷制夷策をとって、「募充中五里蛮精夫不叛者四千人、擊澧中賊」^[140]とあるように、反乱の地域かその付近地域における異民族を募って、反乱を鎮圧した。「永和二年、日南・象林徼外蛮夷區憐等数千人攻象林県、燒城寺、殺長吏。交阯刺史樊演發交阯・九真二郡兵万余人救之。兵士憚遠役、遂反、攻其府」^[141]とあるように、異民族が徴兵される時に叛いて乱を起こしたという事例もある。

一方、接壤地帯における異民族は、継続的な対外戦争と連続的な内乱のために、兵役を重く課された。黄今言の統計によれば、後漢の時、異民族兵の徴発が 80 回以上あった^[142]。そして、徴兵制の衰微による募兵制の台頭のため、辺郡の軍隊の中に異民族兵を多く徴発し、漢の軍隊構造に異民族兵の割合が激増した。北と西での異民族は、元々軍事義務を負担するとはいえ、このように大量的かつ頻繁的に徴発されることに耐えられたはずはない。軍事的徴発を回避するために、異民族は、

及王莽篡位、欲擊匈奴、興十二部軍、使東域將嚴尤領烏桓、丁令兵屯代郡、皆質其妻子於郡県。烏桓不便水土、懼久屯不休、数求謁去。莽不肯遣、遂自亡畔、還為抄盜、而諸郡盡殺其質、由是結怨於莽^[143]。

とあるように、逃亡して漢の辺郡で盗竊・奪掠し、あるいは、

靈帝詔發南匈奴兵、配幽州牧劉虞討之。单于遣左賢王將騎詣幽州。国人恐单于發兵無已、五年、右部醯落与休著各胡白馬銅等十余万人反、攻殺单于^[144]。

とあるように反乱を起こした。

そして、賦税の徴収が地方官僚により行われるため、官僚の腐敗・私曲は、異民族による反乱をいっそう激化させた。後漢では、辺郡の漢人官僚は、異民族に対する支配強化のために、職権が上がった。しかし、前漢と比べると、後漢の辺郡の漢人官僚の素地は明らかに低下した。前漢と後漢との辺郡官僚を比較した後、前漢では辺郡官僚の選抜が多く功績、中央官僚からの降職と内郡官僚の転任によっており、基本的に有能な人材を抜擢し、そして功績のある辺郡官僚を優渥な褒賞を与えていた；後漢では、辺郡官僚の選抜が多く同級の人事異動により行われ、そして、官僚による地方割拠を阻止するために一回の任期が 3 年になった結果として地方政策が連続性を失い、最後に、奨励より懲罰を重視するため辺郡官僚が功績を立てる熱情を失って尸位素餐になった^[145]、と李大竜は指摘している。

職権が上がりながら素地が低下した漢人官僚は、「旧交趾土多珍産、明璣・翠羽・犀・象・瑇瑁・異香・美木之属、莫不自出。前後刺史率多無清行、上承權貴、下積私賂、財計盈給、輒復求見遷代、故吏民怨叛」^[146]とあるように、制度外の税金を横領して私腹を肥やしたり、「機等天性虐刻、……到州之日、多所擾發」^[147]とあるように異民族をほしいままに虐げたり、「移羌男子狼貢責広漢士吏蕭嘉牧」^[148]とあるように、私用のために彼らを労役したり、「安夷県吏略妻卑湍種羌婦」^[149]とあるように、異民族民を占有したりする悪行をしていた。一方、異民族に対する搾取は、地方の漢人官僚だけではなく、異民族に移住して地方勢力として台頭した漢人の大姓も行った。このような大姓は、「時諸降羌布在郡県、皆為吏人豪右所徭役、積以愁怨」^[150]と「其内属者、或恠惚於豪右之手、或屈折於奴僕之勤」^[151]とあるように、漢人官僚と結託して共に異民族を圧迫した。重い搾取を受けていた異民族は「長吏郷亭更賦至重、僕役箠楚、過於奴虜、亦有嫁妻賣子、或乃至自剄割」^[152]とあるように、奴隸のように生活したり、妻か子供を売ったり、最悪には自殺をしたりするほどの残酷な生活を送った。結果として、「巫蛮許聖等以郡收税不均、懷怨恨、遂屯聚反叛」^[153]、「居風令貪暴無度、県人朱達等及蛮夷相聚、攻殺県令」^[154]、「今涼州部皆有降羌、……数为小吏黠人所見侵奪、窮恚無聊、故致反叛」^[155]とあるように、異民族の反旗を誘発することとなった。

異民族の反乱は、単に搾取だけではなく、漢が異民族の地を占領した後にその地での自然資源及び土地を独占したことに関わる。一方、「時又穿臨邛、蒲江塩井二十所、増置塩、鉄官」^[156]とあるように、漢は該当の官僚の設置を通じて、異民族の地における塩、鉄などの自然資源を独占した。もう一方、漢は、農耕の普及のため、「或火耕水耨。民食魚稻、以漁獵山伐為業、果蓏羸蛤、食物常足」^[157]とあるように、元々原始農業と漁獵との地を田とした。その土着はもし農耕の技術を身につけず、あるいは農耕の生活に変えなければ、大山・窮谷までに移住しなければならなかった。谷口房男は、蛮の反乱が秋・冬に集中したことにより、これらの大山・窮谷に移住した土着が冬の食料のために反乱を行ったと推論する^[158]。実際に、漢人は異民族の地に移住した後、優れた農耕技術を通じて、土着の異民族より発展が早く、大姓をめぐって漢人勢力を形成し、異民族から土地を奪った。異民族が漢人の圧力により、他の郡に移住した結果として、反乱も他の郡に及んだ。荊州の江夏・零陵における蛮の反乱は、漢人により江夏・零陵に移住した武陵の槃瓠蛮に行われたことである^[159]。そして、接壤地帯、特に羌の地域に対して、漢は、屯田を通じて、塞外の土地を占領した。漢は、趙充国が零羌の乱の鎮圧のため屯田策を提案した後、屯田で

羌から土地を占有し始めて、後漢に入った後、大量の羌地を占有した。例えば、紀元 102 年、漢は元西海郡の地に 34 部の屯田を設置した。その他に、「乃遣中郎將平憲等多持金幣誘塞外羌、使献地、願内属」^[160]とあるように、漢は買収を通じて羌地を占有した。結果として、自然資源と土地が奪われた異民族は、その生存空間が次第に収縮して、一旦生活すらできなくなったら、最後の手段としての反乱をしなければならなかった。

その他に、反乱を鎮圧した後の漢の行動も異民族に恨みの種をまいた。漢は鎮圧を機に土地を占有したのみならず、「獲牛馬驢騾氍毹廬帳什物、不可勝数」^[161]とあるように、凱旋の時に多く牧畜を戦利品として奪った。一方、反乱を起こした異民族民に対しては、投降を拒否した男を情けなく殺したり、自ら投降に来た男を屯田と辺塞との兵にしたり、その女と子供を奴隷にしたりした。このように屯田と辺塞との兵になった羌人は実際には奴隷に他ならなかった^[162]。東西羌合流による反乱を例にして、漢軍が羌乱を鎮圧する時の残酷さを説明することもできる。段熲は合流した東西羌に対して、攻撃と懷柔を兼有する策を否定し、殲滅戦を行った。この事件に対して「段熲殺羌百万而内地虚耗」^[163]と、明代の李承勳は評価した。漢軍に大量に殺されて寇掠されたことは、漢に対する異民族の怨恨をもたらさざるを得なかった。

漢は、武帝の征服により、農耕地域の辺縁（閩越・南越・西南夷・朝鮮）だけではなく、農耕地域と遊牧地域との接壤地帯をも征服し、前漢の中期から後漢の前期にかけて、異民族に対する支配の強化により、これらの地域に対して、県レベルまでの直接統治を実現したことを通じて、帝国を建設した。しかし、異なる生活・生業をもつ異民族を統治する経験がなく、そして、漢民に倣って苛刻な支配を行った結果として、異民族は絶えず生存のために反乱を起こしていた。結局、漢帝国は、匈奴のような強大な遊牧帝国に打倒されなかったものの、その代わりに、国内の異民族の反乱により、次第に国力を消耗し尽くし、戦力投射が不可能だったためにシステムを維持することもできなくなって、最後に、異民族の反乱と漢民の反乱という二重の打撃により、崩壊を迎えることとなったのであった。

註：

^[1] Kees Van Der Pijl: *Nomads, Empires, States: Modes of Foreign Relations and Political Economy, Volume 1*, Pluto Press, 2007, p. 64.

^[2] 廣瀬憲雄『古代日本外交史-東部ユーラシアの視点から読み直す』講談社、2014 年、36-38 頁

^[3] 常璩著、任乃強校注『華陽國志校補図注』卷 3、上海古籍出版社、1987 年、141 頁

- [4] 『史記』卷 114, 中華書局, 1963 年, 2980 頁
- [5] 『史記』卷 113, 2970-2971 頁
- [6] 陳国強、蔣炳釗、吳綿吉、辛土成『百越民族史』中国社会科学出版社, 1988 年, 187-190 頁
- [7] 『史記』卷 113, 2971 頁
- [8] 広州象崗漢墓發掘隊「西漢南越王墓發掘初步報告」『考古』第 3 期, 1988 年
- [9] 『史記』卷 113, 2971 頁
- [10] 『漢書』卷 95, 中華書局, 1964 年, 3839 頁
- [11] 『漢書』卷 57 下, 2581 頁
- [12] 夜郎に通じる道は難航していたが、何らかの成果のないとは言えない。実際に、紀元前 129 年、「南夷始置郵亭」（『史記』2995 頁）とある通り、夜郎に通じる道は、一部分が開通した。郵亭の設置は、漢と南夷との間に一定の持続的な経済・政治関係ができたことを意味する。周及徐「西漢通西南夷的幾個問題及通西南夷大事年表」『語言歷史論叢』第 12 輯, 2017 年, 125-126 頁
- [13] 『史記』卷 113, 2972 頁
- [14] 『史記』卷 113, 2972 頁
- [15] 『史記』卷 113, 2972 頁
- [16] 『漢書』卷 95, 3863 頁
- [17] 紀元前 122 年、張騫は第一次西域遠征の時に大夏に邛竹杖と蜀布を発見し、西南夷から大夏までの道を把握し、「以騫度之、大夏去漢万二千里、居西南。今身毒又居大夏東南数千里、有蜀物、此其去蜀不遠矣。今使大夏、從羌中、險、羌人惡之；少北、則為匈奴所得；從蜀、宜徑、又無寇」（『漢書』卷 61, 2689-2690 頁）とあるように、この道が匈奴と羌の影響を受けないため河西回廊より安全であると判断し、武帝に「西南夷-大夏」道を勧めた。
- [18] 青山公亮先生最終講義録編集委員会『青山公亮先生最終講義録 漢・魏時代の朝鮮』明治大学文学部史学地理学科, 1973 年, 7-10 頁；堀敏一『東アジア世界の形成—中国と周辺国家』汲古書院, 2006 年, 46-47 頁
- [19] 黎小龍『漢書・西南夷兩粵朝鮮傳』三傳合一体例与兩漢边疆民族思想『中国边疆史地研究』第 2 期, 2015 年, 64-66 頁
- [20] 例えば、「漢誅西南夷、独滇復寵。及東粵滅国遷衆、繇王居股等猶為万户侯。三方之開、皆自好事之臣。」『漢書』卷 95, 3868 頁
- [21] 例えば、「関東諸侯無強大之國、三垂蛮夷無逆理之節；殆為後宮。」『漢書』卷 60, 2671 頁
- [22] 『史記』卷 116, 2991 頁
- [23] 『華陽國志校補図注』卷 3, 142 頁
- [24] ここの漢民は、種族意味上の漢人を指さず、漢の統治を受ける、笮都を主体とする異民族と漢人を指す。石碩「漢代的『笮都夷』、『旄牛徼外』与『徼外夷』—論漢代川西高原的『徼』之劃分及部落分布」『四川大学学報（哲学社会科学版）』第 4 期, 2004 年, 115 頁
- [25] 『漢書』卷 64 下, 2830 頁
- [26] 『後漢書』卷 86, 2835 頁
- [27] 『後漢書』卷 86, 2836 頁
- [28] 『漢書』卷 64 下, 2830 頁
- [29] 『華陽國志校補図注』卷 3, 185 頁
- [30] 『漢書』卷 95, 3864 頁
- [31] 山公亮先生最終講義録編集委員会『青山公亮先生最終講義録 漢・魏時代の朝鮮』, 20-24 頁
- [32] 『漢書』卷 24 下, 1174 頁
- [33] 『漢書』卷 81, 3337 頁
- [34] 『後漢書』卷 48, 1598 頁

- [35] 『漢書』卷24下, 1174頁
- [36] 『漢書』卷24下, 1174頁
- [37] 方国瑜『中国西南歴史地理考釋』中華書局, 1987年, 29-33頁
- [38] 川本芳昭「漢唐間における雲南と日本との関係について-比較史から見た-」川本芳昭『東アジア古代における諸民族と国家』汲古書院, 2015年(初出2013年), 264-267頁
- [39] 川手翔生「南越の統治体制と漢代の珠崖郡放棄」『史観』第174号, 2016年, 53-55頁
- [40] 楊振紅、尹在碩「韓半島出土簡牘与韓国慶州、扶余木簡釋文補正」, ト憲群、楊振紅編『簡帛研究』広西師範大学出版社, 2007年, 281-288頁
- [41] 後藤均平『ベトナム救国抗争史—ベトナム・中国・日本—』新人物往来社, 1975年, 80-81頁
- [42] 『後漢書』卷24, 839頁
- [43] 『後漢書』卷86, 2843頁
- [44] 洪適『隸釋・隸續』中華書局, 1986年, 429-431頁
- [45] 魏斌「古人堤簡牘与東漢武陵蛮」『中央研究院歴史語言研究所集刊』第85本第1分, 2014年, 86頁
- [46] 劉弘、鄧海春、姜先傑「試析漢王朝政治整合西南夷過程中郡県の特徴—以越嶲郡為例」『四川文物』第3期, 2015年, 72-74頁
- [47] 『華陽国志校補図注』卷3, 128頁
- [48] 黎小龍、徐難於「論秦漢時期西南區域開發的差異与格局」『西南師範大学学報(哲学社会科学版)』第3期, 1997年, 22頁
- [49] 『華陽国志校補図注』卷3, 175頁
- [50] 黎小龍「周秦兩漢西南區域民族地理觀的形成与嬗变」『民族研究』第3期, 2004年, 73-74頁
- [51] 劉增貴「漢代的益州土族」『歴史語言研究所集刊』第60本第3分冊, 1990年, 529-536頁
- [52] 黎小龍「兩漢時期西南人才地理特徵探析」『西南師範大学学報(哲学社会科学版)』第2期, 1995年, 89-91頁
- [53] 尤中『中国西南の古代民族』雲南人民出版社, 1980年, 26-28頁
- [54] 『三国志』卷35, 中華書局, 1971年, 921頁
- [55] 『華陽国志校補図注』卷4, 285頁
- [56] 不韋に移住した対象については、孫盛の『蜀譜』によると、「初、秦徙呂不韋子弟宗族於蜀、漢武帝開西南夷、置郡県、徙呂氏以充之、因置不韋県」(『後漢書』卷86, 2847頁)とあるように、南越の呂嘉ではなく、呂不韋の子・弟・宗族である。しかし、楊兆栄は、名前の意味、設置の時間、牢哀での南越の儋耳の伝播、不韋県設置後の人口の急増などの側面から、孫盛説を否定し、そこに移住した者が呂嘉の子孫であることを証明する。楊兆栄「西漢南越王相呂嘉遺族入滇及其歴史影響試探」『中国史研究』第4期, 2004年, 25-30頁
- [57] 『後漢書』卷76, 2462頁
- [58] 『後漢書』2836頁
- [59] 『後漢書』卷86, 2846頁
- [60] 『華陽国志校補図注』卷4, 278頁
- [61] 『華陽国志校補図注』卷3, 148頁
- [62] 『後漢書』卷86, 2847頁
- [63] 『後漢書』卷86, 2836頁
- [64] 『後漢書』卷86, 2845頁
- [65] 『後漢書』卷86, 2833頁
- [66] 『漢書』卷6, 170頁
- [67] 『漢書』卷24下, 1162頁
- [68] 『漢書』卷24下, 1173頁

- [69] 葛劍雄『中国移民史 第二卷』福建人民出版社，1997 年，154 頁
- [70] 『後漢書』卷 89，2953-2954 頁
- [71] 葛劍雄『中国移民史 第二卷』198 頁
- [72] 『漢書』卷 90，2981 頁
- [73] 『漢書』卷 94 上，3784 頁
- [74] 『後漢書』卷 90，2982 頁
- [75] 『後漢書』卷 87，2876 頁
- [76] 『漢書』卷 69，2993 頁
- [77] 『後漢書』卷 87，2878-2879 頁
- [78] 『後漢書』卷 87，2880 頁
- [79] 『後漢書』卷 87，2884 頁
- [80] 東羌と西羌との区別について、「羌居安定・北地・上郡・西河者，謂之東羌；居隴西・漢陽，延及金城塞外者，謂之西羌」（『資治通鑑』中華書局，1956 年，1689 頁）とある基準を、胡三省は註で提示している。しかし、この基準は必ずしも学界多数に認められてはいない。例えば、馬長寿『氏与羌』上海人民出版社，1984 年，102-106 頁；陳琳国「東羌与西羌辨析」『學術月刊』第 4 期，2008 年；酒井駿多「漢代の『羌』という虚像：白馬と東羌を例に」『上智史学』第 62 号，2017 年，64-73 頁
- [81] 葛劍雄『中国移民史 第二卷』236 頁
- [82] 『漢書』卷 6，176 頁
- [83] 『漢書』卷 55，2483 頁
- [84] 『漢書』卷 96 上，3876 頁
- [85] 鎌田重雄『秦漢政治制度の研究』日本學術振興会，1962 年，323 頁
- [86] 熊谷滋三「前漢における属国制の形成--「五属国」の問題を中心として」『史観』134 号，1996 年，28-33 頁
- [87] 野口優「前漢辺郡都尉府の職掌と辺郡統治制度」『東洋史研究』第 71 卷 1 号，2012 年，23-26 頁
- [88] 『漢書』卷 94 上，3783 頁
- [89] 熊谷滋三「前漢における属国制の形成--「五属国」の問題を中心として」34 頁
- [90] 『後漢書』卷 90，2981 頁
- [91] 『後漢書』卷 87，2886 頁
- [92] 『後漢書』卷 89，2964-2965 頁
- [93] 内田吟風「南匈奴の中国移住」『北アジア史研究-匈奴篇-』1975 年〔初出 1932 年〕，同朋舎出版，222 頁
- [94] 『漢書』志 28，3621 頁
- [95] 渡邊信一郎「漢代の財政と帝国編成」『中国古代の財政と国家』汲古書院，2010 年，178-181 頁
- [96] 属国都尉は、最初に典属国の管轄を受けたが、紀元前 28 年に典属国が大鴻臚に併合された後、大鴻臚の管轄を受けた。典属国の大鴻臚への併合については、熊谷滋三は、対異民族政策の側面で、漢が異民族の国内化のために一元的な手段を取ることを指摘し、阿部幸信は、大鴻臚の一元的管理により、「封建擬制を媒介とした漢帝国の同心円的多重構造が完成した」ことを強調する。熊谷滋三「前漢における『蛮夷降者』と『帰義蛮夷』」『東洋文化研究所紀要』第 134 冊，1997 年，62-63 頁；阿部幸信「漢帝国の内臣-外臣構造形成過程に関する一試論-主に印綬制度よりみたる-」『歴史学研究』第 784 号，2004 年，32-33 頁
- [97] 小林聡「後漢の少数民族統御官に関する一考察」『九州大学東洋史論』第 1 号，1989 年，99 頁
- [98] 『後漢書』卷 87，2878 頁
- [99] 『後漢書』卷 57，1850 頁
- [100] 『後漢書』卷 4，179 頁

- [101] 『後漢書』卷3, 156 頁
- [102] 『後漢書』卷51, 1692 頁
- [103] 林幹「兩漢時期『護烏桓校尉』略考」『內蒙古社会科学』第1期, 1987年, 52-54 頁;
酒井駿多「後漢の羌支配体制の成立と崩壊: 護羌校尉を中心に」『紀尾井論叢』第4号,
2016年, 10-13 頁
- [104] 『後漢書』卷89, 2943 頁
- [105] 『後漢書』卷89, 2942 頁
- [106] 『後漢書』卷89, 2943 頁
- [107] 『後漢書』卷89, 2945 頁
- [108] 『後漢書』卷89, 2944 頁
- [109] 『後漢書』卷89, 2948 頁
- [110] 李俊芳「漢代冊命諸侯王禮儀研究」『中国史研究』第3期, 2010年, 94-98 頁
- [111] 『後漢書』卷89, 2945 頁
- [112] 『後漢書』志24, 3565 頁
- [113] 小林聡「後漢の少数民族統御官に関する一考察」102-108 頁
- [114] 『後漢書』卷89, 2960 頁
- [115] 『後漢書』卷89, 2964 頁
- [116] 王雲度「東漢史分期芻議」『南都學壇』第1期, 1991年
- [117] 魯西奇「釋『蛮』」魯西奇『人群・聚落・地域社会: 中古南方史地初探』廈門大学出版社,
2011年, 23-25 頁
- [118] 『後漢書』卷86, 2831 頁
- [119] 『後漢書』卷86, 2841 頁
- [120] 『後漢書』卷86, 2842 頁
- [121] 魏斌「古人堤簡牘与東漢武陵蛮」83 頁
- [122] 『後漢書』卷86, 2860 頁
- [123] 『後漢書』卷87, 2884 頁
- [124] 『後漢書』卷87, 2891 頁
- [125] 『後漢書』卷87, 2897 頁
- [126] 馬大英『漢代財政史』中国財政經濟出版社, 1983年, 15-16 頁
- [127] 『後漢書』卷86, 2841 頁
- [128] 張家山二四七号漢基竹簡整理小組『張家山漢基竹簡(二四七号墓): 釋文修訂本』文物出版社, 2006年, 332 頁
- [129] 『後漢書』卷86, 2842 頁
- [130] 『後漢書』卷86, 2831 頁
- [131] 王万雋「秦漢魏晉時代的『實』」『早期中国史研究』第1卷, 2009年, 156 頁
- [132] 伊藤敏雄「中国古代における蛮夷支配の系譜-税役を中心として-」『中国古代の国家と民衆』編集委員会『中国古代の国家と民衆-堀敏一先生古稀記念』汲古書院, 1995年, 245 頁
- [133] 張家山二四七号漢基竹簡整理小組『張家山漢基竹簡(二四七号墓): 釋文修訂本』332-333 頁
- [134] 織田晃嘉「秦漢朝の蛮夷統治政策について」『人文論究』第51卷第4号, 2002年, 49-50 頁
- [135] 『漢書』卷24下, 1174 頁
- [136] 『後漢書』卷86, 2851 頁
- [137] 『後漢書』卷86, 2833 頁
- [138] 『後漢書』卷86, 2853 頁
- [139] 『後漢書』卷86, 2833 頁
- [140] 『後漢書』卷86, 2832 頁

- [141] 『後漢書』卷 86, 2837 頁
- [142] 黃今言『秦漢軍制史論』江西人民出版社, 1993 年, 119 頁
- [143] 『後漢書』卷 90, 2981 頁
- [144] 『後漢書』卷 89, 2964-2965 頁
- [145] 李大龍「辺吏与古代中国疆域的形成—以兩漢為中心」『雲南師範大學學報（哲學社會科學版）』第 6 期, 2008 年, 9-10 頁
- [146] 『後漢書』卷 31, 1111 頁
- [147] 『後漢書』卷 87, 2895 頁
- [148] 胡平生『敦煌懸泉漢簡釋粹』上海古籍出版社, 2001 年, 170-171 頁
- [149] 『漢書』2881 頁
- [150] 『後漢書』卷 87, 2886 頁
- [151] 『後漢書』卷 86, 2899 頁
- [152] 『後漢書』卷 86, 2843 頁
- [153] 『後漢書』卷 86, 2841 頁
- [154] 『後漢書』卷 86, 2839 頁
- [155] 『後漢書』卷 87, 2878 頁
- [156] 『華陽國志校注』卷 3, 218 頁
- [157] 『漢書』卷 28 下, 1666 頁
- [158] 谷口房男『華南民族史研究』綠蔭書房, 1996 年, 23-25 頁
- [159] 韋東超「移与族際衝突—東漢時期武陵、長沙、零陵三郡『蠻变』動因淺論」『中南民族大學學報（人文社會科學版）』第 1 期, 2003 年, 64-65 頁
- [160] 『漢書』卷 99 上, 4077 頁
- [161] 『後漢書』卷 65, 2153 頁
- [162] 馬長壽『氐与羌』上海人民出版社, 1984 年, 119-120 頁
- [163] 『明史』卷 330, 中華書局, 1974 年, 8544 頁

第五章 東部ユーラシア国際システムの構造：漢・匈奴による二極から漢による単極へ

東部ユーラシア国際システムについて、第三章では、漠南と西域をめぐる漢と匈奴との争覇というテーマで国家間の相互作用を、第四章では、農耕地域の辺縁（閩越・南越・西南夷・朝鮮）と接壤地帯（漠南・河西回廊及びその南の地域に跨る地域）における漢の帝国建設と異民族支配というテーマで帝国内の相互作用を、明らかにした。

概して言えば、東部ユーラシア国際システムは、北匈奴の滅亡を境に二つのタイプに分かれる。北匈奴の滅亡前には、国家間の相互作用の側面から見て、漢は優勢を持った場合には、匈奴を漠南から漠北までに完全に駆逐し、西域に対する覇権を匈奴と競った；もし劣勢になった場合には、西域からある程度まで退いて匈奴の影響の浸透を放任しながら、占領した漠南と漠北との間の地域からある程度後退して匈奴との衝突を避けた。そして、この時期、帝国内の相互作用の側面から見て、漢は、征服した農耕地域の辺縁と接壤地帯には郡県制を設置したが、農耕地域の辺縁、特に南越・西南夷の地域では、土着の異民族の勢力が強かったため、すぐに実質的な支配を行うことができず、異民族勢力の弱体化・郡県制の浸透・移民政策・漢化政策を通じて、後漢中期、すなわち北匈奴の滅亡の前後に、ようやく異民族に対する支配の強化を実現し、県レベルまでの直接統治を行ったのだった。一方、匈奴は、漢に連続的に負けて国力が衰弱した場合には、漢に和親（講和）を請うて、漢との戦争の回避のため核心利益に関わらない西域の国家を漢に譲り、国力の回復に集中し；一旦国力が回復して漢と競争する実力を持ったら、前述の平和状態を破って、漢の辺郡に寇掠・侵攻し、西域に再び影響を回復・拡大した。そして、匈奴が分裂した場合には、相対的劣勢に立つ分断政権（東匈奴・南匈奴）は、漢に称臣し、漢からの経済・軍事援助に頼り、相対的優勢に立つ分断政権（西匈奴・北匈奴）と対抗していた。このような国際背景にあって、西域諸国は、漢・匈奴に対抗する能力を持たず、漢・匈奴による制度を受け入れて臣服を示すことを通じて存続を維持していた。

しかし、北匈奴の滅亡により、東部ユーラシアの状況は一変した。匈奴のような遊牧帝国がなくなったため、漢帝国と対抗する勢力がなくなった。したがって、漢は西域に対する覇権を完全に得ることとなった。その後、鮮卑は一時的に軍事的に統一されたが、政治面の統一を実現しなかったため、漢の辺郡に安全保障上の脅威を与えても、統一政権としての匈奴のように漢と覇権を争ったことがなかった。一方、漢に対しては、異民族支配の

強化への反感ゆえに、漢の統治により生存が難しくなった異民族が絶えず反乱を行っていた。結果として、漢は内乱の鎮圧のために、軍事・経済的資源を著しく消させ、対外的な戦力投射が次第になくなって、西域・遊牧地域・農耕地域を一体化させる能力を失った。このような状況の中で、東部ユーラシア国際システムは、西域と遊牧地域と農耕地域との間の相互作用が完全になくなったのではないまでも、システムを成立させるほどの強度・頻度を失ったため崩壊してきた。

この 400 年ほどの歴史において、国家間・帝国内における多様な相互作用は、戦争を除いて、規則・ルール・規範などを含める制度を形成させた。その中には、最も顕著な二国間制度は、人質に関する質子^[1]制度、経済関係に関する朝貢（貢献）制度、政治関係に関する冊封制度である。この三つの制度は、ルース＝スミット（Reus-Smit）の提案する「基本的制度（fundamental institutions）」の条件に相応しく、「国家間の協力的な相互作用に対する基本の枠組み、勢力均衡と利益構造との変化を越える制度的実践を提供する」^[2]。言い換えると、これらの制度は、権力分布がどう変化しても、国家間の非戦争的な相互作用に適用され、国際システムをうまく維持・機構させる。一方、これらの制度は、各地域においては名前が異なっても、漢か匈奴により設計されたものではなく、長い歴史の中で進化的に発展してきたものである^[3]。したがって、システムにおいては、国家はこれらの制度の意味をかなりよく理解して、特定の目的のために特定の制度を利用する。例えば、漢が西域に初めて進出する時、西域諸国は、漢の制度的な要求の意味を知って、匈奴との関係のため、その要求をほとんど拒否した。一方、これらの制度は、構成的（constitutive）機能を持って、特定の制度をとる国家に対してその地位・アイデンティティ・義務・権利を規定した^[4]。最後に、これらの制度は、近現代の制度とは異なり、秩序のある（主権）不平等という組織原則にもとづき、言い換えると、強い階層関係を反映する。そうであるとする、これらの制度を通じて、二国間関係の階層性を明らかにすることができる。第一章で提案したシステムの構造としての関係的権力にもとづく権力分布（権力中心の数）は、制度及び制度による階層性から明らかにすることができる。

第一節 東部ユーラシアにおける制度：質子・朝貢・冊封

東部ユーラシアにおいては、制度を採用する場合は一般的に三つのタイプに分かれる。まず、A 国は、戦争に勝利した後、戦敗した B 国に特定の制度を取らせた。例えば、漢は、

西域への進出の初期、匈奴の影響を受けた西域諸国にあまりにも歓迎されなかったことを背景に、西域進出の入り口に位置する楼蘭を撃破した後、楼蘭に質子を強要した。このタイプの制度適用は、基本的に大国によることが多い。しかし、大国により制度が適用されることは、覇権安定論とは異なり、制度の階層性が強いいため、安全保障面で大国が安全保障を提供することになる。そこにある国家の矛盾に仲介を与える場合を除けば、制度の提供は、基本的に大国の利益を確保することが主な目的で、公共財の提供というよりも、その国家を搾取する手段になる。したがって、覇権安定論におけるようなフリー・ライダーの問題が基本的に存在しない。もっとも、制度の維持が多少大国に負担をかけるため、大国は国力の衰弱の時、対外に戦力投射ができなくなる時には、制度を維持することを放棄する。例えば、後漢前期、漢は、匈奴による安全保障的脅威の対処に軍事力を集中したため、西域諸国による西域都護の回復の申請を拒否したのだった。

次に、A国は、特定の制度の意味を知った上で、B国に対して、その制度をとって、特定の政治目的を目指した。例えば、後漢前期、西域の鄯善、車師前などの18国は、匈奴の圧力を受けながら、台頭した莎車の拡張を恐れていたため、漢に納質・朝貢をして、西域都護を設置することを請うた。「第一次制度が…国際社会の成員国の資格の標準を定める」^[5]とブザンが指摘したことから見ても、システムの秩序に取り込まれなかった国家は、その秩序に参加するためには、特定の制度を採用することもある。例えば、大秦（ローマ）は、漢と交際のために、象牙・犀角・玳瑁などの特産を朝貢した。

最後に、A国とB国は、約・盟を通じて、両国間関係に特定の制度を適用することを約束する。国家間関係において、約・盟は、「漢亦引兵罷、使劉敬結和親之約」^[6]、「聞其大臣多勸单于北帰者、恐北去後難約束、昌・猛即与為盟約」^[7]とあるように、単に平等関係としての漢と匈奴との関係のみならず、「六年、閩粵撃南粵、南粵守天子約、不敢擅發兵、而以聞」^[8]、「会孝惠・高后天下初定、遼東太守即約滿為外臣」^[9]、「宛王蟬封与漢約、歲献天馬二匹」^[10]とあるように、漢と南越・閩越・朝鮮・西域諸国との不平等関係にも適用された。そして、約・盟は、国家間関係だけではなく、例えば、

昭王嘉之、而以其夷人、不欲加封、乃刻石盟要、復夷人頃田不租、十妻不筭、傷人者論、殺人者得以俛錢贖死。盟曰：「秦犯夷、輸黃龍一双；夷犯秦、輸清酒一鍾。」夷人安之^[11]。

先是、西部都尉広漢鄭純為政清絜、化行夷貊、君長感慕、皆献土珍、頌德美。天子嘉之、即以為永昌太守。純与哀牢夷人約、邑豪歲輸布貫頭衣二領、塩一斛、以為常賦、

夷俗安之^{〔12〕}。

とあるように、国内の異民族に対しても適用された。約・盟の広汎な利用のため、李元暉は、約が農耕民族の価値観の現れとして漢の異民族に対する政策だったとみなし、勢力均衡の時に約を通じて国家間関係を協調させる一方、一旦漢が優勢となったら、約を漢の命令としての「班」と「告」に変えたと考える^{〔13〕}。しかし、農耕民族のみならず遊牧民族も約を重視した。そして、漢と約を結ぶのは夜郎のような小国、国内の異民族のみならず、匈奴のような漢に比敵できる大国、大宛・南越のような地域的大国もあった。したがって、李の判断は必ずしも適切ではない。実際に、約は『説文解字』によると「纏束也」^{〔14〕}とあるように縛りを意味する「束」を指し、制限と規制を与えることを指す。したがって、約（及び盟）は国際関係における契約と同じく、双方の義務と権利を定めて行動に規制を与える手段に他ならない。そして、約・盟は、大国の行動に制限を与えるため、小国・国内異民族の利益をある程度まで保護するのである^{〔15〕}。

一 質子制度

質子、もっと一般的に言えば人質は、古今東西にわたり、信頼醸成の手段としてよく使われる。質子制度は、ある国家が自発的か強制的に王室の人（多くの場合には太子）・貴族・重臣を他国に送ることを通じて、この二つの国家間で、関係が緩和したり信頼が形成されたりという特定の政治目的を実現する制度を指す。この定義によると、前漢初期、漢と匈奴との和親関係において、漢の公主が質子としてみなされるかどうかという問題がある。史籍には、和親関係の 60 年間に、匈奴の単于が漢に派遣される公主を閼氏とした記録がない。一方、公主が実際ではなくても名義上の皇帝の娘である以上、質子制度の機能が生じる。したがって、公主の派遣は、漢と匈奴との政治婚姻というよりも、漢が匈奴に質子を派遣したという意味をもつ^{〔16〕}。

『史記』によると、質子制度は、春秋戦国時代から国家間関係においてよく使われた。

国彊欲待弱之來相事、故遣子及貴臣為質。国弱懼其侵伐、令子及貴臣往為質。又二

国敵亦為交質。左傳云周鄭交質、王子狐為質於鄭、鄭公子忽為質於周是也^{〔17〕}。

とあるように、強国は弱国の服従のため保証として質子を強要したり、弱国は強国による侵伐の回避のため宥和策として質子を派遣したり、敵対的關係にある二つの国家が信頼醸成のため互いに質子を派遣したりする三つのタイプがある。しかし、戦国時代には、質子制度は、単に中原における国家の間だけではなく、「其後燕有賢將秦開、為質於胡、胡甚信

之」^[18]とあるように、中原の国家と遊牧政権との間にも適用された。それだけではなく、遊牧政権の間にも質子の派遣が見られる。「頭曼欲廢冒頓而立少子，乃使冒頓質於月氏」とあるように、匈奴帝国の創建者としての冒頓は、単于になる前に、月氏に質子として派遣された。そうであるとする、質子制度は、決して漢の特有の制度ではなく、東部ユーラシアの歴史の中で進化をとげ発展してきたものだと考えられる。

ところで、質子を侍子と呼ぶのは、春秋戦国時代だけではなく、遊牧政権の間でもなく、武帝以降の漢に特有のことである。武帝は質子を、単に両国間の保証として扱わず、自分の側近に配置して一定の職を担当させた。そのため、武帝の側近には質子が多く見られる^[19]。

したがって、漢に滞留している質子に関して、漢は、送迎、管理、教育などを詳細的に規制した。質子の送迎について、西域からの質子は西域都護によって^[20]、後漢での南匈奴からの質子は使匈奴中郎將によって、自国と漢の都との旅の間、保護された。漢にいる質子は、「征和元年、楼蘭王死、国人來請質子在漢者、欲立之。質子常坐漢法、下蠶室宮刑、故不遣」^[21]とあるように、外交特権を持たず、漢の法律に管轄され、一方、「天子使嚴助往諭意、南粵王胡頓首曰：『天子乃興兵誅閩粵、死亡以報德！』遣太子嬰齊入宿衛。…嬰齊在長安時、取邯鄲嫪氏女、生子興」^[22]とあるように、漢の女と結婚したりする普通の生活を送った。漢は都で生活する質子のため「蛮夷邸」を築いた。したがって、蛮夷邸は漢が質子に政治的信号を与える絶好の場所になる。例えば、「宜鼎頭稟街蛮夷邸間、以示万里、明犯彊漢者、雖遠必誅」^[23]と「至永元六年、都護班超發諸国兵討焉耆・危須・尉黎・山国、遂斬焉耆・尉黎二王首、傳送京師、鼎蛮夷邸」^[24]とあるように、漢は重要な対外戦争に勝った後、質子の住む蛮夷邸に戦敗した国家の王の頭を懸けることを通じて、権威及び威嚇を示した。最後に、質子は漢にいる時には、漢の教育を受ける。例えば、年少の時代に漢に質子として派遣された経験のある延は、帰国の後、莎車王になり、「復參其典法」^[25]とあるように、漢の制度と法律を国内に参考・移植した。漢は教育を通じて、質子に漢に対する好感・敬慕を形成させながら、最も重要なことに、漢に対する臣服の意志を固めさせた。例えば、莎車王の延は、「常勅諸子、當世奉漢家、不可負也」^[26]とあるように、漢に固い忠誠を示した。

質子の派遣は自主と強制という二つのタイプに分かれる。まず、小国が自主的に大国に質子を出すのは、基本的に

而康居驕黠、訖不肯拜使者。都護吏至其国、坐之烏孫諸使下、王及貴人先飲食已、

乃飲啗都護吏、故為無所省以夸旁国。以此度之、何故遣子入侍？其欲賈市為好、辞之詐也 [27]。

とあるように、通商の権利を確保したり、

是時賢自負兵強、欲并兼西域、攻撃益甚。諸国聞都護不出、而侍子皆還、大憂恐、乃与敦煌太守檄、願留侍子以示莎車、言侍子見留、都護尋出、冀且息其兵 [28]。

とあるように、大国の權威を借りて安全を守ったり、

单于聞之、遣左大當戸烏夷治將五千騎擊烏孫、殺数百人、略千余人、毆牛畜去。卑援憲恐、遣子趨遼為質匈奴 [29]。

とあるように、大国からの侵攻を回避したりする多様の目的で行われた。この意味から、中村桃子は「質子は相手国の降伏や臣従を求めて『出させる』という性格のものではなく、相手国との『親信』を求めて自ら進んで『出す』ものなのである」とみなしている [30]。

だが、東部ユーラシアには、力関係が対称的であるというよりも、非対称的である場合が多いため、質子は、小国が多様な目的のために自主的に行うより、臣服の印として大国に強制されることが多い。例えば、

武帝元狩中、票騎將軍霍去病將兵擊匈奴右地、多斬首、虜獲休屠王祭天金人。其夏、票騎復西過居延、攻祁連山、大克獲。於是单于怨昆邪・休屠居西方多為漢所破、召其王欲誅之。昆邪・休屠恐、謀降漢。休屠王後悔、昆邪王殺之、并將其衆降漢。封昆邪王為列侯。日磾以父不降見殺、与母閼氏、弟倫俱沒入官、輸黃門養馬、時年十四矣 [31]。

とあるように、大国が戦勝の戦利品として貴族を俘虜として捕らえたり

貳師將軍之東、諸所過小国聞宛破、皆使其子弟從入貢獻、見天子、因為質焉 [32]。

とあるように、小国が大国の兵威に怯えたり

楊信説单于曰：『即欲和親、以单于太子為質於漢』 [33]。

左伊秩訾曰：「不然。疆弱有時、今漢方盛、烏孫城郭諸国皆為臣妾。自且鞮侯单于以來、匈奴日削、不能取復、雖屈疆於此、未嘗一日安也。今事漢則安存、不事則危亡、計何以過此！」諸大人相難久之。呼韓邪從其計、引衆南近塞、遣子右賢王銖婁渠堂入侍 [34]。

とあるように、大国が小国に臣服させたりする場合に、小国は強制的に大国に質子を出す。このように質子を出すのは、多かれ少なかれ臣服の意思を意味した。

一般的に言えば、質子制度は、信頼を醸成させたり、臣服を示したり、関係を緩和させたりする機能を有する。古代において、協約が結ばれても、締結国が協約を破ることは珍

しくない。そのため、協約の保証として、人質が必要される。したがって、「人質が保証の意義をもつことは、一般の質の目的と共通する」^[35]、と堀敏一は指摘する。したがって、人質は、初めの時から臣服の意味をもつわけではない。だが、人質を通じて協約の遵守を確保することは決して容易ではない。例えば、頭曼単于は、月氏に派遣された冒頓単于を月氏の手を借りて殺すため、月氏を攻撃する。そのため、人質の保証の機能に対して、「信不由中，質無益也。明怨而行，要之以禮，雖無有質，誰能間之」^[36]とあるような非難もある。とは言え、肉親の情が重視される以上、人質は保証として多少機能していたのだろう^[37]。

質子制度は、戦争の回避、大国の要求により、次第に臣服を示す機能を帯びた。戦争状態における二国には、一つ国家は、停戦・講和のために、もう一つの国家に質子を送る。この場合には、質子の派遣は、敗北を認めたり、臣服したりする意味を示すことになる。例えば、匈奴の東西分裂の後、東匈奴にせよ、西匈奴にせよ、いずれも、漢による攻撃を憚って、漢に質子を送った。その後、漢が東・西匈奴に対して攻撃を加えなかったのは、質子の派遣を匈奴の臣服とみなしたためと考えられる。そして、大国が臣服のために質子の派遣を前提として要求するようになって以降、システムにおいては、質子が臣服という意味をとまなうという認識は共有される。こうして、「質子の派遣＝臣服」という概念が構成されることになった。

しかし、質子の最も重要な機能は、質子が帰国して君主になった後に、大国対して権威の承認にもとづく忠誠をもつことを確保することである。一般的に言えば、質子は太子であることが多いため、帰国の後に君主になる可能性が高い。しかし、ある国家が同時に二つの国家に質子を送ったら、だれが即位するかをめぐる問題が生じる。この場合に、基本的に自国にとって影響のより強い国家に派遣された質子が君主になる。例えば、楼蘭は武帝の時に漢と匈奴に同時に質子を送って、紀元前 92 年、その国王が死んだため、漢にいる質子を国王として擁立しようとした。しかし、その質子が犯罪で宮刑に処されたため、漢はその質子の送還を拒否した。その後、匈奴から帰った質子が楼蘭王になり、「然楼蘭国最在東垂、近漢、當白龍堆、乏水草、常主發導、負水儋糧、送迎漢使、又数为吏卒所寇、懲艾不便与漢通。後復為匈奴反間、数遮殺漢使」^[38]とあるように、楼蘭の対外政策を変えて、親漢から親匈奴になった。この例から見て、楼蘭は、最初に漢の質子を王として擁立しようとしたことから見て、匈奴より漢の影響を強く受けた。しかし、匈奴に派遣された質子の即位とともに、楼蘭は、漢から意図的に離れて、匈奴に一辺倒政策をとった。結果

から見て、質子は一国の対外政策を根本から変えることができる。したがって、

於是楼蘭遣一子質匈奴、一子質漢。後貳師軍擊大宛、匈奴欲遮之、貳師兵盛不敢當、即遣騎因楼蘭候漢使後過者、欲絶勿通。時漢軍正任文將兵屯玉門關、為貳師後距、捕得生口、知狀以聞。上詔文便道引兵捕楼蘭王。將詣闕、簿責王對曰：「小国在大国間、不兩属無以自安。願徙国入居漠地。」上直其言、遣歸国、亦因使候司匈奴。匈奴自是不甚親信楼蘭^[39]。

初、貳師將軍李広利擊大宛、還過杆彌、杆彌遣太子賴丹為質於龜茲。広利責龜茲曰：

「外国皆臣屬於漢、龜茲何以得受杆彌質？」即將賴丹入至京師^[40]。

とあるように、大国は、原則として、自国に質子を派遣した小国が他の国家に質子を派遣することを禁じる。しかし、楼蘭の例のように、当時、漢は、匈奴を完全に屈服させる能力をもたなかったため、楼蘭が匈奴に質子を送ったことを大目に見たのだった。

二 朝貢制度

朝貢は、字面から言うと、ある国家の君主（王・皇帝など）に朝覲する時に貢物を献上することを指す。朝貢制度は、国家間において、ある国家が、特定の理由のため、他国の君主に対して、使者か本国の君主の朝覲時に、自発的か強制的に貢物を献上することを通じて、両国間に特定な政治関係を形成させる制度を意味する。ここで区別しなければならないのは、システム秩序としての朝貢システム（Tribute System）と朝貢制度である。マンコール（Mancall）によるこの朝貢システムという概念は、西洋人が東洋を描写するために発明したものである^[41]。フェアバンクが近代以前の中国を中心とする東アジア秩序を朝貢システムあるいは朝貢・貿易システムとして定義した後、朝貢システムは古代東アジアあるいは古代東部ユーラシアの代名詞になった。概して言えば、朝貢システムには、中国は、外国の朝貢を受けることを通じて、中国の天子の権威や合法性が証明され、一方、朝貢国は、中国に貢物を献上することを通じて、朝鮮などの典型的朝貢国のように中国皇帝の冊封により王権の正統性を裏付けることを除いて、基本的に中国から回賜と通商の権利を目指す^[42]。したがって、朝貢システム論は、古代東部ユーラシア国際システムの複雑さを朝貢という制度に簡略化し還元したものである。しかし、明代以降、「民間貿易（互市）を一切禁止して、全ての国際交流（国際交易）を朝貢制度に一元化した極めて統制的な明初の体制を指す」と檀上寛が指摘するように、東アジアでの朝貢一元体制が一時的な状況に過ぎなかった^[43]。他の国際制度は朝貢のような重要性がなかったが、実際に機能してい

た。そして、明清以前には、古代東部ユーラシア国際システムにおける国際交流は、単に朝貢だけではなく、その他の制度をも通じて行われていた。言い換えると、朝貢制度は、古代東部ユーラシア国際システムの多くの制度の一つに過ぎない。

では、朝貢は中国によって発明されたものだろうか。多くの研究者は、古代東部ユーラシアにおける朝貢の根源を先秦時代の五服制による諸侯からの貢・献とみなした^[44]。しかし、全海宗は、『史記』と『漢書』を分析した上で、「朝貢」が術語として使われるのは武帝以降のことなので、武帝以前には、朝貢が対外関係における制度としては使われなかったと指摘する^[45]。実際に、朝貢は「外交政策上の交流における人類学的な慣習」^[46]であり、関係を構築する機能を持つ贈り物 (gift-giving) に他ならず、初めて合う時に敵意を消し、相互作用をうまく行わせる役割を演じる。そして、ヴァッテルのいうように、「大国からの圧迫を免除したり、自国の安全を確保したりするために、小国が独立国家の資格が終わることを避ける対価として、朝貢を支払うことは古代には通常なのだ」^[47]だった。例えば、「西域諸国、各有君長、兵衆分弱、無所統一、雖属匈奴、不相親附。匈奴能得其馬畜旃罽、而不能統率与之進退」^[48]とあるように、この「馬畜旃罽」は、本質から言うと、匈奴が西域諸国から得た朝貢に違いない。又、前漢前期、漢は、匈奴と和親条約を結んで、「歳奉匈奴絮繒酒食物各有数」^[49]とあるように、年ごとに匈奴に貢物を与えた。そうであるとする、「もし漢と匈奴との間に朝貢関係が存在すれば、漢が匈奴に朝貢した」^[50]と李雲泉はいう。最後に、史籍には、朝貢という言葉が基本的に漢の外交だけに使われ、漢が与える朝貢は「漢遣中郎將蘇武厚幣賂遺单于、单于益驕、禮甚倨、非漢所望也」^[51]、「及賂遺贈送、万里相奉、師旅之費、不可勝計」^[52]とあるように、基本的に賂遺^[53]とみなされ、匈奴か西域大国が受ける朝貢は、「賢以大宛貢税減少、自將諸国兵数万人攻大宛」^[54]、「匈奴西辺日逐王置僮僕都尉、使領西域、常居焉耆・危須・尉黎間、賦税諸国、取富給焉」^[55]とあるように、基本的に税と呼ばれた。要するに、贈り物としての朝貢は東部ユーラシアには、漢によって発明されたものではなく、異なる名前の下で普遍的に行われていたものである。この意味から言うと、朝貢も東部ユーラシアの歴史の中で進化し発展してきたものだと考えられる。

朝貢は、一つのタイプではなく、幾つかのタイプに分けることができる。例えば、全海宗は、経済、礼儀、軍事、政治、文化などの側面での基準により、朝貢関係を典型的朝貢関係、準朝貢関係、非朝貢関係に分ける^[56]。しかし、全海宗の分類は中韓関係をモデルにして帰納され、その汎用性が疑問視される。一方、李雲泉は、朝貢の数、政治的隷属関係、

中国の文化に対する承認を基準に、朝貢関係を典型かつ実質的朝貢関係、一般的朝貢関係、名義的朝貢関係に分ける^[57]。しかし、一般的朝貢関係と名義的朝貢関係は、中国の文化に対する承認が異なっても、実際に政治性が低く、貿易を目的とするという共通点がある。これらの分類は、故意的か無意識的にその基準に中国中心主義を設定し、中国以外の国家間の朝貢関係を見逃す傾向にある。

本論文では、第三章で述べた東部ユーラシア国際システムでの相互作用に基づいて、朝貢の動機を基準に、朝貢を、礼儀的朝貢、経済的朝貢、及び政治的朝貢に分ける。まず、礼儀的朝貢は、A国がB国に初めて使者を派遣する時、あるいは敵対関係に立つ時に、友好な雰囲気を作り、交際をうまく行うために、贈り物を与えることを指す。例えば、

天子以為然、拜騫為中郎將、將三百人、馬各二匹、牛羊以万数、齎金幣帛直数千鉅万、多持節副使、道可便遣之旁国^[58]。

安息国遣使献師子・扶拔^[59]。

至桓帝延熹九年、大秦王安敦遣使自日南徼外献象牙・犀角・瑇瑁、始乃一通焉^[60]。

徼外蛮及掸国王雍由調遣重訳奉国珍宝^[61]。

とあるように、漢にせよ、西域の諸国にせよ、大秦（ローマ）にせよ、東南アジアでの国家にせよ、いずれも初めて使者を派遣する時に対象国に朝貢を行った。朝貢を受けた後、外国に対して返礼を行うことは普通である。このように、贈り物による関係構築にとって、必要である贈与（giving）、受贈（receiving）及び返礼（reciprocating）が全て果たされるため^[62]、朝貢を与える国と朝貢を受ける国との間に外交関係が始まる。例えば、漢の西域進出の初期、西域諸国は、匈奴の影響を受けて、漢の使者に対して、それを敵視するわけではなかったものの、歓迎しなかった。しかし、漢は、西域に派遣された使者に沢山の贈り物を対象国に与えさせたことを通じて、「其使見漢人衆富厚、帰其国、其国後乃益重漢」^[63]とある烏孫の反応のように、財力で匈奴の西域影響網を打破し、西域諸国と外交関係を始めた。しかし、礼儀的朝貢は、距離の近い国家の間には、相互作用が行われれば行われるほど、その意味が次第に失なわれるため、なくなっていった。そうであるとすると、礼儀的朝貢は、基本的に距離の遠い国家の間に維持されるものと見ることができる。

そして、国家は、関係回復・停戦・休戦のために、敵対国に贈り物を与えることもある。例えば、「至六年、始令帰德侯劉颯使匈奴、匈奴亦遣使來献、漢復令中郎將韓統報命、賂遣金幣、以通旧好」^[64]とあるように、漢は関係を緩和・回復するために、匈奴に賂遣を与えた。もちろん、「二十八年、北匈奴復遣使詣闕、貢馬及裘、更乞和親、并請音楽、又求率西

域諸国胡客与俱献見」^[65]とあるように、匈奴は関係を緩和・回復するために、漢に貢物をも与えた。このように、贈り物を通じて、両国間の対立・敵対が慰められて、平和的か友好的な関係が可能になった。

次に、経済的朝貢は、A国がB国に、故意に贈り物を与え、形式的に順従な態度を示すことを通じて、通商・交易する権利を得ることを指す。例えば、罽賓は武帝の時漢と外交関係を結んだが、漢が遠い距離を克服できないとの判断にもとづいて、漢の使者を殺害し、漢との関係が中断された。その後、漢と交易を行うためには、朝貢を行なった。このような朝貢に対して、

前親逆節、惡暴西域、故絶而不通；今悔過來、而無親属貴人、奉献者皆行賈賤人、

欲通貨市買、以献為名、故煩使者送至県度、恐失実見欺^[66]。

とあるように、杜欽はその本質を交易であると指摘した。実際に、朝貢を通じて交易を行うことは、秦漢から明清まで東部ユーラシアにおいて、中華帝国と周辺の遊牧国家との間でよく行われた。張勇進は直接に「朝貢システムを特殊な交易協定」^[67]と、フェアバンクと鄧嗣禹はさらに露骨に朝貢を「交易の口実」^[68]と考える。だが、経済的朝貢は、秦漢時代において、罽賓のような遠い国を除いて、東部ユーラシアにおける諸国と漢との関係が恒常化した結果として次第に姿を消したのだった。

礼儀的朝貢と経済的朝貢は、パーデューのいうように、「システムか文化的秩序」ではなく、「礼儀的かつ経済的实践との関連を通じて一種の特別な文化間用語で、その参加者の多様な目的を果たす」^[69]ものである。しかし、政治的朝貢は、朝貢国の意思を問わず、朝貢を受ける国に決められる規則にもとづいて、朝貢国が貢物を献上することを指す。例えば、漢初の時に、秦帝国の一部として独立した南越は、その王室が漢人であったため、朝貢により臣服を示すことを知った。したがって、南越王の趙佗は、漢の使者である陸賈に自分の過失について謝罪した後に、「願奉明詔、長為藩臣、奉貢職」^[70]とあるように、藩臣として朝貢を献上することを約束した。しかし、漢が西域に進出する初期に、匈奴の影響を受けていた西域諸国は、朝貢が臣服を意味することが理解できていなかった。したがって、漢が西域諸国から受けた朝貢は、西域諸国との間に一定の階層関係を結ばないため、政治的意味の朝貢ではなかった。例えば、漢が天山北路に東部の楼蘭・姑師及びパミールの大宛を攻略した後、「大宛諸国発使随漢使來、觀漢廣大、以大鳥卵及犂靬眩人献於漢、天子大説」^[71]とあるように、西域諸国は初めて漢に土産を献上した。この時の朝貢は、決して南越のような政治的朝貢ではなく、漢と友好関係を結ぶための礼儀的朝貢だと考えられる。

しかし、西域都護が設置された後、「昭・宣承業、都護是立、総督城郭、三十有六、修奉朝貢、各以其職」^{〔72〕}とあるように、「朝貢」という術語は初めて史籍に現れた。その時、漢が西域に対する覇権を基本的に樹立したため、この時の朝貢は政治的朝貢に違いない。

一方、匈奴と西域大国（例えば後漢前期に台頭してきた莎車）は、

匈奴西辺日逐王置僮僕都尉、使領西域、常居焉耆・危須・尉黎間、賦税諸国、取富給焉^{〔73〕}。

王莽篡位、貶易侯王、由是西域怨叛、与中国遂絶、並復役属匈奴。匈奴斂税重刻、諸国不堪命、建武中、皆遣使求内属、願請都護^{〔74〕}。

賢以大宛貢税減少、自將諸国兵数万人攻大宛^{〔75〕}。

とあるように、西域の小国から貢物を税として強要した。実際に漢と匈奴との和親関係において、匈奴に強要された賂遣はその本質が定期に一定の定額で与える経済的負担なので、税とも呼ばれると考えられる。小国は自国の存続のために、大国に決められた期間と数量にしたがって、税を払わなければならない。したがって、この税は実際に政治的朝貢に他ならなかったと考えられる。

要するに、政治的朝貢は、朝貢が制度化された後に現れ、規則にもとづいて行われる。そうであるとする、政治的朝貢を行う朝貢国は、厭わしくても、朝貢を受ける国との政治関係が維持された以上、朝貢をしなければならない。もちろん、貢物の多少は、朝貢を受ける国の目的により異なる。例えば、漢は政治的目的を重視し、朝貢を通じて、天子の権威を主張するため、貢物を多く強要しなかった。代わりに、朝貢の返礼としての賞賜に漢はかなりの負担を負った。余英時の統計によると、後漢時代には、漢が毎年朝貢してきた外国に返礼した費用は帝国の総収入の7%に至った^{〔76〕}。一方、匈奴は経済的目的を重視し、朝貢を通じて、不足している生活物質を補充するため、貢物を「諸国不堪命」^{〔77〕}とあるほど多く強要したのだった。

三 冊封制度

冊封は、漢が自国に臣服した国家の王及び大臣に爵位と印綬を与えることを通じて、漢の皇帝とその国家の王との間に君臣関係を築くことを指す。秦漢から隋唐までの東部ユーラシア国際システムは、長い間、西嶋定生が提案した「冊封体制」という言葉で呼ばれてきた。冊封体制とは、金子修一の要約により、「周辺諸国の首長が中国王朝から王や侯の爵号を受けることを冊封と名付け、冊封関係が結ばれることによって生じる文化の伝播

を含む国際的な体制」^[78]である。西嶋定生により、冊封体制は、秦漢の二十等爵にもとづいて発展し、両漢時代にその端緒が現れたが、隋唐時代に一元化により完成した^[79]。西嶋が冊封を中国の国内の爵号の授与と定義するため、冊封体制の適用対象を中華文化圏の諸国（中国、朝鮮、日本、ベトナムなど）に制限した結果、遊牧国家と西域諸国には、冊封体制という表現は適用されない。しかし、金子修一は、「国名に直接王号を付ける本国王」と「奉化王・循義王のように唐の徳化を示す形容句を冠した王号」^[80]を冊封の爵号と認めることを通じて、遊牧国家と西域諸国をも冊封の適用範囲に入れる。結果として、冊封は、狭義の東アジアのみならず、東部ユーラシア全体に一般的に適用される。栗原朋信は、「秦の統一時代から漢代に及ぶと、公印の制度は整然と確立し、皇帝・諸王から下級の官僚に至るまで、一定の格式をそなえる璽印を所持することになった」^[81]ことにより、印綬の形式にもとづいて、冊封を受ける国家を内臣・外臣・客臣に分ける^[82]。一方、このように外国を内臣・外臣・客臣に分けるのは、単に漢の意思だけではなく、地域の重要性和漢のコントロールの強弱によるものでもあった^[83]。

では、冊封を行ったのは漢だけだろうか。あるいは、漢の外の国家も自国に臣服する国家に冊封をしたのだろうか。この問題について、まず、農耕地域をみる。第二章で述べたように、南越は、ベトナム中・北部と海南島を征服した後、前者には土着の駱人の首長を通じて間接統治を行い、後者には楚制を利用し土着の首長を楚の官号である執到に冊封した。そうであるとする、「漢と同様の『内臣』『外臣』構造を保持していた」^[84]と、川手翔生は指摘する。朝鮮は、南越と同じく、その王が漢人であるため、征服した小国との関係に、冊封関係を維持することが考えられる。そして、匈奴には、冊封の伝統があると考えられる。一方、匈奴には投降した漢の名将・貴人を王として冊封した記録がある。例えば、盧綰、李陵、史降はそれぞれ東胡盧王、右校王、天王に冊封された。そして、匈奴は、呼韓邪単于の称臣以降に漢の冊封を理解した後、漢の冊封を利用しようとしたためか、後漢前期、軍閥としての盧芳を漢帝として擁立した。もう一方、匈奴は、拡張を通じて、広大な遊牧地域を帝国に取り込んだ後、地域に直接王号を付ける地域王としての昆邪王・休屠王・盧屠王・甌脱王などから見て、征服された土着を王として冊封して、彼らを通じて間接統治を行ったものと考えられる。

最後に、

貳師既斬宛王、更立貴人素遇漢善者名昧蔡為宛王^[85]。

媯塞王自以国遠、遂殺賢使者、賢擊滅之、立其国貴人駟鞬為媯塞王^[86]。

数歳、龜茲国人共殺則羅・駟鞬，而遣使匈奴、更請立王。匈奴立龜茲貴人身毒為龜茲王、龜茲由是属匈奴^[87]。

龜茲王建攻殺疏勒王成，自以龜茲左侯兜題為疏勒王^[88]。

とあるように、漢、匈奴、西域大国は、例外なく、征服した国家を臣服させるために、その国王を擁立したことがあった。そして、龜茲が匈奴に王を擁立することを請うたことから見て、王の擁立は、単に武力的にのみ行われるわけではなく、小国が臣服を前提として大国に請うることによっても行われた。このようにして、漢の冊封のように爵号・印綬を与えることがなくても、王の擁立が実質的な上下関係あるいは君臣関係を形成させることは、冊封の機能が両国間に君臣関係を形成させることにもとづいて、実質的冊封と考えられる。

そして、冊封は冊封国にどのような義務を付けるだろうか。漢に冊封された南越、朝鮮は、

十一年、遣陸賈立佗為南粵王、与剖符通使、使和輯百粵、毋為南邊害、与長沙接境^[89]。

蛮夷大長老夫臣佗昧死再拜上書皇帝陛下：……老夫故敢妄竊帝号、聊以自娛。……今陛下幸哀憐、復故号、通使漢如故、老夫死骨不腐、改号不敢為帝矣！謹北面因使者献白璧一双、翠鳥千、犀角十、紫貝五百、桂蠹一器、生翠四十双、孔雀二双^[90]。

粵使人上書曰：『兩粵俱為藩臣、毋擅興兵相攻撃。今東粵擅興兵侵臣、臣不敢興兵、唯天子詔之。』…天子使嚴助往諭意、南粵王胡頓首曰：「天子乃興兵誅閩粵、死亡以報德！」遣太子嬰齊入宿衛。謂助曰：「国新被寇、使者行矣。胡方日夜裝入見天子。」助去後、其大臣諫胡曰：「漢興兵誅郢、亦行以驚動南粵。且先王言事天子期毋失禮、要之不可以怵好語入見。入見則不得復歸、亡国之勢也。」於是胡称病、竟不入見^[91]。

会孝惠・高后天下初定、遼東太守即約滿為外臣、保塞外蛮夷、毋使盜邊；蛮夷君長欲入見天子、勿得禁止^[92]。

とあるように、漢の辺境の安全を守ったり、他の冊封国と戦争を行わなかったり、漢に朝貢・納質・朝覲したり、自国の王が帝とは称しなかったりする義務を負う。もう一方、匈奴・西域大国は、他国の王を擁立した後に、

匈奴斂税重刻、諸国不堪命^[93]。

賢以大宛貢税減少、自將諸国兵数万人攻大宛、大宛王延留迎降、賢因將還国、徙拘彌王橋塞提為大宛王。而康居数攻之、橋塞提在国歳余、亡歸、賢復以為拘彌王、而遣延留還大宛、使貢獻如常^[94]。

とあるように、税を納めることを義務として他国に付ける。要するに、冊封による義務に対して、漢は形式の政治的臣服を、匈奴・西域大国は実質の経済的利益を重視する。

実際に、冊封という語は、秦漢時代には存在せず、「明清の用語」^[95]である。そうであるとすると、ここには、君臣関係の形成という機能にしたがって、冊封制度をより一般的に定義する。すなわち、冊封制度は、爵号・印綬を与えること、あるいは、王を擁立することを通じて、二国間に一定の義務をとまなう階層関係を形成させる制度を指すと考えることができる。

最後に、冊封は、国家間関係のみならず、国内における異民族にも与えられた。例えば、漢は、

夜郎侯始倚南粵、南粵已滅、還誅反者、夜郎遂入朝、上以為夜郎王^[96]。

元封二年、天子發巴蜀兵擊滅勞深・靡莫、以兵臨滇。滇王始首善、以故弗誅。滇王離西夷、滇舉国降、請置吏入朝。於是以為益州郡、賜滇王王印、復長其民^[97]。

とあるように、西南夷の夜郎・滇の君主を王として冊封した。第四章で述べたように、漢は、異民族勢力の強い地域に自治権を与え、夜郎王・滇王などの君主を通じて間接統治を行った。しかし、このような国内異民族に対する冊封は、前漢中期から後漢前期までの対異民族支配強化の結果として、西南夷にはなくなったが、接壤地帯には維持された。例えば、

烏桓或願留宿衛、於是封其渠帥為侯王君長者八十一人、皆居塞內、布於緣邊諸郡、令招來種人、給其衣食、遂為漢偵候、助擊匈奴・鮮卑^[98]。

安帝永初中、鮮卑大人燕荔陽詣闕朝賀、鄧太后賜燕荔陽王印綬、赤車參駕、令止烏桓校尉所居寧城下、通胡市、因築南北兩部質館。鮮卑邑落百二十部、各遣入質^[99]。

とあるように、投降・内属してきた烏桓・鮮卑の首長は依然として王として冊封された。烏桓と鮮卑が、漢に征服されたばかりの西南夷のようにまだ部族段階に留まり、そして遊牧生活のため漢の郡県制による支配に適応することができなかったため、漢は分散している部族を有効に管理することが不可能なので、その大人（すなわち、部族の首長）を王か侯に冊封し、部族の管理を任せて間接統治を行った。言い換えると、鮮卑・烏孫の大人を王として冊封することは、前漢の時、漢が西南夷に対して間接統治のためにその君主を冊封したこととは同じだと考えられる。匈奴は、昆邪王・休屠王・盧屠王・甌脱王のように地域に直接王号を付ける地域王に対して、漢のように、自治権を与えながら、間接統治をおこなったのだと考えられる。

第二節 制度に反映される階層関係

第一章で提案した階層関係は、対外主権の譲渡（あるいは対外行動の決定権）により、強い順に帝国（直接統治と間接統治としての自治領）、覇権、勢力圏、非階層関係（敵対か平和）に分かれる。A 国を大国と、B 国を小国として、具体的な説明を行う。帝国では、A 国が B 国を併合し B 国の対外主権を奪って、言い換えると、B 国が対外行動の決定権を A 国に譲渡する；覇権では、A 国が B 国にある種の対外行動を義務付けて、言い換えると、B 国が対外主権をある程度まで譲渡する；勢力圏では、A 国が B 国の対外行動に非対称的な影響を与えて、言い換えると、B 国が圧倒的な強い A 国を憚って A 国を嫌わせないように対外行動を決める。帝国の中で、B 国は、一旦 A 国に併合された後に自治権を保有すれば、A 国の直接統治を受けず、自治領になる。

階層関係及びその基準を明らかにしたので、質子・朝貢・冊封という三つの制度がどのような階層を反映するかを説明する。まず、質子を派遣するのは自主や強制により行われる。質子を自主的に派遣するのは、基本的に、通商の権利、安全援助の取得、大国による侵攻の回避のために行われる。この場合には、質子を派遣する国家は、質子を受ける国家を憚るより、基本的に自国の利益を最優先にして、質子の派遣を決めた。そうであるとすると、自主的な質子の派遣には、明白な階層関係が見られない。一方、強制的質子の派遣は、戦勝国が戦敗国の臣服の保証として戦敗国にその王室か貴人を質子として強要したことである。この場合、戦敗国は、質子を派遣するかどうかという対外行動を決める時に、戦勝国の攻撃を憚って戦勝国を嫌わせないために、自分の思うとおりにできないが、最終的に質子の派遣を自ら決めることができるため、質子の派遣を義務として負わない。したがって、強制的な質子の派遣は、質子を派遣する国家と質子を受ける国家との間に、非対称的影響が見られるため、勢力圏という階層関係を形成させると考えられる。

次に、朝貢は、礼儀的朝貢、経済的朝貢、及び政治的朝貢に分かれる。礼儀的朝貢は、外交関係の構築あるいは対立・敵対関係の緩和のために行われる。この時、朝貢を与える国家は、朝貢を受ける国家の影響を受けず、完全に自分の意思により、朝貢を行う。したがって、礼儀的朝貢は階層関係を反映しない。経済的朝貢は、通商・交易する権利を得るために行われる。この時、朝貢国は、意図的に貢物を与え、形式的に順従な態度を示すが、朝貢という外交行動を決める時に、朝貢を受ける国家の影響を受けず、多くの場合には、貢物を関税とみなすことができる。朝貢を受ける国家が朝貢を臣服の印としてみなしても、

朝貢を行う国家が朝貢を臣服と認めないため、経済的朝貢も階層関係を反映しない。最後に、政治的朝貢は、朝貢国の意思を問わず、朝貢を受ける国によって決められる規則にもとづいて行われる。もちろん、朝貢国は朝貢を中止するのを決めることができるが、例えば、烏桓が漢の宣旨により毛皮税の献上を拒否した後に匈奴から滅亡的な攻撃を受けたように、朝貢を受ける国によって朝貢義務の違反として懲罰を受ける。この意味から見ると、政治的朝貢関係には、朝貢国は、理論上に朝貢を拒否する可能性を持つが、実際に朝貢が義務として課される以上、朝貢を受ける側の国家に朝貢に関する決定権を譲渡した。したがって、政治的朝貢は、受ける側による覇権を形成させることになる。

最後に、冊封は、爵号・印綬の授与と国家の君主の擁立により、二国間に一定の義務を付ける君臣関係を形成させる。このような定義から見て、冊封は、冊封を受ける国が一定の義務を課され、言い換えると、一定の対外行動の決定権を冊封を与える国に譲渡するため、覇権を形成させるに違いない。しかし、問題になるのは、冊封を受ける国は、冊封を与える国の他の国家との相互作用に、被冊封国としての義務を果たさないことである。例えば、南越は、前漢建国の初期、漢に冊封されたが、その後、

於是佗乃自尊号为南越武帝、発兵攻长沙边邑、敗数县而去焉^[100]。

とあるように、国内に帝と称しながら、漢に攻撃を加えただけではなく、

佗因此以兵威边、財物賂遺閩越・西甌・駱、役属焉、東西万余里^[101]。

とあるように、軍事力・経済力で周囲の閩越・西甌・駱を臣服させる。しかし、漢の非難に対して「乃頓首謝、願長為藩臣、奉貢職」^[102]とあるように、趙佗は冊封の義務に対する違反ゆえに謝罪した。こう見ると、冊封による君臣関係の成立は、少なくとも、冊封を受ける国に主導権がある。そして、ここの階層関係が二国関係だけを指すため、冊封を受ける国が冊封を与える国の他の国と結んだ関係は、冊封を受ける国に対して冊封を与える国家の権威が影響されるが、冊封を受けることと冊封を与える国との関係の本質を変えない。又、国家の君主の擁立による冊封は、必ず覇権を形成させるのだろうか。この問題について、莎車による亀茲王の擁立を例として説明する。

其冬、賢復攻殺亀茲王、遂兼其国。……賢又自立其子則羅為亀茲王。賢以則羅年少、

乃分亀茲為烏壘国、徙駟犍為烏壘王、又更以貴人為**婁**塞王。数歳、亀茲国人共殺則羅・

駟犍、而遣使匈奴、更請立王^[103]。

とあるように、莎車が亀茲王を殺して、莎車王の子を亀茲王として擁立したが、亀茲は、亀茲人の莎車王を殺して、匈奴に王を擁立することを請うた。このように見てくると、一

且、擁立された王が殺されると、覇権が次第に消える。そして、もう一つの状況がある。漢の大宛王の擁立を例として説明する。漢が大宛を陥落させた後に昧蔡を王として擁立したが、歳余、大宛の貴人は昧蔡を殺して、漢に殺された大宛王の弟の蟬封を擁立した。その後、大宛王の蟬封は漢に質子を送り、年ごとに2匹の天馬の献上を条約を通じて約束した。この場合、擁立された王が殺されたが、新たに即位した王は、前王を擁立した国家と、条約を通じて新しい関係を結ぶ。しかし、条約を通じて形成される関係は、前の王の擁立とは直接な関係を持たない。そうであるとする、国家の君主の擁立による冊封が覇権を形成させるには、擁立された王の存続が必要と考えられる。

質子・朝貢・冊封などの制度に反映される階層関係は、表 5-1 のように整理できる。国家間関係に対して、自主的な質子の派遣、礼儀的朝貢、経済的朝貢は、国家の対外主権（すなわち対外行動の決定権）の譲渡がないため、階層のない関係を反映する；強制的な質子の派遣は、質子を派遣する国家が質子を受ける国家に非対称的影響を受けるため、質子を派遣する国家が質子を受ける国家の勢力圏にあることを反映する；政治的朝貢、冊封は、朝貢か冊封を行う国家が朝貢か冊封を受ける国家による規則にしたがって、朝貢か冊封に対する決定権を譲渡し、朝貢か冊封を義務として行うため、朝貢か冊封を行う国家が朝貢か冊封を受ける国家の覇権にあることを反映する。一方、帝国内には、異民族の君主が冊封を通じて自治権を受けたら、その異民族の地域は自治領になる。一旦異民族に対する冊封を中止して、その地域及び異民族民を郡県の支配下に置いた場合には、直接統治が成立することとなる。

表 5-1 制度による二国間階層関係一覧表

階層関係のタイプ			制度
国家間 関係	階層性のない		自主的な質子の派遣、礼儀的朝貢、経済的朝貢
	勢力圏		強制的な質子の派遣
	覇権		政治的朝貢、冊封
国家内 関係	帝国	自治領	冊封
		直接統治	郡県制

ところで、二国間では、階層性の強い制度と階層性の弱い制度が同時に利用されることが多い。言い換えると、階層性の強い制度による階層関係には、階層性の弱い制度は、階

層性の強い制度による義務として利用される。例えば、南越と漢の間には、強い制度である冊封関係があり、南越は外臣になった。同時に、南越は、漢に弱い制度を義務として質子を派遣した。このように複数の制度が同時に利用される場合に対しては、その中のもっと階層性の強い制度にもとづいて、二国関係を判断する。

第三節 東部ユーラシア国際システムの構造の変化

前節で示したとおり、東部ユーラシア国際システムにおいて、三つの制度は、それぞれの二国間の階層関係を反映する。二国間関係の階層性を明らかにした後、システムの構造、すなわち権力分布は、二国間階層関係の上位国家の分布により判断することができる。具体的に言えば、もし一つの国が大部分の二国間階層関係の上位国家であれば、システムは、一つの権力中心があるため、単極になる。もし二つの国家が大部分の二国間階層関係の上位国家であり、そして、この二つの国家が互いに階層関係を持たなければ、システムは、二つの権力中心があるため、二極になる。そして、もし三つ以上の国家が大部分の二国間階層関係の上位国家であり、そして、この三つ以上の国家が互いに階層関係を持たなければ、システムは、三つ以上の権力中心があるため、多極になる。

東部ユーラシアが一つのシステムとして形成される前に、匈奴は西域に対して三度の拡張戦争を通じて、

以天之福、吏卒良、馬彊力、以夷滅月氏、盡斬殺降下之。定樓蘭・烏孫・呼揭及其旁二十六国、皆以為匈奴。諸引弓之民、并為一家^[104]。

とあるように、月氏を西域から駆逐して、西域諸国を臣服させた。その後、

西域諸国大率土着、有城郭田畜、与匈奴・烏孫異俗、故皆役属匈奴。匈奴西辺日逐王置僮僕都尉、使領西域、常居焉耆・危須・尉黎間、賦税諸国、取富給焉^[105]。

とあるように、匈奴は、西域諸国に税を義務として負わせた。史籍には匈奴による税の徴収に関する記録がないため、税の数と程度はわからない。後漢前期、「諸国不堪命」^[106]とあるように、匈奴による税はかなり重かったと考えられる。そして、匈奴が、税の徴収のために、わざと僮僕都尉という専門の組織と官僚を設置した以上、西域に対する税の徴収は、一定の規則にもとづいて制度化されたに違いないと考えられる^[107]。一方、

西域諸国、各有君長、兵衆分弱、無所統一、雖属匈奴、不相親附。匈奴能得其馬畜旃罽、而不能統率与之進退^[108]。

とあるように、匈奴は、西域諸国から税を徴収することができたが、西域諸国を統率することができなかった。言い換えると、西域諸国に対する匈奴の征服は、西域諸国を自国の支配下に置させることではなかった。そうであるとする、西域諸国が匈奴に政治的朝貢を与えていたため、匈奴は、西域諸国に対する覇権を樹立していたことになる。楼蘭が漢に質子を送った後。速やかに匈奴にも質子を送ったことから見て、強制的な質子の派遣も匈奴の覇権に取り込まれた西域諸国の義務であったと考えられる。

漢・匈争覇の第一段階の結果として漢が河西回廊の占領を通じて、西域に進出し、西域諸国との相互作用を可能にしたため、東部ユーラシアは初めて一体化され、一つの国際システムになった。その後、漢は匈奴と西域をめぐる覇権を争っていた。匈奴の覇権に取り込まれた西域に対して、漢は、同盟分断戦略として匈奴に異心をもった烏桓と政治婚姻を通じて同盟関係を結びながら、西域北・南路の東の入り口に位置する車師・楼蘭、パミールにおける大国である大宛を軍力で屈服させたことを通じて、軍事力の強大さを誇示して西域諸国にショックを与え、権威を樹立した。しかし、漢の西域攻略は成功を納めなかった。まず、烏孫は、漢の大宛征伐の時に漢の軍事支援との要請を受けても、傍観したことから見て、漢と結んだ同盟関係は、名目的なものに留まった。一方、大宛は、漢に擁立された王を殺して、その後に漢に質子を派遣し、毎年2匹の天馬を献上することを約束した。しかし、この質子が漢との関係回復のために派遣され、毎年2匹の天馬の献上が象徴的な意味しか持たなかったため、この時の大宛と漢との関係には明白な階層性が見られなかった。そして、車師と楼蘭は、戦敗のため一時的に漢に屈服したが、漢が匈奴との戦争で敗勢になった後、再び漢との階層関係を断った。もっとも、漢の西域進出は一定の成果を収めてもいる。「自貳師將軍伐大宛之後、西域震懼、多遣使來貢獻、漢使西域者益得職」^[109]とあるように、西域諸国は、漢の軍事力を憚って、漢に貢物を献上し、漢の西域進出を妨げなかった。しかし、この時の朝貢は、西域諸国が漢と明白な関係を結ばなかったため、礼儀的朝貢に過ぎなかった。最後、匈奴に対する三回の征伐が失敗した後、武帝は、対外拡張政策を国力回復政策に転じて、西域から撤退した。結果として、漢は匈奴と西域をめぐる覇権を初めて争ったが、西域諸国に漢の強大を誇示し、西域への進出の阻害を消したことを通じて、西域にある程度の影響を及ぼした。しかし、全体的に言えば、西域諸国は依然として匈奴の覇権のもとに留まったが、権力分布から見ると、匈奴という権力中心の他に、漢という権力中心が現れたと整理することができる。

一方、漢は、西域攻略の他に、農耕地域の辺縁（閩越・南越・西南夷・朝鮮）に対する

征服に成功し、その地に郡県制を設置したことを通じて、農耕帝国を完全に打ち立てた。閩越と朝鮮とは異なり、南越・西南夷には、漢は、土着の勢力が強かった地域に自治権を与え、土着の異民族の首長を王・侯として冊封し、間接統治を行なった。したがって、南越・西南夷における異民族の王国が自治領になった。その後、漢は、土着勢力の抑圧・地方支配の浸透・移民政策・漢化政策により、異民族支配を次第に強化した結果として、後漢中期以降、自治領としての異民族の王国を廃止して、郡県制による直接統治を行った。

昭帝末期から、漢は輪台での屯田と楼蘭の征服をはじめとして西域攻略を再開した。匈奴は、漢の攻勢に危機感を感じて、漢の同盟国としての烏孫に攻撃を加えた。烏孫に対する匈奴の攻撃は、漢の公主を俘虜して、烏孫と漢との同盟関係を破壊することを目的とした。烏孫を重要な同盟国とみなした漢は、宣帝の即位後に、烏孫の軍事支援の要請を受けて、烏孫とともに匈奴を撃退した。この後、匈奴は、自然災害の他に、丁零、烏桓、烏孫、漢からの攻撃のため衰弱してきた。これを機に、漢は、亀茲と車師を相次いで屈服させた。だが、匈奴にとっては、車師が重要な戦略要地であるため、匈奴と漢は車師をめぐる4年の戦争を行った。結果として、車師は、匈奴の代理人としての車師後国と漢の代理人としての車師前国に分かれた。この時期、漢は、烏孫との同盟関係を固めながら、西城南・北路の入り口に位置する楼蘭（漢に征服された後に鄯善と改名される）・車師前国を征服して、君主の擁立によってこの二つの国を覇権に取り込んだことを通じて、西域進出を確保した。そして、亀茲の臣服により、漢は天山南路に対する浸透に成功した。したがって、前のように西域諸国が全て匈奴の覇権に取り込まれた状況は、漢の西域攻略の成功により、一変したのだった。この時、西域の天山南路の東・中部及び天山北部の東部は、漢の覇権に取り込まれた。この意味から言うと、東部ユーラシア国際システムの権力分布は一定の変化が見られるのである。

匈奴の東西分裂は、東部ユーラシア国際システムの権力分布がさらに変化することをもたらした。東匈奴の呼韓邪単于は、西匈奴の郅支単于と対抗するために、初めて漢に臣服した。客臣としての匈奴は政治上で納質・朝貢・朝覲などの義務を負った一方、漢からの軍事・経済の援助を受けた。そして、「自今以來、漢与匈奴合為一家、世世毋得相詐相攻。有竊盜者、相報、行其誅、償其物；有寇、発兵相助。漢与匈奴敢先背約者、受天不祥。令其世世子孫盡如盟」^[110]とある安全保障的盟約から見て、漢と匈奴との間に、明白な階層関係は形成されなかった。言い換えると、呼韓邪が称臣した後、漢と（東）匈奴は盟にもとづいて平等な関係を結んで、前漢初期に和親約によって漢女・賂遺などの義務を漢につ

ける形で匈奴に傾いたのを反転し、前漢末期には納質・朝貢・朝覲・称臣などの義務を匈奴に付加する形で漢にとって政治的により有利なものとなった。そうであるとする、この時の匈奴は漢に称臣したため、漢の勢力圏あるいは覇権に取り込まれたとは言えなかったのである。

しかし、匈奴の分裂の初期、西域事務を担当する日逐王の先賢揮の投降は西域に対する匈奴の覇権の崩壊をもたらした。漢は、先賢揮の投降を受けた後に、天山北路と天山南路に対する監護のために西域都護を西域の中心部の烏壘城に設置した。これにより、漢の西域都護は、西域に対する組織としての匈奴の西域僮僕にとってかわった。西域都護の設置後、莎車・于闐をはじめとする天山南路諸国も漢に臣服してきた。結果として、「漢之号令班西域矣、始自張騫而成於鄭吉」^{〔111〕}とあるように、西域都護の設置は西域に対する攻略の成功を告げた。その後、漢は、同盟国の烏孫の内乱を巧みに利用して、大・小昆彌の擁立を通じて烏孫を二つに分けた。結果として、烏孫は、漢の同盟国という地位を失って、漢の冊封を受けて、漢の覇権に取り込まれたのだった。

漢が西匈奴を滅ぼした後に、

最凡国五十。自訳長・城長・君・監・吏・大祿・百長・千長・都尉・且渠・當戸・將、相至侯・王、皆佩漢印綬、凡三百七十六人。而康居・大月氏・安息・罽賓・烏弋之属、皆以絶遠不在数中、其來貢獻則相与報、不督録総領也^{〔112〕}。

とあるように、西域諸国は、漢の印綬を佩帯していたことから見て、漢の冊封を受けていたため、漢の覇権に取り込まれた。しかし、この時、匈奴は完全に西域に対する影響を失ったとは言えない。例えば、「本匈奴盛時、非以兼有烏孫、康居故也；及其称臣妾、非以失二国也。漢雖皆受其質子、然三国内相輸遺、交通如故、亦相候司、見便則發；合不能相親信、離不能相臣役」^{〔113〕}とあるように、西域の大国の烏孫と康居は依然として匈奴と密接的関係を持っていた。そして、去胡來王と車師後王が匈奴に亡命したことから見て、匈奴は最盛期のように西域諸国を派遣に取り込むことができなくても、依然として西域に対する影響を保持していた。

漢は、覇権を樹立した後に、匈奴と西域諸国を帝国に取り込むことを試みて、内政干渉を露骨に行っていた。王莽が帝位を篡奪した後に帝国化政策をいっそう強化した結果として、匈奴と西域諸国は反発して、新と対決した。新が内戦の中で滅亡すると同時に、「王莽篡位、貶易侯王、由是西域怨叛、与中国遂絶、並復役属匈奴。匈奴斂税重刻、諸国不堪命」^{〔114〕}とあるように、西域諸国は再び匈奴の覇権に取り込まれて、政治的朝貢を献上してい

た。しかし、この時、匈奴が漢に対する侵攻を対外戦略の中心としたため、匈奴から遠い天山南路の西部において、莎車は、匈奴の覇権に逆らう勢力として、付近の小国の征服を通じて台頭していった。匈奴と莎車との圧迫を受けていた西域諸国は、漢に質子・朝貢を与えて、西域都護の回復を請うた。しかし、漢は、「今使者大兵未能得出、如諸国力不従心、東西南北自在也」¹¹⁵⁾とあるように冷たく拒否し、諸国に自らの活路を探させた。結果として、西域諸国は、匈奴より重い税を強要した莎車と対抗するために、匈奴の覇権に戻った。要するに、この時、漢と西域諸国との階層関係が終わった一方、匈奴は、政治的朝貢を復活させたことによって、西域を再び覇権に取り込んだ。だが、西域に台頭しつつあった莎車は、匈奴の西域をめぐる覇権に対抗することとなった。

匈奴の南北分裂がこの状況に変化をもたらした。南匈奴が北匈奴と対抗し漢に臣服した後、漢は、南匈奴を国内に移住させ、質子・朝貢・朝覲・葬儀などの制度を規定し、南匈奴の管理と監視のために使匈奴中郎将と度遼將軍を設置したことを通じて、南匈奴を国内異民族とした。北匈奴は、南匈奴を吸収した漢からの攻撃を憚って漠北へ遷移し、漢と平和関係を保持しながら、対外政策の中心を西域攻略に置いた。北匈奴は、天山南路南道の反莎車闘争の成果を奪ったことを通じて、ハブ・アンド・スポークの支配を形成し、天山北路の車師、天山南路北道の龜茲、天山南路南道の于闐と鄯善を代理国として、西域諸国を覇権に組み込むことに成功した。

明帝末期、漢は基本的に国力を回復し、西域攻略を再開し、紀元 73 年に竇固に北匈奴を征伐させた。漢の攻撃を予想できなかった北匈奴は漢軍に負けて西北へ撤退した。漢は勝利に乗じて、西域進出の拠点としての伊吾と車師を占領し、班超を通じて天山南路南道をも臣服させた。その西域攻略の成果を確保するために、西域都護と戊己校尉が復活された。しかし、匈奴は戦敗の後、軍隊を休養・再編し、紀元 75 年の竇固の撤退を機に、車師争奪戦を起こした。その後、漢が匈奴を憚って西域都護と戊己校尉を廃止した。こうしたことから見て、漢の西域攻略は失敗し、西域は依然として匈奴の覇権にあった。一方、班超は皇帝の召還を無視し、独力で天山南路南道の西部を拠点にし、個人的な魅力と能力で天山南路南道とパミールまでの国家を懐柔して味方に入れて、次第に天山北路西部の烏孫ともある程度まで連携を回復した。

1 世紀 80 年代に入った後、北匈奴は旱害と蝗害による飢餓を蒙った後、多くの部族が漢に投降した。一方、漠南から南匈奴、烏桓、鮮卑が漢の賞賜のため絶えずに北匈奴の漠北を攻撃した。このような内憂外患にある北匈奴に対して、南匈奴は匈奴統一の希望を見て、

北匈奴征伐を諫言した。竇太后は北匈奴征伐に同意し、竇憲を主帥に任命して大規模な征伐を行った。三年をかけて、漢は、北匈奴を滅した。北単于が西北に亡命し、行方不明になったため、漠北の地は鮮卑によって占領された。そうであるとする、独立した国家としての匈奴は滅亡した。一方、北匈奴征伐の中で、漢は、伊吾を奪回した後、天山北路の車師を初めとして、天山南路北道の亀茲・姑墨・溫宿などを臣服させた後に、西域都護を再度復活させた。3年後に、西域都護は、亀茲・鄯善などの八国の兵を率いて、漢と対抗していた焉耆・尉犁を攻撃して臣服させた。結果として、「六年、班超復撃破焉耆、於是五十余国悉納質内属。其條支・安息諸国至于海瀕四万里外、皆重訳貢獻」^{〔116〕}、「自兵威之所肅服、財賂之所懷誘、莫不献方奇、納愛質、露頂肘行、東向而朝天子。故設戊己之官、分任其事；建都護之帥、総領其權。先馴則賞簠金而賜龜綬、後服則繫頭頸而鬻北闕」^{〔117〕}とあるように、漢は西域に強制的質子の派遣、政治的朝貢及び冊封を回復したことを通じて、西域諸国を再び漢の覇権に取り込んだ。

班超が西域都護になった12年間、漢は西域における覇権をうまく維持した。だが、班超を引き継ぐ任尙が赴任した後、西域に対して不干渉政策をやめて西域諸国の反抗を招いた。そして、この時、漢の異民族支配の強化により、異民族の反乱が激しく起こった。その中、紀元92年から紀元102年までの10年間の羌乱の鎮圧のため、漢は、西域の反抗に対して一時的に反応不能になった。そして、鮮卑が漠北の地を占領した後、その一部の部族が蘇拔廆の領導下で漢に攻略をし続けた。そのため、漢は西域から一時的に撤退した。この時、西域での北匈奴敗残勢力はこれを機に、西域に進出し、車師を屈服したことを通じて天山北路の東部に勢力を振るった。一方、漢の勢力がなくなった後、西域の大国が相次いで拡張を目指した結果として、天山南路南道の中部の于闐、天山南路南道の西部の莎車・疏勒、天山南路北道の亀茲が台頭してきた。漢は、紀元125年に班勇を西域長史として、西域攻略を再開した。班勇は亀茲を初めとする天山南路諸国を懐柔して臣服させ、北匈奴敗残勢力を撃退させた後に車師後と焉耆を征服したことを通じて、天山南路、天山北路の東・中部に対する覇権を復活した。だが、この時、「烏孫・葱嶺已西遂絶」^{〔118〕}とあるように、漢の影響は天山北路の中部までに留まって、その西部及びパミールには及ばなかった。しかし、紀元132年以降、「自陽嘉以後、朝威稍損、諸国驕放、轉相陵伐」^{〔119〕}とあるように、漢は、西域の秩序を保つことが次第にできなくなったのだった。

2世紀50年代に入った後、鮮卑は檀石槐の領導下で部族同盟の形で統一を実現した後、南の漢の辺境、北の丁令、東の夫余、西の烏孫を攻撃することを通じて、台頭した。しか

し、鮮卑は、檀石槐の個人的権威で部族同盟を結成したため、181 年檀石槐の死の後、その部族同盟が崩壊した。鮮卑は完全な国家組織を持たなかったため、漢に軍事的脅威を与えたものの、匈奴のように漢と西域に対する覇権を争うことができなかった。一方、漢は、鮮卑から脅威を受けながら、農耕地域の辺縁における異民族による反乱の他に、二つの大規模な羌乱を被った。漢は、羌乱を漸く鎮圧したが、軍事力と財政資源が激しく消耗し、戦力投射が次第にできなくなった。紀元 170 年、漢が西域小国の疏勒を征伐することに失敗したことから見て、漢は実力が不足したため西域に対する覇権を維持できなかった。その後、漢と西域諸国との実質的な相互作用は基本的に消滅することとなった。80 年代に入った後、漢も蜂起と内戦のなかで崩壊した。西域と遊牧地域と農耕地域との相互作用が次第になくなった結果として、東部ユーラシア国際システムは解体したのであった。

本章のまとめを行うと、東部ユーラシア国際システムは、形成された時から北匈奴の滅亡までは、税としての政治的朝貢による覇権を樹立した匈奴、冊封による覇権を樹立した漢、という二つの権力中心があったため、二極システムであった。その後の時代では、北匈奴が滅亡した後、部族同盟という段階に留まった鮮卑は匈奴に代わって覇権を樹立することができず、漢という権力中心しかなかったため、単極システムになったのであった。

註：

[1] 質子（時には侍子とも呼ばれる）は、史籍（例えば、『漢書』『後漢書』など）を見ると、古代東部ユーラシアにおける外交に対する慣用語で、一国が他国に派遣した人質を指す。質子は、二つの特色がある。まず、質子は、一般的に皇族の中に最も重要な人（例えば、漢から匈奴に送った公主、匈奴から漢に送った太子、西域から漢・匈奴に送った太子）が担当し、帰国した後に国王になることが珍しくない。次に、人質が一般的に保証品として固定的な場所に軟禁されるという被動的機能しかないが、質子は、多く場合に派遣先の国に、政治・経済・教育などの活動に参加したり、両国間の友好関係を促進したり、派遣先の国に暗示される警告・勸説などを自国に伝えたりする能動的機能をも備える。したがって、質子の特性を示し、一般的な人質を区別するために、本論文は、人質ではなく、質子を用いる。手塚隆義「兩漢質子考」『史苑』第 15 卷第 4 号、1944 年；中村桃子「前漢時代の「質子」（「侍子」）外交：漢の匈奴・西域諸国との関係を中心に」『アジアの歴史と文化』19 号、2015 年；成琳「兩漢時期民族關係中的『質子』現象」『新疆大学学报（哲学人文社会科学漢文版）』第 1 期、2007 年；陳金生、王希龍「兩漢辺政中的質子述評」『中国边疆史地研究』第 2 期、2008

[2] Christian Reus-Smit: *The Moral Purpose of the State*, Princeton University Press, 1999, p. 4

[3] Barry Buzan: *From International to World Society: English School Theory and the Social Structure of Globalisation*, Cambridge University Press, 2004, pp. 161-162

[4] Barry Buzan: *From International to World Society: English School Theory and the Social Structure of Globalisation*, p. 167

[5] Barry Buzan: *An Introduction to the English School of International Relations: The Societal*

Approach, p.16-17.

- [6] 『漢書』卷 94 上，中華書局，1964 年，3754 頁
- [7] 『漢書』卷 94 下，3801 頁
- [8] 『漢書』卷 95，3860 頁
- [9] 『漢書』卷 95，3864 頁
- [10] 『漢書』卷 96 上，3895 頁
- [11] 『後漢書』卷 86，中華書局，1965 年，2842 頁
- [12] 『後漢書』卷 86，2851 頁
- [13] 李元暉「『約』與西漢的民族政策」『西域研究』第 2 期，2016 年，10-18 頁
- [14] 許慎『說文解字』中華書局，1963 年，272 頁
- [15] 常璩著、任乃強校注『華陽國志校補圖注』上海古籍出版社，1987 年，15 頁
- [16] 芮佺明「古代『和親』利弊論」『史林』第 2 期，1997 年，6 頁；S.-K. Psarras: “Han and Xiongnu: A Reexamination of Cultural and Political Relations (I),” *Monumenta Serica* 51(1), 2003, p. 142
- [17] 『史記』卷 6，中華書局，1963 年，223 頁
- [18] 『漢書』卷 94 上，3748 頁
- [19] 林梅村『古道西風：考古新發現所見中西文化交流』三聯書店，2000 年，172-173 頁
- [20] 黎虎『漢唐外交制度史』蘭州大學出版社，1998 年，107-108 頁
- [21] 『漢書』卷 96 上，3877 頁
- [22] 『漢書』卷 95，3853-3854 頁
- [23] 『漢書』卷 70，3015 頁
- [24] 『後漢書』卷 88，2928 頁
- [25] 『後漢書』卷 88，2923 頁
- [26] 『後漢書』卷 88，2923 頁
- [27] 『漢書』卷 96 上，3892-3893 頁
- [28] 『後漢書』卷 88，2924 頁
- [29] 『漢書』卷 94 下，3811 頁
- [30] 中村桃子「前漢時代の「質子」（「侍子」）外交：漢の匈奴・西域諸国との關係を中心に」162 頁
- [31] 『漢書』卷 68，2959 頁
- [32] 『漢書』卷 61，2703 頁
- [33] 『漢書』卷 94 上，3773 頁
- [34] 『漢書』卷 94 下，3797 頁
- [35] 堀敏一『東アジアの中の古代日本』研文出版，1998 年，194 頁
- [36] 十三經註疏編委會『春秋左傳正義』北京大學出版社，2000 年，85 頁
- [37] Lien-sheng Yang: “Hostages in Chinese History,” *Harvard Journal of Asiatic Studies*, 15(3/4), 1952, pp. 521-522
- [38] 『漢書』卷 96 上，3878 頁
- [39] 『漢書』卷 96 上，3877 頁
- [40] 『漢書』卷 96 下，3916 頁
- [41] Mark Mancall: “The System: Ch'ing Tribute An Interpretive Essay,” in John K. Fairbank, ed.: *The Chinese World Order: China's Foreign Relations*, Oxford University Press, 1968, p. 63
- [42] John K. Fairbank & S. Y. T'eng: “On the Ch'ing Tributary System,” *Harvard Journal of Asiatic Studies* 6(2), 1941; John K. Fairbank: “Tributary Trade and China's Relations with the West,” *The Far Eastern Quarterly* 1(2), 1942; John K. Fairbank: “A Preliminary Framework,” in John K. Fairbank, ed.: *The Chinese World Order: Traditional China's Foreign Relations*, Harvard University Press, Cambridge, 1968, pp. 1~19
- [43] 檀上寬『明代海禁=朝貢システムと華夷秩序』京都大學學術出版會，2013 年，4-8 頁
- [44] 李雲泉『朝貢制度史論—中国古代對外關係體制研究』新華出版社，2004 年，1-14 頁；韓昇『東亞世界形成史論』復旦大學出版社，2009 年，41 頁；Yü Ying-shih: “Han Foreign

- Relations,” in Denis Twitchett and John K. Fairbank, eds.: *The Cambridge history of China: Volume I The Ch'in and Han Empires, 221 B.C. 220 A.D.*, Cambridge University Press, 1986, pp. 378-383
- [45] 全海宗著，全善姬訳「漢代朝貢制度考—通過對《史記》、《漢書》の考察」《中韓關係史論集》中国社会科学出版社，1997年〔初出1973年〕
- [46] Harriet Rudolph: “Entangled Objects and Hybrid Practices? Material Culture as a New Approach to the History of Diplomacy,” in Harriet Rudolph and Gregor M. Metzger, eds.: *Material Culture in Modern Diplomacy from the 15th to the 20th Century*, De Gruyter, 2016, p. 18
- [47] Emmerich De Vattel: *The Law of Nations*, Liberty Fund, 2010, p. 83.
- [48] 『漢書』卷96下，3930頁
- [49] 『漢書』卷94上，3754頁
- [50] 李雲泉『朝貢制度史論—中国古代對外關係体制研究』15頁
- [51] 『漢書』卷94上，3777頁
- [52] 『漢書』卷96下，3928頁
- [53] ここに注意すべきことは、賂遺は「謂百官羣下所遺也」（『漢書』3729頁）とあるように君主が臣下に対する賜物であることである。言い換えると、漢の史籍は、漢が匈奴に朝貢したことを、君としての漢が臣としての匈奴に賞賜したのと巧みに言い繕っている。
- [54] 『後漢書』卷88，2925頁
- [55] 『漢書』卷96上，3872頁
- [56] 全海宗著，全善姬訳「韓中朝貢關係概観—韓中關係史鳥瞰」《中韓關係史論集》中国社会科学出版社，1997年〔初出1970年〕133-136頁
- [57] 李雲泉『朝貢制度史論—中国古代對外關係体制研究』71-72頁
- [58] 『漢書』卷61，2692頁
- [59] 『後漢書』卷4，168頁
- [60] 『後漢書』卷88，2920頁
- [61] 『後漢書』卷86，2851頁
- [62] Marcel Mauss: *The Gift: Forms and Functions of Exchange in Archaic Societies*, Cohen & West, 1966, pp. 37-41
- [63] 『漢書』卷96下，3902頁
- [64] 『後漢書』卷89，2940頁
- [65] 『後漢書』卷89，2946頁
- [66] 『漢書』卷96上，3886頁
- [67] Zhang Yongjin: “System, Empire and State in Chinese International Relations,” *Review of International Studies* 27(5), 2001, p.52
- [68] J. K. Fairbank & S. Y. Têng. “On the Ch'ing Tributary System,” p.139
- [69] Peter C. Perdue: “A Frontier View of Chineseness,” in Arrighi, Giovanni, Takeshi Hamashita and Mark Selden, eds.: *The Resurgence of East Asia: 500, 150 and 50 Year Perspectives*, Routledge, 2003, p.67
- [70] 『漢書』卷95，3851頁
- [71] 『漢書』卷61，2696頁
- [72] 『漢書』卷100下，4268頁
- [73] 『漢書』卷96上，3872頁
- [74] 『後漢書』卷88，2909頁
- [75] 『後漢書』卷88，2925頁
- [76] 余英時著，鄒文玲訳『漢代貿易与拡張—漢胡經濟關係結構研究』上海古籍出版社，2005年，59頁
- [77] 『後漢書』卷88，2909頁
- [78] 金子修一『古代東アジア世界史論考—隋唐の国際秩序と東アジア—』八木書店，2019年，6頁
- [79] 西嶋定生「東アジア世界の形成」『中国古代国家と東アジア世界』東京大学出版会，1997年〔初出1983年〕，406-411頁

- [80] 金子修一『古代東アジア世界史論考-隋唐の国際秩序と東アジア-』95 頁
- [81] 栗原朋信「文献にあらわれたる秦漢璽印の研究」『秦漢史の研究』吉川弘文館, 1960 年, 126 頁
- [82] 栗原朋信「文献にあらわれたる秦漢璽印の研究」『秦漢史の研究』吉川弘文館, 1960 年, 229-284 頁; 栗原朋信「漢帝国と周辺諸民族」樺山紘一等編『岩波講座 世界歴史 4: 古代 4』岩波書店, 1970 年, 479-485 頁
- [83] 韓昇『東亞世界形成史論』31-33 頁
- [84] 川手翔生「南越の統治体制と漢代の珠崖郡放棄」『史観』第 174 号, 2016 年, 52 頁
- [85] 『漢書』卷 96 上, 3895 頁
- [86] 『後漢書』卷 88, 2924 頁
- [87] 『後漢書』卷 88, 2924-2925 頁
- [88] 『後漢書』卷 88, 2926 頁
- [89] 『漢書』卷 95, 3848 頁
- [90] 『漢書』卷 95, 3851 頁
- [91] 『漢書』卷 95, 3853 頁
- [92] 『漢書』卷 95, 3864 頁
- [93] 『後漢書』卷 88, 2909 頁
- [94] 『後漢書』卷 88, 2925 頁
- [95] 金子修一『古代東アジア世界史論考-隋唐の国際秩序と東アジア-』53-54 頁
- [96] 『漢書』卷 95, 3841-3842 頁
- [97] 『漢書』卷 95, 3842 頁
- [98] 『後漢書』卷 90, 2982 頁
- [99] 『後漢書』卷 90, 2986 頁
- [100] 『史記』卷 113, 2969 頁
- [101] 『史記』卷 113, 2969 頁
- [102] 『史記』卷 113, 2970 頁
- [103] 『後漢書』卷 88, 2924-2925 頁
- [104] 『史記』卷 100, 2896 頁
- [105] 『漢書』卷 96 上, 3872 頁
- [106] 『後漢書』卷 88, 2909 頁
- [107] 王子今『匈奴経営西域研究』中国社会科学出版社, 2016 年, 54-56 頁
- [108] 『漢書』卷 96 下, 3930 頁
- [109] 『漢書』卷 96 上, 3873 頁
- [110] 『漢書』卷 94 下, 3801 頁
- [111] 『漢書』卷 70, 3006 頁
- [112] 『漢書』卷 96 下, 3928 頁
- [113] 『漢書』卷 96 上, 3892 頁
- [114] 『後漢書』卷 88, 2909 頁
- [115] 『後漢書』卷 88, 2924 頁
- [116] 『後漢書』卷 88, 2910 頁
- [117] 『後漢書』卷 88, 2931 頁
- [118] 『後漢書』卷 88, 2912 頁
- [119] 『後漢書』卷 88, 2912 頁

終章

本論文は、国際システムに対する理論枠組みに沿って、秦漢時代における東部ユーラシア国際システムに対して、境界・ユニット・相互作用という三つの条件から、システムの形成を証明し、そして、国家間・帝国内の相互作用を通じて、形成されたシステムの変化と崩壊のプロセスを明らかにし、最後に、質子、朝貢、冊封という三つの国際制度の階層性にもとづいて、東部ユーラシアにおけるユニットの間の階層関係を探り出すことを通じて、400年ほどの秦漢時代において東部ユーラシア国際システムの構造が、漢と匈奴による二極から、北匈奴の滅亡により単極になったことを解明する。

具体的に言えば、秦漢時代には、東部ユーラシア国際システムは、境界とユニットという二つの条件を持ったが、匈奴の遮断により、各地域（農耕地域、遊牧地域、西域）との間で、互いに直接的な相互作用を行うことができなかったため、最初から成立したわけではなかった。東部ユーラシアは、地理的側面で他の地域から隔離され、経済的側面で自己完結的貿易圏になり、軍事・政治的側面で国家間相互作用としての戦争と外交、及び国際制度としての質子、朝貢、冊封により、独自に機能していたため、閉鎖的システムになった。そして、秦漢時代における東部ユーラシアは、領土・人口・政府などの構成要素と、他のユニットに対し独立自主な政策をとる能力要素を備える多様のユニット（前国家アクター、都市国家・行国、領域国家と統一国家）があった。しかし、匈奴が西域に対する拡張に成功し、西域と農耕地域との通路としての河西回廊を占領したことは、西域と漢との間での相互作用を妨げた。その後、武帝期に入った後、漢は、経済を回復させ、諸侯王問題を解決したため、その政策の中心を対内問題から対外問題に転じて、匈奴に対して、和親条約による平和共存を放棄し、争覇戦争を始めることとなった。漢は、漢匈争覇の第一段階に成功した成果として、河西回廊を占領し、西域に進出することができるようになった。漢は、敗北した匈奴と停戦したことを機に、前に幾つかの小帝国（南越と朝鮮）に分裂された農耕地域を征服と郡県制を通じて統一した。同時に、漢は、匈奴の西域同盟網を破壊させるために、西域に対する攻略を始めた。漢は、その西域攻略が一定の成果を収めた後、匈奴に対して新たな攻勢を展開して、漢匈争覇の第二段階に入った。しかし、漢は、匈奴に負けて、西域攻略を中止し、政策の中心を対外拡張から国力回復に戻した。結果的に見ると、漢匈争覇は、漢と匈奴のどちらが勝ったかということはそれほど重要ではなく、

漢が河西回廊を占有し、西域諸国と相互作用を行なったことにより、農耕地域、遊牧地域、西域において、頻繁かつ軸複合的な相互作用ができて、国際システムが形成されたことが重要である。

東部ユーラシア国際システムは、形成された後、漢と匈奴が漠南で直接対抗しながら、西域をめぐる覇権を争う相互作用の中で継続していた。すなわち、漢は優勢を持った場合には、匈奴を漠南から漠北までに完全に駆逐し、西域に対する覇権を匈奴と競った；もし劣勢になった場合には、西域からある程度まで退いて匈奴の影響の浸透を放任しながら、占領した漠南と漠北との間の地域からある程度後退して匈奴との衝突を避けた。

漢と匈奴との争覇のプロセスには、二つの重要な転機が見られる。一つには、宣帝期、匈奴の東西分裂の後、東匈奴は、西匈奴と対抗するために、漢に称臣して、質子と朝貢を行なうことを通じて、漢から軍事・経済の援助を得た。前漢初期の和親条約による平等な平和共存関係が漢女・賂遺などの義務を漢につけることで匈奴に有利であったのと反対に、東匈奴の称臣により、盟にもとづいて形成された漢と匈奴との新たな平等な関係は、納質・朝貢・朝覲・称臣などの義務を匈奴に付加する形で漢にとって政治上より有利なものとなった。漢は、東匈奴の屈服を機に、西域に西域都護の設置を通じて、匈奴の代わりに西域諸国を臣服させた。軍事的に西匈奴を滅した後、漢は、帝国化政策をとって、西域諸国と匈奴に対して内政干渉を試みた。王莽が漢を篡奪した後に、匈奴と西域を格下げするために、その君主を王から侯に変えることは、帝国化政策の最高潮であった。

その後、漢・新の帝国化政策に激高した匈奴と西域は、新と決裂して、東部ユーラシアで60年ほど続いた平和に終止符を打った。その後、匈奴は再び西域諸国を臣服させたが、内戦の中で滅ぼした新にかわった漢は、対外的に匈奴の侵攻を防衛しながら、対内的に地方勢力を統一することに焦点を置いたため、西域から一定の距離を保って、西域諸国による西域都護の復活の請求をも拒否した。匈奴が対外政策の中心を漢への侵攻に置いたことを機に、西域の西南部に位置する莎車は、権力の空白を活かし、匈奴と対抗する形で、台頭してきた。

この時点で、匈奴は南北に分裂することとなった。南匈奴は、東匈奴のように漢の軍事・経済的援助を求め漢に臣服した。しかし、この時の漢は、宣帝の対西匈奴政策を放棄し、代わりに帝国政策をとって、南匈奴を国内に移住させ、南匈奴に内臣の義務をつけ、南匈奴の管理のために相次いで使匈奴中郎将・度遼將軍を設置したことによって、南匈奴を国内異民族とした。一方、北匈奴は、漢と南匈奴との協力による共同的攻撃を憚って、その

戦略中心を西域に置き、反莎車闘争の勝利の実を奪って、ハブ・アンド・スポークの支配を形成し、車師を通じて天山北路を、亀茲を通じて天山南路北道を、于闐と鄯善を通じて天山南路南道を確保し、西域を覆う勢力圏に組み込んだ。しかし、漢は、国力を回復した後、匈奴と争覇戦争を再び開始し、西域攻略を展開した。結局、漢は、明帝期の寶固による北匈奴征伐から、和帝期の寶憲による北匈奴征伐まで、約 20 年を経て、断続的戦争によって、最後に内憂外患に陥った北匈奴を滅ぼした。北匈奴の滅亡により、漢は、西域都護の復活を通じて、西域諸国を臣服させた。鮮卑は、この機を利用し、漠北を奪ったが、部族段階に留まったため、匈奴のような統一政権を建てることはできず、遊牧地域を統一することもなかった。

遊牧帝国としての北匈奴の滅亡により、東部ユーラシアは、第二の転機を迎えた。東部ユーラシアには、第一の転機には、匈奴は実力を温存し、西域の一部分の国家と階層関係を維持したため、構造的変化は生じなかったが、第二の転機には、北匈奴の滅亡により、漢帝国と対抗できる実力をもって、西域諸国と階層関係を結ぶ国が現れなかったため、東部ユーラシア国際システムには、漢という大国しかなく、したがって、その構造は漢・匈奴による二極から漢による単極に変化することとなった。

しかし、東部ユーラシアは、単極になったのと同時に、その崩壊が始まった。漢は西域諸国を臣服させたが、国内の異民族の反乱及び烏桓・鮮卑による北辺への侵攻により、西域に対して戦力投射を次第にできなくなって、西域諸国の対抗をきっかけとして、西域都護を廃止した。この背景に、北匈奴の残余勢力は、西域北路を覇権に取り込んだ一方、天山南路南道の中部の于闐、天山南路南道の西部の莎車あるいは疏勒、天山南路北道の亀茲などの西域の大国も付近の小国を臣服させて、台頭してきた。その後、漢は、北匈奴を撃退させ、西域諸国を臣服させたが、西域都護を設置しなかったため、西域に対する影響も次第に弱体化していった。羌乱により、西域と繋がる河西四郡は次第に機能不能の状況になったため、漢は、西域から次第に撤退することになった。一方、遊牧地域は、鮮卑により占領された。鮮卑は統一政権がなかったため、分散した部族が多く存在していた。しかし、檀石槐は初めて鮮卑諸部族を連合し、統一的政権を目指したが、匈奴のような帝国を建てることに失敗した。結果として、鮮卑は、檀石槐の時、漢に安全保障上の脅威を与えたが、檀石槐の死亡の後に、間もなく分裂し、部族として分散していった。したがって、遊牧地域は、北匈奴の滅亡により、統一性を失ったのであった。そして、鮮卑の崩壊の後、漢が内乱と内戦に陥ったため、遊牧地域との相互作用もなくなった。結局、東部ユーラシ

アは、農耕帝国としての漢が西域と遊牧地域を関連させる能力を失った後、農耕地域・遊牧地域・西域との間の相互作用がシステムを維持する程度に達しなかったため、崩壊することになった。

秦漢時代における東部ユーラシア国際システムには、農耕地域・遊牧地域・西域との間の国家間の相互作用だけではなく、漢帝国の拡張により、農耕地域の異民族が漢に統合された結果として、漢帝国内では、国家間相互作用に準える漢と国内異民族との相互作用もあった。秦は、天下統一した後、南越、東甌、閩越、朝鮮を征服して、農耕地域に帝国を建てた。しかし、秦の滅亡の後、農耕地域の辺縁での南越、閩越、朝鮮は建国によって独立した。その中で、南越と朝鮮は、建国初期の漢と君臣関係を通じて、漢からの攻撃を避けながら、漢の援助を利用して、付近の国家・部族を征服し、独自の国際秩序を形成させ、小帝国になった。漢は、長年の内戦による経済不況と諸侯王問題との内憂および匈奴による安全保障的脅威との外患に陥ったため、これらの小帝国を大目に見た。しかし、武帝期に入った後、漢は、内憂外患を乗り越えて、匈奴との第一段階の争覇に勝ったことにより、農耕地域を征服するための軍事的配置ができるようになった。したがって、漢は、戦争を通じて南越、閩越、朝鮮、西南夷を征服し、前に内属してきた東甌を加えて、郡県制の実施を通じて、農耕地域を統一した。漢は、閩越、東甌、朝鮮には直接統治を行なったが、南越と西南夷には、土着の異民族の勢力が強かったため、異民族の首長を王・侯と冊封して間接統治を行なった。前漢中期から後漢前期まで、漢は、土着勢力の抑圧・地方支配の浸透・移民政策・漢化政策により、異民族支配を次第に強化し、異民族民を個人的に支配し、県レベルまでに直接統治を行ったのだった。

そして、漢は、匈奴との第一段階の争覇に勝った成果として、漠南・河西回廊及びその南の地域（現在の甘粛省と青海省との辺り）に跨る接壤地帯を占領した。接壤地帯には、投降・俘虜・移民などにより来た異民族（匈奴、烏桓、鮮卑、羌）が次第に多くなった。したがって、漢は、これらの異民族に対して、行政区画としての属国および少数民族統御官としての使匈奴中郎将・度遼將軍・護烏桓校尉・護羌校尉などの特別な政治体制を整え、間接的な統治を行った。前漢中期以降、異民族支配の強化の結果として、漢は接壤地帯における異民族をある程度まで直接的に支配することができるようになったのだった。

しかし、漢は、異民族支配の強化の後に、異なる生活・生業をもつ異民族に対して、その生活・生業に対応する統治方法がなく、漢民に対する統治方法で苛刻な支配を行なった。このような統治下では、異民族は、漢民のように戸籍に登録され、深重な賦税を納めさせ

られたり、漢人の官僚だけではなく、在地の漢人の大姓に搾取されたり、自然資源が漢王朝に独占され、土地も農耕化のため失われたりする残酷な生活を送ったため、後漢中期以降、絶えず反乱を引き起こしていた。南での異民族による反乱は、数が多かったが、その規模が小さかったため、その損害はそれほど深刻ではなかった。しかし、羌乱は、長時間かつ広域なので、その鎮圧には莫大な軍事・財政資源が消耗されたため、漢の対外的戦力投射の能力を弱体化させた。結局、国内の異民族による反乱は、漢が東部ユーラシアの各地域を関連させる能力を消耗した側面から見ると、東部ユーラシア国際システムの崩壊をもたらしたのだった。

秦漢時代の約 400 年には、質子、朝貢、冊封という三つの国際制度は、東部ユーラシア国際システムをうまく機能させていた。しかし、この三つの国際制度は、必ず同じ階層関係を反映していたわけではない。質子は自主的な質子の派遣と強制的な質子の派遣にわかれ、朝貢は礼儀的朝貢、経済的朝貢と政治的朝貢にわかれ、冊封は爵号・印綬の授与による冊封と国家の君主の擁立による冊封に分けられる。国家間関係に対して、自主的な質子の派遣、礼儀的朝貢、経済的朝貢は、国家の対外主権（すなわち対外行動の決定権）の譲渡がないため、階層のない関係を反映する。強制的な質子の派遣は、質子を派遣する国家が質子を受ける国家から非対称的影響を受けるため、質子を派遣する国家が質子を受ける国家の勢力圏にあることを反映する。政治的朝貢には、朝貢を行う国家は朝貢を受ける国家による規則にしたがい、朝貢に対する決定権を譲渡し、言い換えると、朝貢を義務として行う。そして、冊封には、冊封を受ける国家は冊封を与える国家による規則にしたがい、冊封に対する決定権を譲渡し、言い換えると、冊封を義務として行う。したがって、政治的朝貢にせよ、冊封にせよ、いずれも、朝貢を受ける国家あるいは冊封を与える国家という大国の覇権にあることを反映する。一方、帝国内では、異民族の君主が冊封を通じて自治権を受けたら、その異民族の地域は自治領になる。一旦、異民族に対する冊封を中止して、その地域及び異民族民を郡県の支配下に置くなら直接統治である。

歴史を回顧すれば、東部ユーラシア国際システムが形成される前に、匈奴は、西域諸国に政治的朝貢を義務として課したことを通じて、西域を覇権に取り込んだ。東部ユーラシア国際システムが形成された後に、漢は、武帝期における匈奴との争覇を通じて、西域のいくつかの国家に質子の派遣を強要した結果として、西域の一定の地域を勢力圏に取り込んだ。その後、昭帝と宣帝の西域攻略及び匈奴の東西分裂のため、漢は、西域都護を設置し、西域諸国を冊封したことによって、西域を覇権に取り込んだ。しかし、この時、匈奴

は、完全に西域を失ったわけではなく、いくつかの西域大国との友好関係を基礎に、漢から遠い距離のある西域国家を依然として自国の覇権に組み込んだ。この背景には、漢・新が、帝国化政策をとって、匈奴と西域を漢帝国に取り込もうとしたが、匈奴と西域の叛意を惹起し、次第に西域に対する覇権を失ったことがある。匈奴は、新の内戦を好機として、西域を再び覇権に取り込んだ。匈奴が漢への侵攻に焦点を置いたため、莎車は西域の権力真空を機に台頭してきた。しかし、匈奴が南北分裂した後、北匈奴は、西域攻略を対外政策の中心として、西域を完全に覇権に取り込んだ。このような状態は、漢の北匈奴征伐により変化することになる。結局、漢は、北匈奴を滅ぼして、西域都護を設置し、西域諸国に冊封を行なったことを通じて、西域を覇権に取り込んだ。東部ユーラシア国際システムが完全に崩壊する前に、漢は西域諸国と遊牧地域の烏桓・鮮卑のいくつかの部族に冊封制度を適用させたことを通じて、覇権を維持していた。一方、北匈奴が崩壊した後、西域諸国と政治的朝貢を通じて階層関係を結んだ遊牧帝国は現れなかった。したがって、東部ユーラシアには、一つの極（漢帝国）だけが残った。要するに、東部ユーラシア国際システムは、北匈奴の滅亡の前には、政治的朝貢により覇権を維持した匈奴と冊封により覇権を維持した漢という二つの大国があったため、二極システムであったが、北匈奴の滅亡の後には、冊封により覇権を維持した漢という一つの大国しかなくなったため、単極システムになったのであった。

最後に、二つの問題を通じて、秦漢時代における東部ユーラシア国際システムの特徴に触れることとする。まず、秦漢時代における東部ユーラシア国際システムには、その存続の半分をこえる期間には、覇権を樹立した漢と匈奴による二極的な構造があったが、漢の覇権は、政治的色彩が濃く、その覇権を受ける国家に冊封を通じて政治的権威を認めさせた一方、匈奴の覇権は、経済的特色が濃く、その覇権を受ける国家に深重な税金を課した。このような覇権の相違は、漢と匈奴との国内的要素による。

漢は、早くに郡県制を通じて中央集権体制を実現し、天下^[1]という観念により、東部ユーラシアそのものを天下とみなし、「天下無外（天下には外というものがなく、全てが中とみなされる）」という理想にもとづいて、東部ユーラシア国際システムを、漢を中心とする一つのものにしようとした^[2]。このような天下は、中心としての漢が君臨して、周辺としての全ての国家と（冊封を通じて）君臣関係を結び、これらの冊封を受ける国家による質子、朝貢、朝覲を受けることを通じて天子としての権威を付けられることを理想モデルとした^[3]。そして、中心とする漢と周辺となる他の国家を区別するにあたって、華夷思想が

機能していた。漢は華として当然に君主とになり、夷としての諸国は漢を敬慕・学習し、漢に臣下として奉ずる^[4]ということは、漢にとって、理想的な秩序であった。そして、漢の支配を受けた異民族は、漢の支配を受けない異民族から自分を区別するため、漢化の結果として夷から華になることができた^[5]。国内の異民族だけではなく、漢は西匈奴を滅した後に、帝国化政策を試みたと同時に、「華夷混一の理想社会」の実現のために、『穀梁伝』を外交の指導思想の根拠と公認して、夷狄とみなす諸国が華になる道を理論的に切り開いた^[6]。しかし、漢は全ての国家を覇権に取り込むことに失敗して、この失敗を糊塗するために、「夷狄不臣」論を出して^[7]、漢に臣服しなかった夷狄と羈縻関係を保つべきであると主張した。羈縻は、唐代の羈縻府州の「羈縻」とは異なり、「是以聖王之制、羈縻不絶而已」^[8]とあるように、関係を保つことを意味する。そうであるとする、漢の覇権は実際に、図 6-1 のように、現実としての覇権関係と、理想的覇権としての羈縻関係（漢と関係をもつ）とに分けられる。漢は、国内のように中央集権的な手段をもって覇権における国家を統合的に支配する。その最も顕著な例は、西域諸国を統御するために西域都護を設置したことである。言い換えるなら、漢は水平的覇権を樹立したのであった。

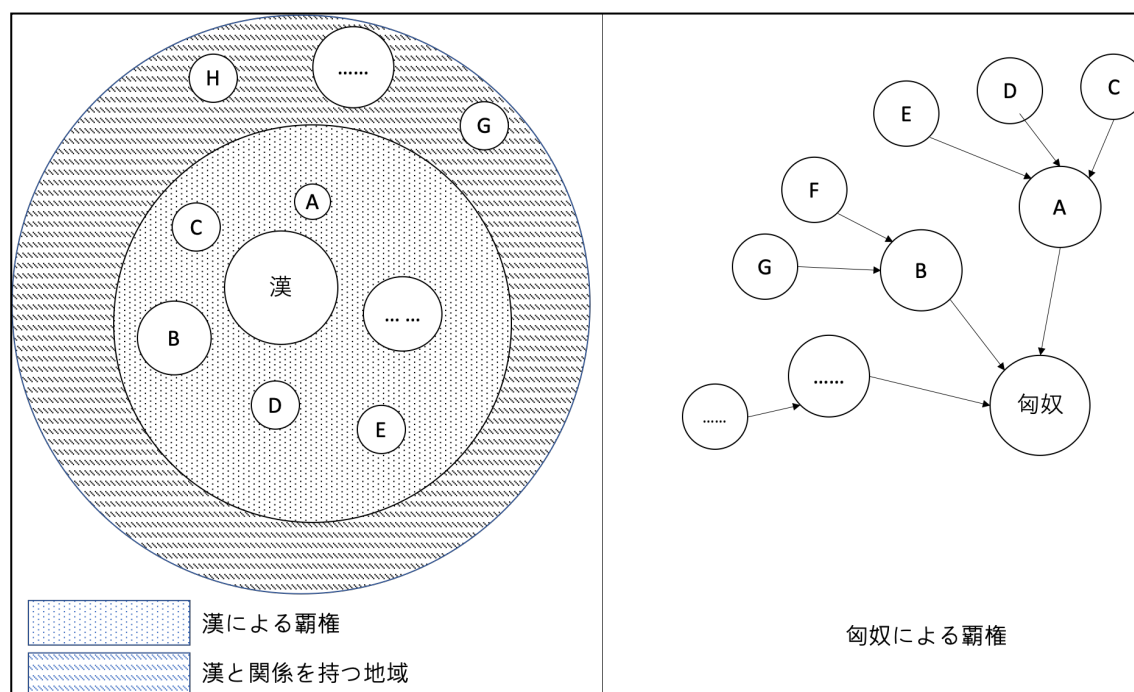


図 6-1：漢と匈奴との覇権の構造図

匈奴は、漢とは完全に異なる覇権を形成した。匈奴は、遊牧を主な生業とするため、自

給自足ができず、他の国家から資源を、武力か貿易で、補充することが必要であった。したがって、匈奴は、覇権の及ぶ国家に税を重く課した^[9]。匈奴の求めるものが税金であるため、匈奴は、覇権における国家に対して、基本的に政治的干渉を行わなかったが、一旦他の大国が覇権における国家を丸め込んだら、直接干渉し、究極的には戦争を行なった。したがって、匈奴は覇権における国家を、形式上は漢のように恒常的な支配をしないが、実質上はかなり強い支配を維持した。匈奴が形式的に覇権の及ぶ国家を直接的に干渉しなかったのは、匈奴が漢のような中央集権的政治体制を持たず、覇権の及ぶ国家の支配に国内のような分権的政治体制^[10]をとったためである。例えば、西域諸国の事務を担当するのは、日逐王である。日逐王は、西域に税金を納めるために、焉耆・危須・尉黎の間に僮僕都尉を設置した。そして、匈奴は覇権の及ぶ相対的大国を代理国として、これらの大国を通じて遠い地域を支配した。結果として、図 6-1 のように、匈奴の覇権は、ハブ・アンド・スポーク^[11]という形になった。例えば、後漢初期、北匈奴は、ハブ・アンド・スポークの支配を形成し、車師を通じて天山北路を、亀茲を通じて天山南路北道を、于闐と鄯善を通じて天山南路南道を確保し、西域を覆う覇権に組み込んだ。言い換えると、匈奴は垂直的覇権を樹立したのであった。

ところで、漢による覇権にせよ、匈奴による覇権にせよ、いずれも成功的な覇権だと考えられる。テイラーは、覇権の及ぶ国家が覇権国を見習うことを覇権の成功の基準とみなす^[12]。言い換えると、漢化あるいは匈奴化（胡化）が行われたら、漢か匈奴による覇権が成功だと判断することができるのである。胡化は、遊牧国家によく見られ、その中で最も成功したのが烏孫だった。一方、漢化は、西域大国としての亀茲、莎車などの都市国家で国内政治改革のために用いられた。そして、覇権が正当化されることにより、その覇権が成功だと判断することもできる。覇権の正当化は、もとより覇権の及ぶ国家が、覇権が終わった後に、もとの覇権国に覇権の復活を要請することにみられる。後漢初期、西域諸国が自ら質子・朝貢を送って、漢に西域都護を復活することを要請したことから見て、漢による覇権は正当化された。一方、漢が西域都護の復活を拒否した後、西域諸国は、匈奴の覇権に自ら入ったことから見て、匈奴による覇権も正当化されたのだった。

なぜ漢と匈奴との覇権は成功したのだろうか。その原因は覇権が秩序を保持する機能にある。覇権国は、「レベニューのために公共財（安全保障と財産に対する保護）を提供する」^[13]。弱肉強食の世界には、弱国が覇権国の保護のためにある程度まで主権を譲渡することは合理かつ有効な生存策だと考えられる。一方、覇権国は、このような公共財を提供する

ためには、一定の資源を消耗しなければならない。したがって、国内の資源が不足する時には、覇権国は、覇権を放棄することもある。例えば、後漢初期、漢は西域都護の復活を拒否し、そして、後漢後期、漢は、内乱のため、西域の秩序を保つ能力を次第に失っていき、西域から撤退した。東部ユーラシア国際システムの崩壊は、この意味から言うと、実際には、覇権国の能力の低下によるものだと考えられる。二極システムでは、一つの極としての国家が衰弱しても、もう一つの極としての国家はシステムを維持することができる。しかし、単極システムでは、その極としての国家が衰弱すれば、システムは崩壊するしかなかった。

もう一つの問題として、なぜ秦漢時代における東部ユーラシアは帝国システムにならなかったのだろうか。一部の中国研究者は、秦漢時代における東部ユーラシアを漢帝国とみなす。この漢帝国論は、西匈奴の呼韓邪単于の称臣と西域都護の設置により、漢を宗主国とみなし、遊牧地域の匈奴と西域諸国を従属国とみなして、漢と遊牧・西域との藩属関係を理由として、東部ユーラシアが漢帝国に取り込まれたと考える^[14]。一方、日本にも秦漢時代における東部ユーラシアを漢帝国とみなす研究者がいる。これらの研究者は、二つのタイプに分かれる。一つは、西嶋定生を代表者として、東部ユーラシアを東アジアに収縮し、「漢王朝という先進的統一帝国が、結果的に郡県化という直接的支配の形態をとることによって南方および東方に進出した」ことにより、漢帝国が東アジアを支配したと考える^[15]。もう一つは、堀敏一を代表者として、「中国を中心とする世界帝国が、本質的には支配・従属の関係をもちながら、その関係が羈縻という形をとり、歴史的・地域的条件によって様々な変差をもち、全体としてルーズな結合関係をもっている」^[16]ことを基準にして、漢が東部ユーラシアを含む世界帝国を建てたと考える^[17]。だが、これらの研究者のいう帝国は、対外政策を支配することに留まり、対内政策を支配しなかったため、実際には、覇権であるにすぎない。

実際に、漢は西匈奴を滅ぼした後に、帝国化政策をとって、東部ユーラシアを帝国システムにしようと努力した。しかし、匈奴と西域諸国はこのような帝国化政策に激怒したため、新・漢と対抗・戦争を行なった。これを教訓としたためか、後漢に入った後、漢は、遊牧地域と西域に対して、帝国化政策をとることがなかった。そして、北匈奴の滅亡の後、遊牧地域は、部族段階にある鮮卑が占領した。漢は、統一政権を建てなかった鮮卑に対して、対匈奴のようにその君主（単于）を通じて二国関係を処理することができなくなり、全ての鮮卑の部族と外交を行うことも不可能であった。最後に、漢は、羌乱により、河西

地域の機能が不具合を起こしたため、西域に進出することが次第になくなった。そうであるとすると、漢は、匈奴に対する軍事的大勝利をきっかけとして、システムを帝国化させる試みをしたことがあったが、失敗した。

秦漢時代において、東部ユーラシアが帝国システムにならなかったのは、漢と匈奴が異質的な地域を征服する野望を持たなかったことによる、と考えられる。まず、軍事力の優勢をもつ時に、匈奴が農耕地域に対し戦争を頻繁的に行っていたことは、匈奴が農耕地域を征服しようとしているという錯覚をもたらした。けれども、遊牧国家が農耕国家に戦争を行うことは、遊牧国家の生産方式の一つである。遊牧経済は自給自足ができないため、遊牧国家は、常に貿易と戦争を通じて、生産・生活資料を補充しなければならない。国力が強い時には、遊牧国家は貿易よりもその軍事力によって「有限戦争」（すなわち、占領ではなく、略奪を目的とする戦争）を通じて農耕国家にある種の政治的朝貢を強要することを、主要な対外政策として行う^[18]。そして、政治的朝貢と貿易が遊牧国家の貴族によって独占されるのとは異なり、戦争では「其攻戦、斬首虜賜一卮酒、而所得鹵獲因以予之、得人以為奴婢。故其戦、人人自為趣利、善為誘兵以冒敵」^[19]とあるように、一般の匈奴人も参戦を通じて戦利品を得ることができるため、遊牧国家にとっては、その国内の経済問題に対して最も有効な政策であった^[20]。したがって、第二章で述べたように、匈奴は、漢と和親条約を結んで平和共存関係になった後でも、漢に略奪のための侵攻を行った。

また、匈奴は、漢の辺境で争を行なって、漢の郡県に進軍したが、漢の領土を占領したことは基本的になく、略奪の後には撤退している。匈奴が漢の領土を占領しなかったのは、

高帝乃使使問厚遺閼氏、閼氏乃謂冒頓曰：「兩主不相困。今得漢地、单于終非能居之。且漢主有神、单于察之」^[21]。

とあるように、漢の領土に対する興味が強くなかったことによる。それだけではなく、匈奴は、漢との和親条約には、「先帝制：長城以北、引弓之国、受命单于；長城以内、冠帶之室、朕亦制之」^[22]とあるように、漢との間で万里の長城を境界線とすることを約束した。これに対して、匈奴は、少しの農耕を行うものの^[23]、遊牧を主な生業とするために、農地としての漢の領土を牧場に変えて利用することが難しい^[24]。そして、もしこの領土を漢に返したら、漢がこれらの領土で生産を回復した後に、匈奴は新たな略奪を行うことが可能になる。したがって、経済利益から見ると、匈奴にとっては、漢の領土を占領しないことが利益を生む。一方、安全保障からみると、漢の領土を占領することは、匈奴に危険をもたらす可能性が高い。匈奴は、一旦漢の農耕的領土を占領したら、その領土を管理するた

めに駐軍しなければならなくなる。そうなれば、匈奴は、その軍事的優勢としての機動力を失って、常に漢の攻撃に晒されることになる^[25]。このような軍事的不利を避けるために、匈奴は、漢の領土を占領することを控えた。漢は匈奴が漢の領土に興味を持たないことを知って、匈奴が漢の領土を占領することを恐れず、匈奴による略奪だけを脅威とみなした。例えば、匈奴が漢に対して最も軍事的優勢を誇った前漢初期にも、賈誼は、匈奴による脅威を説明する時に、

竊料匈奴控弦大率六万騎，五口而出介卒一人，五六三十，此即戸口三十万耳，未及漢千石大県也。而敢歳言侵盜，屢欲亢禮，妨害帝義，甚非道也^[26]。

とあるように、単に匈奴の「侵盜」を挙げた。

最後に、歴史的に回顧すれば、遊牧国家が一旦農耕地域を占領したら、農耕地域にいる部分は、農耕地域の富を享受しながら、次第に遊牧性を失い、軍事的能力が低下していくため、軍隊を指揮することができなくなる。これを機に、もとより従属していた遊牧部族は、独立して、農耕地域に入った遊牧国家を遊牧地域から駆逐し、新たな遊牧国家を建てる。このプロセスは、「遊牧民族の統治の循環」とも呼ばれる²⁷。最も顕著な例として、第三章で述べたように、北匈奴が滅した後には、長期的に漢の辺郡に留まった南匈奴ではなく、純粹の遊牧生活を送る鮮卑が漠北を占領した。農耕地域に移住しなくても、農耕地域の富を長期的に享受すれば、遊牧国家も遊牧性を失う可能性がある。例えば、前漢初期、匈奴は、和親条約を通じて、漢からの賂遺を享受していた時に、その遊牧性を喪失する前兆を示した。匈奴に來た中行説は匈奴が漢の賂遺によりその遊牧性を失っていったことを見て、

匈奴人衆不能當漢之一郡、然所以疆者、以衣食異、無仰於漢也。今單于變俗好漢物、漢物不過什二、則匈奴盡歸於漢矣。其得漢繒絮、以馳草棘中、衣袴皆裂敝、以示不如旃裘之完善也。得漢食物皆去之、以示不如湼酪之便美也^[28]。

とあるように、單于に農耕的生活になることを警戒して、遊牧的生活を堅持すべきことを諫言した。

一方、第三章で述べたように、漢は、何回も匈奴に決定的に勝ったが、農耕地域と遊牧地域との接壤地帯（漠南・河西回廊）を占領したことを除いて、遊牧地域からは撤退した。農地が匈奴にとって重要ではないのと同じく、

且得匈奴地、澤鹵非可居也^[29]。

自三代之盛、胡越不与受正朔、非疆弗能服、威弗能制也、以為不居之地、不牧之民、

不足以煩中国也^[30]。

其地不可耕而食也、其民不可臣而畜也、是以外而不内、疏而不戚、政教不及其人、正朔不加其国；來則懲而御之、去則備而守之^[31]。

匈奴处沙漠之中、生不食之地、天所賤而棄之^[32]。

とあるように、漢にとって、遊牧地域は「無用」なものであった。このように遊牧地域を「無用」とみなすのは、秦の時から始まった。李斯は、

夫匈奴無城郭之居、委積之守、遷徙鳥举、難得而制。輕兵深入、糧食必絕；運糧以行、重不及事。得其地、不足以為利；得其民、不可調而守也。勝必棄之、非民父母。

靡敝中国、甘心匈奴、非完計也^[33]。

とあるように、軍事的リスクを克服して匈奴に勝っても、その地を利用することができないことを理由とし、始皇帝に匈奴を攻撃しないことを諫言した。武帝は、拡張を通じて、農耕地域を征服し、匈奴をある程度まで撃退し、西域に進出したが、漢の国内に莫大な問題をもたらしたため、治世の最後の時期に對外拡張を中止した。武帝の拡張政策を反省するために開催された塩鉄会議は、このような「無用論」を漢の對外政策の指導思想とした^[34]。「無用論」にもとづいて、「北胡南漢」という構造を漢が受け入れた^[35]。このような構造は、

孝宣・孝元皇帝哀憐父呼韓邪单于、從長城以北匈奴有之^[36]。

とあるように、東匈奴が漢に称臣しても維持されていた。

漢が遊牧地域を占領することを控えたのは、まず、地理的要素による財政の問題による。漢は農耕帝国であるため、その軍隊及び政府を維持するために、農耕を行う民から税金を徴収することが必要である。しかし、遊牧地域では農耕を行うことができず、したがって、徴税の対象もない。このような状況で、もし遊牧地域を占領したら、漢は、第四章に述べた初郡に準えて、

漢連出兵三歲、誅羌、滅兩粵、番禺以西至蜀南者置初郡 十七、且以其故俗治、無賦税。南陽、漢中以往、各以地比給 初郡 吏卒奉食幣物、傳車馬被具。而 初郡又時時小反、殺吏、漢發南方吏卒往誅之、間歲万余人、費皆仰大農。大農以均輸調鹽鉄助賦、故能澹之。然兵所過県、県以為訾給毋乏而已、不敢言輕賦法矣^[37]。

とあるように、辺郡あるいは内郡から物質を配分し、遊牧での新占領地の軍隊と政府を維持しなければならなくなる。農耕地域と遊牧地域との接壤地帯に設置した漢の辺塞は、屯田を通じて財政は部分的に自給自足の状態になったが、その維持のためにも、莫大な財政

を消耗しなければならなかった^[38]。屯田すらできない遊牧地域を維持するための財政的圧力は、想像できないほど重い。したがって、班固は、遊牧の地を占領しないことを、「其地不可耕而食也、其民不可臣而畜也」^[39]という理由で説明した。言い換えると、漢にとっては、匈奴に勝つことは、短時間的な作戦として全国の力を投入すれば行えるものの、遊牧の地域を占領することは、長期間的な統治となり、どのぐらいの資源を消耗することになるかすらわからず、不可能なことであった^[40]。漢が、遊牧地域をたとえ一時的に占領しても、財政的圧力のため、最後に放棄しなければならなかったことは、第四章で述べたように、武帝の時に無謀的な拡張を通じて占領された幾つかの地域を放棄したことからも、推測することができる。

そして、漢は、中央集権的体制をとったため、国内の局部的な問題が全国的問題になりえた。したがって、一旦遊牧地域を占領したら、漢は遊牧地域における問題（例えば、軍事上の反乱、経済上の飢餓など）に対して、遊牧地域に相当な軍事・経済的資源を配置しなければならない。そうであるとする、漢の民衆に莫大な負担をかけることになる。したがって、一旦民衆がこの負担を耐えられなくなれば、蜂起と内乱が繰り返される^[41]。また、遊牧地域を占領したら、必然的に多くの遊牧民を統治しなければならない。第四章で述べたように、漢は接壤地帯における羌人を統治することに失敗し、五つの大規模な羌乱を被んで、崩壊寸前になった。羌人より団結力があり強大な匈奴人を統治したら、遊牧民に対する統治方法を整えなかった漢は、西晋が匈奴人の劉淵により滅国したことから見ると、羌乱よりさらに深刻な影響をもつ匈奴人による反乱のため、滅亡してしまうこともありえた。そのために、漢は、「自三代之盛、胡越不与受正朔、非彊弗能服、威弗能制也、以為不居之地、不牧之民、不足以煩中国也」^[42]とあるように、匈奴（胡）人を征服することはできても支配することはできないこと理由として、匈奴のために国力を消耗することを控えたのだった。

結局、第三章に述べたように、匈奴は、農耕地域を征服する意思を持たず、漢に対し優勢になったら政治的朝貢を要求した一方、漢も、遊牧地域を征服する意思を持たず、匈奴に対し優勢を持ったら政治的臣服を要求した。したがって、東部ユーラシア国際システムでは、一つの大国がシステムを帝国に取り込もうとする努力がなかったため、帝国システムにならなかったのがあった。

最後には、本論文の意義について、その要点を整理させて頂くこととする。本論文は、秦漢時代における東部ユーラシア国際システムを対象として、今まで利用されてこなかつ

た国際関係論のシステムに関する理論にもとづいて、システムの存在を理論的に証明し、システムの形成・変化・崩壊のプロセスを説明し、システムの構造を権力分布で明らかにするといった研究成果を得た。これらの研究成果の意義は、すでに各章において説明をおこなったが、全体像が俯瞰できるように、最後にここでもう一度、体系立てて紹介する次第である。

第一章では、システムに関する理論を、システムの基準とシステムの構造という二つの部分に分けて、前者をシステムが存在する根拠としてシステムの形成と崩壊を説明しながら、後者をシステムの特徴としてシステムの存続と変化を説明する。このような区分により、本論文では、秦漢時代における東部ユーラシア国際システムの存在を、今までの研究のように無視したり簡略的に言及したりするだけではなく、境界・ユニット・相互作用という三つの条件にもとづいて、厳密かつ整然として証明し得ることとなった。また、本論文で参考にされた英国学派は、近現代の世界システムを対象とするため、境界という要素をあまり重視しない。しかし、古代における国際システムは、世界的規模というより、地域的規模をもったため、境界という要素はかなり重要であった。このように、境界という要素を、英国学派の国際システムに対する理論枠組みに入れるのは、その理論枠組みの汎用性をいっそう引き上げることになった。そして、本論文は、権力分布をシステムの構造とするが、今までよく利用されてきた量的権力の概念に代えて、関係的権力を用いる。関係的権力を用いることで、古代のように客観的に能力を測定できない場合に、国際制度による階層性を通じて、権力の分布を明らかにすることができるため、この方法は、権力分布の判断に新たなツールを設定したことを意味した。

第二章では、境界・ユニット・相互作用にもとづいて、東部ユーラシア国際システムの形成を理論的に説明した。境界という基準を用いたのは、東部ユーラシアの地理的規模を精確に定義することができるからである。そして、国家（古代国家）だけではなく、前国家アクターをもユニットとみなすのは、東部ユーラシアにおけるユニットの多様性を見出し、この多様性による相互作用の複雑性を明らかにすることができるからである。最後に、頻繁かつ軸複合的な相互作用をシステムの基準とするのは、東部ユーラシア国際システムが最初から形成されていたという錯覚を回避するためである。この基準を用いることで、漢匈争覇により、匈奴に遮断されていた漢と西域諸国との間で相互作用ができるようになったため、東部ユーラシア国際システムが漢匈争覇の結果として形成されたと確定することができたのである。

第三章では、漢と匈奴が漠南で対抗しながら西域をめぐる覇権を争っていたプロセスを通じて、東部ユーラシア国際システムの変化と崩壊を説明した。概して、東部ユーラシア国際システムは、形成された後には、漢と匈奴による二極システムから、漢による単極システムとなり、その後、漢がシステムを維持する能力を失った結果として崩壊した。本論文は、漢と匈奴との関係にもとづいて、漢と匈奴による二極システムを、次のような3つの時期にわけた。すなわち、前漢中期から前漢後期までの漢匈対抗時期、前漢後期から新までの漢匈平和時期、新から後漢中期までの漢匈対抗時期である。このようにすることで、東部ユーラシア国際システムが変化していくプロセスをより具体的かつ全面的に明らかにすることができた。

第四章では、漢帝国とその国内異民族との相互作用にもとづいて、帝国の成立のプロセスを明らかにし、帝国の崩壊を異民族の吸収による副作用という側面から説明した。異民族の吸収を説明するにあたって、異民族を、農耕地域での異民族と農耕地域と遊牧地域との接壤地帯での異民族とに分けた。漢の異民族支配の強化により、農耕地域での異民族は、漢民のように直接統治を受けていた一方、接壤地帯での異民族が一定の自治権を依然として保ったことを解明した。そして、漢の統治方法の違いにより、農耕地域での異民族による反乱は多かったが分散して規模が小さかった一方、接壤地帯での異民族による反乱は、長時間かつ広域だったため、莫大な損失をもたらした。このように、帝国の拡大による異民族の吸収は、副作用として帝国の弱体化と崩壊をもたらすことを明らかにした。

第五章では、質子・朝貢・冊封という国際制度による階層性にもとづいて、東部ユーラシア国際システムの構造の変化を明らかにした。自主的な質子の派遣、礼儀的朝貢、経済的朝貢を階層のない関係の基準とし、強制的な質子の派遣を勢力圏の基準とし、政治的朝貢と冊封を覇権の基準とすることにより、秦漢時代における東部ユーラシアが二極システムから単極システムになるプロセスを明らかにした。そして、漢にせよ、匈奴にせよ、いずれも東部ユーラシアを自国による帝国に取り組もうとする努力をしなかったことを明らかにした。その結果として、秦漢時代における東部ユーラシアが漢による世界帝国になった、という認識が成り立たないことを証明することができた。

各章での立論に加え、本論文は全体として、歴史学と国際関係研究に一定の貢献をしたものといえる。歴史学では、秦漢時代における東部ユーラシア国際システムを、漢帝国の対外関係に還元し、漢帝国の形成プロセスとして分析するのが伝統的な研究方法である。本論文は、国際関係論、特にシステムに関する理論を導入し、秦漢時代における東部ユー

ラシア国際システムを一国史ではなく、国際システム史として研究するという地平を拓いたといえる。その結果として、大国間の相互作用、大国と小国との相互作用、帝国と国内の異民族との相互作用を通じて、国際制度による階層性にもとづくシステムの構造（すなわち、権力分布）を明らかにすることによって、秦漢時代における東部ユーラシア国際システムを、より全面的かつ立体的に説明することができるようになった。言い換えると、本論文は、古代国際システムについて、伝統的研究の視点に代えて、新たな研究方法を提案したという意義をもつ。

国際関係研究にとっては、本論文が国際関係論を秦漢時代における東部ユーラシア国際システムに適用することにより、国際関係論の汎用性が証明されることとなった。そして、英国学派による「世界歴史の国際システム」という研究プロジェクトには、戦国時代と明清時代での東部ユーラシア国際システム研究がすでに含まれていたが、他の時代の東部ユーラシア国際システムに対する研究は不足していた。本論文が秦漢時代における東部ユーラシア国際システムをテーマとして研究したことは、「世界歴史の国際システム」という英国学派の研究プロジェクトに、あらたなケーススタディーとして秦漢時代を提供するという意義をも持つこととなったのだった。

註：

- [1] 天下という概念は、その意味が戦国時代にはまだ統一されておらず（平勢隆郎『左傳の史料批判的研究』汲古書院，1998年；平勢隆郎『中国古代の预言書』講談社，2000年；平勢隆郎「壹、戦国時代の天下与其下の中国、夏等特別領域」甘懷真『東亞歷史上的天下与中国概念』台湾大学出版中心，2007年）、少なくとも統一王朝が建てられた後に初めて統一される（安部健夫『元代史の研究』483-502頁）。天下という概念が対外関係の指導思想になったのは、皇帝と天子との印璽の分化を基準として、少なくとも武帝以降のことと考えることができる（安部健夫『元代史の研究』507-508頁；西嶋定生「皇帝支配の成立」『中国古代国家と東アジア世界』東京大学出版会，1997年〔初出1970年〕，64-90頁；阿部幸信「漢初の天下秩序に関する一考察」『中央大学文学部紀要』第62巻，2017年）。
- [2] 趙汀陽『天下体系：世界制度哲学導論』中国人民大学出版社，2011年，23-73頁；趙汀陽『天下的当代性：世界秩序の實現与想像』中信出版集团，2016年，49-130頁。
- [3] 高明士『天下秩序与文化圈的探索：以東亜古代的政治与教育為中心』3-28頁；John K. Fairbank and S. Y. Têng: "On the Ch'ing Tributary System," *Harvard Journal of Asiatic Studies* 6(2), 1941; John K. Fairbank: "Tributary Trade and China's Relations with the West," *The Far Eastern Quarterly* 1(2), 1942; John K. Fairbank: "A Preliminary Framework," in John K. Fairbank, ed.: *The Chinese World Order: Traditional China's Foreign Relations*, Harvard University Press, Cambridge, 1968
- [4] 何芳川『『華夷秩序』論』『北京大学學報（哲学社会科学版）』第6期，1998年
- [5] 例えば、西南夷における異民族は、漢の長期的統治を受けて、漢の地方政府から個人的支配を受けた場合に、漢の境界の外の異民族と区別する際に、夷ではなく、華を意味す

- る民と呼ばれる。朱聖明「試論漢代西南夷地區的人群画分—以不同場景變換為視角」『史學月刊』第4期，2012年
- [6] 渡邊義浩「兩漢における華夷思想の展開」渡邊義浩編『兩漢儒教の新研究』汲古書院，2008年；渡邊英幸「華夷思想」湯淺邦弘『テーマで読み解く中国の文化』ミネルヴァ書房，2016年
- [7] 保科季子「漢儒の外交思想—『夷狄不臣』論を中心に」夫馬進編『中国東アジア外交交流史の研究』京都大学学術出版会，2007年
- [8] 『後漢書』卷25，中華書局，1965年，876頁
- [9] 札奇斯欽『北亞游牧民族与中原農業民族間的和平戰爭与貿易之關係』正中書局，1972年，1-19頁；王子今『匈奴經營西域研究』中国社会科学出版社，2016年，45-66頁
- [10] 護雅夫「北アジア・古代游牧国家の構造」井上秀雄編『岩波講座世界歴史6 古代6 東アジア世界の形成 III 内陸アジア世界の形成』岩波書店，1979年；加藤謙一「匈奴の社会構造に関する一考察—軍事的民主制の一類型としての游牧『帝国』—」『歴史評論』第546号，1995年
- [11] Alexander J. Motyl: *Imperial Ends: The Decay, Collapse and Revival of Empires*, Columbia University Press, 2001, pp. 13-15
- [12] Christopher Chase-Dunn etc.: “The Forum : Hegemony and Social Change,” *Mershon International Studies Review* 38(2), 1994, pp. 364
- [13] Robert Gilpin: *War and Change in World Politics*, Cambridge University Press, Cambridge, 1981, p. 145
- [14] 李大龍『漢唐藩属体制研究』中国社会科学出版社，2006年，56-161頁；孫力舟「西漢時期東亞國際体系的二極格局分析—基于漢朝与匈奴二大政治行為体的考察」『世界經濟与政治』第8期，2007年，24-25頁；苗中泉「從三強並立到帝国秩序—西漢時期東亞國際体系的演變」『世界經濟与政治』第2期，2016年，79-82頁；劉永強、王飛『兩漢經營西域研究』西北農林科技大学出版社，2014年，119-132頁
- [15] 西嶋定生「東アジア世界の形成」『中国古代国家と東アジア世界』東京大学出版会，1997年〔初出1983年〕，408頁
- [16] 堀敏一「東アジアの歴史像をどう構成するか—前近代の場合」『律令制と東アジア—私の中国史学（二）』汲古書院，1994年〔初出1963年〕，121頁
- [17] 堀敏一『中国と東アジア世界：中華的世界と諸民族』岩波書店，1993年，61-82頁；堀敏一『東アジア世界の歴史』講談社，2008年，37-65頁
- [18] 札奇斯欽『北亞游牧民族与中原農業民族間的和平戰爭与貿易之關係』25-73頁
- [19] 『史記』卷100，中華書局，1963年，2892頁
- [20] 王明珂『游牧者的抉擇：面对漢帝国的北亞游牧部族』北京師範大学出版社，2008年，134-141頁
- [21] 『漢書』卷94上，中華書局，1964年，3753頁
- [22] 『史記』卷100，2902頁
- [23] 林俊雄『興亡の世界史 02 スキタイと匈奴 游牧の文明』講談社，2007年，294-298頁；陳序經『匈奴史稿』中国人民大学出版社，2007年，79-80頁
- [24] 王紹東『碰撞与交融—戰国秦漢時期的農耕文化与游牧文化』内蒙古大学出版社，2011年，338-344頁
- [25] 巴菲爾德著，袁劍訳『危險的边疆：游牧帝国与中国』江蘇人民出版社，2011年，64-65頁
- [26] 賈誼著，閻振益、鍾夏校注『新書校注』中華書局，2000年，134頁
- [27] 拉鉄摩爾著，唐曉峰訳『中国的亞洲内陸边疆』江蘇人民出版社，2008年，354-360頁
- [28] 『史記』卷100，2899頁
- [29] 『漢書』卷94上，3757頁
- [30] 『漢書』卷64上，2777頁
- [31] 『漢書』卷94下，3834頁

- [32] 王利器校注『鹽鐵論校注（定本）』中華書局，1992年，444頁
- [33] 『漢書』卷64上，2800頁
- [34] 黎小龍、徐難於「兩漢邊疆思想觀的論爭與統一多民族國家邊疆思想的形成」『中國邊疆史地研究』第4期，2006年
- [35] 黎小龍、郭奇龍「兩漢北胡南漢說」『中國邊疆史地研究』第4期，2019年
- [36] 『漢書』卷94下，3810頁
- [37] 『漢書』卷24下，1174頁
- [38] 張俊民「從漢簡談漢代西北邊郡運輸的幾個問題」『中國社會經濟史研究』第3期，1996年
- [39] 『漢書』卷94下，3834頁
- [40] 葛劍雄「論秦漢統一的地理基礎」中國秦漢史研究會編『秦漢史論叢 第6輯』，江西教育出版社，1994年，135頁
- [41] 胡鴻「秦漢帝國擴張的制約因素及突破口」『中國社會科學』第11期，2014年，191-192頁
- [42] 『漢書』卷64上，2777頁

参考文献

1 和文

【研究書】

青山公亮先生最終講義録編集委員会『青山公亮先生最終講義録 漢・魏時代の朝鮮』明治大学文学部史学地理学科，1973 年

安部健夫『元代史の研究』創文社，1972 年

井上秀雄編『岩波講座世界歴史 6 古代 6 東アジア世界の形成 III 内陸アジア世界の形成』岩波書店，1979 年

猪口孝『国家と社会』東京大学出版会，1988 年

石母田正『石母田正著作集 第四巻』岩波書店，1989 年

内田吟風『北アジア史研究-匈奴篇-』同朋舎出版，1975 年

内田吟風『北アジア史研究-朝卑柔然突厥篇-』1975 年、同朋舎

宇山智彦編『ユーラシア近代帝国と現代世界』ミネルヴァ書房，2016 年

大津透他編『岩波講座 日本の歴史 第 22 巻：歴史学の現在<テーマ巻 3>』岩波書店，2016 年

尾形勇『中国古代の「家」と国家-皇帝支配下の秩序構造-』岩波書店，1979 年

何永昌「古代東部ユーラシアにおける国際システム：多様な世界像」『現代社会文化研究』第 69 号，2019 年，65-79 頁

何永昌「古代東部ユーラシア国際システムの成立について：境界、国家、相互作用および構造」『現代社会文化研究』第 71 号，2020 年，49-66 頁

何永昌「両漢時代の東部ユーラシア国際システムにおける国家間相互作用：漠南と西域をめぐる覇権争いを中心に」『現代社会文化研究』第 73 号，2021 年，19-36 頁

樺山紘一等編『岩波講座 世界歴史 4：古代 4』岩波書店，1970 年

金子修一『古代東アジア世界史論考-隋唐の国際秩序と東アジア-』八木書店，2019 年

鎌田重雄『秦漢政治制度の研究』日本学術振興会，1962 年

柄谷行人『世界史の構造』岩波書店，2010 年

川本芳昭『東アジア古代における諸民族と国家』汲古書院，2015 年

鬼頭清明『日本古代国家の形成と東アジア』校倉書房，1976 年

栗原朋信『秦漢史の研究』吉川弘文館，1960 年

- 『中国古代の国家と民衆』編集委員会『中国古代の国家と民衆—堀敏一先生古稀記念』汲古書院，1995 年
- 後藤均平『ベトナム救国抗争史—ベトナム・中国・日本 —』新人物往来社，1975 年
- 沢田勲『匈奴—古代遊牧国家の興亡』東方書店，1996 年
- 妹尾達彦『グローバル・ヒストリー』中央大学出版部，2018 年
- 菅沼愛語『7 世紀後半から 8 世紀の東部ユーラシアの国際情勢とその推移—唐・吐蕃・突厥の外交関係を中心に—』溪水社，2013 年
- 杉原高嶺他著『現代国際法講義（第 5 版）』有斐閣，2012 年
- 杉山正明『大モンゴルの世界 陸と海の巨大帝国』角川書店，1992 年
- 杉山正明『遊牧民から見た世界史—民族も国境もこえて』日本経済新聞者，2003 年
- 杉山正明『中国の歴史（08）疾駆する草原の征服者：遼 西夏 金 元』講談社，2005 年
- 鈴木俊、西嶋定生編『中国史の時代区分』東京大学出版会，1957 年
- 鈴木靖民他編『梁職貢図と東部ユーラシア世界』勉誠出版，2014 年
- 谷口房男『華南民族史研究』緑蔭書房，1996 年
- 谷川道雄他編『魏晋南北朝隋唐時代史の基本問題』汲古書院，1997 年
- 檀上寛『明代海禁＝朝貢システムと華夷秩序』京都大学学術出版会，2013 年
- 藤間生大『東アジア世界の形成』春秋社，1977 年
- 西嶋定生『中国古代国家と東アジア世界』東京大学出版会，1997 年
- 浜下武志『近代中国の国際的契機—朝貢貿易システムと近代アジア』東京大学出版会，1990 年
- 林俊雄『スキタイと匈奴 遊牧の文明』講談社，2007 年
- 日比野丈夫『中国歴史地理研究』同朋舎，1977 年
- 平勢隆郎『左傳の史料批判的研究』汲古書院，1998 年
- 平勢隆郎『中国古代の予言書』講談社，2000 年
- 廣瀬憲雄『古代日本外交史—東部ユーラシアの視点から読み直す』講談社，2014 年
- 廣瀬憲雄『古代日本と東部ユーラシアの国際関係』勉誠出版，2018 年
- マックス・ヴェーバー著，中村貞二、山田高生、脇圭平訳『政治論集 2』みすず書房，1982 年
- 藤田勝久『中国古代国家と郡県社会』汲古書院，2005 年
- 夫馬進編『中国東アジア外交交流史の研究』京都大学学術出版会，2007 年

- 杉山明『漢帝国と辺境社会-長城の風景』中央公論新社，1999 年
- 堀敏一『中国と東アジア世界：中華的世界と諸民族』岩波書店，1993 年
- 堀敏一『律令制と東アジア-私の中国史学（二）』汲古書院，1994 年
- 堀敏一『東アジアの中の古代日本』研文出版，1998 年
- 堀敏一『東アジア世界の形成-中国と周辺国家』汲古書院，2006 年
- 堀敏一『東アジア世界の歴史』講談社，2008 年
- 堀池信夫『知のユーラシア』明治書院，2011 年
- 松島隆真『漢帝国の成立』京都大学学術出版会，2018 年
- 護雅夫『古代トルコ民族史研究 I』山川出版社，1992 年
- 歴史学研究会編『第 4 次 現代歴史学の成果と課題：第 2 巻 世界史像の再構成』績文堂出版
- 山本有造編『帝国の研究—原理・類型・関係—』名古屋大学出版会，2003 年
- 山本吉宣『「帝国」の国際政治学-冷戦後の国際システムとアメリカ』東信堂，2006 年
- 湯浅邦弘『テーマで読み解く中国の文化』ミネルヴァ書房，2016 年
- 李開元『漢帝国の成立と劉邦集団—軍功受益階層の研究』汲古書院，2000 年
- 李成市『東アジア文化圏の形成』山川出版社，2000 年
- 渡邊義浩編『両漢儒教の新研究』汲古書院，2008 年
- 渡邊信一郎『中国古代の財政と国家』汲古書院，2010 年

【論文】

- 阿部幸信「漢帝国の内臣-外臣構造形成過程に関する一試論-主に印綬制度よりみたる-」『歴史学研究』第 784 号，2004 年，20-36 頁
- 阿部幸信「漢初の天下秩序に関する一考察」『中央大学文学部紀要』第 62 巻，2017 年，37-68 頁
- 内田吟風「匈奴西移年表：附・フンネン=匈奴に関する再考察」『東洋史研究』第 2 巻第 1 号，1936 年，15-35 頁
- 大河内隆「前漢の西域進出と烏孫の動向-漢の烏孫支配に関連して-」『史叢』第 26 号，1980 年，30-42 頁
- 岡安勇「中国古代における『客礼』の礼遇形式-匈奴呼韓邪単于への礼遇を手掛りとして-」『東方学』第 74 号，1987 年，30-42 頁

- 岡安勇「匈奴呼韓邪单于の対漢『称臣』年代について」『東方学』第 80 号, 1990 年, 33-47 頁
- 加藤謙一「匈奴の社会構造に関する一考察-軍事的民主制の一類型としての遊牧『帝国』-」『歴史評論』第 546 号, 1995 年, 29-47 頁
- 川手翔生「南越の統治体制と漢代の珠崖郡放棄」『史観』第 174 号, 2016 年, 45-61 頁
- 岸野浩一「英国学派の国際政治理論におけるパワーと経済: E・H・カーとヒュームからの考察」『法と政治』第 63 巻第 2 号, 2012 年, 95-165 頁
- 久保靖彦「戊己校尉設置の目的について」『史苑』26 巻 2/3 号, 1966 年, 55-66 頁
- 熊谷滋三「前漢における属国制の形成-『五属国』の問題を中心として-」『史観』第 134 冊, 1996 年, 26-38 頁
- 熊谷滋三「前漢における『蛮夷降者』と『帰義蛮夷』」『東洋文化研究所紀要』第 134 冊, 1997 年, 19-71 頁
- 小林惣八「前漢に於ける匈奴帝国の内部分裂について」『駒沢史学』第 17 号, 1970 年, 48-70 頁
- 小林惣八「武帝の对外政策-衛青・霍去病の匈奴対策」『駒沢史学』第 19 号, 1972 年, 55-64 頁
- 小林聡「後漢の少数民族統御官に関する一考察」『九州大学東洋史論』第 1 号, 1989 年, 95-116 頁
- 酒井駿多「後漢の羌支配体制の成立と崩壊: 護羌校尉を中心に」『紀尾井論叢』第 4 号, 2016 年, 1-16 頁
- 酒井駿多「漢代の『羌』という虚像: 白馬と東羌を例に」『上智史学』第 62 号, 2017 年, 57-75 頁
- 織田晃嘉「秦漢朝の蛮夷統治政策について」『人文論究』第 51 巻第 4 号, 2002 年, 46-59 頁
- 嶋崎昌「姑師と車師前後王国」『中央大学文学部紀要』第 41 号, 1966 年, 45-86 頁
- 菅沼愛語「西魏・北周の对外政策と中国再統一へのプロセス-東部ユーラシア分裂時代末期の外交関係-」『史窓』2 月, 2013 年, 43-66 頁
- 高村武幸「河西における漢と匈奴の攻防-前漢後半期から後漢初期の史料分析を通じて」『東洋学報』第 82 巻第 3 号, 2000 年, 339-369 頁
- 手塚隆義「兩漢質子考」『史苑』第 15 巻第 4 号, 1944 年, 10-27 頁

- 手塚隆義「烏孫の国内事情と西域都護の成立」『史苑』第 14 巻第 1 号, 1941 年, 18-51 頁
- 手塚隆義「日逐王比の独立と南匈奴の単于継承について」『史苑』第 25 巻第 2 号, 1964 年
- 中川祐志「前漢期対匈奴政策：宣帝期を中心として」『ゆけむり史学』第 8 号, 2014 年, 2-15 頁
- 中野聡『『東アジア』とアメリカ-広域概念をめぐる闘争-』, 『歴史学研究』7 号, 2013 年, 15-25 頁
- 中村桃子「前漢時代の「質子」（「侍子」）外交：漢の匈奴・西域諸国との関係を中心に」『アジアの歴史と文化』19 号, 2015 年, 149-165 頁
- 野口優「前漢辺郡都尉府の職掌と辺郡統治制度」『東洋史研究』第 71 巻 1 号, 2012 年, 1-35 頁
- 濱下武志「朝貢貿易システムと近代アジア」『季刊国際政治』第 82 号, 1986 年, 42-55 頁
- 古松崇志「契丹・宋間の澶淵体制における国境」『史林』第 90 巻第 1 号, 2007, 28-61 頁
- 前田徹「シュメールにおける地域国家の成立」『早稲田大学文学研究科紀要』第 54 巻第 4 号, 2009 年, 39-54 頁
- 松井健「牧畜社会への再認識：遊牧の文化的特質についての試論—西南アジア遊牧民を中心として—」『国立民族学博物館研究報告別冊』第 20 巻, 1999 年, 493-516 頁
- 宮崎市定「中国上代は封建制か都市国家か」『史林』第 33 巻第 2 号, 1950 年, 144-163 頁
- 山本吉宣「帝国システムの国際政治理論（上）」『国際関係論研究』第 22 巻, 2004 年, 1-63 頁
- 山本吉宣「帝国システムの国際政治理論（下）」『国際関係論研究』第 23 巻, 2005 年, 1-43 頁
- 吉開将人「歴史世界としての嶺南・北部ベトナム—その可能性と課題—」『東南アジア—歴史と文化—』第 31 号, 2002 年, 79-96 頁
- 好並隆司『『称臣而不名』再考』『史学研究』第 233 号, 2001 年, 21-36 頁
- 渡邊義浩「後漢の匈奴・烏桓政策と袁紹」『早稲田大学総合人文科学研究センター研究誌』第 3 号, 2015 年, 524-534 頁

2 中国語

【漢籍】

『史記』中華書局，1963 年

『漢書』中華書局，1964 年

『後漢書』中華書局，1965 年

『三国志』中華書局，1971 年

『晋書』中華書局，1974 年

『明史』中華書局，1974 年

『資治通鑑』中華書局，1956 年

常璩著，任乃強校注『華陽国志校補圖注』上海古籍出版社，1987 年

洪適『隸釋・隸續』中華書局，1986 年

賈誼著，閻振益、鐘夏校注『新書校注』中華書局，2000 年

十三經註疏編委會『春秋左傳正義』北京大学出版社，2000 年

王利器校注『塩鉄論校注（定本）』中華書局，1992 年

許慎『説文解字』中華書局，1963 年

【研究書】

巴菲爾德著、袁劍訳『危險的边疆：游牧帝国与中国』江蘇人民出版社，2011 年

卜憲群、楊振紅編『簡帛研究』广西師範大学出版社，2007 年

陳国強、蔣炳釗、吳綿吉、辛土成『百越民族史』中国社会科学出版社，1988 年

陳序經『匈奴史稿』中国人民大学出版社，2007 年

陳寅恪『唐代政治史述論稿』上海古籍出版社，1997 年

方国瑜『中国西南歷史地理考釋』中華書局，1987 年

甘懷真『東亞歷史上的天下与中国概念』台湾大学出版中心，2007 年

高明士『天下秩序与文化圈的探索：以東亞古代的政治与教育為中心』上海古籍出版社，2008 年

高荣『河西通史』天津古籍出版社，2011 年

葛劍雄『中国移民史 第二卷』福建人民出版社，1997 年

韓昇『東亞世界形成史論』復旦大学出版社，2009 年

胡平生『敦煌懸泉漢簡釋粹』上海古籍出版社，2001 年

黃今言『秦漢軍制史論』江西人民出版社，1993 年

翦伯贊『秦漢史』北京大學出版社，1999 年

拉鉄摩爾著，唐曉峰譯『中國的亞洲內陸邊疆』江蘇人民出版社，2008 年

李大龍『漢唐藩屬體制研究』中國社會科學出版社，2006 年

李大龍『從「天下」到「中國」：多民族國家疆域理論解構』人民出版社，2015 年

李雲泉『朝貢制度史論-中國對外關係體制研究』新華出版社，2004 年

黎虎『漢唐外交制度史』蘭州大學出版社，1998 年

林甘泉、田人隆等『國古代史分期討論五十年 1929-1979 年』上海人民出版社，1982 年

林幹『匈奴史』內蒙古人民出版社，2007 年

林幹『突厥與回紇史』內蒙古人民出版社，2007 年

林梅村『古道西風：考古新發現所見中西文化交流』三聯書店，2000 年

劉永強、王飛『兩漢經營西域研究』西北農林科技大學出版社，2014 年

魯西奇『人群·聚落·地域社會：中古南方史地初探』廈門大學出版社，2011 年

馬大英『漢代財政史』中國財政經濟出版社，1983 年

馬長壽『突厥人和突厥汗國』上海人民出版社，1957 年

馬長壽『北狄と匈奴』三聯書店，1962 年

馬長壽『氏與羌』上海人民出版社，1984 年

全海宗著，全善姬譯『中韓關係史論集』中國社會科學出版社，1997 年

宋新寧、陳岳『國際政治學概論』中國人民大學出版社，2000 年

台灣三軍大學編『中國歷代戰爭史 第三冊』1983 年，軍事譯文出版社

閻學通、徐進『中國先秦國家間政治思想選讀』復旦大學出版社，2008 年

葉自成『中國崛起-華夏體系 500 年的大歷史』人民出版社，2013 年

王明珂『遊牧者的抉擇：面對漢帝國的北亞遊牧部族』北京師範大學出版社，2008 年

王紹東『碰撞與交融—戰國秦漢時期的農耕文化與遊牧文化』內蒙古大學出版社，2011 年

王永平『從“天下”到“世界”：漢唐時期之中國與世界』中國社會科學出版社，2015 年

王子今『匈奴經營西域研究』中國社會科學出版社，2016 年

烏恩岳斯圖『北方草原考古學文化比較研究—青銅時代至早期匈奴時期』科學出版社，2008 年

吳軍、劉艷燕『敦煌古代石刻藝術』甘肅人民出版社，2016 年

余英時著，鄔文玲訳『漢代貿易与拡張—漢胡經濟關係結構研究』上海古籍出版社，2005 年

袁南生『中国古代外交史 夏商時期-近代以前』湖南人民出版社，2017 年

尤中『中国西南の古代民族』雲南人民出版社，1980 年

札奇斯欽『北亞遊牧民族与中原農業民族間の和平戦争与貿易之關係』正中書局，1972 年

張広志『中国古史分期討論の回顧与反思』陝西師範大学出版社，2003

張家山二四七号漢基竹簡整理小組『張家山漢基竹簡（二四七号墓）：釋文修訂本』文物出版社，2006 年

張維華編『中国古代對外關係史』高等教育出版社，1993 年

趙汀陽『天下体系：世界制度哲学導論』中国人民大学出版社，2011 年

趙汀陽『天地的当代性：世界秩序的實現与想像』中信出版集团，2016 年

趙永春『從複數「中国」到单数「中国」—中国歷史疆域理論研究』黑龍江教育出版社，2014 年

中国秦漢史研究会編『秦漢史論叢 第 6 輯』，江西教育出版社，1994 年

中国社会科学院民族研究所民族歷史研究室編『民族史論叢 第 1 輯』中華書局，1987 年

周振鶴『西漢政區地理』人民出版社，1987 年

朱紹侯，齊濤，王育濟編『中国古代史（第五版）』福建人民出版社，2010 年

【論文】

陳金生、王希龍「兩漢邊政中的質子述評」『中国边疆史地研究』第 2 期，2008 年，1-14 頁

陳琳国「東羌与西羌辨析」『學術月刊』第 4 期，2008 年，31-37 頁

陳尚勝「朝貢制度と東亜地区伝統国際秩序—以 16-19 世紀の明清王朝為中心」『中国边疆史地研究』第 2 期，2015 年

陳勝武「漢武帝時期漢匈戦争双方戰略運用比較」『軍事歷史研究』第 2 期，2011 年，108-113 頁

成琳「兩漢時期民族關係中的『質子』現象」『新疆大学学报（哲学人文社会科学漢文版）』第 1 期，2007 年，77-84 頁

高榮「月氏、烏孫和匈奴在河西的活動」『西北民族研究』第 3 期，2004 年，23-32 頁

広州象崗漢墓發掘隊「西漢南越王墓發掘初步報告」『考古』第 3 期，1988 年，222-230 頁

何芳川「“華夷秩序”論」『北京大学学报（哲学社会科学版）』第 6 期，1998 年，30-45 頁

何星亮「匈奴語“甌脱”再釈」『民族研究』1988 年，第 1 期，101-108 頁

- 洪濤「漢代西域都護府研究述評」『新疆師範大學學報（哲學社會科學版）』第2期，2007年，5-10頁
- 胡波「古代東亞關係体系的肇始」『外交評論』第1期，2008年，50-59頁
- 胡広起「漢代兵力論考」『歷史研究』1996年，第3期，29-40頁
- 胡鴻「秦漢帝國擴張的制約因素及突破口」『中國社會科學』第11期，2014年，191-192頁，184-203頁
- 李炳泉「西漢河西四郡的始置年代及疆域變遷」『東嶽論叢』第12期，2013年，76-83頁
- 李大龍「邊吏与古代中国疆域的形成—以兩漢為中心」『雲南師範大學學報（哲學社會科學版）』第6期，2008年，1-10頁
- 李俊芳「漢代冊命諸侯王禮儀研究」『中國史研究』第3期，2010年，89-104頁
- 李楠「兩漢戊己校尉職数再考證」『內蒙古大學學報（哲學社會科學版）』第3期，2016年，68-73頁
- 黎小龍「兩漢時期西南人才地理特徵探析」『西南師範大學學報（哲學社會科學版）』第2期，1995年，89-94頁
- 黎小龍「『漢書·西南夷兩粵朝鮮傳』三傳合一体例与兩漢边疆民族思想」『中國边疆史地研究』第2期，2015年，64-72頁
- 黎小龍、郭奇龍「兩漢北胡南漢說」『中國边疆史地研究』第4期，2019年，19-27頁
- 黎小龍、徐難於「論秦漢時期西南區域開發的差異与格局」『西南師範大學學報（哲學社會科學版）』第3期，1997年，18-23頁
- 黎小龍、徐難於「兩漢边疆思想觀的論争与統一多民族国家边疆思想的形成」『中國边疆史地研究』第4期，2006年，9-20頁
- 李元暉「『約』与西漢的民族政策」『西域研究』第2期，2016年，10-18頁
- 劉瑞「秦、西漢的『內臣』与『外臣』」『民族研究』第3期，2003年，69-79頁
- 劉弘、鄧海春、姜先傑「試析漢王朝政治整合西南夷過程中郡縣的特徵—以越嶲郡為例」『四川文物』第3期，2015年，68-75頁
- 劉增貴「漢代的益州土族」『歷史語言研究所集刊』第60本第3分冊，1990年，527-577頁
- 林幹「兩漢時期『護烏桓校尉』略考」『內蒙古社會科學』第1期，1987年，49-54頁
- 馬智全「漢簡所見西漢与車師的交往」『魯東大學學報（哲學社會科學版）』第3期，2011年，67-69頁
- 孟維瞻「古代東亞等級制の生成条件」『國際政治科學』第1期，2016年，91-124頁

- 苗中泉「從三強並立到帝国秩序-西漢時期東亞國際体系的演變」『世界經濟与政治』第 2 期，2016 年，60-88 頁
- 齊思和「匈奴西遷及其在歐洲的活動」『歷史研究』第 3 期，1977 年，126-141 頁
- 芮佺明「古代『和親』利弊論」『史林』第 2 期，1997 年，5-17 頁
- 尚新麗「西漢人口数量变化考論」『鄭州大學學報（哲學社会科学版）』第 3 期，2003 年，19-22 頁
- 尚新麗「西漢時期匈奴人口数量变化蠡測」『人口与經濟』第 2 期，2006 年，60-65 頁
- 石碩「漢代的『笮都夷』、『旄牛徼外』与『徼外夷』-論漢代川西高原的『徼』之劃分及部落分布」『四川大學學報（哲學社会科学版）』第 4 期，2004 年，112-118 頁
- 時殷弘「武装的中国：千年戰略傳統及其外交意蘊」『世界經濟与政治』第 6 期，2001 年，4-33 頁
- 孫力舟「西漢時期東亞國際体系的二極格局分析-基于漢朝与匈奴二大政治行為体的考察」『世界經濟与政治』第 8 期，2007 年，17-25 頁
- 孫衛國「論事大主義与朝鮮王朝对明關係」『南開學報（哲學社会科学版）』第 4 期，2002 年
- 王日華「國際体系与中国古代国家間關係研究」『世界經濟与政治』第 12 期，2009 年，58-68 頁
- 王雲度「東漢史分期芻議」『南都學壇』第 1 期，1991 年，8-12 頁
- 王万雋「秦漢魏晉時代的『實』」『早期中国史研究』第 1 卷，2009 年，125-156 頁
- 王子今「論匈奴僮僕都尉“領西域”“賦税諸国”」『石家莊學院學報』2012 年，第 4 期，20-25 頁
- 魏斌「古人堤簡牘与東漢武陵蛮」『中央研究院歷史語言研究所集刊』第 85 本第 1 分，2014 年，61-101 頁
- 韋東超「移与族際衝突-東漢時期武陵、長沙、零陵三郡『蛮变』動因淺論」『中南民族大學學報（人文社会科学版）』第 1 期，2003 年
- 薛宗正「車師考一兼論前、後二部的分化及車師六国諸問題」『蘭州學刊』第 8 期，2009 年，12-23 頁
- 葉自成、扈珣「中国春秋戰国時期的外交思想流派及其与西方的比較」『世界經濟与政治』第 12 期，2001 年，24-29 頁
- 于逢春「構築中国疆域的文明板塊類型及其統合模式序說」『中国边疆史地研究』2006 年，第 3 期，9-24 頁

- 于逢春「論“大漠游牧文明板塊”在中国疆域最終底定過程中的地位」『內蒙古師範大學學報（哲學社會科學版）』第3期，2010年，63-87頁
- 余太山「兩漢西域戊己校尉考」『史林』第1期，1994年，8-11頁
- 楊兆榮「西漢南越王相呂嘉遺族入滇及其歷史影響試探」『中國史研究』第4期，2004年，23-33頁
- 袁建平「中國早期國家時期的邦國と方國」『歷史研究』第1期，2013年，37-53頁
- 張俊民「從漢簡談漢代西北邊郡運輸的幾個問題」『中國社會經濟史研究』第3期，1996年，1-9頁
- 張文「論古代中國的國家觀与天下觀-邊境與邊界形成的歷史坐標」『中國邊疆史地研究』第3期，2007年，16-23頁
- 趙貞「漢代戊己校尉闡釋」『敦煌研究』第4期，1999年，147-151頁
- 周方銀「朝貢體制的均衡分析」『國際政治科學』第1期，2011年，29-58頁
- 周及徐「西漢通西南夷的幾個問題及通西南夷大事年表」『語言歷史論叢』第12輯，2017年，117-131頁
- 竺可楨「中國近五千年來氣候變遷的初步研究」『考古學報』第1期，1972年，15-38頁
- 朱聖明「試論漢代西南夷地區的人群畫分—以不同場景變換為視角」『史學月刊』第4期，2012年，5-13頁

3 英文

【研究書】

- Adam Watson: *The Evolution of International Society: A Comparative, Historical Analysis*, Routledge, 1992
- Alexander J. Motyl: *Imperial Ends: The Decay, Collapse and Revival of Empires*, Columbia University Press, 2001
- Alexander Wendt: *Social Theory of International Politics*, Cambridge University Press, 1999
- Amitav Acharya and Barry Buzan: *Non-Western International Relations Theory: Perspectives On and Beyond Asia*, Routledge, 2010
- Barry Buzan: *From International to World Society: English School Theory and the*

- Social Structure of Globalisation*, Cambridge University Press, 2004
- Barry Buzan: *An Introduction to the English School of International Relations: The Societal Approach*, Polity, 2014
- Barry Buzan and Ana Gonzalez-Pelaez: *International Society and the Middle East: English School Theory at the Regional Level*, Palgrave Macmillan, 2009
- Barry Buzan, Charles Jones, and Richard Little: *The Logic of Anarchy: Neorealism to Structural Realism*, Columbia University Press, 1993
- Barry Buzan and Richard Little: *International Systems in World History: Remaking the Study of International Relations*, Oxford University Press, 2000
- Barry Buzan and Ole Wæver: *Regions and Powers: The Structure of International Security*, Cambridge University Press, 2003
- Bruce Russett, Harvey Starr, David Kinsella: *World Politics: The Menu for Choice (Sixth Edition)*, Bedford/St. Martin's, 2000
- Christian Reus-Smit: *The Moral Purpose of the State*, Princeton University Press, 1999
- Dave Elder-Vass: *The Causal Power of Social Structures: Emergence, Structure and Agency*, Cambridge University Press, New York, 2010
- David A. Lake: *Hierarchy in International Relations*, Cornell University Press, 2011
- David C. Kang: *China Rising: Peace, Power, and Order in East Asia*, Columbia University Press, 2007
- David C. Kang: *East Asia Before the West: Five Centuries of Trade and Tribute*, Columbia University Press, 2010
- David S. Sorenson: *Shutting Down the Cold War: Politics of Military Base Closure*, Palgrave MacMillan, 1998
- David Harvey: *The New Imperialism*, Oxford University Press, 2005
- Denis Twitchett and John K. Fairbank, eds.: *The Cambridge history of China: Volume I The Ch'in and Han Empires, 221 B.C. 220 A.D.*, Cambridge University Press, 1986
- Edy Kaufman: *The Superpowers and Their Spheres of Influence: The United States and the Soviet Union in Eastern Europe and Latin America*, Croom Helm, 1976
- Elman R. Service: *Origins of the State and Civilization: The Process of Cultural Evolution*, W. W. Norton & Company Inc., 1975

- Emmerich De Vattel: *The Law of Nations*, Liberty Fund, 2010
- G. John Ikenberry, Michael Mastanduno and William C. Wohlforth : *International Relations Theory and the Consequences of Unipolarity*, Cambridge University Press, 2011
- G. Modelski & W. R. Thompson: *Seapower in Global Politics, 1494–1993*, University of Washington, 1988
- Giovanni Arrighi, Takeshi Hamashita and Mark Selden, eds.: *The Resurgence of East Asia: 500, 150 and 50 Year Perspectives*, Routledge, 2003
- Goedele De Keersmaecker: *Polarity, Balance of Power and International Relations Theory: Post-Cold War and the 19th Century Compared*, Palgrave Macmillan, 2017
- Harriet Rudolph and Gregor M. Metzsig, eds.: *Material Culture in Modern Diplomacy from the 15th to the 20th Century*, De Gruyter, 2016
- Hanna Samir Kassab: *Weak States in International Relations Theory: The Cases of Armenia, St. Kitts and Nevis, Lebanon, and Cambodia*, Palgrave Macmillan, 2015
- Hans J. Morgenthau: *Politics among Nations: The Struggle for Power and Peace*, McGraw-Hill, 1997
- Hedley Bull: *The Anarchical Society: A Study of Order in World Politics*, Macmillan International Higher Education, 2012
- Hedley Bull and Adam Watson: *Expansion of International Society*, Clarendon, 1992
- Helga Haftendorn, Robert O. Keohane, and Celeste A. Wallander, eds.: *Imperfect Unions: Security Institutions over Time and Space*, Oxford University Press, 1999
- Immanuel Wallerstein: *World-Systems Analysis: An Introduction*, Duke University Press, 2004
- James E. Dougherty and Robert L. Pfaltzgraff, Jr.: *Contending Theories of International Relations: A Comprehensive Survey (Fifth Edition)*, Longman, 2001
- Jared M. Diamond: *Guns, Germs, and Steel: The Fates of Human Societies*, W. W. Norton & Company, 1999
- John Curtis and Bardwell L. Smith, eds.: *Essays on T'ang Society: The Interplay of Social, Political and Economic Forces*, Brill, 1976
- John J. Mearsheimer: *The Tragedy of Great Power Politics*, W. W. Norton & Company,

2001

- John K. Fairbank, ed.: *The Chinese World Order: Traditional China's Foreign Relations*, Harvard University Press, Cambridge, 1968
- Jonathan Karam Skaff: *Sui-Tang China and its Turko-Mongol Neighbors: Culture, Power and Connections, 580-800*, Oxford University Press, Oxford, 2012
- Joshua S. Goldstein: *Long Cycles: Prosperity and War in the Modern Age*, Yale University Press, 1988
- K. J. Holsti: *International Relations: A Framework for Analysis (Fourth Edition)*, Prentice-Hall, INC., 1983
- Karl Wittfogel: *Oriental Despotism: A Comparative Study of Total Power*, Yale University Press, 1981
- Kees Van Der Pijl: *Nomads, Empires, States: Modes of Foreign Relations and Political Economy, Volume 1*, Pluto Press, 2007
- Kenneth N. Waltz: *Theory of International Politics*, Addison-Wesley Publishing Company, 1979
- Kenneth N. Waltz: *Man, State, and War: A Theoretical Analysis*, Columbia University Press, 2001
- Lassa Francis Oppenheim: *International Law: A Treatise (Volume I: Peace, Second Edition)*, Longmans, 1912
- Marcel Mauss: *The Gift: Forms and Functions of Exchange in Archaic Societies*, Cohen & West, 1966
- Mathias Albert, Lars-Erik Cederman and Alexander Wendt, eds.: *New Systems Theories of World Politics*, Palgrave Macmillan, New York, 2010
- Martin Wight: *Systems of States*, Leicester University Press, 1997
- Michael Barnett and Raymond Duvall: *Power in global governance*, Cambridge University Press, 2005
- Morris Rossabi: *China Among Equals: The Middle Kingdom and Its Neighbors, 10th-14th Centuries*, University of California Press, 1983
- Morton A. Kaplan: *System and Process in International Politics*, European Consortium for Political, 2008

- Nicola Di Cosmo: *Ancient China and its Enemies: The Rise of Nomadic Power in East Asian History*, Cambridge University Press, 2002
- Paul Keal: *Unspoken Rules and Superpower Dominance*, Palgrave Macmillan, 1983
- Robert Gilpin: *U.S. Power and the Multinational Corporation: The Political Economy of Foreign Direct Investment*, Basic Books, 1975
- Robert Gilpin: *War and Change in World Politics*, Cambridge University Press, Cambridge, 1981
- Robert O. Keohane: *After Hegemony: Cooperation and Discord in the World Political Economy*, Princeton University Press, 1984
- Robert O. Keohane: *International Institutions and State Power: Essays in International Relations Theory*, Routledge, 1989
- Robert W. Cox: *Production, Power, and World Order: Social Forces in the Making of History*, Columbia University Press, 1987
- Royston Greenwood, Christine Oliver, Roy Suddaby, Kerstin Sahlin-Andersson: *The SAGE Handbook of Organizational Institutionalism*, SAGE Publications Ltd., 2008
- Owen Lattimore: *Inner Asian Frontiers of China*, Oxford University Press, 1989
- Polly Low: *Interstate Relations in Classical Greece: Morality and Power*, Cambridge University Press, 2007
- Samir Amin: *Unequal Development: An Essay on the Social Formations of Peripheral Capitalism*, Monthly Review Press, 1977
- Susan E. Alcock, Terence N. D'Altroy, Kathleen D. Morrison and Carla M. Sinopoli, eds.: *Empires: Perspectives from Archaeology and History*, Cambridge University Press, 2001
- Susanna Hast: *Spheres of Influence in International Relations: History, Theory and Politics*, Ashgate, 2014
- Stephen D. Krasner: *International Regimes*, Cornell University Press, 1983
- Steve Smith, Ken Booth and Marysia Zalewski, eds.: *International Theory: Positivism and Beyond*, Cambridge University Press, 1996
- Thomas Barfield: *The Perilous Frontier: Nomadic Empires and China, 221 BC to AD 1757*, Wiley-Blackwell, 1992

Ursula Brosseder and Bryan K. Miller, eds.: *Xiongnu Archaeology: Multidisciplinary Perspectives on the First Steppe Empire in Central Asia*, Bonn Contributions to Asian Archaeology, 2011

Victoria Tin-bor Hui: *War and State Formation in Ancient China and Early Modern Europe*, Cambridge University Press, New York, 2005

Walter Carlsnaes, Thomas Risse and Beth A Simmons, eds.: *Handbook of International Relations*, SAGE Publications Ltd., 2013

【論文】

Alexander Backlund: "The definition of system," *Kybernetes: The International Journal of Systems & Cybernetics*, 29(4), 2000, pp. 444-451

Alexander E. Wendt: "The Agent-Structure Problem in International Relations Theory," *International Organization* 41(3), 1987, pp. 335-370

Alexander Wendt, "Anarchy is what States Make of it: The Social Construction of Power Politics", *International Organization* 46(2), 1992, pp. 391-425

Carla Norrlof and William C. Wohlforth: "Raison de l'Hegemonie (The Hegemon's Interest): Theory of the Costs and Benefits of Hegemony," *Security Studies* 28(3), 2019, pp. 422-450

Charles L. Glaser: "Realists as Optimists: Cooperation as Self-help," *International Security* 19(3), 1994-95, pp. 50-90

Charles L. Glaser and Chaim Kaufmann: "What is the offense-defense balance and can we measure it? (Offense, Defense, and International Politics)," *International Security* 22(4), 1998, pp. 44-82

Charles Krauthammer: "The unipolar moment," *Foreign Affairs* 70(1), 1990/1991, pp. 23-33

Christopher Chase-Dunn etc.: "The Forum: Hegemony and Social Change," *Mershon International Studies Review* 38(2), 1994, pp. 361-376.

Colin Mackerras: "Sino-Uighur Diplomatic and Trade Contacts (744-840)," *Central Asiatic Journal* 13(3), 1969, pp. 215-240

David C. Kang: "Getting Asia Wrong: The Need for New Analytical Frameworks,"

- International Security* 27(4), 2003, pp. 57–85
- David C. Kang: “Hierarchy, Balancing, and Empirical Puzzles in Asian International Relations,” *International Security* 28(3), 2004, pp. 165–180
- David. C. Kang: “Hierarchy and Legitimacy in International Systems: The Tribute System in Early Modern East Asia,” *Security Studies* 19(4), 2010, pp. 591–622
- E. D. Mansfield: “Concentration, polarity, and the distribution of power,” *International Studies Quarterly*, 37(1), 1993, pp. 105–128
- Frank Whelon Wayman: “Bipolarity and War : The Role of Capability Concentration and Alliance Patterns among Major Powers, 1816-1965,” *Journal of Peace Research* 21(1), 1984, pp. 61-78
- Geddes W. Rutherford: “Spheres of Influence: An Aspect of Semi-Suzerainty,” *The American Journal of International Law* 20(2), 1926, pp. 300-325
- George Modelski: “Agraria and Industria: Two Models of the International System,” *World Politics*, 14(1), 1961, pp. 118-143
- Hendrik Spruyt: “Collective Imaginations and International Order: The Contemporary Context of the Chinese Tributary System,” *Harvard Journal of Asiatic Studies* 77(1), 2017, pp. 21-45
- Helen Milner: “The Assumption of Anarchy in International Relations Theory: A Critique,” *Review of International Studies*, 17(1), 1991, pp. 67-85
- J. David Singer: “The level-of-analysis problem in international relations,” *World Politics*, 14(1), 1961, pp. 77-92
- James D. Morrow: “Alliances and Asymmetry: An Alternative to the Capability Aggregation Model of Alliances,” *American Journal of Political Science* 35(4), 1991, pp. 904-933
- Jay S. Goodman: “The Concept of ‘System’ in International Relations Theory,” *Background*, 8(4), 1965, pp. 257-268
- Jeffrey T. Checkel: “International Institutions and Socialization in Europe: Introduction and Framework,” *International Organization* 59(4), 2005, pp. 801-826
- John G. Ruggie: “Territoriality and Beyond: Problematizing Modernity in International Relations,” *International Organization* 47(1), 1993, pp. 139-174

- John K. Fairbank: "Tributary Trade and China's Relations with the West," *The Far Eastern Quarterly* 1(2), 1942, pp. 129-149
- John K. Fairbank & S. Y. Têng: "On the Ch'ing Tributary System," *Harvard Journal of Asiatic Studies* 6(2), 1941, pp. 135-246
- John J. Mearsheimer: "The False Promise of International Institutions," *International Security* 19(3), 1994, pp. 5-49
- Joshua Van Lieu: "The Tributary System and the Persistence of Lake Victorian Knowledge," *Harvard Journal of Asiatic Studies* 77(1), 2017, pp. 73-92
- Kenneth N. Waltz: "Structural Realism after the Cold War," *International security* 25(1), 2000, pp. 5-41
- Lien-sheng Yang: "Hostages in Chinese History," *Harvard Journal of Asiatic Studies*, 15(3/4), 1952, pp. 507-521
- N. N. Kradin: "Nomadism, Evolution, and World-Systems: Pastoral Societies in Theories of Historical Development," *Journal of World-System Research* Vol. 8, 2002, pp. 368-388
- Prasenjit Duara: "Afterword: The Chinese World Order as a Language Game – David Kang's East Asia Before the West and Its Commentaries," *Harvard Journal of Asiatic Studies* 77(1), 2017, pp.123-129
- Robert. A. Dahl: "The Concept of Power," *Behavioral Science*, 2(3), 1957, pp. 201-215
- Robert E. Kelly: "A 'Confucian Long Peace' in pre-Western East Asia?," *European Journal of International Relations* 18(3), 2011, pp. 407-430
- Robert Jervis: "Cooperation under the Security Dilemma," *World Politics* 30(2), 1978, pp. 167-214
- Sophia-Karin Psarras: "Han and Xiongnu: A Reexamination of Cultural and Political Relations (I)," *Monumenta Serica* 51(1), 2003, pp. 55-236
- Stephen D. Krasner: "State Power and the Structure of International Trade," *World Politics* 28(3) 1976, pp. 317-347
- Steve Smith: "The Discipline of International Relations: Still an American Social Science?," *British Journal of Politics and International Relations* 2(3), 2000, pp. 374-402

- T. W. Crawford: "Preventing Enemy Coalitions: How Wedge Strategies Shape Power Politics," *International Security* 35(4), 2011, pp. 155-189
- Tang Shiping: "International System, not International Structure: Against the Agent-Structure Problématique in IR," *The Chinese Journal of International Relations* 7(4), 2014, pp. 483-506
- Terence K. Hopkins and Immanuel Wallerstein: "Cyclical Rhythms and Secular Trends of The Capitalist World-Economy," *Review (Fernand Braudel Center)* 2(4), 1979, pp. 483-500
- Thomas J. Barfield: "The Hsiung-nu Imperial Confederacy: Organization and Foreign Policy," *The Journal of Asian Studies* 41(1), 1981, pp. 45-61
- W. R. Thompson: "Polarity, the long cycle, and global power warfare," *The Journal of Conflict Resolution* 30(4), 1986, pp. 587-615
- Zhang Yongjin: "System, Empire and State in Chinese International Relations," *Review of International Studies* 27(5), 2001, pp. 43-63
- Zhang Yongjin and Barry Buzan: "The Tributary System as International Society in Theory and Practice," *The Chinese Journal of International Politics*, Vol. 5, 2012, pp. 3-36

